㈶岐阜市教育文化振興事業団報告書第６集

下西郷一本松遺跡

－西郷１号線街路事業に伴う緊急発掘調査－

２０００

㈶岐阜市教育文化振興事業団

調査区（北区）全景（南上空から）

北区全景（上空から）

例　　言

1　本書は下西郷一本松遺跡発掘調査報告書である。

2　調査は西郷1号線街路事業に伴う緊急調査として、委託業務契約に基づき、委託者・岐阜市（土木部道路建設課の調査経費負担により、受託者㈶岐阜市教育文化振興事業団が実施した。

3　調査期間は下記のとおりである。

現地調査　平成11年4月14日～平成11年9月30日

4　調査面積は928㎡である。

5　調査組織は下記のとおりである。

調査主体者	㈶岐阜市教育文化振興事業団理事長　後藤左右吉
事務局	㈶岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所長　中尾義晃
調査担当	井川祥子・高木　晃（㈶岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所）
調査員	沢田伊一郎
調査補助員	倉持和美・棚橋英子・辻　啓子・森　和子
作業員	苅谷克己・河合　茂・河合弘公・山本政雄・安田金一・望月　修・三島　彰 小椋　登・江崎浩也・立川　力・友保有紀・後藤ゆき子・前田きみよ 井川順子・吉藤享子・神谷すみ子

6　発掘調査は北区（A～E区）と南区（F・G区）にわけ、北区を井川・高木が、南区を高木が行い、内堀（岐阜市教育委員会社会教育課）・山田宜久（㈶岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所）がこれを補佐した。

7　遺構の図版整理・作成は高木・井川が行った。

8　遺物の整理作業は、沢田・倉持・後藤・前田・吉藤・井川・神谷の協力のもと井川が行い、内堀がこれを補佐した。

9　遺物の実測は沢田が、遺構・遺物図版のトレースは倉持が行った。

10　遺物の写真撮影は佐藤右文氏に依頼して行った。

11　本書の執筆は井川・高木・内堀が担当し、編集は井川が行った。

12　執筆分担は、目次に掲載した。第6章自然科学分析のみ文頭に記した。

13　土器・陶磁器の編年観については下記の各氏に御教示を頂いた。

弥生土器（中期）	石黒立人	（㈶愛知県埋蔵文化財センター）
須恵器	渡辺博人	（各務原市埋蔵文化財調査センター）
灰釉陶器	尾野善裕	（京都国立博物館）
山茶碗	藤沢良祐	（㈶瀬戸市埋蔵文化財センター）

14　本遺跡の自然科学分析は㈱パレオ・ラボに依頼した。

15　現地調査及び整理作業の課程で下記の方々機関に御指導・御協力を賜った。

内堀信雄（岐阜市教育委員会）・小野木　学・千堂克彦・成瀬正勝・藤田英博（㈶岐阜県文化財保護センター）　横幕大祐（池田町教育委員会）　鈴木　元（大垣市教育委員会）　大熊茂弘（各務原市埋蔵文化財調査センター）

16　調査記録及び出土遺物は㈶岐阜市教育文化振興事業団で管理している。

凡　　例

遺構

1　図中の方位は真北を示し、座標は国家座標第Ⅶ座標系に準拠している。

2　遺構実測図の縮尺は1/50・1/25を基本としている。

3　遺構の略号は下記のとおり用いた。

住居－SB、溝－SD、土坑－SK、土坑墓－SZ、柱穴・小穴－P、その他－SX

4　遺構番号は北・南区を通して付け、原則として発掘調査時の番号を用いている。

遺物

1　遺物実測図の縮尺は土器は1/3を基本としている。石器は1/2・1/3・1/4である。金属製品は原寸である。

2　図中のスクリーントーンは赤彩を示す。

表

1　第3表の数値は接合後の破片数である。

2　第3表の弥生土器と土師器は、弥生土器が弥生中期後半の土器で、土師器はそれ以外の弥生土器・土師器とした。

目　次

第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯（内堀） …… 1
　第２節　発掘調査の経過（高木） …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第１節　遺跡の立地（高木） …… 2
　第２節　周辺の遺跡（井川） …… 2
第３章　遺跡の概要 …… 6
　第１節　層位（高木） …… 6
　第２節　遺構・遺物の概要（井川） …… 8
第４章　遺構と遺物（遺構：高木・井川　遺物：井川） …… 14
　第１節　１期の遺構と遺物 …… 14
　第２節　２期の遺構と遺物 …… 16
　第３節　３期の遺構と遺物 …… 18
　第４節　４期の遺構と遺物 …… 24
　第５節　５期の遺構と遺物 …… 24
　第６節　６期の遺構と遺物 …… 30
　第７節　７期の遺構と遺物 …… 42
　第８節　８期の遺構と遺物 …… 50
　第９節　９期の遺構と遺物 …… 59
　第10節　10期の遺構と遺物 …… 60
　第11節　その他の遺構と遺物 …… 61
第５章　まとめ・考察 …… 126
　第１節　下西郷一本松遺跡の土器組成（井川） …… 126
　第２節　下西郷一本松遺跡の遺構変遷（井川） …… 130
　第３節　下西郷一本松遺跡で検出した竪穴住居について（高木） …… 133
　第４節　下西郷一本松遺跡出土甕の使用痕（内堀） …… 137
第６章　自然科学分析 …… 143
　第１節　SB12炉跡焼土の焼成年代 …… 143
　第２節　高杯類胎土の材料分析 …… 148
　第３節　下西郷一本松遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定 …… 164

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図 …… 3
第2図　発掘調査位置図 …… 4
第3図　土層模式図 …… 7
第4図　主要遺構切り合い図 …… 8
第5図　地区割り図 …… 9
第6図　主要器種分類図(1) ……12
第7図　主要器種分類図(2) ……13
第8図　SK5・9遺構図 ……15
第9図　SB16・33遺構図 ……17
第10図　SK6遺構図 ……18
第11図　SB3・21遺構図 ……19
第12図　SB9遺構図 ……20
第13図　SB20遺構図 …… 21
第14図　SD3遺構図 …… 23
第15図　SB25・SK1遺構図(1) ……26
第16図　SB25・SK1遺構図(2)・SK7遺構図　27
第17図　F区住居跡切り合い模式図 …… 28
第18図　SB30・34遺構図 ……29
第19図　SB4・8遺構図 ……31
第20図　SB10遺構図 ……32
第21図　SB12遺構図(1) ……34
第22図　SB12遺構図(2) ……35
第23図　SB13・14遺構図 ……36
第24図　SB15遺構図 ……37
第25図　SB18遺構図 ……39
第26図　SB32遺構図 ……40
第27図　SB1遺構図 ……43
第28図　SB7・19遺構図 ……44
第29図　SB17遺構図 ……45
第30図　SD26・SD6遺構図 ……46
第31図　SB29・SD9・SK8遺構図 ……47
第32図　SK2遺構図(1) …… 48
第33図　SK2遺構図(2) ……49
第34図　SB2遺構図 ……50
第35図　SB5遺構図 ……51
第36図　SB6遺構図 …… 53
第37図　SB11遺構図 ……54
第38図　SB22遺構図 ……55
第39図　SB28・31遺構図 ……56
第40図　SZ1遺構図 ……59
第41図　SD8・12・13・14・15・17・21・SX5・6・7・9遺構図 ……66
第42図　SD7・10・11・16・18・19・20遺構図……67
第43図　SK3・4・SX1・2・4・8・10遺構図 ……68
第44図　SX3・13遺構図 ……69
第45図　SX11・12・16遺構図(1) ……70
第46図　SX11・12・16遺構図(2) ……71
第47～82図　遺物実測図 ……73～108
第83図　甕・高杯の組成グラフ ……129
第84図　主要遺構変遷図 ……131
第85図　土師器煮炊具使用痕(1) ……140
第86図　土師器煮炊具使用痕(2) ……141
第87図　過去2,000年間の磁気永年変化曲線 144
第88図　試料No.11の段階交流消磁測定結果 145
第89図　地磁気永年変化曲線の一部とSB12炉跡の磁化方向 ……146
第90図　胎土材料分析遺物実測図 ……158
第91図　土器胎土中の粒子組成図 ……159
第92図　樹種同定試料出土位置図(1) ……170
第93図　樹種同定試料出土位置図(2) ……171

別添図1　遺構全体図　（A・B・C区）
別添図2　遺構全体図　（C・D・E・F区）
別添図3　遺構全体図　（F・G区）

表 目 次

第１表　時期区分表 …… 8
第２表　遺構表……109
第３表　出土遺物集計表……110
第４表　遺物観察表(1)～(15)……111
第５表　遺構別出土遺物集計表……127
第６表　竪穴住居長辺の時期別件数……136
第７表　床面積の時期別件数……136
第８表　竪穴住居方向の時期別件数……136
第９表　炉位置の時期別件数 …… 136
第10表　カマド位置の時期別件数……136
第11表　土師器煮炊具使用痕時期別分類一覧
……141
第12表　炉跡焼土の残留磁化測定と統計計算
結果 …… 146
第13表　SB12炉跡焼土の残留磁化測定による焼
成年代測定結果 ……147
第14表　高杯類の胎土分析試料 ……157
第15表　土器胎土中の粒子組成一覧表 ……160
第16表　高杯胎土の粘土および砂粒の特徴　161
第17表　下西郷一本松遺跡住居跡出土炭化材
樹種同定結果 ……169
第18表　下西郷一本松遺跡住所別の検出樹種
比較 ……170

写真図版目次

口絵カラー　調査区（北区）全景（南上空から）・北区全景（上空から）
図版１　土師器煮炊具使用痕 ……142
図版２　土器胎土中の砂粒顕微鏡写真 ……162
図版３　土器胎土中の粒子顕微鏡写真 ……163
図版４～８　住居跡出土炭化材の組織写真(1)～(5) ……164
図版９～19　遺構写真
図版20～33　出土遺物写真

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

平成10年度、岐阜市土木部道路建設課から岐阜市教育委員会社教育課へ西郷一号線街路事業に関連して埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。市教育委員会では、当事業予定地内に下西郷一本松遺跡が含まれていることから、文化財保護法上の手続きと本調査前の試掘調査について説明を行った。平成10年2月26日、10月28日の2度にわたって道路建設予定地内に数カ所のトレンチを設定して遺構・遺物の有無、土層の状態等を検討した。その結果、遺跡推定範囲北端部以外全域において古墳時代を主体とする遺構・遺物が存在することが明らかになった[1]。試掘調査の結果を受けて、平成11年度に発掘調査（調査主体は㈶岐阜市教育文化振興事業団）を実施することとした。平成11年1月20日付けで文化財保護法第57条の3の発掘調査通知が岐阜市長から文化庁あてに提出された。これに対し平成11年2月8日付けで県教育長から岐阜市長あてに、事前に発掘調査を実施する旨の指示があった。平成11年4月6日付けで㈶岐阜市教育文化振興事業団理事長（市教育長）から文化庁あてに文化財保護法第57条の届け出を行った。

(1) 岐阜市教育委員会『平成9・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』 1999

第２節　発掘調査の経過

調査区は全長約113mを測り、範囲内で用水路が東西方向に1条横切るため、これを境に北区と南区を設定した。北区を15m毎に区切り、北から順にA～E区の名称を付け、また南区は南北に2分割し、F・G区の名称を付けた。調査は北区から着手し、4月14日～16日で表土を剥ぎ、事務所の設置・現場での諸準備が終了した後、4月21日から遺構検出を開始した。平成10年2月26日、同年10月28日に行った2度の試掘の結果から、特に南部で遺構が集中していることが予想されたが、地山と遺構埋土との判別が難しく、検出作業は困難を極めた。それにもかかわらず、北区においては、11棟の炉・カマドを伴う住居跡、焼失住居（SB09・12）、土器集積をともなう遺構（SK01・02・06、SD03）、耳環が出土した土坑墓（SZ01）をはじめ、多くの遺構を確認した。7月14日に七郷小学校の5・6年生を対象として遺跡見学会を実施し、カマドを持つ住居の構造について説明した。7月22日に空撮を実施し、8月6日に北区における調査を終了した。南区の表土剥ぎは7月30日から開始し、北区の作業と並行して行った。8月4日から検出作業を開始したが、北区に比べ、地山・遺構埋土に若干の質の違いが認められ、遺構検出が容易になった。しかしF区において、狭い範囲で6つの住居跡が重なり合っており、さらに調査区中央部では数条の溝が切り合っていたことから、切り合い関係の判断に手間取った。遺構数は多くないが、焼失住居（SB30）や高蔵期の土器集積を伴う土坑（SK09）などを確認した。空撮は9月14日に行い、南区での調査は9月29日には終了した。9月30日、10月1日の2日間で事務所等の撤去作業を行った。整理作業、報告書作成作業は現場と並行して行い、平成12年3月31日にすべての作業を終了した。

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

下西郷一本松遺跡は、岐阜市の西側、糸貫町内を南北に流れる根尾川が形成した扇状地上に立地している。根尾川扇状地の範囲は半径約８kmを測り、西は三水川と大野台地、東は黒野大地に接する面積40平方キロメートルの規模を持つ。

約１万年前、根尾川は断層谷の根尾谷を曲流し、山地から平野部に出る山口（本巣町）付近で藪川、古犀川、古糸貫川、古根尾川に分流していた。分流の理由としては、扇頂部には洪水の度に大量の土砂が運ばれ、洪水が終わると、この土砂が川の流れを防ぐようになったことが挙げられる。根尾川は山地から砂礫を搬出し、平野部に至ると急激に河川の運搬力が衰え、拡散的に砂礫を堆積させた。根尾川扇状地は、このような作用により、山口付近を頂点として形成された緩傾斜の扇状地である。緩傾斜となった理由としては、平野部ですでに堆積していた濃尾第一礫層の傾斜がそれほど急でなかったこと、古根尾川の水量が多く、網状流路によって流水が広い地域に土砂を運んだことが挙げられる。この扇状地においては、地表下に１～２ｍの砂・シルト層の堆積があり、その下に厚い礫層が認められる。緩傾斜の扇状地は中州のような流路の堆積による紡錘形や菱形の平面形を成す微高地と、旧河道ないし河間の低地から成る。下西郷一本松遺跡がある西郷・七郷地区はこの中の微高地に相当する。

〔参考文献〕
西郷の歴史刊行会『西郷の歴史』第１章　1982
岐阜市『岐阜市史』通史編　原始・古代・中世　1980

第２節　周辺の遺跡

下西郷一本松遺跡は、岐阜市の西部、糸貫町との境近くに位置する。下西郷一本松遺跡のあるこの西郷地域周辺は、平成２～７年度にかけて実施された岐阜市遺跡詳細分布調査によって古代から中世にかけての遺物が散布する遺跡が多数見つかった。それ以前は古墳以外の遺跡は、一部弥生中期から後期にかけての遺物の散布が知られるのみであった。

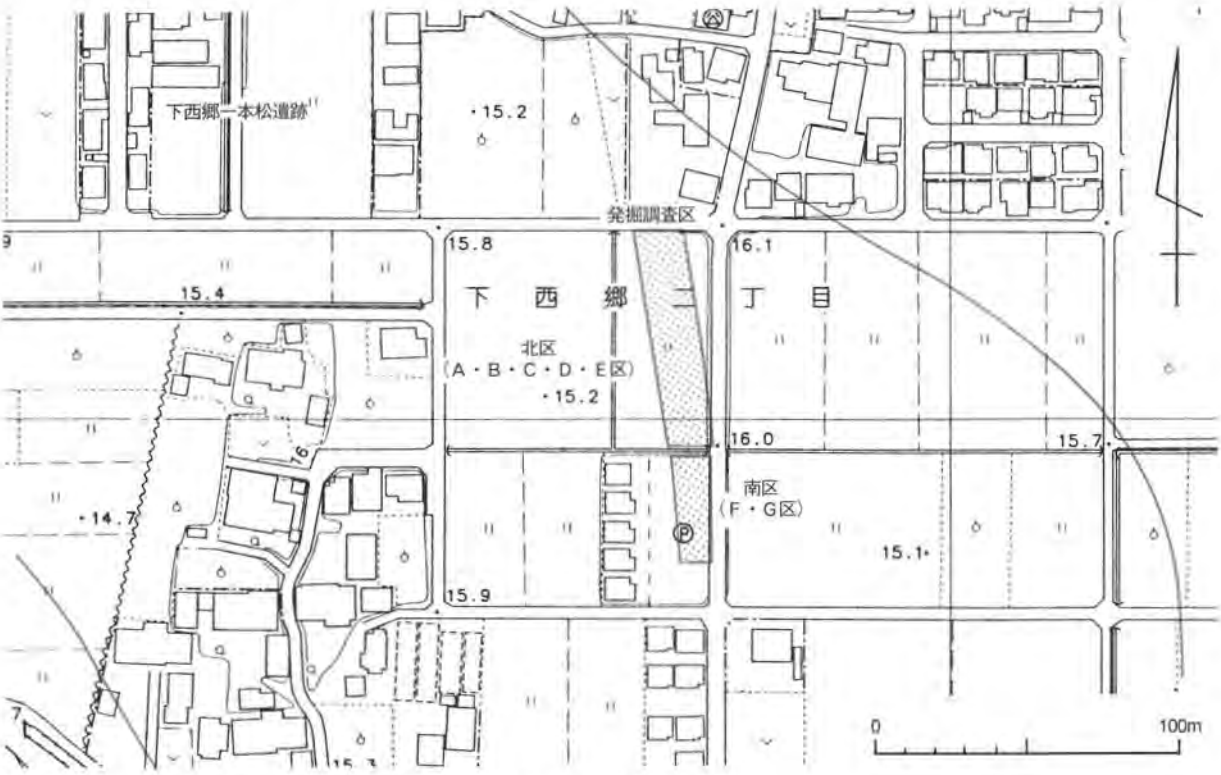
周辺遺跡を時代ごとにみると、黒野台地北西端に立地する御望Ａ遺跡は平成３年～５年度にかけて発掘調査が行われ、縄文時代前期後葉の集落跡であることがわかった。その他にも縄文時代中期後葉・弥生時代後期の住居跡・中世の溝も見つかっている。ほかに縄文時代の遺跡として犬塚遺跡がある。

弥生時代から古墳時代にかけての集落は、御望山の西方の扇状地上に立地する犬塚遺跡では弥生中期から後期にかけての土器が採取されている。御望川から南に延びる緩やかな支丘上に立地する洞山上遺跡では弥生時代後期の高杯が採取されている。

また近年の試掘調査で、根尾川扇状地上の中西郷Ｂ遺跡では溝が検出され、古墳時代末の土師器・須恵器が出土。上西郷Ｃ遺跡では竪穴住居跡が検出され、須恵器・土師器片が、下西郷Ａ遺跡では須恵器が出土。上尻毛八幡遺跡では古墳時代の土器が出土している。

第１図　周辺遺跡分布図（国土地理院発行１：25000地形図（北方）使用）

1 下本郷一本松遺跡	2 上西郷Ａ遺跡	3 船来山古墳群	4 上西郷Ｂ遺跡
5 大塚遺跡	6 大塚古墳群	7 御望古墳群	8 洞第２古墳群
9 上西郷Ｃ遺跡	10 御望Ａ遺跡	11 洞第１古墳群	12 洞山上遺跡
13 御望Ｂ遺跡	14 御望Ｃ遺跡	15 黒野洞遺跡	16 今川遺跡
17 中西郷Ａ遺跡	18 中西郷中遺跡	19 中西郷Ｃ遺跡	20 中西郷Ｂ遺跡
21 小野Ｂ遺跡	22 黒野城下町遺跡	23 小野Ａ遺跡	24 下西郷Ｄ遺跡
25 小西郷遺跡	26 下西郷Ｃ遺跡	27 下西郷Ａ遺跡	28 下西郷Ａ遺跡
29 小西郷鶴木遺跡	30 西改田村前遺跡	31 西改田宮西遺跡	32 上尻毛高田遺跡
33 東改田再勝遺跡	34 上尻毛八幡遺跡	35 又丸遺跡	36 川部Ａ遺跡
37 木田遺跡			



第２図　発掘調査位置図

古墳については、主に横穴式石室を主体とする古墳群が御望山や船木山にみられる。

下西郷一本松遺跡から北へ約３㎞にある御望山には西から犬塚古墳群、御望古墳群、洞第１古墳群、洞第２古墳群がある。犬塚古墳群は西端南麓に位置し、２基の古墳が確認されており、ともに内部主体は横穴式石室で、直刀・鉄鏃・須恵器の高杯・杯身が出土している。御望古墳群は南斜面山麓に位置し、４基が確認され、一部の古墳は横穴式石室であることが知られており、須恵器（杯身・高杯・平瓶）が出土している。洞第１古墳群は南麓に位置し、現在２基の古墳が確認されているが、内部主体は横穴式石室で、玉類（勾玉・管玉）・五獣鏡・直刀・須恵器（杯身・高杯）が出土している。洞第２古墳群は現在５基の古墳が確認されている。内部主体は横穴式石室で、玉類（勾玉・管玉）直刀・須恵器（杯身・高杯・甕・平瓶など）・土師器（壺）が出土している。

北西へ約２㎞、岐阜市・糸貫町・本巣町にまたがる船来山には船来山古墳群がある。古くから鏡を出土した24号墳・27号墳などの前期古墳や、多くの横穴式石室が知られていた。平成７・８年度には３市町で発掘調査が行われ、多数の古墳が確認、調査された。

古代から中世・近世にかけての遺跡として黒野台地上には御望Ｃ遺跡、黒野洞遺跡、今川遺跡、小野Ａ遺跡、黒野台地西端部から根尾川扇状地上には中西郷・中遺跡、根尾川左岸扇状地上には上西郷Ａ遺跡、上西郷Ｃ遺跡、中西郷Ａ遺跡、中西郷Ｂ遺跡、小西郷遺跡、下西郷Ｄ遺跡、板屋川右岸の自然堤防上には木田遺跡、板屋川左岸扇状地上には東改田再勝遺跡が立地する。これらの古代から中世の遺跡については、須恵器が多く、灰釉陶器が減少し、山茶碗が灰釉陶器とほぼ同一数量に留まるか、さらに減少するといった傾向の遺跡が多く、この現象は岐阜市西部の西郷地区周辺に見られるという分析もなされている[1]。

近世初期には本遺跡の北東1.8㎞の黒野台地の北西端に黒野城が築かれ、黒野藩が成立した。しかし、城主の移封によって幕領と藩領にわけられた。

〔注〕

（1）内堀信雄「第3章　考察（岐阜市における古代～中世の集落遺跡の動向）」
1995『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』

〔参考文献〕

岐阜市『岐阜市史』史料編 考古・文化財　1979

岐阜市教育委員会『御望遺跡－市道西郷1号線建設に係る緊急発掘調査の記録－』　1944

岐阜市教育委員会『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』　1996

岐阜市教育委員会『平成5～7年度岐阜市埋蔵埋蔵文化財調査報告書』　1996

岐阜市教育委員会『平成7年度市内遺跡発掘調査報告書』1996

岐阜市教育委員会『平成8年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』　1997

岐阜市教育委員会『平成9年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』　1998

岐阜市教育委員会『平成9・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』　1999

㈶岐阜市教育文化振興事業団『平成10・11年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』　2000

糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会『船来山古墳群』　1999

第３章　遺跡の概要

第１節　層位

以下に記す層位は、一部を除き調査区の西壁において確認したものである。

Ⅰａ層（表土層）：暗褐色土。現代の田の耕作土である。北区全域において確認でき、厚さは30㎝前後と平均している。

Ⅰｂ層（表土層）：黄色砂礫層。現代の住居建築のために盛られたものである。南区全域で確認でき、厚さは約１ｍを測る。水平に盛り土されている。

Ⅰｃ層：灰色砂質シルト。現代の田の床土であり、非常に硬く締まる。Ａ～Ｅ区で確認でき、厚さは10㎝前後と一定である。

Ⅰｄ層：黒灰色粘質土。Ｆ・Ｇ区で確認でき、厚さは約20㎝と一定である。

Ⅱ層（遺物包含層）：暗褐色砂質シルト。鉄分を多く含み、硬く締まる。Ａ・Ｂ・Ｃ区において確認でき、SD1によって切られている。またＣ区においては灰褐色砂質シルトになる。

Ⅲａ層（遺物包含層）：青灰色砂質シルト。均質で混じりもなく、硬く締まる。Ｅ区でのみ確認できた。本層を取り除いた面でSB18、SD4を検出したことから、ある時期にこの部分で地形が落ち込んでおり、のちに本層が堆積したと考えられる。

Ⅲｂ層（遺物包含層）：灰褐色シルト。Ｆ区でのみ確認した。

Ⅲｃ層（遺物包含層）：暗黄褐色シルト。Ｆ・Ｇ区で確認した。本層上面からSD7が掘り込まれている。

Ⅲｄ層（遺物包含層）：明黄灰色シルト。Ｇ区でのみ確認した。

Ⅲｅ層（遺物包含層）：暗灰色シルト。Ｇ区でのみ確認した。

Ⅲｆ層（遺物包含層）：灰色粘質シルト。硬く締まる。Ｇ区のみで確認した。

Ⅳ層：黄灰色粘質シルト。本層の上面でSB32を検出した。北に向かって厚くなるが、Ｅ区において対応する層は見つかっていない。

Ⅴａ層：赤褐色砂質シルトで、北の方では茶褐色砂質土で黄茶色シルトになる。Ａ～Ｅ区で確認した。本層の上面で遺構を検出した。南区においては本層に対応する層は見つかっていない。

Ⅴｂ層：赤褐色砂質シルト。調査区全域で確認した。またＦ・Ｇ区において、溝の下部では灰色粘質土に変質している部分が数ヶ所観察できた。本層の上面でSX11、南区の遺構のほとんどを検出した。

Ⅴｃ層：暗黄灰色砂質シルト。Ｇ区でのみ確認した。SB33などは本層の上面で確認した。

Ⅵａ層：茶褐色砂層。トレンチによる狭い範囲の確認となったため、堆積の状況は確認できなかった。

Ⅵｂ層：茶褐色砂層。Ⅵａ層と同様に、トレンチによる狭い範囲での確認となったため、堆積の状況は確認できなかった。

Ⅵａ・ｂ層については、SB17のカマド付近から北側で検出しているが、この南側では見つけることができなかった。

Ⅵｃ層：灰褐色シルト。Ｆ区の中央部分でのみ確認した。遺物は認められない。

Ⅵｄ層：茶褐色シルトに鉄分が多く混じる。Ｆ・Ｇ区において確認した。遺物は認められない。

Ⅵｅ層：黄褐色シルト。遺物は認められない。

Ⅵｆ層：灰色シルト。Ⅵｃ・ｄ層が変質したものと考えられる。遺物は認められない。

Ⅵｇ層：灰色粘質シルト。Ⅵｃ層が変質したものと考えられる。遺物は認められない。

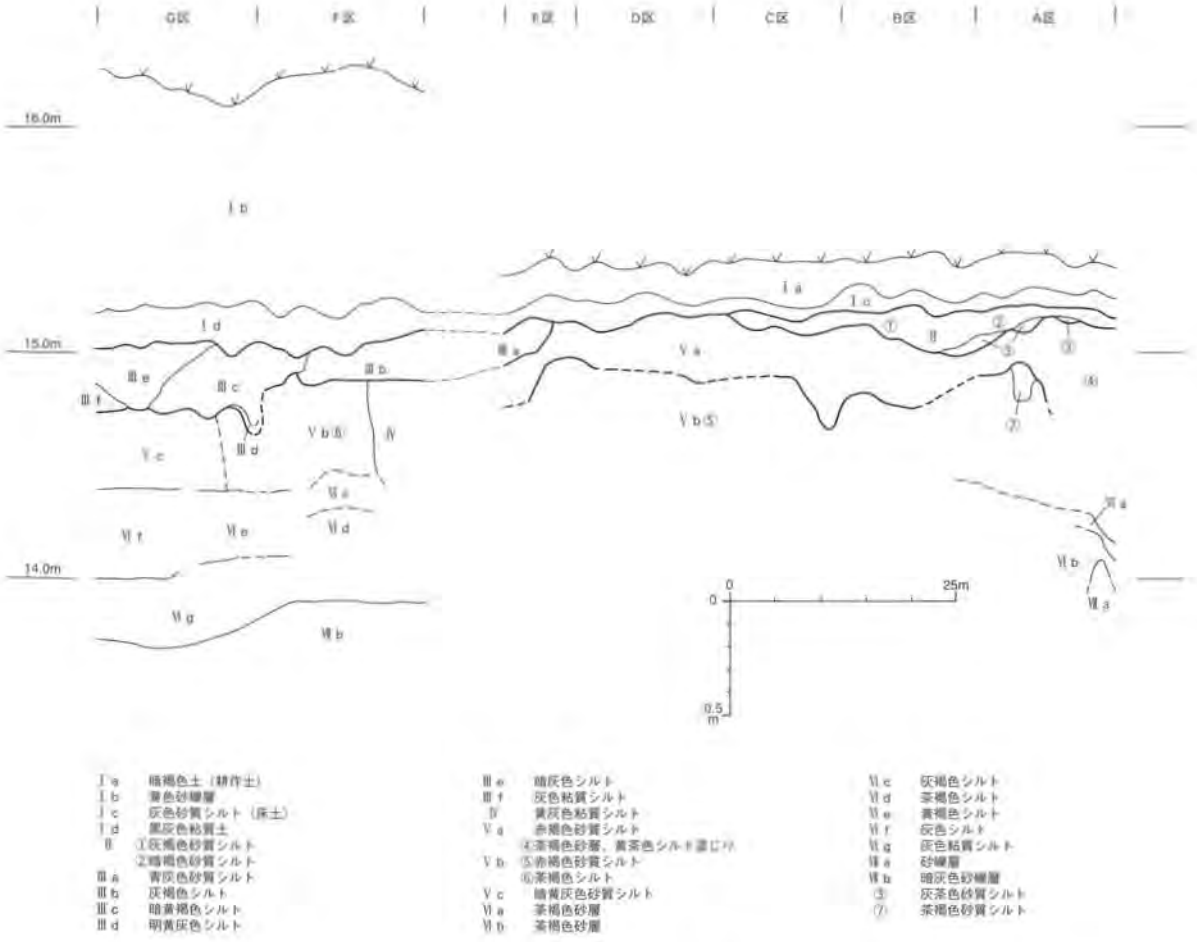
Ⅵｃ～ｇ層について、これらの層は調査区の西壁で確認したものではなく、遺構の掘削終了後、調査区の中央に入れた確認トレンチにおいて確認したものである。位置から考えて大差がないと判断し、ここに記述した。

なお、Ⅵｃ～ｆ層については無遺物層であるが、Ⅵａ・ｂ層は無遺物層とは認識していない。

Ⅶａ層：砂礫層。礫の直径は１～２㎝を測る。重機によるトレンチでは、南北両方向に向かって傾斜している様子が確認できた。遺物は認められなかった。

Ⅶｂ層：暗灰色砂礫層。南に向かって緩やかに傾斜し堆積している。遺物は認められなかった。

本調査の土層観察では、全体に南への緩やかな堆積が確認できた。これらは根尾川によって形成された緩傾斜扇状地の地形を反映しているものと考えられる。



第３図　土層模式図

第２節　遺構・遺物の概観

（１）遺構の概要

今回の発掘調査では、弥生時代中期後半から古代にかけての遺構・遺物が検出された。大きく３つの時期に分けられる。

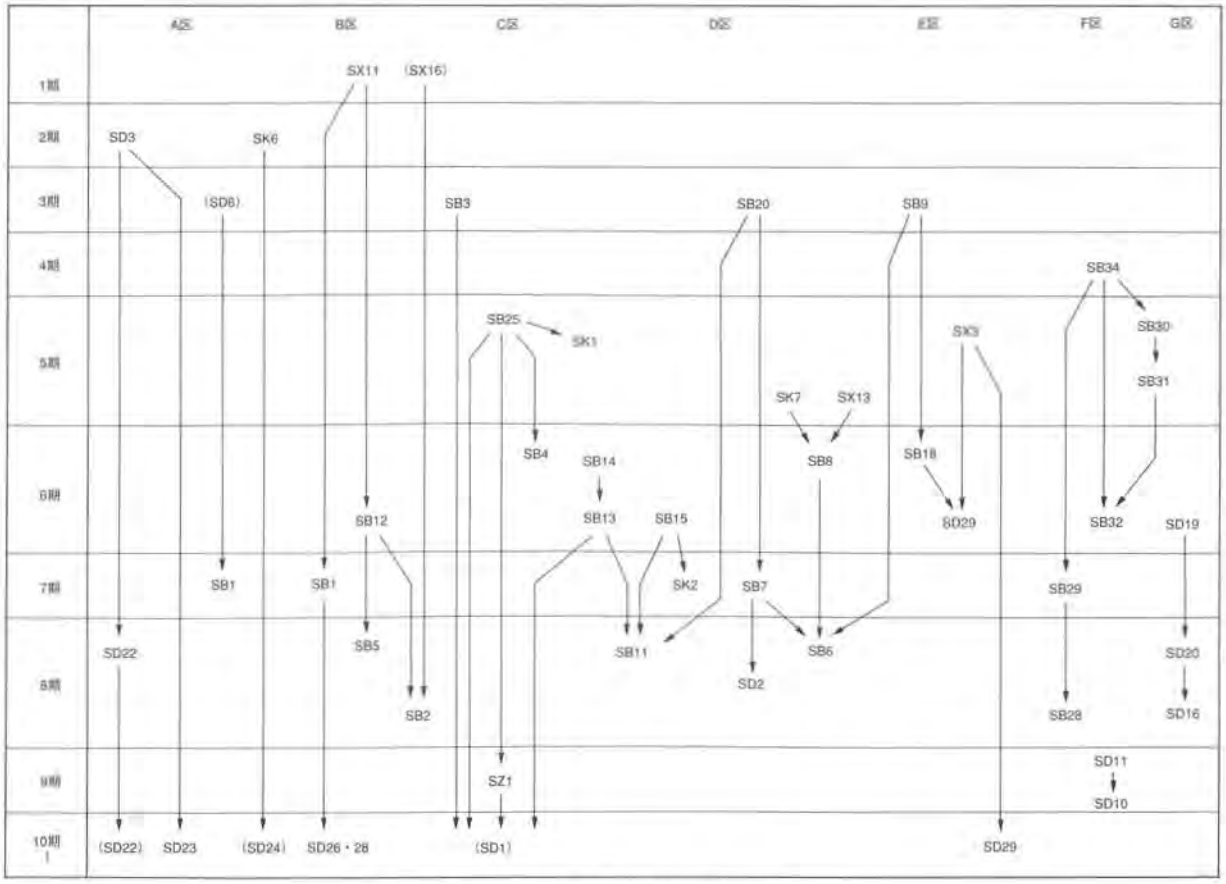
１つは弥生時代中期後半期で、弥生時代末から古墳時代の遺構面及び下層で見られる。

２つめは弥生時代後期から古墳時代にかけて、本遺跡の中心となる時期である。

３つ目は古代から中世にかけてであるが、溝以外の明瞭な遺構は確認できなかった。

遺構は、住居跡が31、溝29、土坑９、ピット45、不明遺構16の合計130基の遺構が確認された。このうち、不明遺構内にも住居跡の可能性のあるものがある。遺構数が少ない理由として、本遺跡は基盤となる層と遺構の埋土が酷似しており、遺構検出が困難で、複雑に重なり合う遺構やピットなどの小さな遺構は検出できなかったと思われる。また、住居跡の柱穴や周溝もほとんど確認できなかった。また、弥生中期後半期の遺構については弥生時代後半から古墳時代にかけての遺構とは基本的に検出レベルが異なることから検出・調査ができなかった。

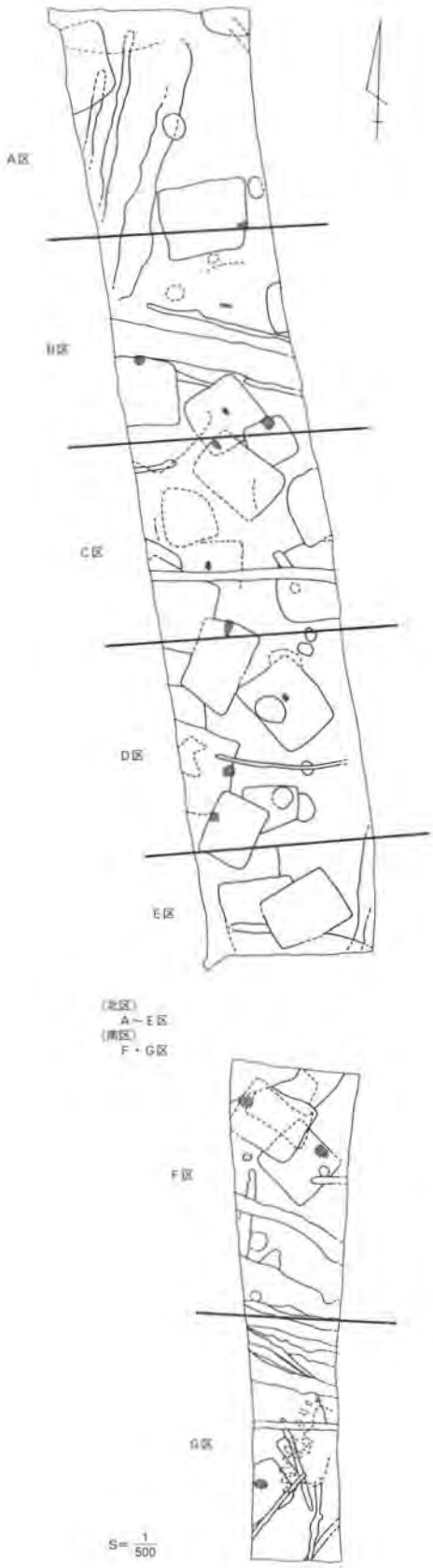
本調査区の中心となる時代・遺構は弥生時代末から古墳時代にかけての住居跡で、調査区全体に見られるが、特にＢ区の南側からＦ区北側の間に集中する。Ａ・Ｂ区の住居跡は、検出面から床面までが浅く、それに比べるとＣ区南・Ｄ・Ｅ・Ｆ区では床面までが深い。これにすべてが該当するわけで



第４図　主要遺構切り合い図

はないが、全体的にそういった傾向がみられる。このことは調査区の北部分がかなり削閉されていることを示しており、A区・B区南では遺構が少ないのではなく、削られてしまったか、SB21のように床面のみとなってしまって遺構として検出が困難となったことも考えられる。

本報告では、遺構の帰属時期を表すために記述の便宜上時期区分を第1表のとおりおこなう。基本的に第6回東海考古学フォーラムの時期区分[1][2]に従い、それにさらに付け加え、10期に区分した。



第5図　地区割り図

時期		フォーラム編年	城之内遺跡時期区分
1期	弥生中期後半		
2期	山中式併行	Ⅰ期	6期
3期	欠山式・廻間Ⅰ式併行	Ⅱ期	7期
4期	元屋敷式・廻間Ⅱ式併行	Ⅲ期	8期
5期	廻間Ⅲ式・松河戸Ⅰ式併行	Ⅳ期	9期
6期	松河戸Ⅱ式併行	Ⅴ期	10期
7期	宇田式併行	Ⅵ期	11期
8期	古墳時代後期		12期
9期	古代		
10期	中世～		

第１表　時期区分表

（２）遺物の概要・分類（第６・７図）

発掘調査で出土した遺物は全部で37,739点である。遺物は弥生中期後半、弥生時代末から古墳時代全般、古代、中世のものが見られるが、特に弥生時代末から古墳時代の土師器がそのほとんどを占める。ここではこれら弥生土器・土師器について概観してみたい。基本的には東海考古学フォーラムの器種分類[3]に基づき主要な器種について記す。

弥生土器（弥生時代中期後半）

〈甕〉

平底甕(叩き)　弥生中期後半の土器で、体部に叩きを施す。叩きを施す台付甕もみられる。

弥生土器・土師器（弥生時代後半～古墳時代）

〈甕〉

受口口縁甕　　底部が平底・台付がみられる。

くの字甕　　底部が平底・台付の２種類がある。口縁端部は面を持つもの・持たないもの、口縁部や体部に加飾するもの・しないもの

Ｓ字甕　　Ａ類からＤ類に分類。Ｄ類に関しては内堀案[1]に従ってＤ１類からＤ３類に分類

Ａ類　口縁外面第２段に押引き刺突文のあるもの　口縁第２段が垂直に立ち上がる

Ｂ類　口縁外面第２段に押引き刺突文のないもの　口縁第２段が垂直に立ち上がる

Ｃ類　口縁外面第２段に押引き刺突文のないもの　口縁第２段が外反する

Ｄ１類　口縁部が肥厚して先端に面をもつもので、Ｃ類と器壁の厚さが同じもの

Ｄ２類　口縁部が肥厚するか、肥厚して先端に面をもつもので、器壁がいわゆるＳ字甕Ｂ・Ｃ類とＤ３類の中間のもの

Ｄ３類　口縁端部が肥厚するか。肥厚して先端に面をもつもので、宇田型甕同様器壁が厚いもの口縁外面に必ず稜をもつ

宇田型甕　　器壁は厚く、口縁部外面の稜はみられない。口端部に面あるいは１条の沈線を持つ

伊勢型甕　　丸底で口縁端部を上方に鋭く引き伸ばし、口縁部が肥厚する。胴部内面上半横ハケ、下半ケズリ調整が多数をしめる。

〈高杯〉

屈折外反高杯　杯部が外反するいわゆる山中式併行期の高杯

有段高杯　　杯部は垂直あるいは上外方に伸びる脚部は短く、中途で屈折内彎する。脚部に透孔が開けられ、杯部内外面、脚部外面をミガキ調整するもの

屈折脚高杯　　杯部は直線的もしくは外反して外方へ伸びる。脚部は上半は棒状でで裾部が屈折し、外へ開く。調整はナデが見られる。

これが基本形であるが、杯部に垂下稜をもつもの、杯部屈曲部が丸く杯部が外反し端部は丸くおさまるもの、器形は共通性があるが、杯部・脚部にミガキを施すものの4類にわけられる

杯部椀形高杯　杯部が丸く、椀形になるもの。杯端部は外反するもの・丸くおさまるものがある。

〈壺〉

細片多く、器形も様々である。これに口縁部に擬横線、体部に加飾し、赤彩をほどこすものをパレス壺、口縁部に二重口縁技法をもち、口縁内外面に羽状の刺突文をもつものを柳ヶ坪型壺、それ以外の大形の壺を広口壺とする。

〈鉢〉

口縁部が甕と同様の形態をもつ大形のものとバリエーションのある小形の鉢とに分けられる。

〈甑〉

基本的に2孔のもののみで、胎土や口縁端部、調整で、宇田型甕に酷似するもの、伊勢甕に酷似するもの、その他の3つグループに分けられる。

須恵器

基本的にH-11・TK-47窯式併行期から見られ、この出現期と7C代の須恵器が多い。器種は 杯身・杯蓋・高杯・高杯蓋・無蓋高杯・瓮・甕・壺・器台がある。

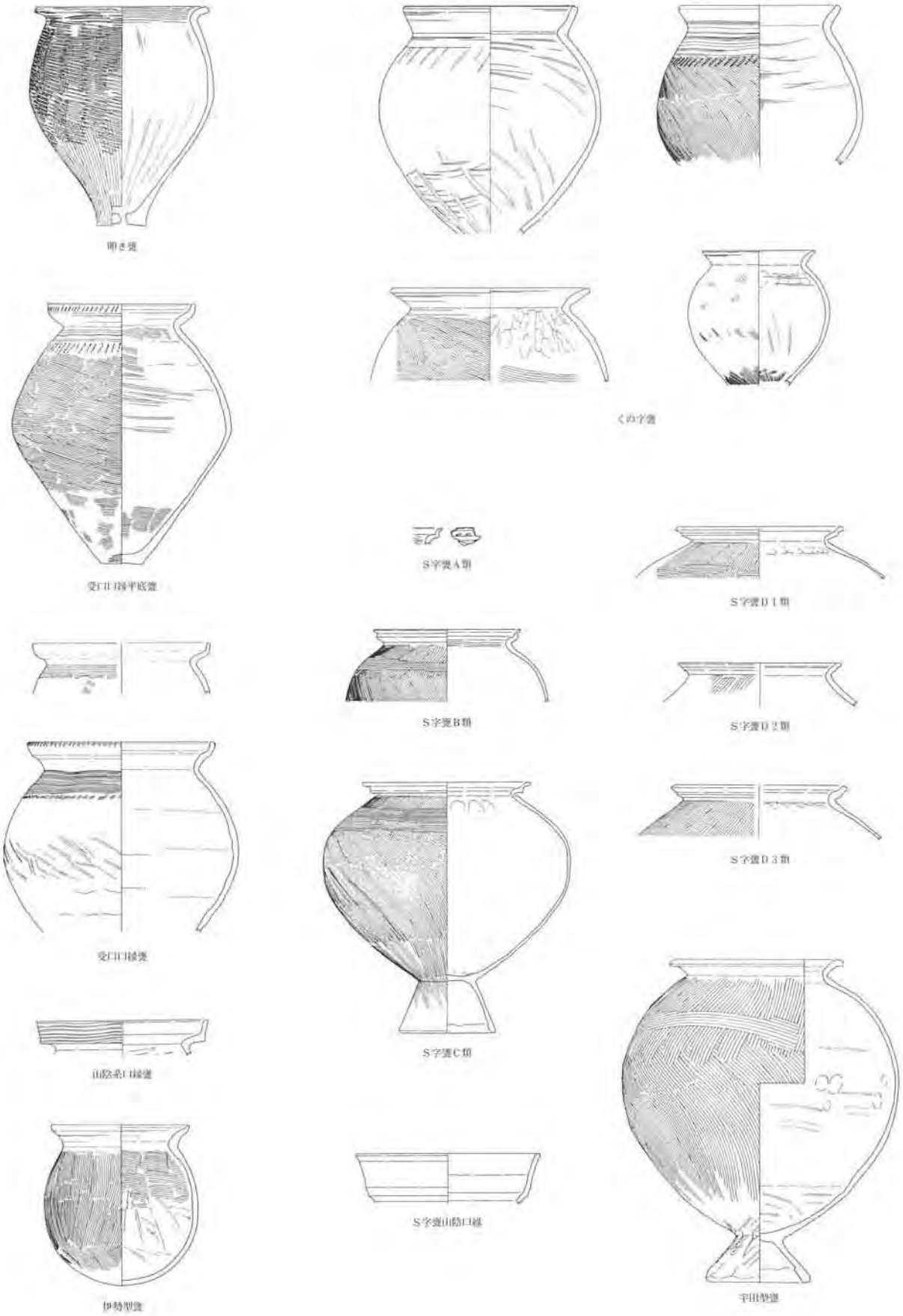
産地はH-11・TK-47窯式併行器には尾張系と陶邑系のものとがあり、尾張系のものの方が多い。6C末から7Cにかけては尾張・陶邑系に美濃産のものが見られるようになる。7C後半になると美濃・美濃須衛産がほとんどを占める[5]。

灰釉陶器

椀・深椀・皿が見られる。出土量は少ない。時期的には前半のものである。

山茶碗

尾張系と東濃系の碗が見られる。出土量は僅かである。



第６図　主要器種分類図（１）

第７図　主要器種分類図（２）

〔注〕

（１）内堀信雄・横幕大祐「山中ー宇田式併行期の美濃西部域土器編年」『土器・墓は語る』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会　1998

（２）下西郷一本松遺跡の時期区分については内堀信雄氏にご教示いただいた。

（３）横幕大祐「形式分類」東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会　1998

（４）内堀信雄「Ｓ字甕～宇田甕の変化傾向」『土器・墓が語る』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会　1998

（５）渡辺博人氏にご教示

参考文献

東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会『土器・墓が語る』　1998

東海考古学フォーラム三重大会実行委員会『Ｓ字甕を考える』　2000

岐阜市教育委員会『城之内遺跡ー長良公園整備に伴う緊急発掘調査ー（第１分冊）)』　1999

渡辺博人「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』　1984

藤沢良祐「山茶碗の研究現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

第４章　遺構と遺物

第１節　１期の遺構と遺物

SK5（第８図・第47図１～６）

遺構　A区SB17の東側に位置し、南北に長い楕円形を呈する。深さは約10㎝と浅く、底は平坦である。底部分には炭化物を多く含む層があり、この層より遺物が出土した。

遺物　１・２は甕の口縁部、３は甕の脚台で、外面、脚台部内面にハケ調整を施す。４は壺の胴部で、体部上半には櫛描きによって波状文・斜格子文・直線文が施され、下半にはハケ調整が見られる。５・６は壺の底部である。いずれも弥生中期後半のものである。

SK9（第８図・第47図７～12）

遺構　F区に位置し、SD21に切られる。平面形は不整円形を呈し、深さは15cmである。検出面において土器集積を確認し、その集積は土坑の底部まで達していた。

遺物　出土した遺物はすべて平底の叩きを施した甕である。底部５点のうち７・９・11の３点には底部穿孔が施され、８は穿孔途中である。穿孔はいずれも外面からなされている。外面は縦・斜めハケののち叩き施され、内面は上半が斜めハケ、下半は縦方向のケズリが施される。９の体部には二重の列点文が見られる。叩き痕はどの甕も顕著である。

SX7（第41図・第47図13）

遺構　F区に位置し、SD11に切られる。平面形は不整形で、凹凸が激しい。

遺物　本遺構からの出土遺物は少量で、図化できたものは13の叩きを施す甕の脚台部のみである。今回の調査で出土した叩き甕の底部は13を除いてすべて平底である。

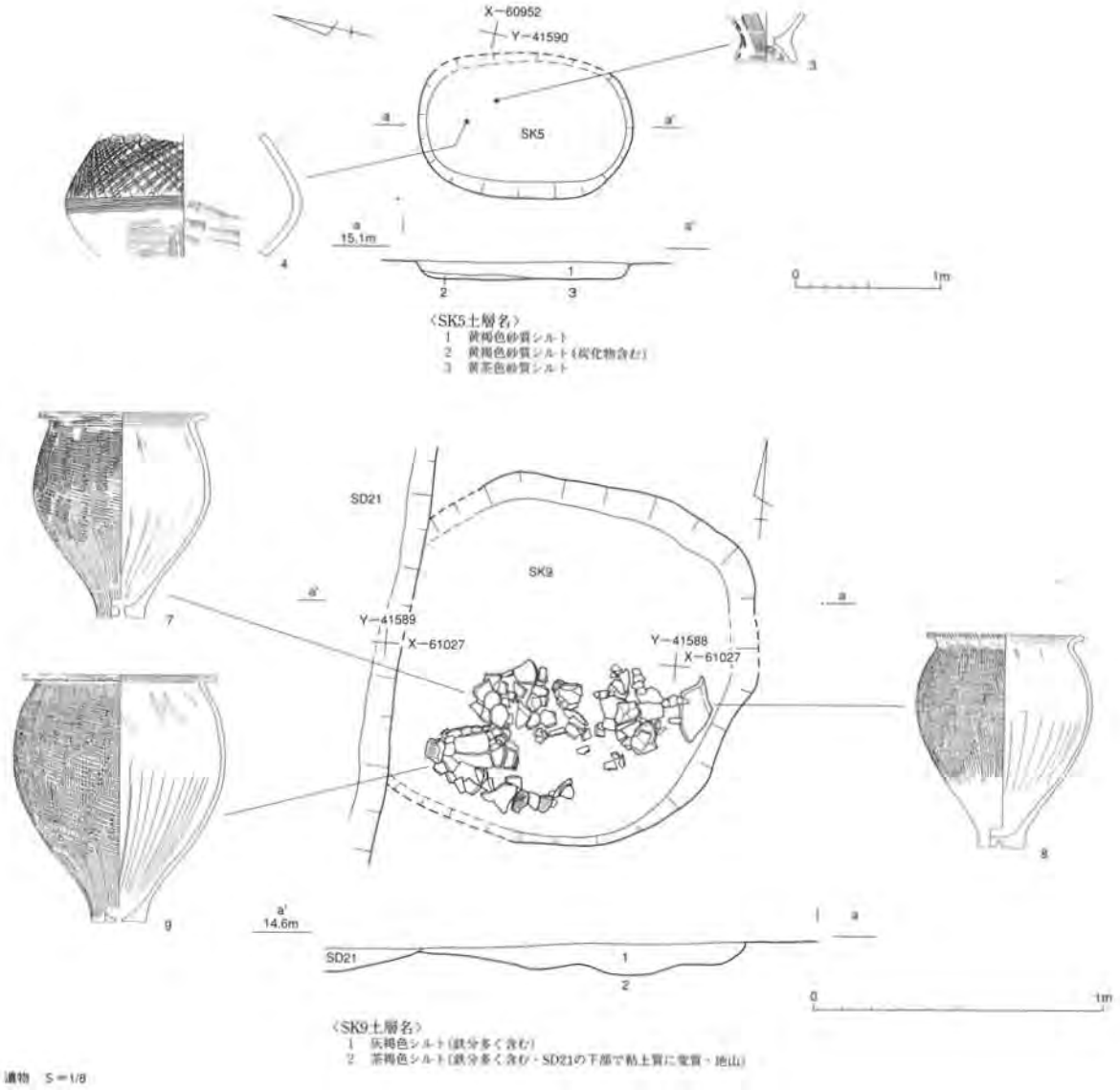
SX8（第43図・第47図14）

遺構　F区に位置する。平面形は東西方向に長軸をとる楕円形を呈し、深さは７㎝と浅い。埋土には多量の炭化物と焼土が混じる。

遺物　出土遺物は少なく、14は直線文と波状文を施した壺の破片である。

SX11（第45・46図・第48図15～21）

遺構　B・C区の西側に位置する。本遺構は古墳時代の住居跡を検出した面ではプランは全く検出できず、西壁沿いとSB12のサブトレンチ、そして重機による南北トレンチの断面によって確認された。平面形は南部分の検出状況から方形を呈すると思われるが、調査区の西壁の断面では炭化物を含む層は約９ｍにわたって検出され、一遺構としては大きく、遺構が重なっている可能性が考えられる。北区において弥生中期後半の遺構と考えられるものは、SK5を除いて、弥生時代末から古墳時代の遺構とは検出レベルが異なり、基盤となる赤褐色砂質シルト層の中で確認されるが、下層面として捉らえ



第8図　SK5・9遺構図

ことはできない。また、遺構と基盤となる層とを区別することも難しく、炭化物や焼土が含まれることで区別ができる。

遺物　15は叩き甕の底部、16・17は直線文と波状文を施す壺の体部、18は瓜郷式の壺、19は外面に縦位の条痕、外底部に布目痕が見られる貝田町式の甕の底部である。20・21は伊勢湾西岸域で見られる甕と壺で、20の口縁端部には列点文、21の口縁部内面にはボタン状突起が見られる。

SX12（第45・46図・第48図22·23）

遺構　B区に位置する。重機による南北トレンチによって遺構の北側の掘り込みが確認されたが、一部分のみで全体の規模や形は不明である。遺構の北端から南へ約2.8 mのところで焼土が集中する部分が検出された。断面からみる遺構の状況、焼土の位置からこれを炉であると考えると住居跡である可能性が高い。

遺物　本遺構からの出土遺物は少ない。22は太頸壺の口縁部である。

第2節　2期の遺構と遺物

SB16（第9図・第48図24～30）

遺構　B区に位置する。遺構の半分以上は調査区外であるが、平面形は方形を呈すると思われる。炉、周溝、ピット等は確認できなかった。検出面からの床面までの深さは約50㎝と他の住居跡より深い。

遺物　本遺構の出土遺物は少なく小片である。24・25は弥生中期後半のもので、26～30は本遺構に伴う。24は体部に波状文を、25は口縁端部に沈線とキザミを施す伊勢湾西岸域で見られる壺である。26･27はくの字甕、28は口縁部にキザミを施し、口縁端部に明瞭な面を持つ受口口縁の甕である。体部は内外面ともにハケ調整が見られる。29は器台、30は外面に細かい縦ミガキを施す。小片で器形は断定できないがワイングラス型高杯の可能性がある。弥生時代中期後半の土器は、本遺構掘削時に部分的に掘りすぎた部分から出土し、SX12に関連する可能性がある。

SB33（第9図・第48図31～34）

遺構　G区に位置し、SD17、SX4に切られる。遺構の半分ほどが調査区外で、平面形は方形を呈する。炭化物が密集する部分があり、その直上で長さ35㎝の川原石が出土した。調査区西壁の土層観察において、炭化物密集部分と対応する位置で川原石・土器片があることから、ここに炉があったことが予測できる。炉は一度床を掘り込み、砂質の土で埋められて構築されている。炭化物密集部と調査区の北壁の間には、排水のための側溝を掘削したが、その際に、炭化物密集部付近から土器片が大量に出土している。床の硬化面、周溝、ピット等は見られなかった。

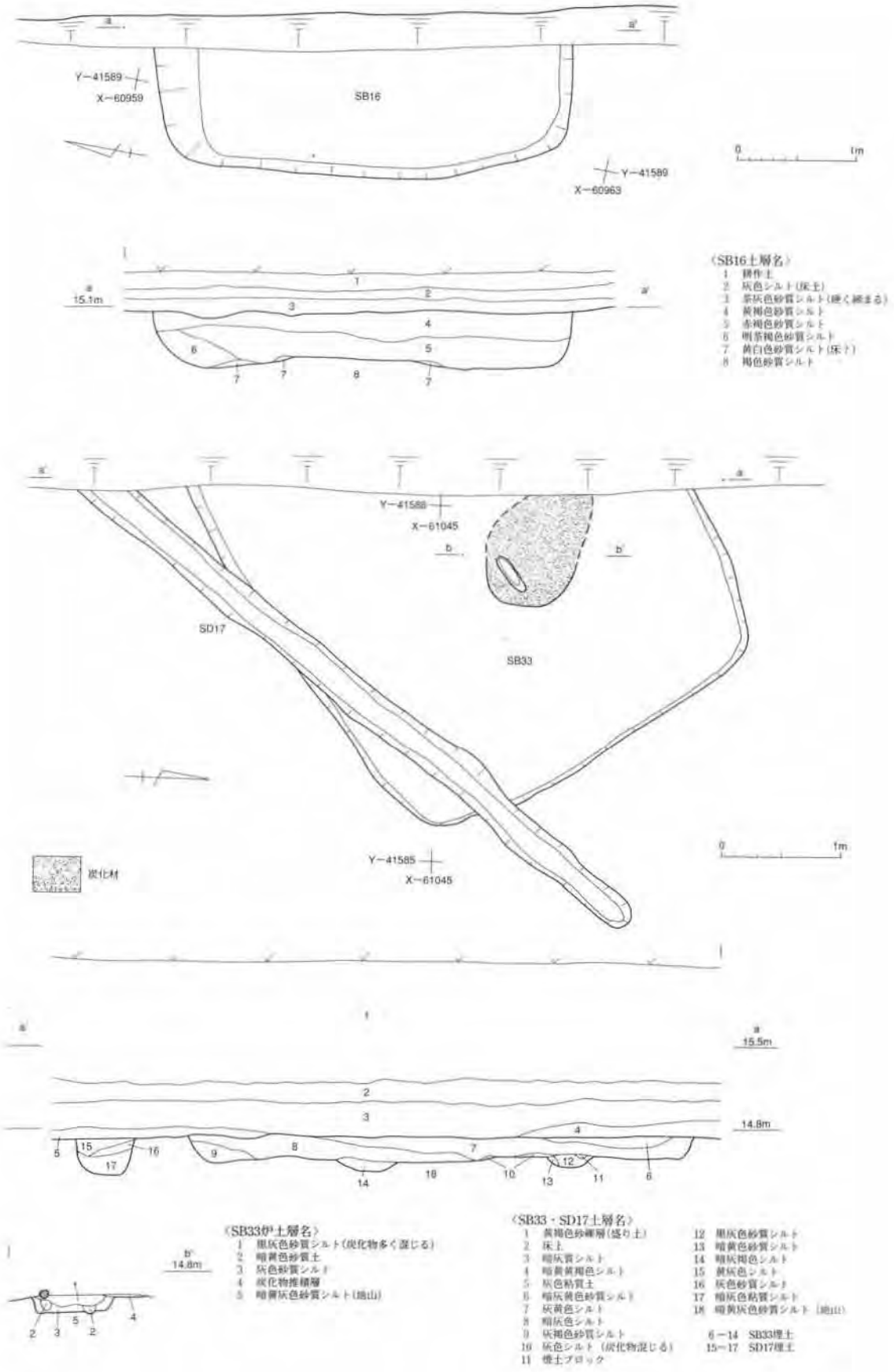
遺物　本遺構からの出土遺物は少量で図下できたものは少ない。31は甕の脚台、32は小型壺の底部で外面は細かいミガキを施す。33・34は屈折外反高杯の脚の裾部で縦方向のミガキが施されている。

遺構検出時にⅠ層として取り上げた遺物があり、902～905の高杯や器台も本遺構の遺物の可能性がある。

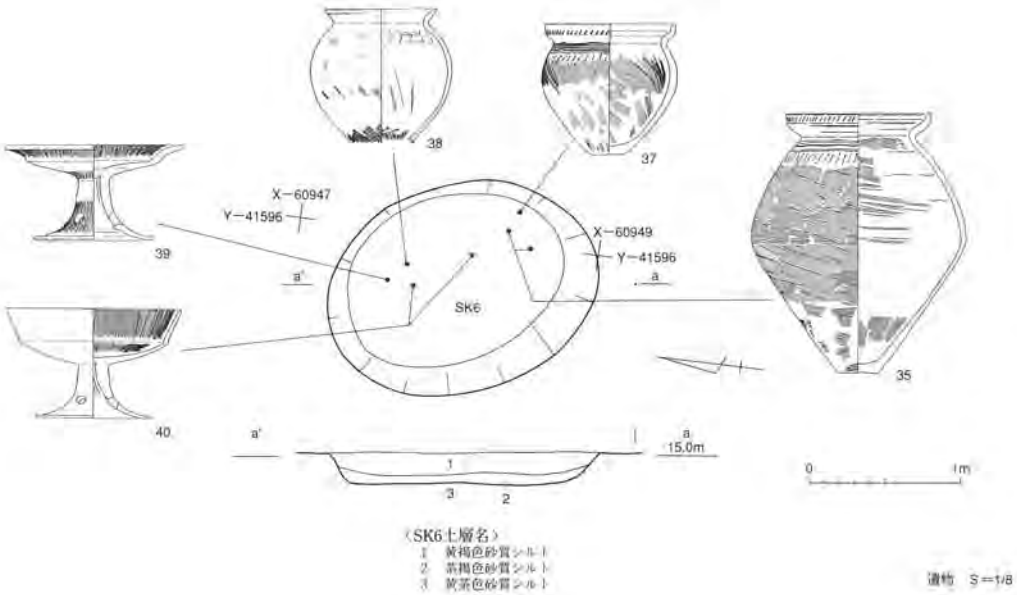
SK6（第10図・第48図35～第49図40・第81図917・923・924）

遺構　A区に位置し、SD24に切られる。本遺構はA区北側に堆積する鉄分を多く含む非常に硬く締まる暗褐色砂質シルトに覆われ、さらにその下SD24の下で検出された。平面形は南北に長い楕円形を呈する。底部分は平坦で、遺物は東寄りの底付近から出土した。

遺物　35・37は受口口縁平底甕で、口縁部に列点文、胴部にはハケメ原体による刺突文を施す。頚部から胴部にかけては35はハケによる横線文、37は櫛状工具によって沈線を施す。38はくの字甕でハケ調整ののちナデ調整を行う。底部の形態は不明である。36はハケ調整の見られる平底甕の底部、39は屈折外反高杯で、杯部は大きく外反し扁平で、脚は短く、裾部が大きく広がる。杯部・脚部には縦方向の細かいミガキ調整が施される。40は39の脚の形態は酷似するが、杯部は外反せず直口する。この高杯の類似品は今宿遺跡・荒尾南遺跡（大垣市）や加佐美山1号墳（各務原市）に見られる。917は磨製石鏃の未製品である。



第9図　SB16・33遺構図



第10図　SK6遺構図

第3節　3期の遺構と遺物

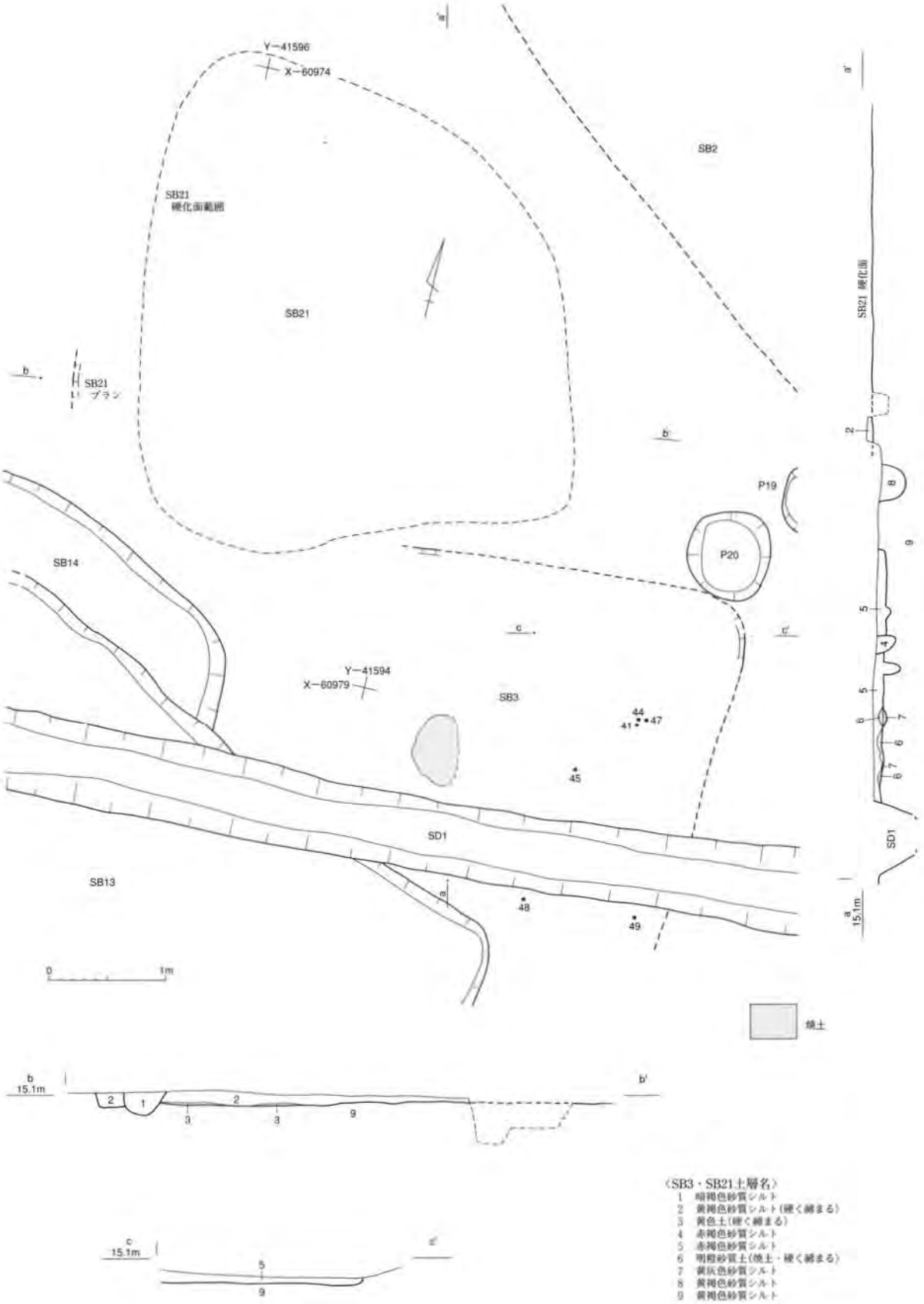
SB3（第11図・第49図41～51）

遺構　本遺構は遺構検出の段階でほぼ床面しか残っておらず、北・北東部分の堀形が一部確認できたのみである。また、3期の遺物が住居の範囲内と思われる箇所から出土することから、ある程度の住居跡の範囲が想定できる。平面形は西と南部分は不明であるが、北・北東・東方部分のライン、遺物の分布状況をみると方形であると考えられる。遺構の西・南部分はSB13・14に、北西部分はSB21に切られていると思われる。住居跡の中央部分に焼土が見られ、炉跡の可能性が考えられる。また、焼土周辺で黄灰色のやや硬く締まる床の硬化面が見られる。出土した遺物はほとんど床面直上のものである。

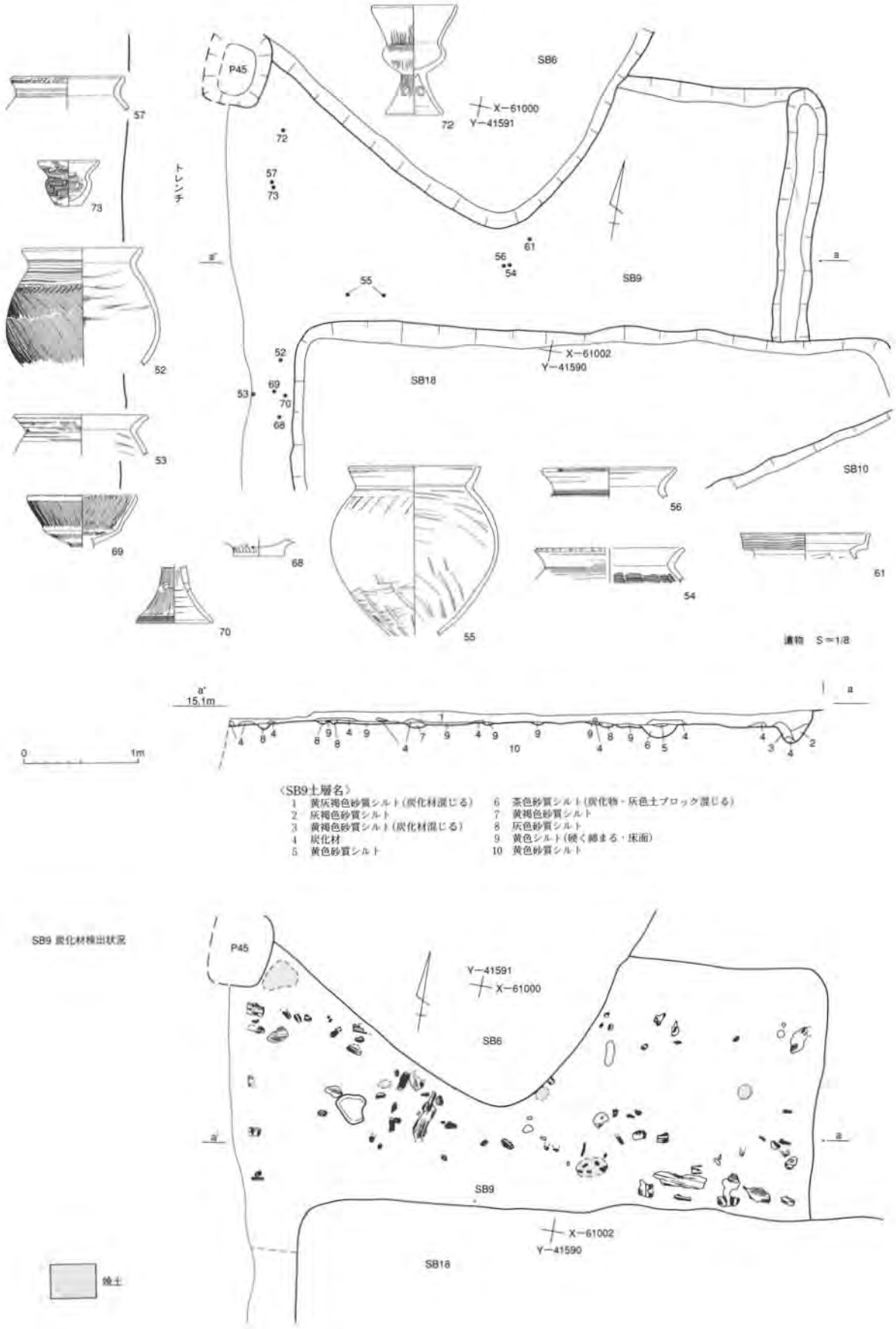
遺物　41～43・46はくの字甕、44は受口口縁甕、45は受口口縁の鉢で、口縁部と体部にヘラによるキザミ、頸部から体部にかけて横線文を施す。48・49は有段高杯で、48の杯内底部には窪みが見られる。49の杯部はやや外反し、杯部内外面にはやや斜め方向のミガキ、杯端部内外面には横方向のミガキを施す。50は端部に擬凹線を施す器台、47は広口壺である。

SB9（第12図・第49図52～第50図74・第82図932）

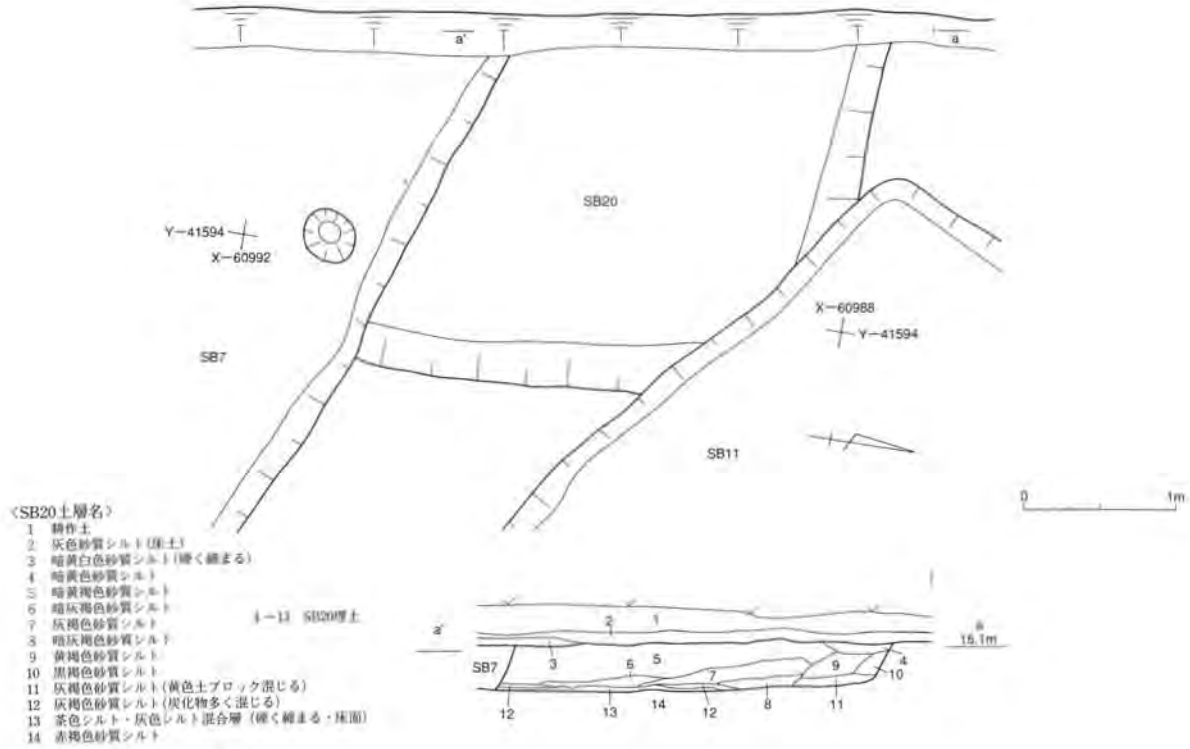
遺構　E区に位置し、SB6・18に切られる。平面形は方形を呈すると思われる。図中の南壁付近の点線は炭化物の検出範囲であり、南壁については確認できなかった。床の硬化面は部分的に確認した。周溝は東壁部分でのみ確認した。炉、ピット等は見られなかった。床面直上において非常に多くの炭化物を検出したことから本住居跡が焼失住居であると判断した。炭化物は材木状のものがほとんどである。確認面において土器集積（特に西部に集中）が認められたが、遺構自体の深さが10㎝程度であ



第11図　SB3・21遺構図


SB6
SB9
SB18
SB10
P45
トレンチ
X−61000
Y−41591
X−61002
Y−41590
遺物 S＝1/8
a'
15.1m
0
1m
〈SB9土層名〉
1 黄灰褐色砂質シルト(炭化材混じる)
2 灰褐色砂質シルト
3 黄褐色砂質シルト(炭化材混じる)
4 炭化材
5 黄色砂質シルト
6 茶色砂質シルト(炭化物・灰色土ブロック混じる)
7 黄褐色砂質シルト
8 灰色砂質シルト
9 黄色シルト(硬く締まる・床面)
10 黄色砂質シルト
SB9 炭化材検出状況
撹土

第12図　SB9遺構図



第13図　SB20遺構図

るため、これらは床面直上のも

のと考えられる。しかし、炭化物と土器集積のレベルを比べると、土器集積の方がレベルが若干高いため、焼失後に土器が捨てられた可能性も考えられる。

遺物　本遺構の出土遺物は比較的残りが良い。52～57はくの字甕で、52の頚部には横線文、体部に刺突文が施される。53・54の口縁は外反し端部に面を持つ。56・57は口縁端部が内彎し明瞭な面はもたない。端部に列点文が施される。58·59は受口口縁甕、60～62は山陰系口縁甕で胎土は白く、砂粒を多く含む。内面に横方向のケズリが見られる。同一個体の可能性がある。くの字甕や受口口縁甕は底部が出土していないため脚台がつくのか平底なのかは不明である。63～68は壺。63・64は同一個体と思われる。体部には沈線文・貝殻による刺突文が施され、下段の沈線文より下を赤彩する。66は突帯部分と内面に赤彩が見られる。69～71は有段高杯で、69の杯端部はやや内彎し、内外面ともにやや斜めの縦ミガキを施す。70の脚裾部はそれほど広がらず、内湾傾向も少ない。脚端部に4条の沈線文を施す。72～74は鉢である。72は脚付の鉢で、口縁端部はやや内彎する。73は小型鉢で内外面ともに横方向の細いミガキを施す。

SB20（第13図・第51図75・76）

遺構　D区に位置し、SB7・11に切られる。遺構の大部分が調査区外で、検出の範囲も狭いが、その形状から平面形は方形を呈すると思われる。土層観察において床の硬化面とその上に堆積する炭化物が混じる層を確認した。炉、周溝、ピット等は確認できなかった。

遺物　本遺構からの出土遺物は少量で、図下できたものは75の広口壺と76の器台である。75は口縁

端部は外面に粘土を折り曲げ丸くおさまる。調整は頸部には縦方向のミガキが、体部にはハケ状の調整が見られる。76は脚部に縦方向のミガキ調整が見られる。これ以外の遺物は破片であるが、壺はミガキを施すものが多く、破片でもS字甕が見られないことから本遺構を3期とした。

SD3（第14図・第51図77～第54図129）

遺構　A区の北端に位置する東西方向の溝である。A区の北側部分は鉄分を多量に含む硬く締まる暗褐色砂質シルト層に覆われ、この層の下より検出された。しかし、基盤となる面と埋土が酷似しており、平面的には遺構を検出できず、断面と遺物の出土によって確認できた。

溝の東部分は調査区北東端にトレンチを入れたが検出できず、調査区外である北側へカーブをしていく可能性がある。溝の北側の肩も調査区外で溝の幅は不明である。検出した部分でも幅2.5 mを測る。

遺物は溝の断面のラインに沿って見られ、溝が掘削されて間もない段階に南側よりまとまって廃棄されたと考えられる。

遺物　本遺構から出土した遺物は、他の遺構に比べると残りが良い。79～90は受口口縁甕、91～99はくの字甕、101～115は有段高杯、117～119は器台、121～124は鉢、125～129は壺である。

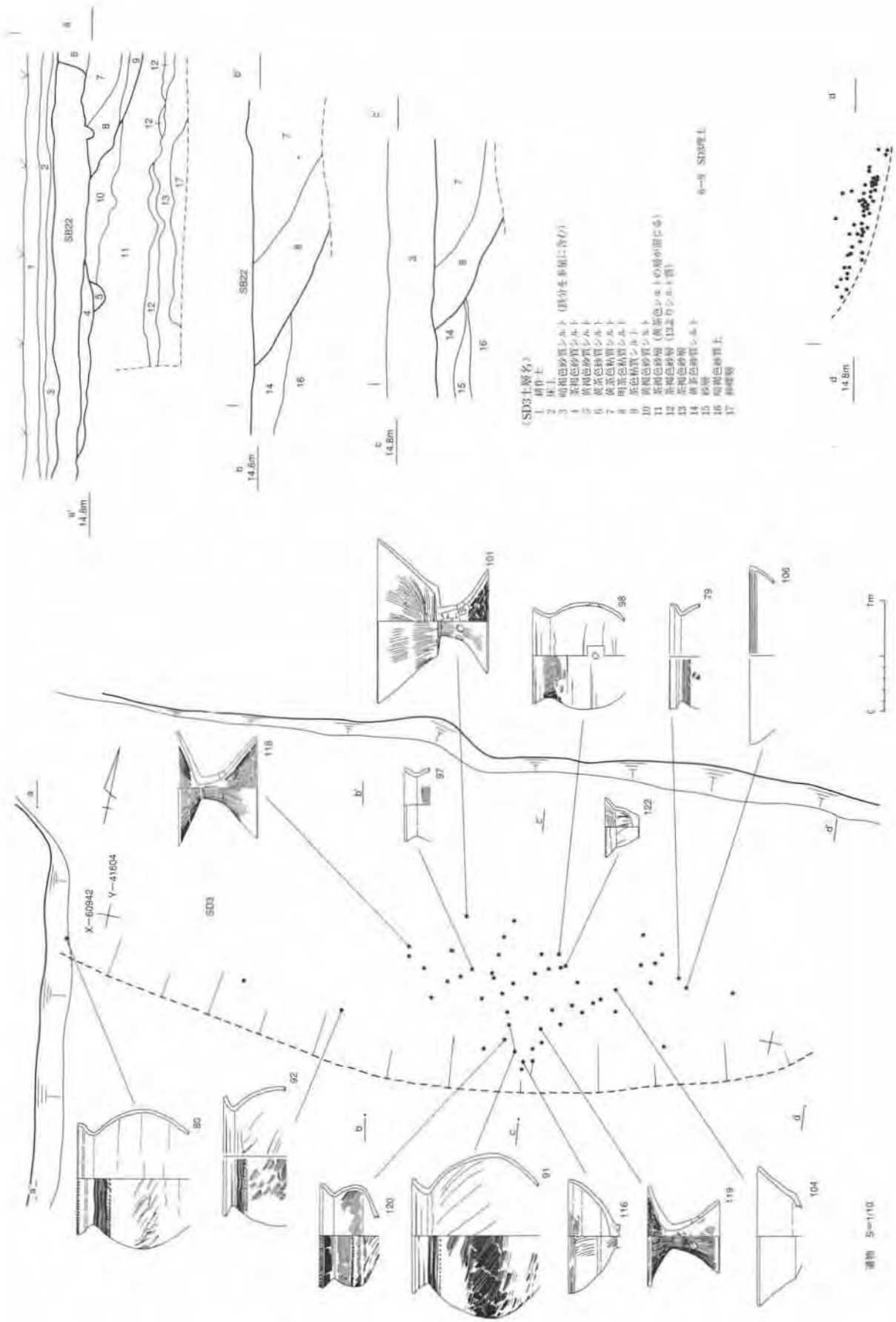
受口口縁甕は、口縁端部が外反し垂直に屈曲、立ち上がるものと、外反し端部が外側上方に伸びるものとがあるが、後者がほとんどである。口縁端部に列点文をほどこすものなにもしないものがある。くの字甕は、端部に面をもつものが多く、外面はハケ調整のみのものと横線文と列点文を施すものとがある。98は体部にハケ調整のちにナデ調整を行う。体部中央に径約1 cmの穿孔が内面からなされている。これらの甕の底部であるが、口縁部から底部までわかる物がなく断定はできないが、脚台が数点出土しているが、平底は出土していないことから台付甕である可能性が高い。

有段高杯は杯端部に多条沈線のあるものとないものとがあり、数は半々くらいである。多条沈線幅は、1.2 cmから2.0 cmの間におさまる。101の杯部にはやや斜め方向のミガキが、脚部は縦ミガキがほどこされている。杯部は外反ぎみに立ち上がり、端部がやや内彎する。脚部は外反屈曲し、端部が僅かに内彎する。114は有段高杯を真似したものと思われる。116は椀形をした高杯である。

器台は117は杯部が内彎ぎみ、脚部は大きく広がる。119は杯部が外反ぎみ、脚部は117ほど広がらず直線的である。ともに杯部・脚部に縦方向のミガキが施される。

鉢はいくつかの形態が見られる。120は口縁端部に貝殻による刺突文が、頸部から体部には横線文、体部に列点文が施される。外面下半は斜め方向のケズリが見られる。121・122は口縁部が外方向へ屈曲する手づくねの鉢で、胴部内面には指押さえが、口縁部内面にはハケ調整がみられる。123は椀形で内外面にハケ調整が施され、口縁端部は横ナデする。124は口縁部外面に沈線文を施すもので、内外面ミガキ調整が施される。

129の壺の体部には線刻が見られる。線刻は具象的な絵画ではなく、原単位図形をかなり変化・省略して描かれたものと思われる[1]。



第14図　SD3遺構図

第４節　４期の遺構と遺物

SX10（第43図・第55図130～138）

遺構　Ｂ区に位置する。調査区内で設定した基準杭の周囲において、遺物が集中して出土したことから遺構が存在すると思われたが、プランを確認することはできなかった。遺構埋土は、周囲の土の暗黄褐色土よりも若干暗く、また炭化物が少量混じる。

遺物　130は押引刺突文をもつＳ字甕Ａ類、131・132は頸部内面にハケ調整を施すＳ字甕Ｂ類、136・137はパレス壺である。今回の調査でＳ字甕Ａ類は本遺構出土の１点のみである。パレス壺は底部のみで、赤彩が施されている。

第５節　５期の遺構と遺物

SB25（第15・16図・第55図139～第56図174）

遺構　Ｃ区に位置し、SB4、SK1、SZ1、SD1に切られる。住居跡の一部が調査区外であるが平面形は方形を呈する。床の硬化面はほぼ全面で検出され、３基のピットを検出した。炉、周溝等は確認できなかった。遺物は床面直上のものは少なく、ほとんどが住居が埋没するある段階に廃棄されたと思われるものがほとんどである。しかし、この遺物には２時期のものが見られ、古いものは周辺で遺構を壊すなどした時に出土したものが混入した可能性が考えられる。

遺物　本遺構から出土した遺物は大きく２時期のものが見られる。一つは３・４期に伴うもの（144～159）。もう一つは本遺構の時期（160～174）である。

144～149は有段高杯で、145の杯端部、146の脚裾部には沈線と連弧文が施される。148の脚部には縦ミガキと裾部には横ミガキが施される。150・151は器台、152は広口壺で、口縁端部に擬凹線を施す。154はパレス壺、158は壺の体部で線刻が見られる。

160～163は有段高杯と思われるが、薄手で、脚部はスカート状に広がり、屈曲・内彎しない。この脚部に伴う杯部は出土していない。甕はＳ字甕が見られ、164～170はＣ類、171はＤ１類である。169は床面直上で出土した。139～142は弥生時代中期後半の遺物である。

SK1（第15・16図・第56図175～第57図178）

遺構　Ｃ区のSB25内に位置する。本遺構はＳ字甕が集中し、正位の状態で検出されたことから、周辺のSB25に伴う遺物群とは異なる何らかの遺構であると推測されたが、埋土が酷似することから、平面的にプランは確認できず、断面や遺物の状況によっておおよそのプランが確認できた。

SB25との関係を見るとSB25が埋没する最終段階の中心部の窪み部分に土坑を掘り、Ｓ字甕を据えたと考えられる。177・178は正位の状態で、175は倒れた状態で３個体がかたまって出土した。177・178の脚台部は打ち欠いた状態で、178には底部穿孔がなされていることから何らかの祭祀行為であることが考えられる。本遺構の出土遺物とSB25新相の遺物とは時期差が見られず、SB25は短期間に埋まり、SK1が掘削されたと考えられる。

遺物　175～176・178はＳ字甕のＣ類である。178の底部には外面から径約0.8㎝の穿孔が施されている。また178と177は脚台部を打ち欠く。

SB30（第18図・第57図179～184）

遺構　Ｆ区の遺構検出段階において数棟の住居跡が重なっていることが判明していた。最初はSB27（最終的に欠番となる）を設定し掘削を開始したが、その後の土層観察により検出ミスが判明し、その段階でプラン等を変更したため、SB27として取り上げた遺物をはじめ、Ｆ区で検出したその他の住居跡（SB28・30・31・32・34）から出土した遺物にも時期的な混じりが生じてしまった。これらの住居跡については、以上のことをふまえて記述を行う。

Ｆ区に位置する。SB28・31・32に切られ、SB34を切る。検出できたプランは全体のおそらく３分の１程度であるが、平面形は方形を呈すると思われる。床の硬化面はほぼ全面で確認でき、住居の中央付近がよりレベルが高く、縁辺部に向かってなだらかに傾斜している。硬化面の直上に多量の炭化物・焼土ブロックが見られたことから、本住居跡が焼失住居であると判断した。しかし、炭化物・焼土塊は検出範囲の中でも東半分のみにあるという偏った分布をしている。炭化物について、SB9・12の炭化物と比較するとかなり残りが悪く、材木状のものも見られなかった。また、調査区の北壁を利用した土層観察において、住居東壁部分で、他の部分と比べ特に焼土が厚く堆積する部分を確認した。カマドもしくは炉、周溝等は見られなかった。ピット１基を確認したが、半分ほどの残存であるため、柱穴か否かは判断できない。

遺物　遺物は小片が多く、179は弥生時代中期の波状文と直線文を施した壺の破片、180はくの字甕で、口縁端部に列点文を施す。182・183はＳ字甕Ｃ類、184はその脚台。181は有段高杯の杯端部で、内外面ミガキ調整、内面に沈線と連弧文を施す。

SB31（第39図・第57図185～188）

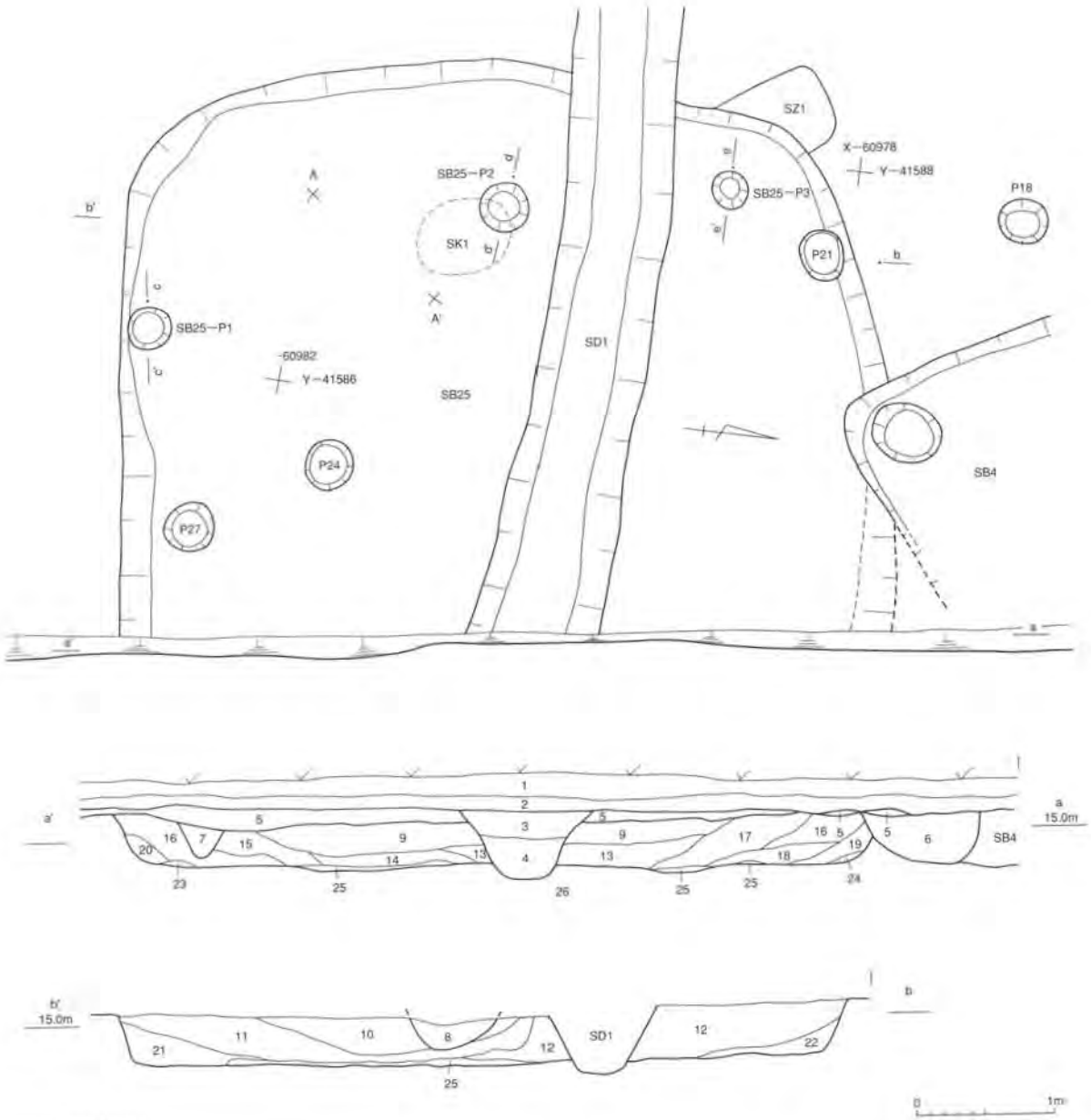
遺構　Ｆ区に位置し、SB28・32に切られ、SB30・34を切る。検出範囲が狭いが、平面形は方形を呈すると思われる。床の硬化面を全面に確認することができた。炉、周溝、ピット等は確認できなかった。

遺物　出土遺物は少量で、小片である。185はＳ字甕Ｃ類、186・187はＳ字甕Ｄ１類で、187の口縁端部には沈線が見られる。

SK7（第16図・第57図189～202）

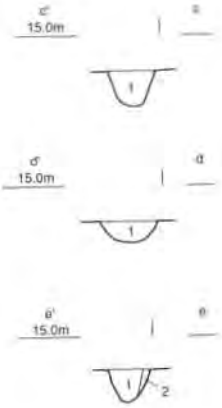
遺構　Ｄ区に位置し、SB8・SK4に切られる。平面形は東西に長軸をとる楕円形を呈する。量は少ないが、土坑のほぼ中央部で土器集積が見られた。

遺物　189は受口口縁甕でSB9からの混入である。190～192・195はＳ字甕Ｃ類　193・194・196はＳ字甕Ｄ１類、197はＳ字甕の山陰系口縁甕である。193の口縁端部には沈線がめぐる。198～200はＳ字甕の脚台でいづれも器壁は薄い。201は壺の底部、202は器台である。



〈SB25・SK1土層名〉
1 耕作土
2 床土
3 明黄灰色砂質シルト
4 灰色砂質シルト（粘質強い）
5 灰黄色シルト（鉄分を多量に含む・硬く締まる）
6 灰色砂質シルト（土坑）
7 暗茶褐色砂質シルト
8 赤褐色砂質シルト
9 黄褐色砂質シルト
10 赤褐色砂質シルト（黄色ブロック含む）
11 黄褐色砂質シルト
12 黄褐色砂質シルト
13 黄褐色砂質シルト（12より硬く締まる）
14 黄褐色砂質シルト（黒褐色ブロック含む）
15 茶褐色砂質シルト（黄色ブロック含む）
16 茶褐色砂質シルト（黄色ブロック含む）
17 黄褐色砂質シルト
18 赤褐色砂質シルト
19 黄褐色砂質シルト
20 黄褐色砂質シルト
21 赤褐色砂質シルト
22 暗褐色砂質シルト
23 明黄褐色砂質シルト
24 暗褐色砂質シルト
25 黄灰色砂質シルト（硬く締まる）
26 暗黄褐色砂質シルト

9～25 SB25埋土
8 SK1埋土
3・4 SD1埋土



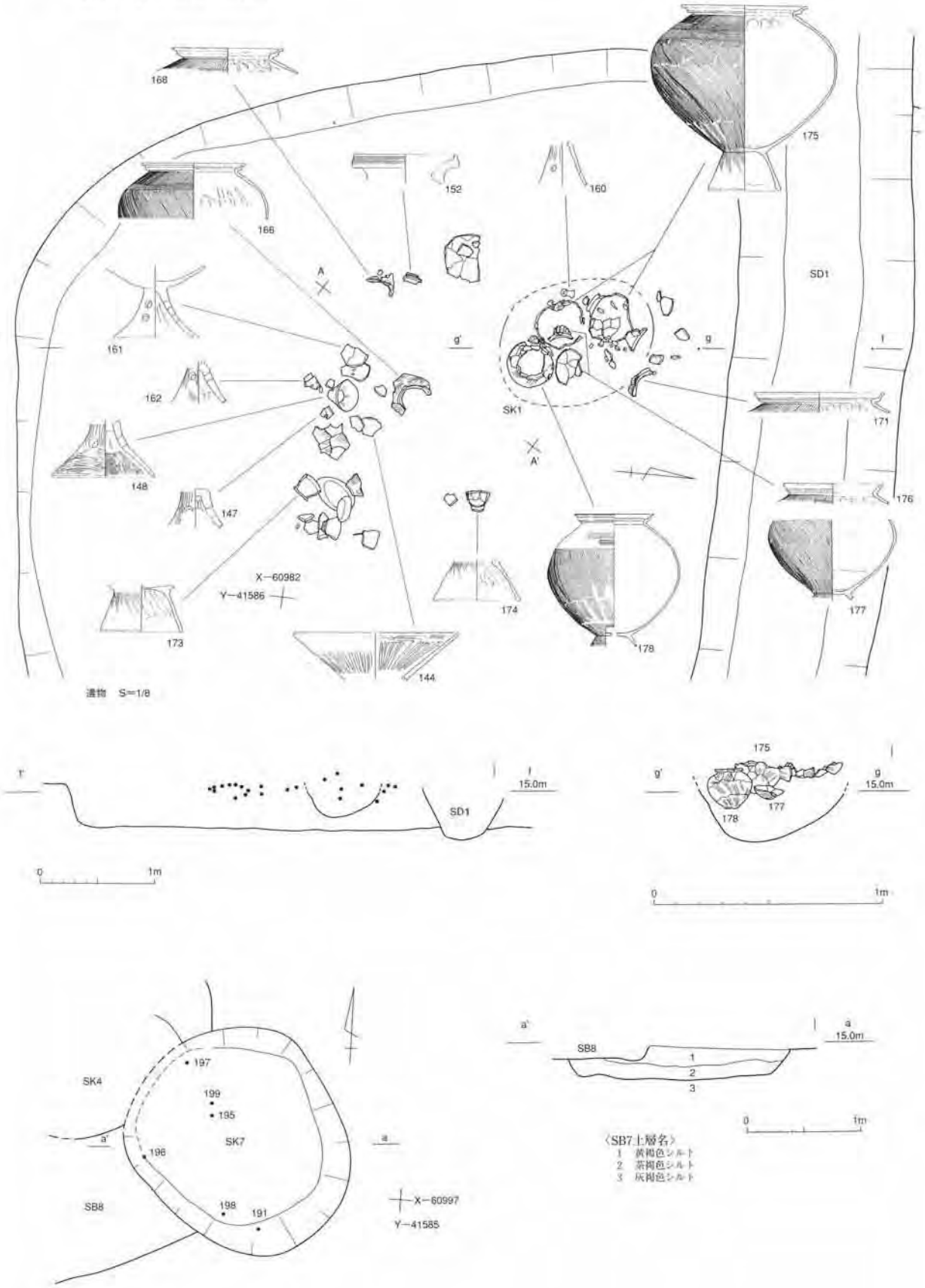
〈SB25−P1土層名〉
1 暗褐色砂質シルト

〈SB25−P2土層名〉
1 暗褐色砂質シルト

〈SB25−P2土層名〉
1 暗褐色砂質シルト
2 褐色砂質シルト

第15図 SB25・SK1遺構図（1）

SB25・SK１遺物出土状況



第16図　SB25・SK1遺構図（２）・SK7遺構図

SX3（第44図・第58図203～206）

遺構　E区の南東端に位置し、SB10に切られる。遺構検出段階では、直線的な遺構ラインを確認し、掘方は緩やかに傾斜していることから溝の可能性が考えられたが、検出範囲があまりに狭いことから、性格を確定することはできなかった。

しかし、調査終了後、図面・遺物等を検討した結果、西壁においてSX3と同様の緩やかな落ち込みが見られ、SX3の北側のラインとほぼ一直線となることから、一連の溝である可能性も考えられる。また、SB18の下層で確認されたSD4も同じライン上に重なる。遺物からもSX3を切るSB10・18から出土した遺物には住居跡の時期以前の遺物が多く混入しており、これらの遺物とSX3から出土した遺物とはほぼ同時期であることから、SX3は西壁で検出された溝と同じである可能性が考えられる。しかし、現場では確認できず、断定はできない。

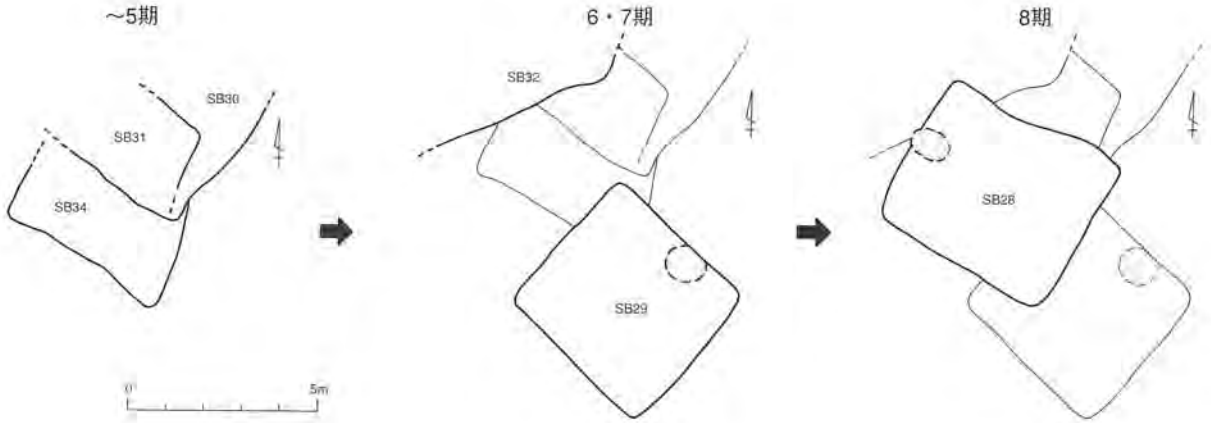
遺物　遺物の出土数は少ない。203・204はS字甕C類、205はS字甕D1類、206はS字甕の山陰系口縁甕である。

SX13（第44図・第58図207・208）

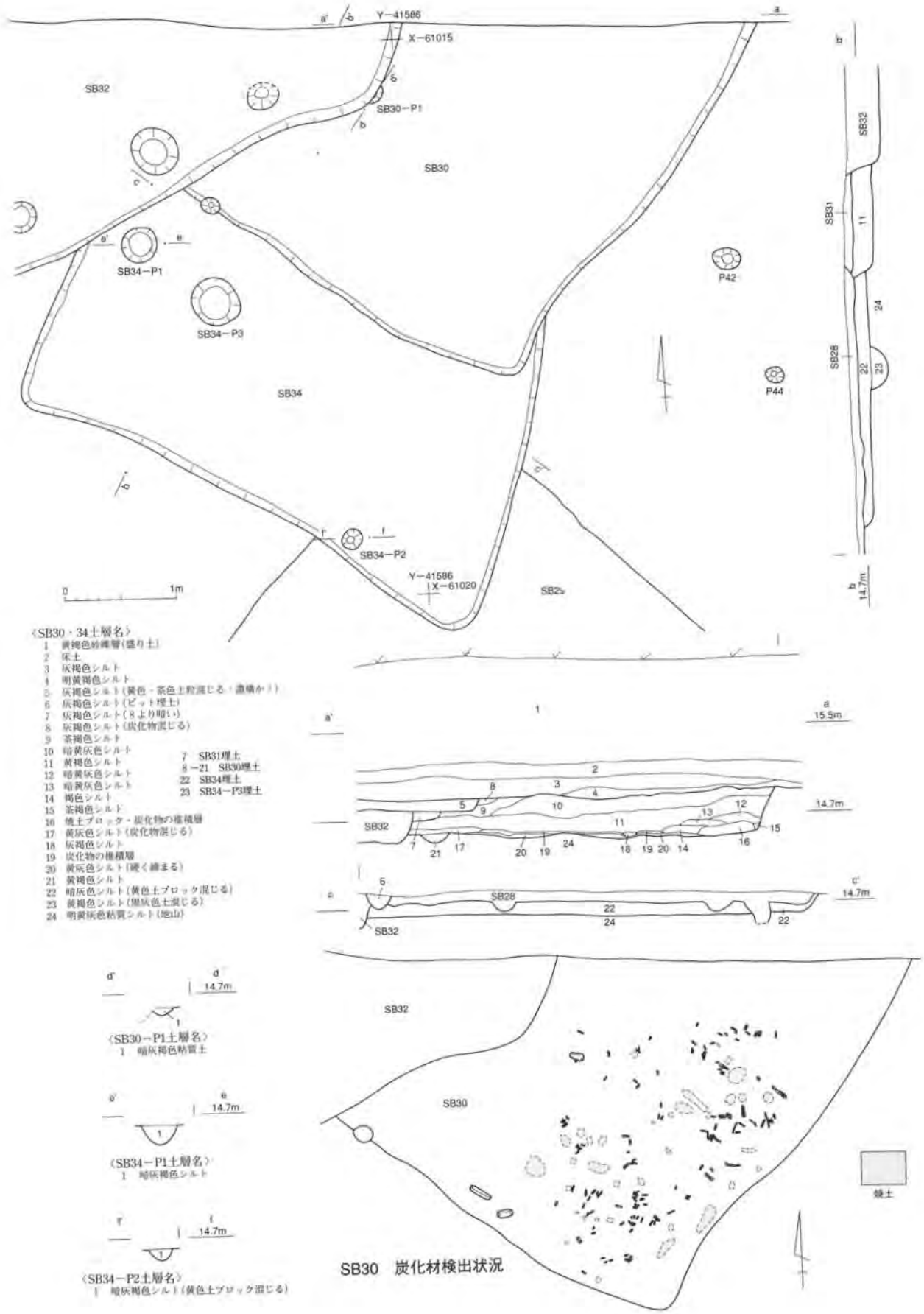
遺構　本遺構はD区の南の中央、SB6・8の下層に位置し、重機による南北トレンチで見つかった。SB6・8からは各住居跡に伴う遺物よりも古い遺物が多く混入し、SK4からもその時期の遺物が多数出土することから何らかの遺構の存在が考えられたが平面的には検出できなかった。

断面のみからであるが、プランは方形になる可能性があり、竪穴住居である可能性が高い。SX13が住居跡であるならば、SB6の遺物として取り上げた602・603、SK4・7はSX13とほぼ同一レベルであり、遺構の範囲内に入ることから個々の遺構ではなく、同一遺構である可能性も考えられる。

遺物　出土遺物は少ない。207は屈折脚高杯で、杯部内外面にはミガキ、脚部は裾部にむかって広がらず、外面には縦方向のミガキ調整が見られる。208は小型丸底壺の口縁部と思われる。



第17図　F区住居跡切り合い模式図



第18図 SB30・34遺構図

第６節　６期の遺構と遺物

SB4（第19図・第58図209～225・第82図926）

遺構　Ｃ区に位置し、SB25を切る。遺構の半分は調査区外であるが、平面形は方形を呈すと思われる。床の硬化面は部分的に見られた。ピットは南西端に１基確認し、柱痕が確認された。炉や周溝は確認できなかった。床面直上には炭化物が密集しており、断面では炭化物と土とが層になっている部分も見られ、焼失住居の可能性が考えられる。

遺物　209～211はくの字甕、212はＳ字甕Ｄ２類、213～216はＳ字甕Ｄ３類。216はＳ字甕の脚台で、やや器壁が厚く、外面はハケ調整を施す。217～221は屈折脚高杯、222～225は小型丸底壺である。

SB8（第19図・第58図226～第59図253）

遺構　本住居跡とSK4との関係について、検出したのはSB8床面であるが、その大きさを考えると住居に伴わない可能性もある。また、埋土が酷似することから上からの掘り込みの可能性も否定できず、結局前後関係については判断できなかった。以下ではこのことをふまえて記述する。

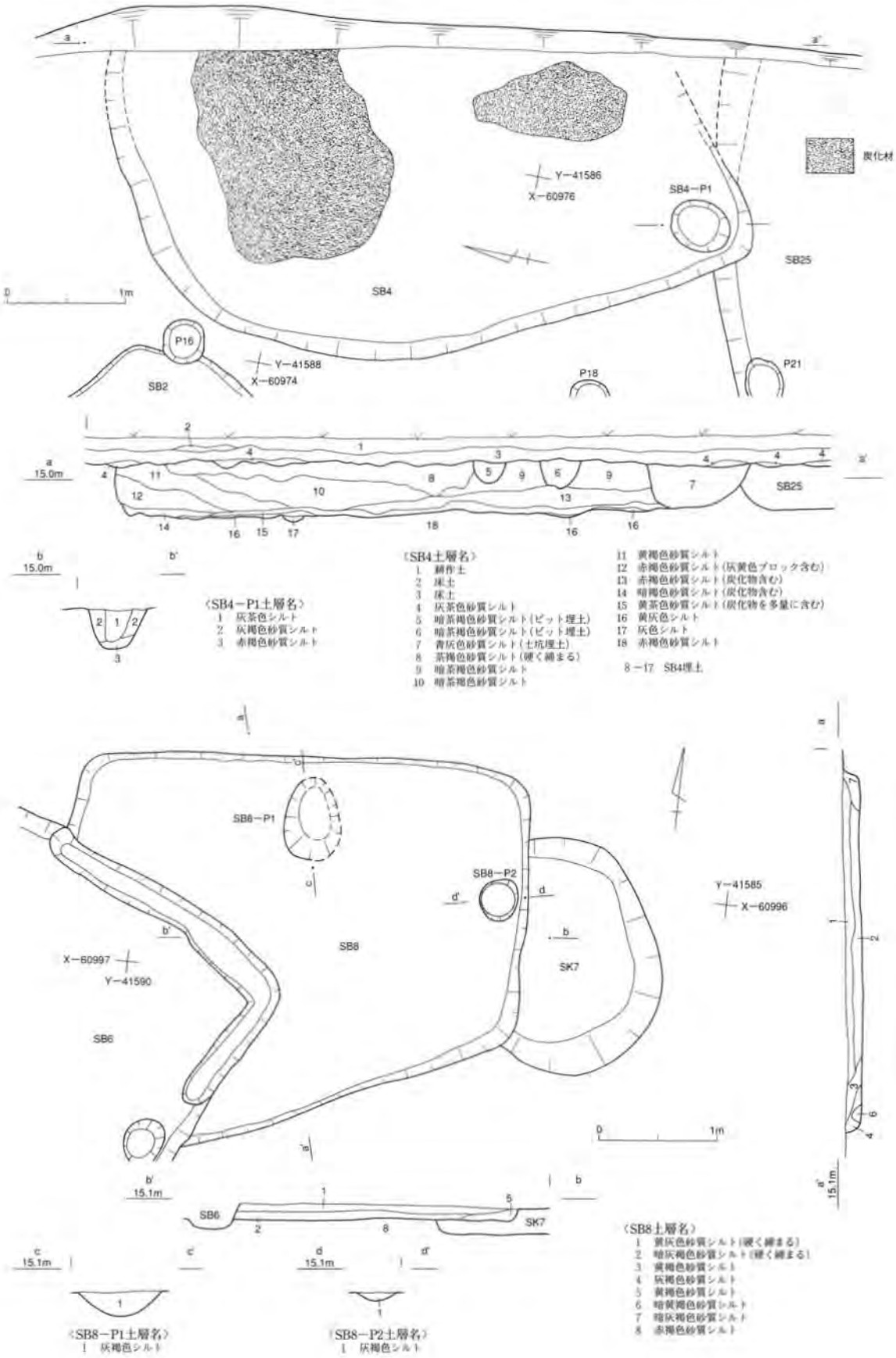
Ｄ区に位置する。SB6に切られ、SK7・SX13を切る。SK4との関係は前述の通りである。平面形は台形を呈する。床の硬化面、カマドもしくは炉、周溝等は見られなかった。床面においてピットを２基確認した。完掘後に確認のためのトレンチを掘削した際、本遺構の下層から遺物が出土したことから、SK7以外にも遺構が存在する可能性があると考えられる（SX13）。しかし、今回の調査ではそのプランを確認・掘削することができなかった。

遺物　本遺構からは、連続しているが２時期の遺物が出土した。１つは前述したSX13に関連するもので、もう一つは本遺構の時期のものである。

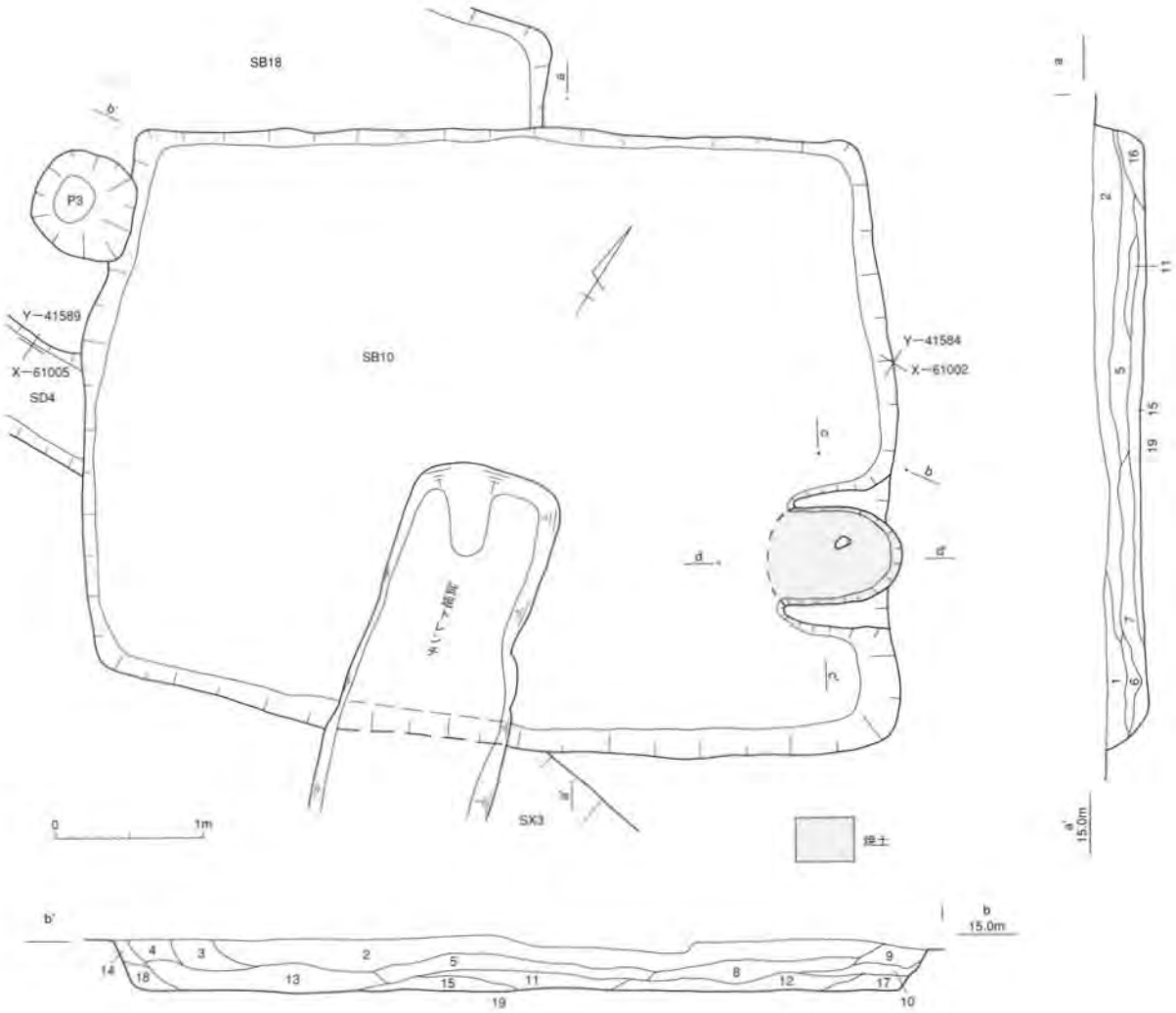
226はくの字甕で、227・229・230・232・233・235はＳ字甕Ｃ類・228・231・234・236はＳ字甕Ｄ１類、238はＳ字甕Ｄ２類、237・239～241はＳ字甕Ｄ３類である。Ｓ字甕の脚台部はハケ調整の見られるものである。Ｓ字甕はＣ類・Ｄ１類は下層のSX13に、Ｄ２類・Ｄ３類は本遺構に伴うものと考えられる。高杯は屈折脚高杯（245～248）があるが、いずれもミガキを施すもので、SX13に伴なうものと思われる。本遺構に伴う高杯は出土していない。249は口縁端部が内側に丸くおさまる外来系の壺である。調整は摩耗が激しく不明である。250は広口壺で口縁外面に段を施し、有段口縁風になっている。外面はナデ調整、内面はハケ調整が見られる。251～253は小型丸底壺である。薄手で口縁部の横ナデが顕著である。

SB10（第20図・第59図254～第60図293）

遺構　Ｅ区に位置する。SB18、SD4、SX3を切る。Ｐ３に切られる。平面形は東西に長軸をとる長方形を呈する。床の硬化面はほぼ全面で確認した。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置し、遺構掘削時にカマドの上部を若干削ってしまったが、それでもカマド本体の残りは悪く、構造物としては袖の一部と支脚石が１点出土したのみである。支脚石は長さ22㎝の川原石で、その内12㎝は地中に埋められており、カマドの中央よりやや北東部に位置する。またカマドの周囲、特に北側の床面直上で焼

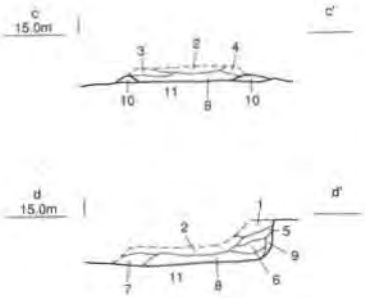


第19図　SB4・8遺構図



〈SB10土層名〉

1 褐色砂質シルト（黄色土ブロック混じる）
2 暗灰黄色砂質シルト
3 暗灰色砂質シルト（黄色土ブロック混じる）
4 灰褐色砂質シルト（褐色土粒混じる）
5 暗灰褐色シルト（黄色土ブロック混じる）
6 暗灰色砂質シルト（黄色土混じる）
7 灰褐色砂質シルト（黄色土ブロック混じる）
8 暗黄褐色砂質シルト
9 黄灰色砂質シルト
10 灰茶色砂質シルト
11 暗黄灰色砂質シルト
12 暗黄灰色砂質シルト（黒褐色土ブロック混じる）
13 暗灰褐色砂質シルト（黄褐色土ブロック混じる）
14 暗灰褐色砂質シルト
15 黄灰色砂質シルト
16 暗灰色砂質シルト
17 暗茶褐色砂質シルト（焼土多く混じる）
18 黒灰褐色砂質シルト
19 黄褐色砂質シルト



〈SB10カマド土層名〉

1 明茶褐色砂質シルト（焼土粒混じる）
2 灰褐色砂質シルト（焼土混じる）
3 明灰色砂質シルト（焼土混じる・軟質）
4 明灰色砂質シルト（焼土混じる・軟質）
5 茶褐色砂質シルト（焼土・炭化物混じる）
6 褐色砂質シルト（焼土混じる）
7 暗灰色砂質シルト（炭化物混じる）
8 暗灰褐色砂質シルト（焼土・炭化物混じる）
9 焼土ブロック
10 灰褐色砂質シルト（袖）
11 黄褐色砂質シルト

第20図　SB10遺構図

土を多く検出した。周溝、ピット等は見られなかった。

セクション図において、遺構の掘り直しのように見える部分があるが、掘り直しとは考えていない。

遺物　本遺構からは多くの遺物が出土したが、遺物に時期幅が見られる。

253～257は弥生時代中期後半期の土器である。254・255は叩きを施す甕の底部である。256は口縁部に沈線、頸部にハケメ原体による矢羽状の刺突文、直線文を施す細頸壺。258・259の外面には竹管文が見られる。260は杯端部に多条沈線がめぐる有段高杯、262はS字甕B類、263～266はS字甕C類、267はS字甕D2類、268・269はS字甕D3類、270～279は宇田型甕である。280・281はくの字甕である。高杯は282～285が屈折脚高杯、うち282・284はカマドから出土。248は杯部が深く端部が内側へ丸くおさまる。286は杯部椀形高杯である。287は小型丸底壺の口縁部。須恵器は289が杯蓋、290・291が杯身、293が無蓋高杯、292は甕である。須恵器は時期的にまとまりがあり、H-11新段階のものである。

まず、S字甕C類は切り合うSX3に伴う可能性があり、本遺構に伴うものはS字甕D3・宇田型甕で、高杯は屈折脚高杯であると考えられる。須恵器は宇田型甕に伴うことも考えられるが、S字甕D3類や屈折脚高杯に伴う段階のものではないため、検出できなかった遺構から出土したと思われる。また7期になるとくの字甕はあまり見られなくなるが、本遺構では一定量見られる[1]ことから本住居跡の時期を6期とする。しかし、遺構からみると本遺構には炉ではなくカマドがあり、本遺跡ではカマドは7期以降の住居跡から見つかっており、本遺構を6期とするとカマドの出現が1期早くなることになる。

SB12（第21・22図・第60図294～第62図341）

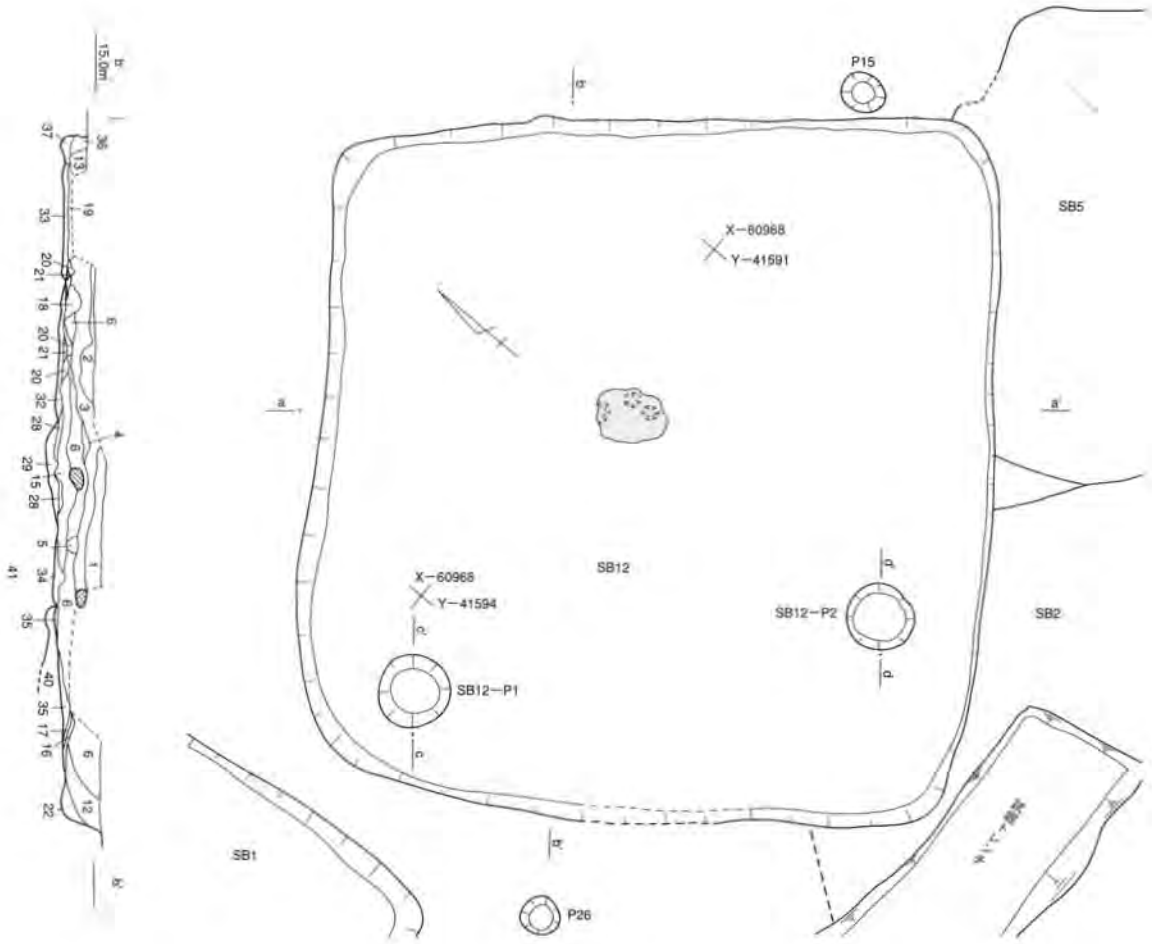
遺構　B・C区中央に位置する。焼失住居で、埋土は床面付近では炭化材・焼土・土（粘土）が複雑に重なった状態が見られた。炭化材は土壌化し、あまり良好な状態ではなかったが、中心部から放射状になり、これに直行するような炭化材は見あたらなかった。また一部には藁状のものも検出された。これらの炭化材・焼土の上には径10㎝から30㎝までの石がいくつのも見られ、屋根の押さえの石の可能性がある。また、住居跡の北西・南東の壁際には幅約8㎝の焼土や炭化材の混じる灰褐色の帯がみられ、埋土とは明らかに異なる。住居跡の何らかの痕跡と思われ、住居の壁土であるとも考えられたが残存状況が悪く、確証はない。

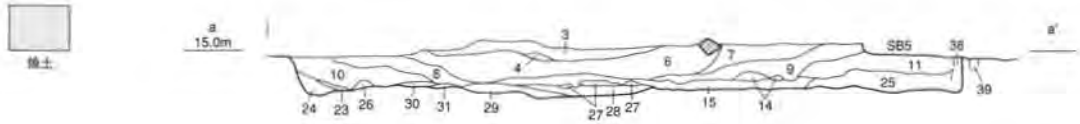
遺物の多くは炭化材・焼土の上から出土し、その下からは小片が出土したのみである。

住居跡の中央やや東寄りには炉跡が検出され、一部非常に硬質な状態であった。この焼土の熱残留磁化測定を行い365±15年という想定結果がでた。（第6章1節）

遺物　本遺構からは比較的多くの遺物が出土したが小片が多い。また、SX11と切り合うため、弥生時代中期後半の遺物が多く見られる。294～296は平底の叩き甕の底部、297～301は壺、302は条痕を施す式の甕、303は蓋、304は高杯である。307は体部に沈線・竹管文・矢羽状のキザミを施し、赤彩する小型の壺、309も口縁部に赤彩が見られる。305は山中前半の高杯で、杯端部外面に沈線を施す。

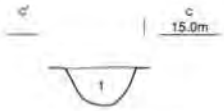
310・311はくの字甕、312はS字甕D2類、313・315・316はS字甕D3類、314・317～319は宇田型甕である。320・321はS字甕の、324宇田型甕の脚台部である。325～333は屈折脚高杯で、



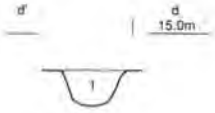


《SB12土層名》

1 黄茶色砂質シルト（硬く締まる）
2 黄茶色砂質シルト（硬く締まる）
3 暗茶色砂質シルト
4 黄色砂質シルト
5 茶褐色砂質シルト
6 茶褐色砂質シルト
7 黄茶色砂質シルト（黄色ブロック含む）
8 茶褐色砂質シルト
9 暗褐色砂質シルト（炭化物含む）
10 黄茶色砂質シルト
11 茶褐色砂質シルト（黄灰色ブロック含む）
12 茶褐色砂質シルト
13 黄茶色砂質シルト（黄灰色ブロック含む・硬く締まる）
14 黄色シルト（硬く締まる）
15 暗茶褐色砂質シルト（焼土ブロック・炭化物含む）
16 暗褐色砂質シルト（炭化物多量に含む）
17 暗褐色砂質シルト（炭化物多量に含む）
18 暗褐色砂質シルト（炭化物多量に含む）
19 暗褐色砂質シルト（炭化物多量に含む）
20 黒褐色砂質シルト（炭化物多量に含む）
21 暗褐色砂質シルト（炭化物多量に含む）
22 暗茶褐色砂質シルト
23 黄褐色砂質シルト（炭化物含む）
24 暗茶色砂質シルト
25 黄色砂質シルト
26 黄褐色砂質シルト（炭化物含む）
27 橙色砂質土（焼土・炉の硬化部分）
28 黄灰褐色砂質シルト
29 黄茶色砂質シルト
30 黄褐色砂質シルト（炭化物含む）
31 黄灰褐色砂質シルト
32 黄灰褐色砂質シルト
33 茶褐色砂質シルト（黄灰色粘質シルトブロック含む）
34 赤褐色砂質シルト（焼土ブロック多量に含む）
35 暗褐色砂質シルト（炭化物多量に含む）
36 黄灰色砂質シルト（焼土ブロックを大量に含む・炭化物含む）
37 黄茶色砂質シルト（炭化物含む）
38 暗褐色砂質シルト（焼土ブロック含む）
39 暗褐色砂質シルト（焼土ブロック含む）
40 暗褐色砂質シルト
41 赤褐色砂質シルト

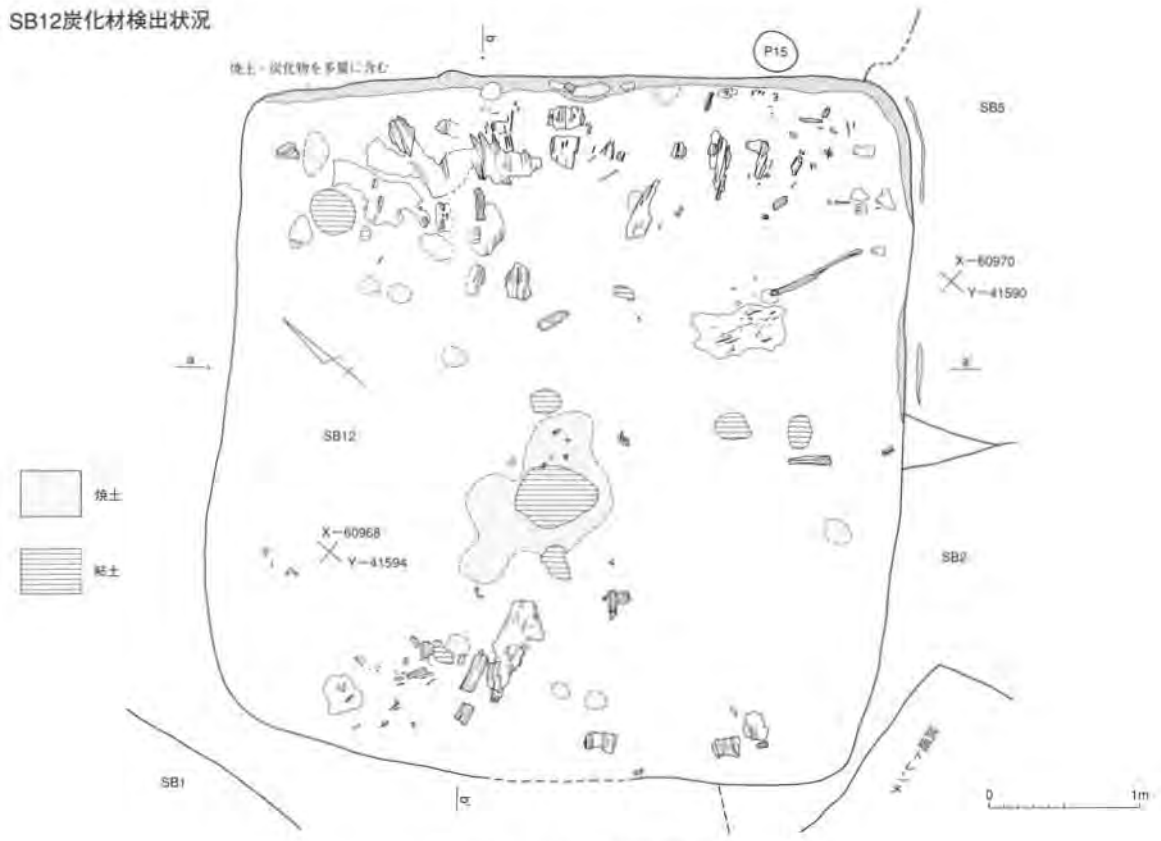


《SB12−P1土層名》
1 暗褐色砂質シルト



《SB12−P2土層名》
1 暗褐色砂質シルト

第21図　SB12遺構図（1）



第22図　SB12遺構図（2）

328には垂下稜が見られる。234～337は杯部椀形高杯である。338・339は小型丸底壺、340・341は中形の丸底壺である。

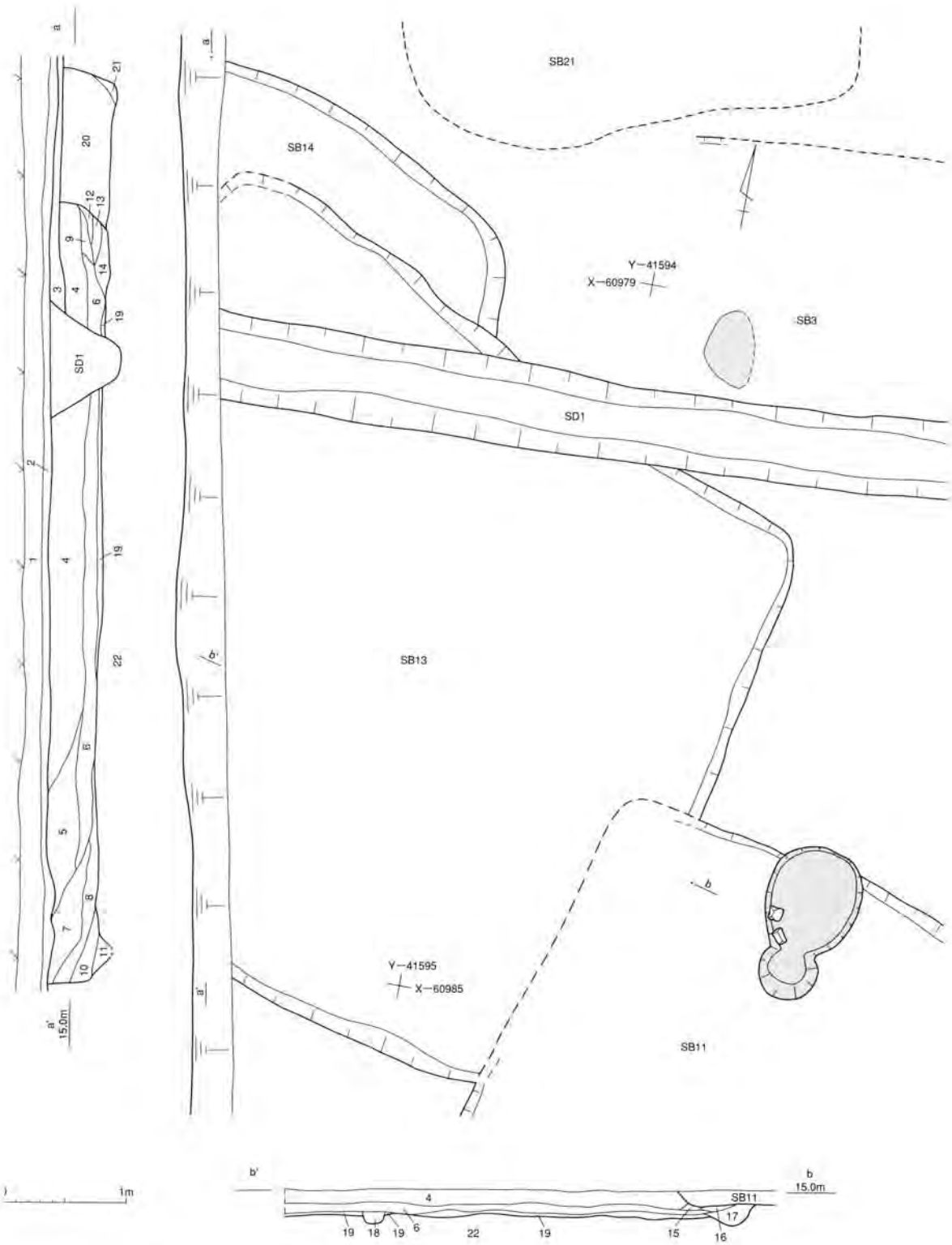
SB13　（第23図・第62図342～361・第81図916）

遺構　SB11とSB13の切り合い関係について、プランの検出段階ではSB13がSB11を切ると判断した。しかしながら、SB13の掘り下げ段階においてSB11の床の硬化面を確認したこと、出土遺物の様相がSB11の方が新しいことなどから、最終的にはSB11の方が新しいと判断した。SB11も含め、以下ではこのことをふまえて記述を行う。

C区に位置する。SB11、SD1に切られ、SB14を切る。遺構の約3分の1ほどが調査区外であると思われる。平面形は方形を呈する。貼床状の硬化面が住居のほぼ全面で確認でき、かなり硬く締まっていた。周溝については、セクションでは確認できたがプランは検出できなかった。カマドもしくは炉、ピット等は見られなかった。床面直上で近現代の遺物が1点出土し、該当期の遺構が本住居跡の上から掘り込まれていた可能性が高いが、遺構検出段階では確認できなかった。

遺物　本遺構からは多くの遺物が出土したが、小片が多く摩耗が激しい。また、遺構の掘り間違いなどがあり、遺物に時期幅が見られる。342～347は弥生時代中期後半の遺物で、342・343は叩き甕、344は波状文と横線文を施した壺、345は高杯の杯部で内面にハケ調整が見られる。348は外面に横位の条痕、口縁部内面に波状文を施す甕である。346・347瓜郷式の壺の口縁部と胴部である。

351・352・355はS字甕D3類、353・356・357は宇田型甕である。351・355の口縁端部には沈



〈SB13・14土層名〉

1 耕作土
2 灰色砂質シルト(床土)
3 黄灰色砂質シルト(硬く締まる)
4 褐色砂質シルト(黄色土ブロック混じる)
5 明灰褐色砂質シルト
6 暗灰褐色砂質シルト
7 灰褐色砂質シルト
8 黒褐色砂質シルト(黄色土粒混じる)
9 暗灰褐色砂質土
10 黒灰褐色砂質土
11 黒灰色砂質土(褐色土ブロック混じる)
12 茶褐色砂質土
13 褐色砂質土
14 黄褐色砂質土
15 灰褐色砂質シルト
16 灰茶褐色砂質シルト
17 暗灰褐色砂質シルト
18 黒褐色シルト
19 茶褐色シルト(炭化物多く混じる)
20 茶褐色砂質シルト
21 暗褐色砂質シルト
22 茶褐色砂質シルト

4〜19 SB13埋土
20・21 SB14埋土

第23図 SB13・14遺構図

線が見られる。358はくの字甕の脚台がある。これらは本遺構に伴う遺物と考えられる。

須恵器が多く見られるが、359は杯蓋、360は高杯の杯部、361は壺口縁部である。これらは6C末から7世紀前半の須恵器で本遺構に伴う物ではない。切り合うSB11か、検出できなかった遺構に伴うと思われる。

SB14（第23図・第62図362～365）

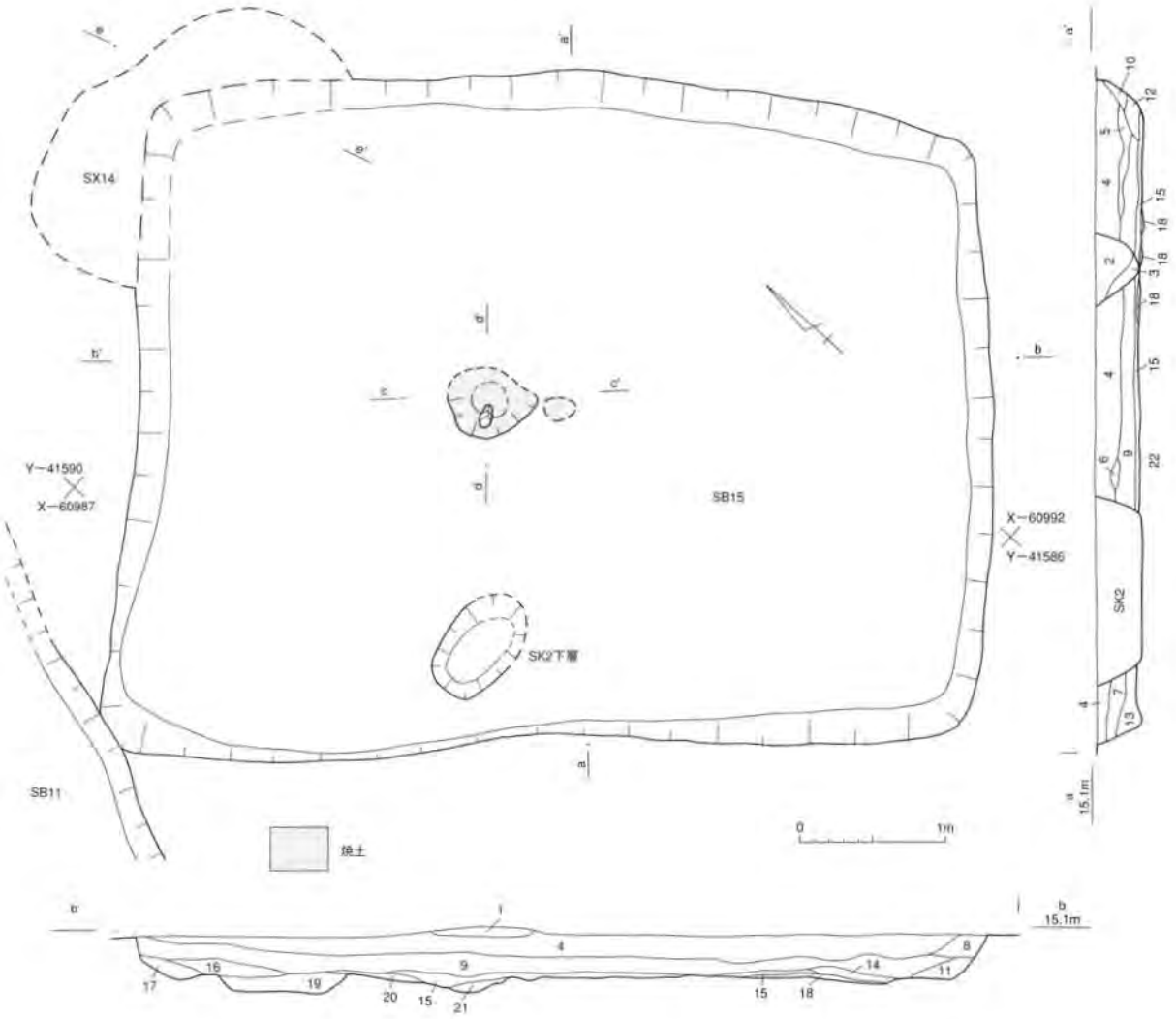
遺構　C区に位置し、SB13に切られる。検出範囲が狭いため、平面形は不明である。検出面から床面までは深さ約0.45ｍを測る。床の硬化面、炉、周溝、ピット等は確認できなかった。

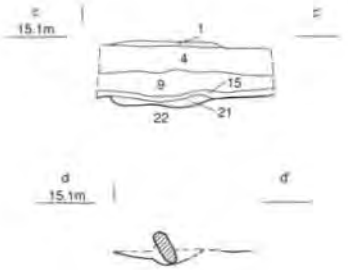
遺物　SB14から出土した遺物は少量である。236は弥生時代中期の壺、363はくの字甕、364は屈折脚高杯の脚、365はＳ字甕のＤ２類である。

SB15（第24図・第63図366～第64図397・第82図297）

遺構　D区に位置し、SB11、SK2、SX14に切られる。平面形は南北に長軸をとる長方形を呈する。床の硬化面を住居中央部の広い範囲で検出した。住居のほぼ中央で焼土・炭化物が集中する部分があり、長さ23㎝の川原石１点が検出された。場所などから炉であると考えられる。炉は床面を若干掘り込んでいる。また川原石には宇田型甕の脚台が被さって出土した。周溝、ピット等は見られなかった。本遺構の検出段階において、炉がある部分のほぼ直上に円形で厚さ約３㎝の炭化物の堆積があったが、本遺構との関係は解明できなかった。その他セクションにおいて、上から掘り込まれたピットを確認しているが、プランは検出できなかった。

遺物　本遺構からは多くの遺物が出土した。366・367は体部に波状文・直線文を施す弥生時代中期後半の壺である。371は加飾壺の体部、372は屈折外反高杯の脚部である。373は有段高杯の杯部で、内面に沈線と鋸歯文をヘラ描きによって施す。374～376はくの字甕、377・380はＳ字甕Ｄ２類、378・379はＳ字甕Ｄ３類、381～385は宇田型甕である。358の肩部外面には横ナデが１条見られる。386はＳ字甕か宇田型甕の、387は宇田型甕の脚台である。脚台部外面の調整は386がハケ調整、387はナデ調整である。高杯は、389～392が屈折脚高杯、393は杯部椀形高杯である。394・395は甑で395の胎土は宇田型甕と酷似する。396は小型丸底壺である。

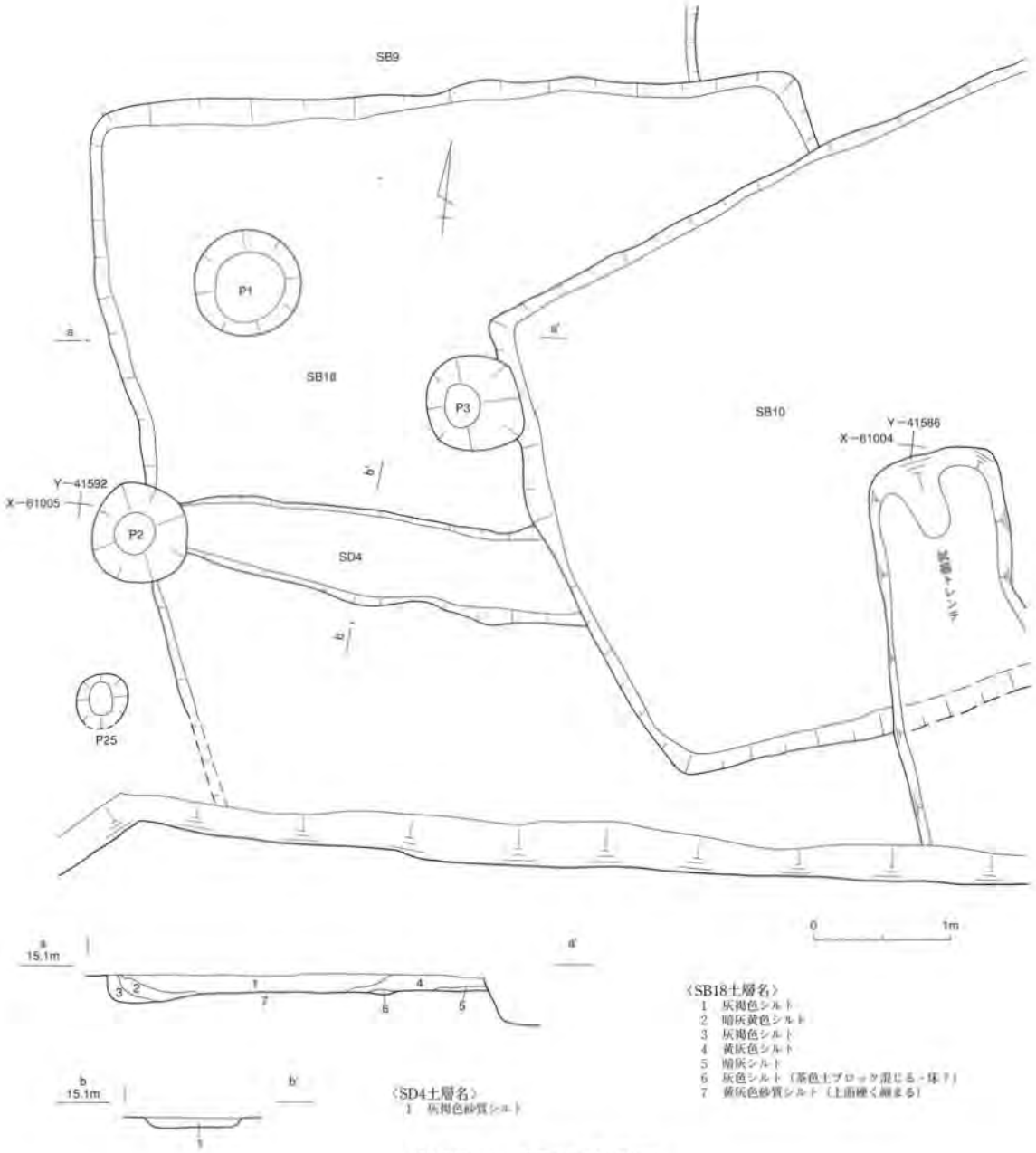




〈SB15土層名〉
1 炭化物堆積層
2 黄褐色砂質シルト（P埋土）
3 赤褐色砂質シルト（硬く締まる・P埋土）
4 茶褐色砂質シルト
5 暗黄褐色砂質シルト（灰色土粒混じる）
6 黄色土
7 黄褐色砂質シルト
8 黄褐色砂質シルト
9 灰茶色砂質シルト
10 明灰褐色砂質シルト
11 暗褐色砂質シルト（炭化物混じる）
12 茶色砂質シルト（黄色土粒混じる）
13 暗黄褐色砂質シルト（焼土ブロック混じる）
14 灰褐色砂質シルト
15 暗褐色砂質シルト（炭化物多く混じる）
16 灰褐色砂質シルト
17 黒灰褐色砂質シルト
18 黄白色シルト（硬く締まる・床面）
19 茶褐色シルト（炭化物・黄色土ブロック混じる・土杭？）
20 黄褐色シルト（硬く締まる・床面）
21 焼土
22 灰褐色砂質シルト

〈SX14土層名〉
1 明灰褐色シルト（焼土混じる）
2 黒灰色褐色シルト（炭化物混じる）
3 褐色シルト
4 黄褐色シルト（硬く締まる）
5 灰褐色砂質シルト

第24図　SB15遺構図

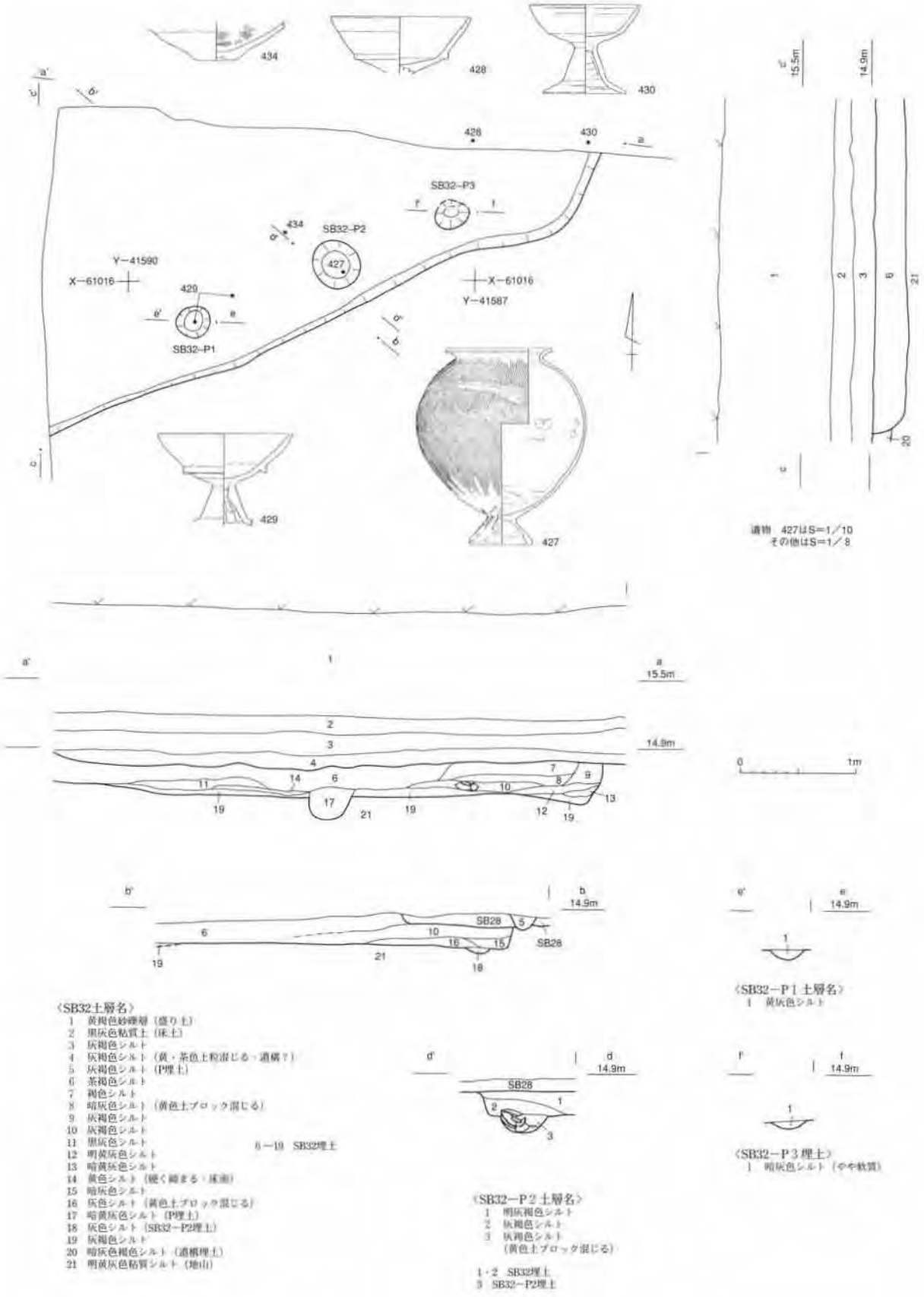


第25図　SB18遺構図

SB18（第25図・第64図398～420）

遺構　E区に位置する。SB10・SD4に切られ、SB9を切る。遺構の南部分が調査区外で、平面形は方形を呈する。床の硬化面をほぼ全面で検出したが、カマドもしくは炉、周溝、ピット等は見られなかった。また、床面直上で屈折脚高杯の脚部が正位の状態で出土し、脚部は床面よりも低いレベルにあったため、ピットの存在が考えられたがプランは検出できなかった。

遺物　402～406はS字甕C類、407はくの字甕の脚台、408～415は屈折脚高杯で、413は杯部が外反し、端部はつまみ上げる。416は薄手で器台脚部の可能性がある。417・418は柳ヶ坪型壺。419・420は壺の底部で420のが外底部には木葉痕が見られる。本遺構から出土した遺物はS字甕C類・柳ヶ坪型壺の時期と、屈折脚高杯の時期の2時期が見られる。前者に対応する高杯、後者に対応する甕は見られない。前者はSX3・SD4（西壁の東西方向の溝）の遺物である可能性が高く、後者は本遺構



第26図　SB32遺構図

に伴う遺物であると考えられる。よって本遺構を６期とした。

SB32（第26図・第65図421～434・第82図925）

遺構　Ｆ区に位置する。SB28に切られ、SB30・31・34を切る。また調査区西壁において別の遺構を切ること、さらに調査区北壁において別の遺構に切られることを確認している。本遺構は検出範囲が狭いが、掘方のラインが直線的に伸びることから、方形を呈すると思われる。床の硬化面はほぼ全面で確認した。カマドもしくは炉、周溝等は見られなかった。ピットは３基検出したが、Ｐ１からは高杯の脚部片が出土し、Ｐ２からはほぼ完形の宇田型甕が出土した。宇田型甕については、ピットの中に据えられていたことが土層観察から判明している。またＰ２の埋土中には焼土・炭化物は全く確認できなかったが、宇田型甕の脚台を取り上げたところ、その内部には焼土が充填していた。Ｐ１の北東約40㎝の所と調査区北壁内において、床面直上で垂下稜を持つ高杯の杯部が逆位の状態で出土している。

遺構の完掘後、確認のための断ち割りを入れたところ、床面よりも下のレベルで部分的にラインが検出できたが、これは床の硬化面より下にあるため、住居の使用以前のものと考えている。

遺物　本遺構からの出土遺物は多くはないが、残りが良い。421はくの字甕、422～425はＳ字甕Ｃ類でいずれも小片である。Ｓ字甕についてはSB30・31の混入と思われる。

427は宇田型甕でほぼ完形となる。428～433はは屈折脚高杯で、428・429は垂下稜をもつ。本遺構の屈折脚高杯は杯部に丸みを帯び、赤色である。434は大形の壺の底部である。

SD19（第42図・第65図435・436）

遺構　Ｇ区に位置し、SD18・20に切られる。北西－南東方向に直線的にのび、北西側は調査区外で南東側はSD18に切られている。調査で確認した長さは4.5ｍで、断面形は確定できない。

遺物　435はＳ字甕Ｄ３類、436はＳ字甕の底部で、穿孔が施してある。

SX9（第41図・第65図437～439）

遺構　Ｆ区に位置し、SD11に切られる。埋土は炭化物が多量に混じる。平面形は南北に長軸をとる楕円形を呈する。深さは７㎝である。

遺物　437はＳ字甕Ｃ類、438は口縁内面にハケメ原体による矢羽状の刺突文が施される壺の口縁部。439は中形壺である。

第７節　７期の遺構と遺物

SB1（第27図・第66図440～455）

遺構　B区に位置する。遺構の一部は調査区外で、平面形は方形を呈する。検出面から床面までは約15㎝と浅い。北壁のほぼ中央部に焼土が密集する部分があり、その中央には長さ30㎝の川原石があり支脚として使用された石であると思われ、焼土部分は位置などからもカマドであると考えられる。床の硬化面はカマドの周辺のみ確認した。周溝やピットは見られなかった。

本遺構は検出面から床面までがほとんどなく、出土遺物は床面直上ものもである。

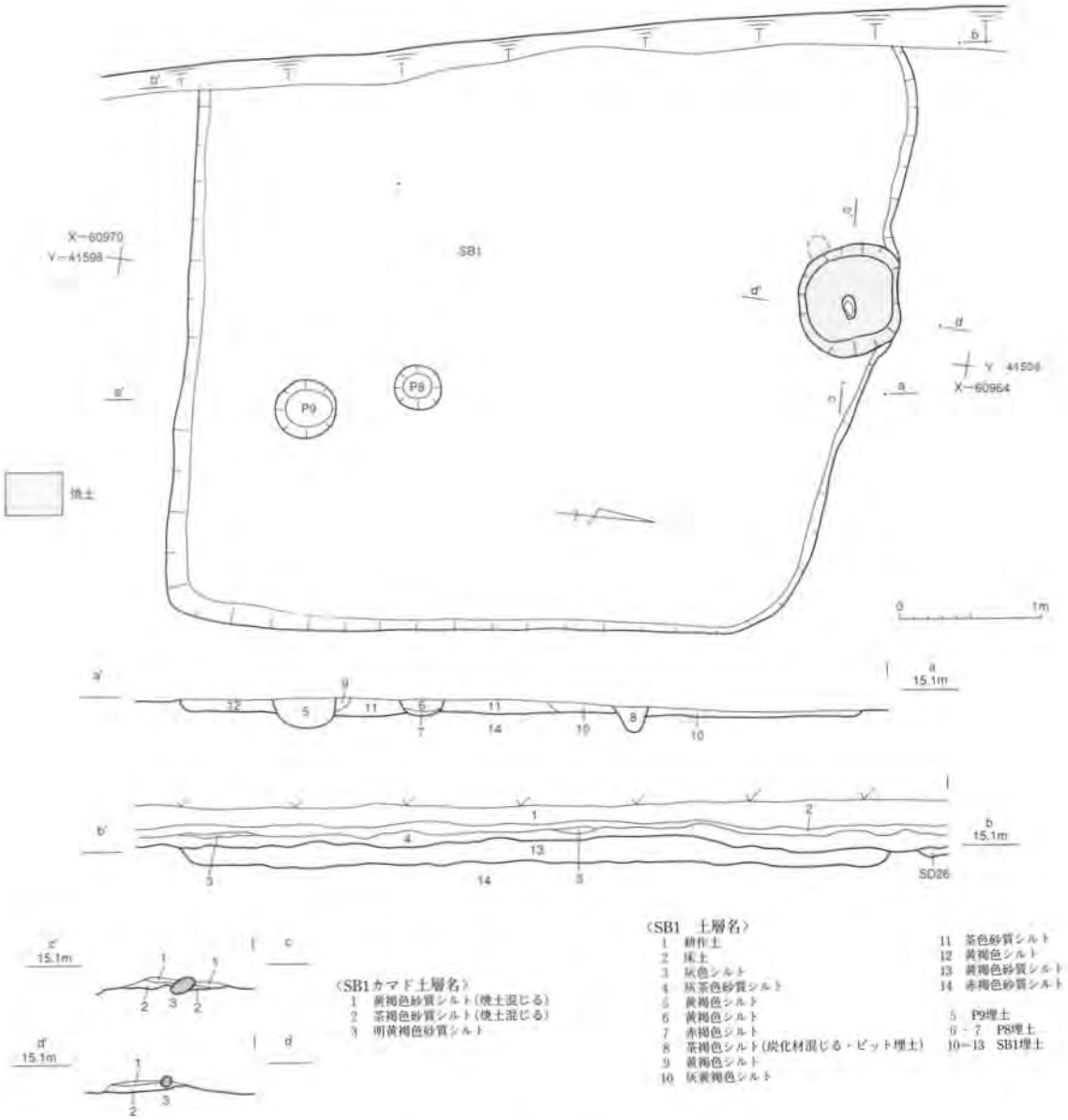
遺物　本遺構から出土した遺物は少ない。

445～449は宇田型甕、450～453は杯部椀形高杯で杯端部は短く外折するものもあるが、丸くおさまるものが多い。455は須恵器の杯蓋、454は高杯の蓋である。440～444は弥生時代中期後半の土器で、SX11に伴う可能性がある。440は叩き甕、442は条痕を施す甕、441～444は壺、443は壺の脚部である。445の宇田型甕と450の杯部椀形高杯は、カマドの中より出土した。

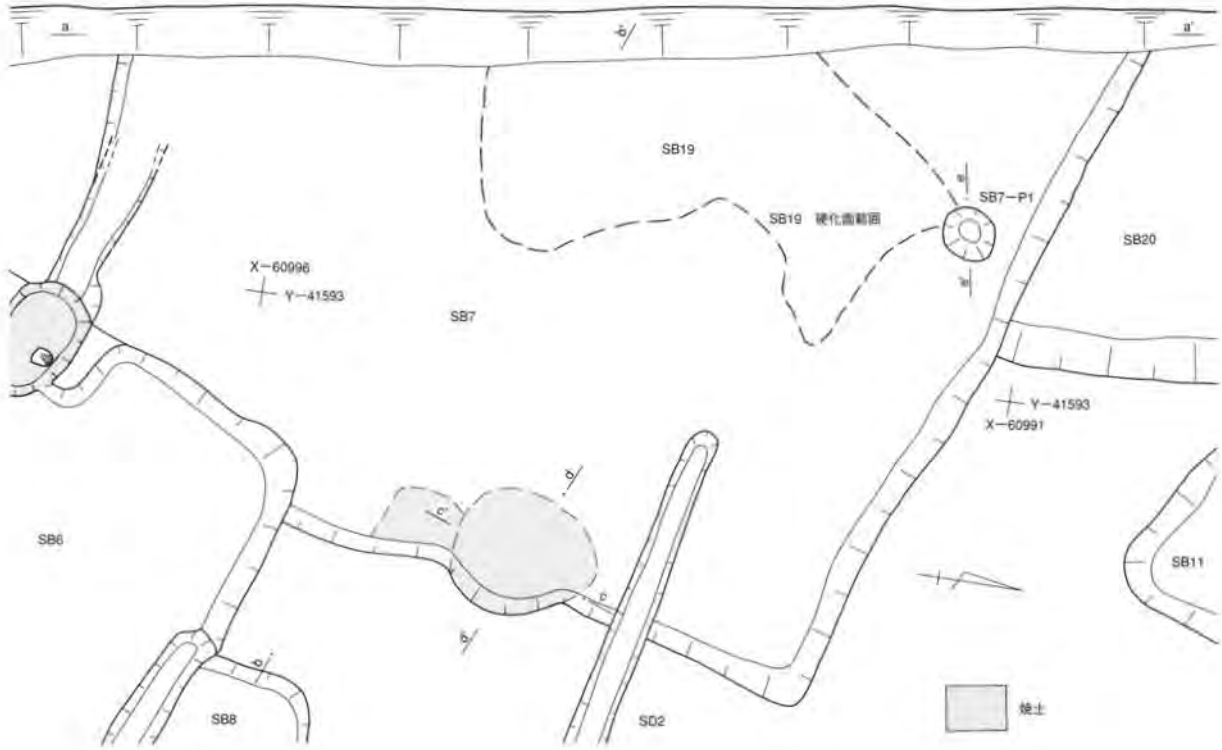
SB7（第28図・第66図456～第67図476）

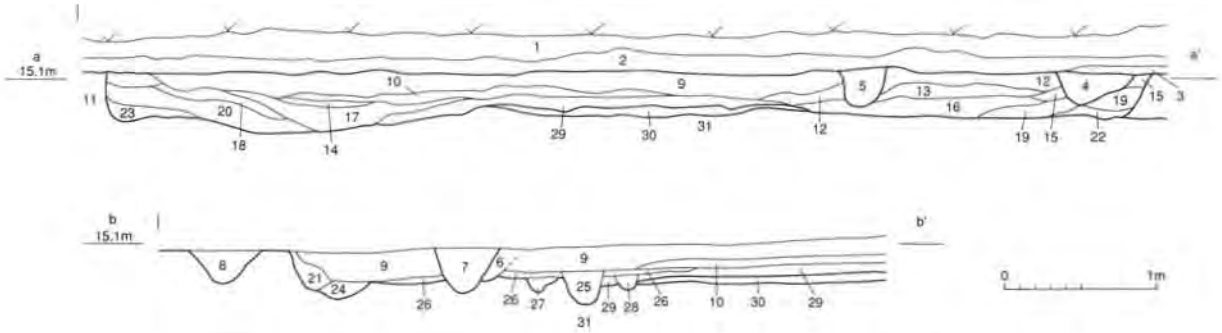
遺構　D区に位置する。SB19・20を切り、SB6、SD2に切られる。またプランは確認できなかったが南北方向でカマドの西側付近を通る溝にも切られている。遺構のおそらく半分ほどが調査区外で、平面形は方形を呈する。また住居の南壁は、SB６にともなうカマド煙道部の南側ラインとほぼ一致する。床の硬化面について、掘削時に掘りすぎてしまったためその範囲を確定することはできなかったが、南北セクションで確認したところ、住居の中央部のみであると考えている。東壁の中央やや北寄りに焼土の密集部分があることからここにカマドがあったと考えられる。またカマドの南側で焼土と炭化物が密集する部分を検出した。周溝は見られなかった。床面においてピットを１基検出したが、位置・深さから考えて柱穴とは断定できない。また東西セクションにおいて、住居の東側にピットの存在を確認したが、プランは検出できなかった。

遺物　456は杯端部に多条沈線をもつ有段高杯、475は器台、458は壺の底部である。460～465は宇田型甕の口縁部、466は宇田型甕の脚台、467～474は杯部椀形高杯で、杯端部が短く外折するものが目立つ。475は須恵器の杯身、476は土錘である。


SB1
P9
P8
X−60970
Y−41598
Y 41506
X−60964
焼土
0
1m
a
15.1m
b
15.1m
SD26
c'
15.1m
d'
15.1m
〈SB1カマド土層名〉
1 黄褐色砂質シルト(焼土混じる)
2 茶褐色砂質シルト(焼土混じる)
3 明黄褐色砂質シルト
〈SB1 土層名〉
1 耕作土
2 床土
3 灰色シルト
4 灰茶色砂質シルト
5 黄褐色シルト
6 黄褐色シルト
7 赤褐色シルト
8 茶褐色シルト(炭化材混じる・ピット埋土)
9 黄褐色シルト
10 灰黄褐色シルト
11 茶色砂質シルト
12 黄褐色シルト
13 黄褐色砂質シルト
14 赤褐色砂質シルト
5 P9埋土
6・7 P8埋土
10〜13 SB1埋土

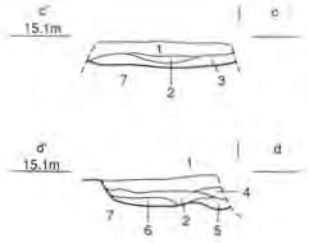
第27図　SB 1遺構図





〈SB7・SB19土層名〉

1 耕作土
2 灰色砂質シルト
3 明黄褐色砂質シルト(硬く締まる)
4 暗黄褐色砂質シルト(暗褐色土ブロック混じる・ピット埋土)
5 灰褐色砂質シルト(ピット埋土)
6 暗灰褐色砂質シルト
7 暗黄褐色砂質シルト(SB7を切る溝の埋土)
8 暗黄褐色砂質シルト(炭化物少し混じる・ピット埋土)
9 黄褐色砂質シルト
10 灰褐色砂質シルト
11 灰褐色砂質シルト
12 灰褐色砂質シルト(径2cmの黄灰色土ブロック混じる)
13 暗灰褐色砂質シルト
14 茶色砂質シルト(径2cmの灰色土ブロック混じる)
15 茶褐色砂質シルト(灰色土粒混じる)
16 黄褐色砂質シルト
17 灰茶褐色砂質シルト(径5cmの黄色土ブロック混じる)
18 茶褐色砂質シルト(径3cmの灰黄色土ブロック混じる)
19 灰褐色砂質シルト(径5cmの黄色土ブロック混じる)
20 茶灰褐色砂質シルト(黒色土少し混じる)
21 黒灰褐色砂質シルト(焼土少し混じる)
22 淡黄灰色砂質シルト
23 灰褐色砂質シルト(径3cmの赤褐色土ブロック混じる)
24 灰褐色砂質シルト(炭化物・焼土混じる)
25 暗灰褐色砂質シルト(ピット埋土)
26 灰色砂質シルト(硬く締まる・茶色土ブロック混じる・SB7床面)
27 黒灰褐色砂質シルト(ピット埋土)
28 暗灰色砂質シルト(黄色土ブロック混じる・ピット埋土)
29 灰色砂質シルト(硬く締まる・茶色・黒色土ブロック混じる(SB7床面))
30 黄白色砂質シルト(茶色土ブロック混じる・硬く締まる・SB19埋土)
31 赤褐色砂質シルト



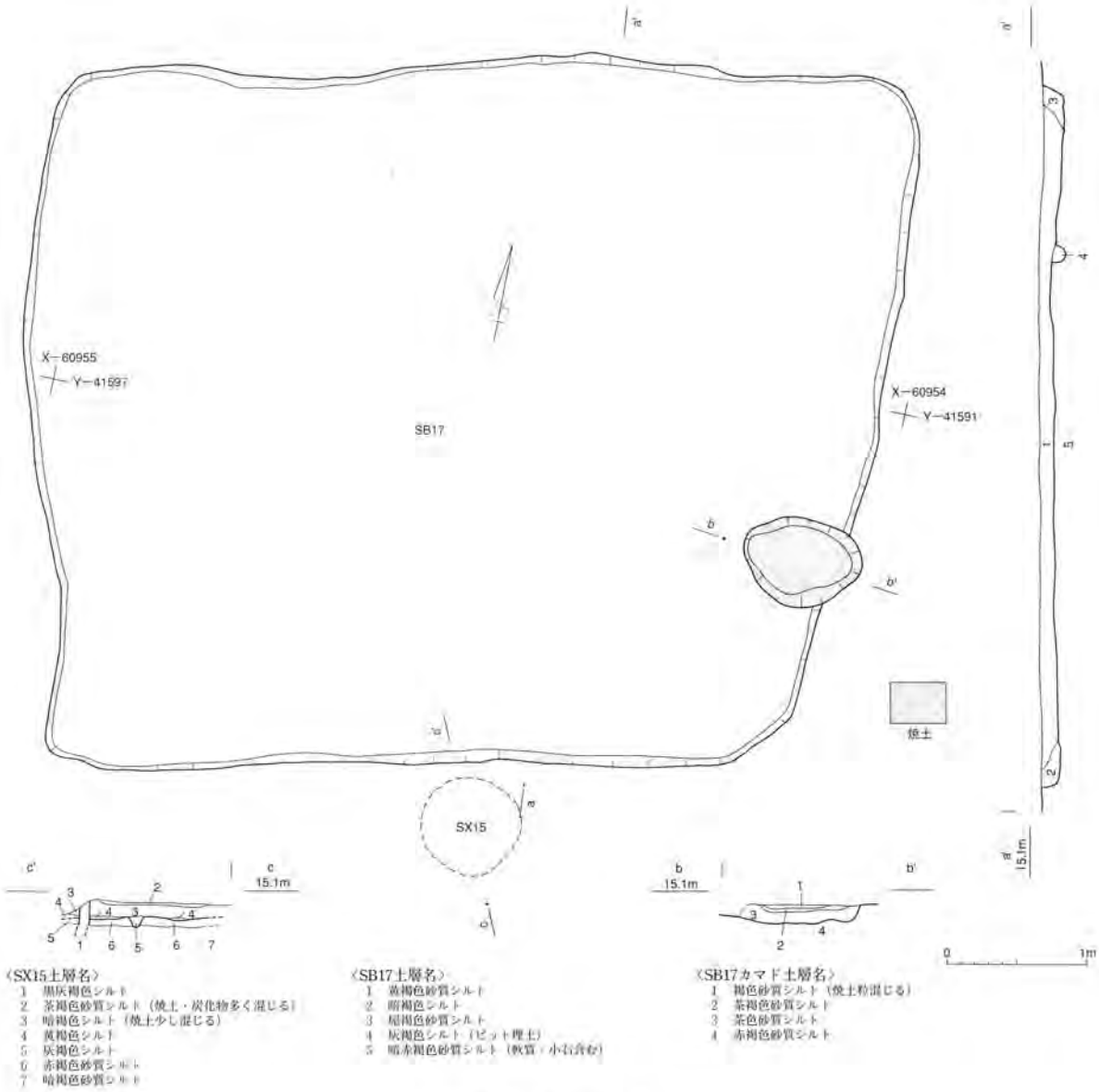
〈SB7カマド土層名〉

1 明灰褐色シルト(SB7埋土)
2 明灰褐色砂質シルト(焼土・炭化物混じる)
3 灰褐色砂質シルト(焼土ブロック混じる)
4 暗黄灰色砂質シルト(焼土ブロック混じる)
5 灰褐色砂質シルト(焼土ブロック混じる)
6 暗黄褐色砂質シルト
7 赤褐色砂質シルト

〈SB7−P1土層名〉

1 黒灰色シルト

第28図　SB 7・19遺構図

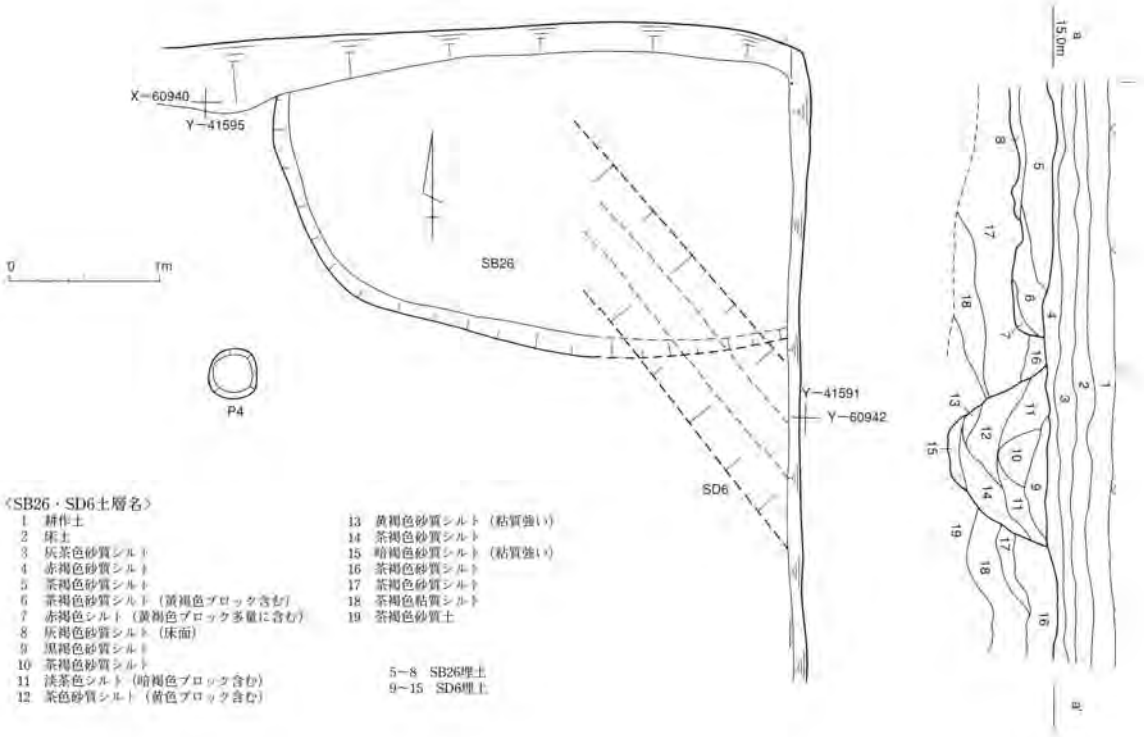


第29図　SB17遺構図

SB17（第29図・第67図477～492）

遺構　A・B区に位置する。平面形は東西に長軸をとる長方形を呈する。床の硬化面は見られなかった。東壁の中央やや南寄りの位置に焼土の密集部分があり、位置からカマドがであると考えられる。しかし、煙道・支脚石などの構造は残存していない。カマド底部は床面をやや掘り込んでいる。周溝、ピット等は見られなかった。

遺物　本遺構からの出土遺物は小片が多く、時期幅が見られる。477・478は弥生時代中期後半の甕と壺の破片、479は屈折外反高杯、480はパレス壺の体部で、沈線文と山形文が施文され、赤彩が施される。484・485は杯部椀形高杯、482は宇田型甕である。486は口縁部は短く外反し、体部には横ナデ調整が見られ、甑か鉢と思われる。須恵器は487・489が杯蓋、489・490が杯身、488・491は高杯である。やや時代が下るものもみられるが、基本的にはH-11窯式段階の須恵器が伴うと考えられる。



第30図　SB26・SD 6遺構図

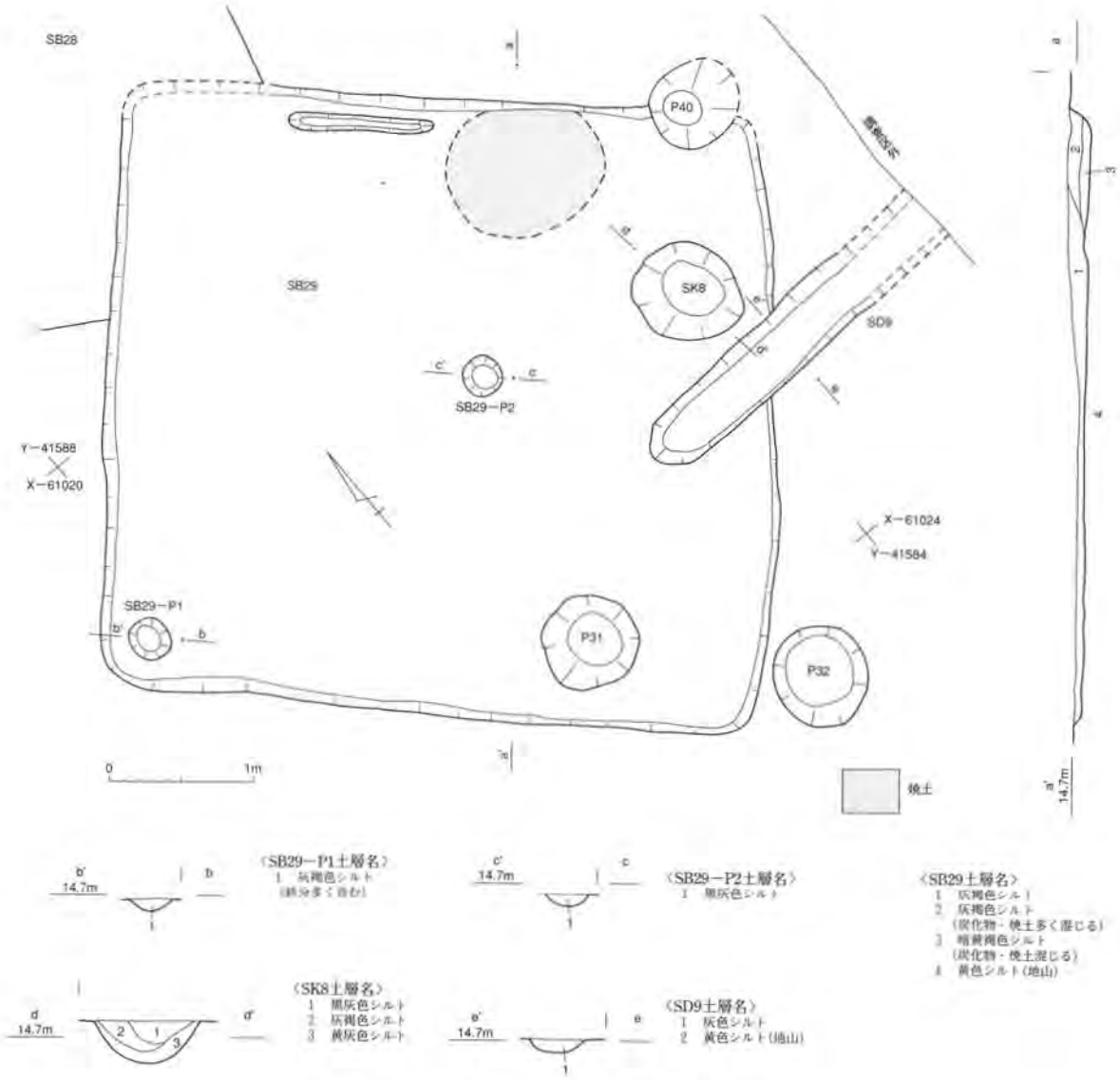
SB26（第30図・第67図493～496）

遺構　A区の北東端に位置し、SD6を切る。遺構の大部分が調査区外で、検出範囲も狭いことから平面形は断定できないが、方形を呈すると思われる。床面の硬化面は僅かであるが検出できた。カマド、周溝、ピット等は確認できなかった。

遺物　本遺構からの出土遺物は少量で、493はS字甕D３類、494・495は杯部椀形高杯である。495は口縁端部がやや窪み、口縁端部のつくりや胎土は宇田型甕に酷似する。体部の内外面はナデ調整が施され、器種は甑か鉢と思われる。本住居跡の検出段階で出土した遺物はⅠ層（A区）としたが、宇田型甕の口縁部が数点出土している。

SB29・SK8（第31図・第68図497～510・第70図562）

遺構　SB29はF区に位置する。SB28、SD9に切られ、SB34を切る。平面形はほぼ正方形を呈する。床の硬化面は見られなかった。北壁の中央やや東寄りに焼土密集部分を確認したが、位置から考えておそらくカマドと思われる。袖などの構造は残存していない。またこの部分において南北方向に断ち割りを入れたところ、住居の外側で少量の炭化物を検出したことから煙道が残存していることが予測されたがプランは確認できなかった。北壁の西半分において、全長約１ｍの周溝と思われる部分を確認したが壁には接していない。ピットを２基検出したが、深さ・位置などを考えると柱穴とは断定できない。カマドの南側において、南北に長軸をとる楕円形のSK8を確認し、埋土中からは多くの遺物が出土した。住居跡の検出時にはSK８のプランが見られなかったため、本住居跡の床から掘り込まれているものとして考えているが、埋土掘削時に、この部分で特に遺物の出土量が多かったことから、



第31図　SB29・SD9・SK8遺構図

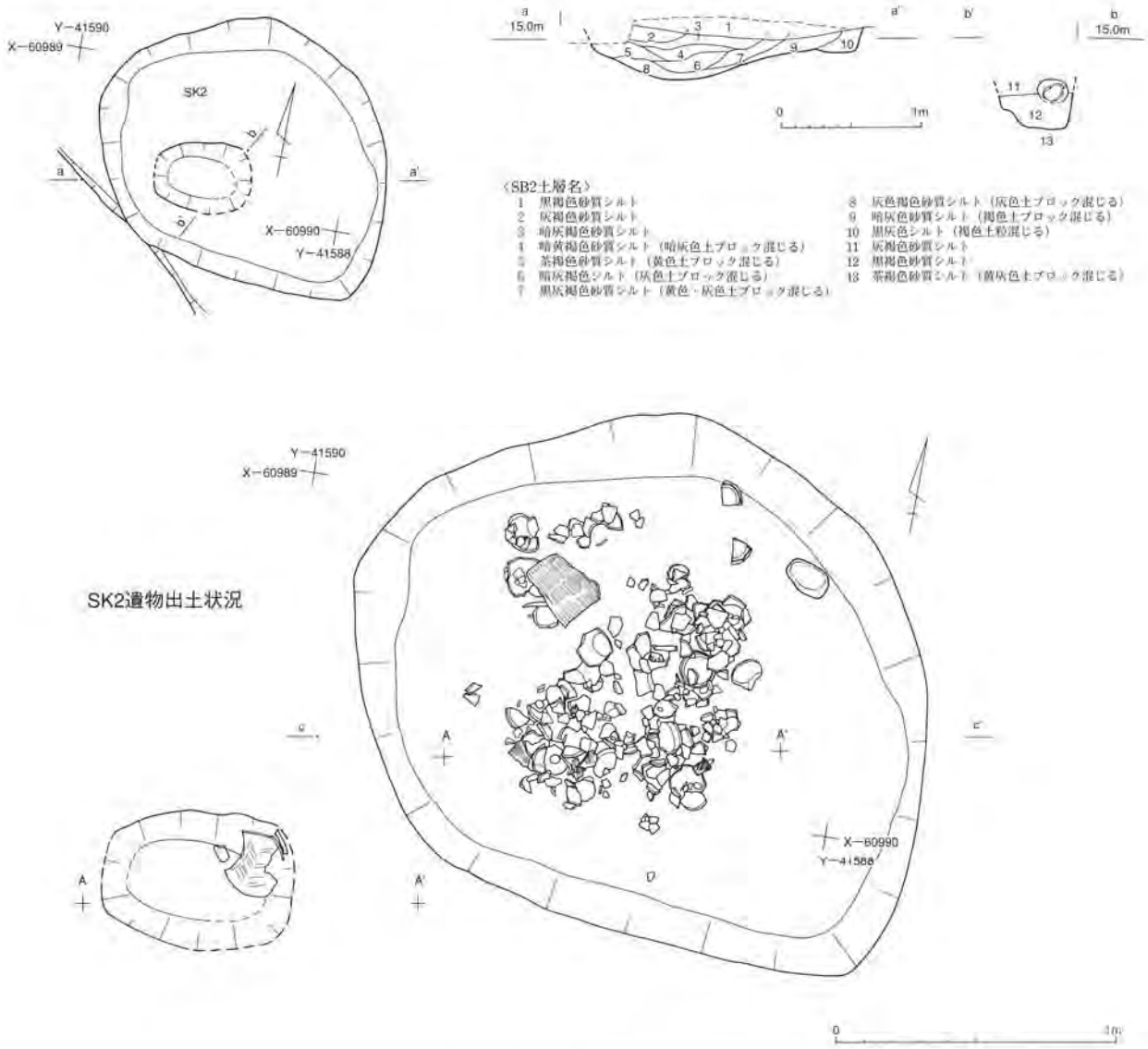
SK8がSB29を切っており、プランが確認できていなかった可能性も考えられる。

遺物　497～502は宇田型甕、497・498の口縁内面の窪みが顕著である。503はくの字甕の脚台で器壁が厚く、外面にはハケ調整が見られる。504・505は屈折脚高杯、杯部・脚裾部は横ナデが見られる。506～508は杯部椀形高杯で、いずれも小片である。509は須恵器の杯身、510は体部に波状文が施され、蓋と思われる。2つの須恵器は本遺跡の中でも一番古い段階の須恵器である。

SK2（第32・33図・第68図511～第70図561）

遺構　本遺構については、堀方のラインと底部の認識を誤っており、後に最下部の土器を確認したことから、SB15として取り上げた遺物にSK 2の遺物が混じった可能性がある。

D区に位置し、SB15を切る。平面形は不整楕円形を呈し、東西に長軸をとる。確認面において土師器や須恵器の集積を確認した。厚さ30㎝の中に遺物が集中する。この遺物集中部分から約0.4m下の下層土坑では宇田型甕が1点と須恵器の杯蓋が1点出土している。

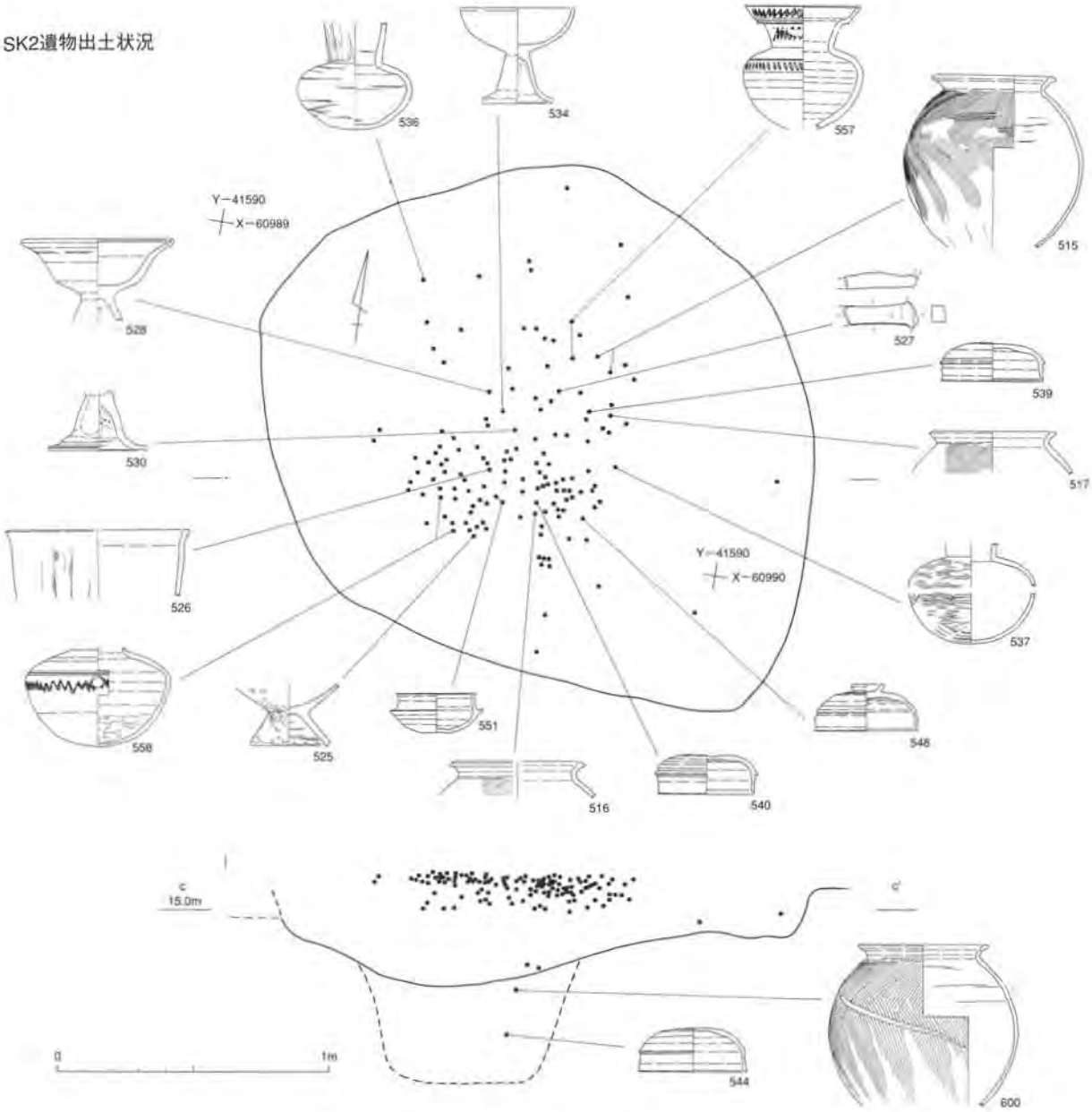


第32図　SK2遺構図（1）

上層のレンズ状の土坑と下層の逆台形の土坑との関係、さらにSB15との関係は、一度に本遺構を検出できず別々に掘削したために不明である。判明している材料から考えると、SB15が埋没する途中の段階とは断定できないが下層の土坑が掘削され、それが埋まり、さらにSB15と共に埋没した段階で上層のレンズ状の土坑を掘削して遺物を廃棄したか、SB15が埋没した後、一度に約60㎝の深さの断面形が異なる土坑を掘削し、下層部分が埋められるか埋没するかして、この土坑が埋没する最終段階に遺物を大量に廃棄したことがなどが考えられるが断定できない。ただ、下層土坑と上層土坑とでは須恵器に時期差はみられない。

遺物　本遺跡の中で一番出土遺物が多い土坑である。

519～525は宇田型甕、520の体部には横ナデが1条見られる。脚台部の外面の調整は板状工具によるナデである。526・527は甑で、526は口縁端部に面をもち、外面は縦方向のケズリがなされる。高杯は528～530が屈折脚高杯、531～535は杯部椀形高杯である。屈折脚高杯は一般的な屈折脚高杯と



第33図　SK2遺構図（2）

は異なる。杯部は丸味を帯び、大きく外反し、端部が内側に屈曲する。脚部は面をもつ。杯部椀形高杯は口縁端部が短く外折する。536～538は肩部が張り、頸部が細く長い中形の壺で、537・538の体部外面は横ミガキ調整が見られる。

須恵器は他の遺構と比較すると残存状況が良く多く出土した。593～547は杯蓋、551～556は杯身、548～550は高杯の蓋、557・558は甕、581は大甕の体部、559は高杯の脚部である。杯蓋の比率が多い。

その他の遺構出土遺物（第70図562～566）

563は宇田型甕、564は杯部椀形高杯（P 2）、565は宇田型甕（P 20）、566は須恵器（P 40）の杯身である。

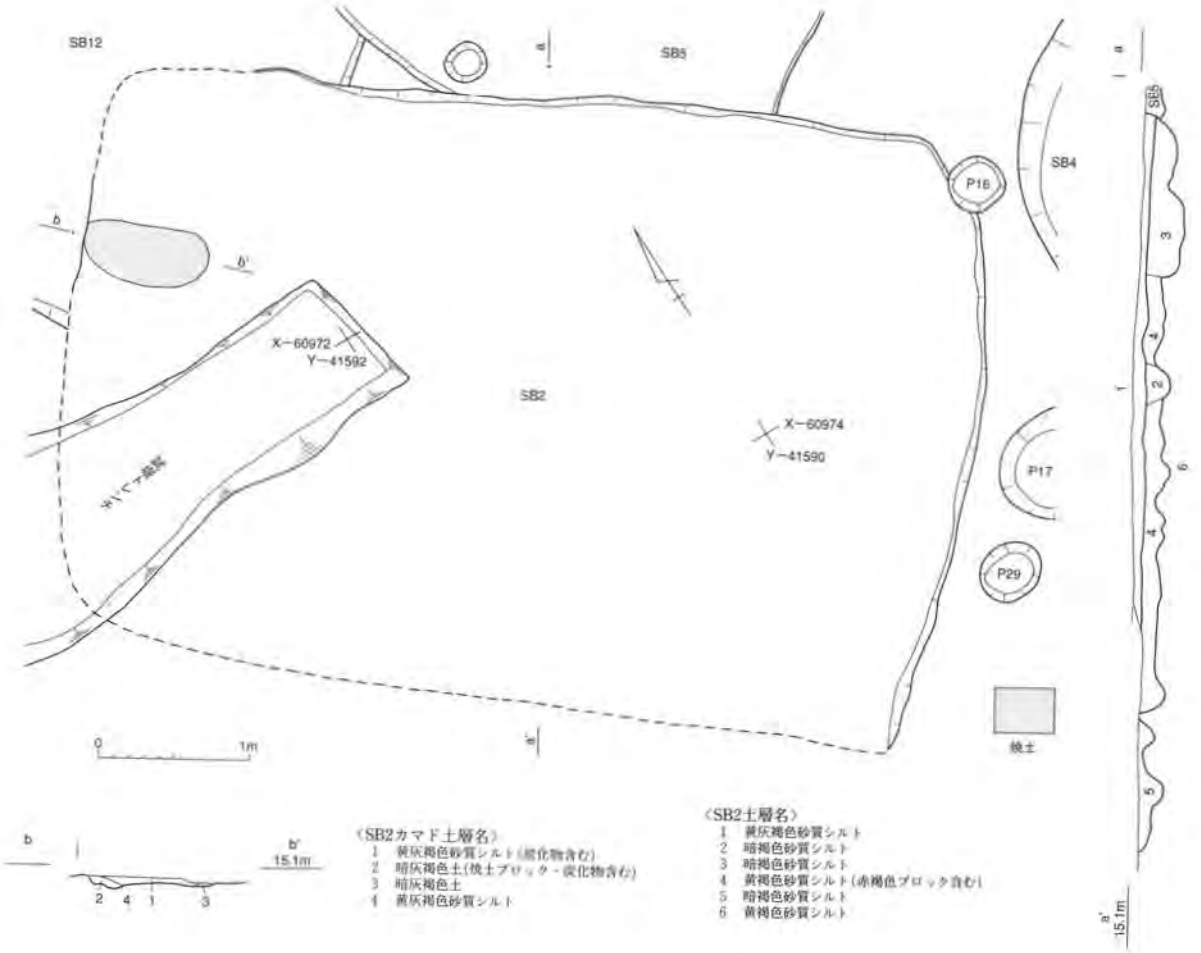
第８節　８期の遺構と遺物

SB2（第34図・第71図567～583）

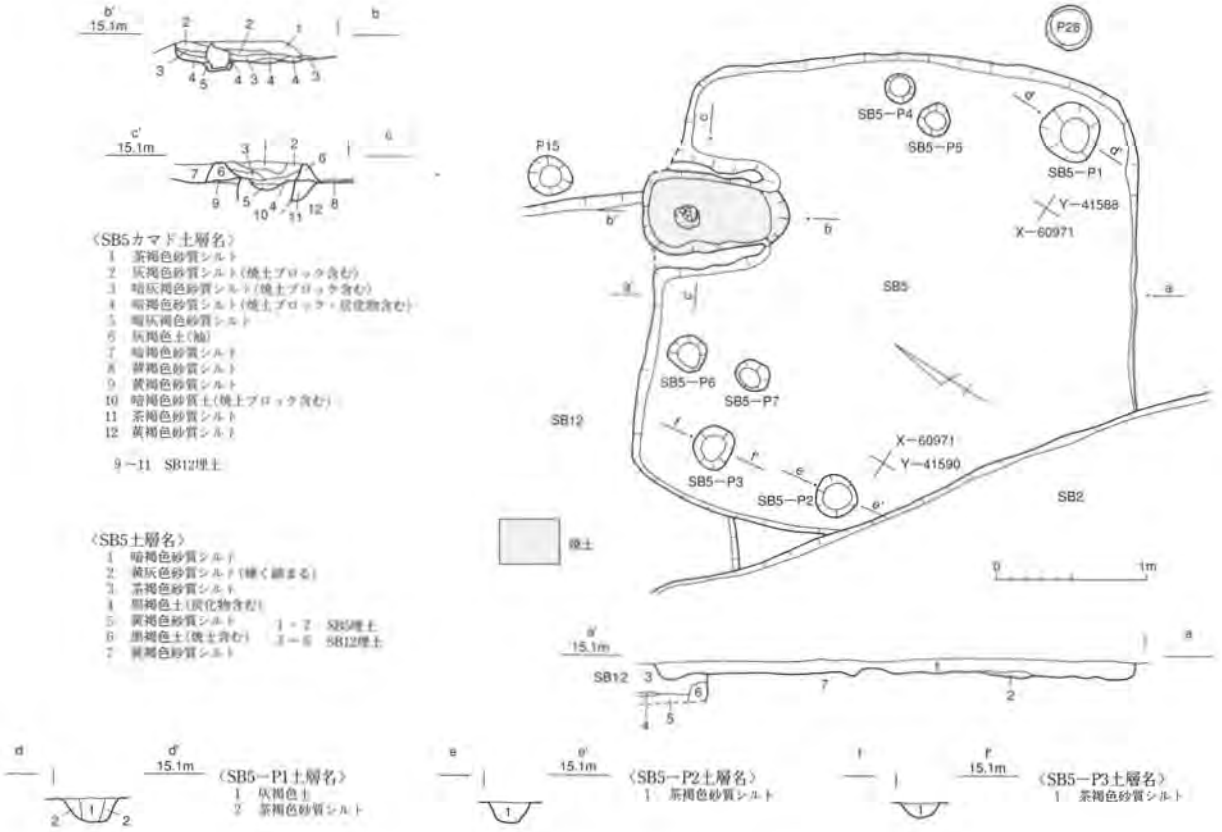
遺構　Ｃ区に位置し、SB5・12を切り、下層にはSX16がある。平面形は西側が遺構検出時にほぼ床面まで下がってしまったため堀方が確認できず断定はできないが、長方形を呈すと思われる。住居の東と南側では検出面から７～８㎝ほどで床面に達した。床の硬化面は部分的に見られる。北西壁の中央部で焼土と炭化物が密集ずる部分があり、位置からカマドであると考えられる。残存状況が悪く詳細は不明である。また、カマドの南約１ｍの所ではさらに別の焼土と炭の密集部を検出したが、性格は不明である。ピットや周溝は確認できなかった。

本住居跡の床は、一度穴を掘り、10～20cmほど土を入れ、その上につくるというような構造となっている。この床面より下の穴は住居跡とほぼ同じ大きさで、底部分は凹凸がある。今回の調査でこのような構造の住居跡は本遺構のみである。

遺物　569～571は宇田型甕で、床面下の坑の埋土から出土したものである。572～576は伊勢型甕、577・578は甑（伊勢型）、579は把手付きの鍋（伊勢型）である。伊勢型甕の長胴甕の胴部も出土している。580・582は須恵器の杯蓋、581須恵器の杯身、583は口縁部に波状文を施す甕である。



第34図　SB２遺構図



第35図　SB 5遺構図

SB5（第35図・第71図584～596）

遺構　B・C区東寄りに位置する。SB12を切り、SB2に切られる。一辺が約3.2 mと小さく、平面形はほぼ正方形を呈する。床面のほぼ全面で硬化部分を確認した。ピットは7基検出されたが、P 4～7は径も小さく浅い。周溝は確認できなかった。

カマドは北壁の中央やや東寄りに位置し、床面をやや掘り込んで構築されている。カマドのほぼ中央では伊勢型の短胴甕が逆位で出土し、層位の検討から支脚として使用された可能性が考えられる。

遺物　本遺構からの出土遺物は少ない。588は宇田型甕、589はカマドの中央部から出土した伊勢型甕で、短胴でほぼ口縁部から底部まである。口縁部の外面は横ナデ・内面横ハケ、胴部外面斜めハケ・内面上半横ハケ・下半ケズリが施される。590・591は土師器の把手であるが、甑か鍋かは不明である。胎土砂粒が多く、伊勢型甕とは異なる。592・593は須恵器の杯蓋、594は高杯の蓋、595は高杯の脚部である。

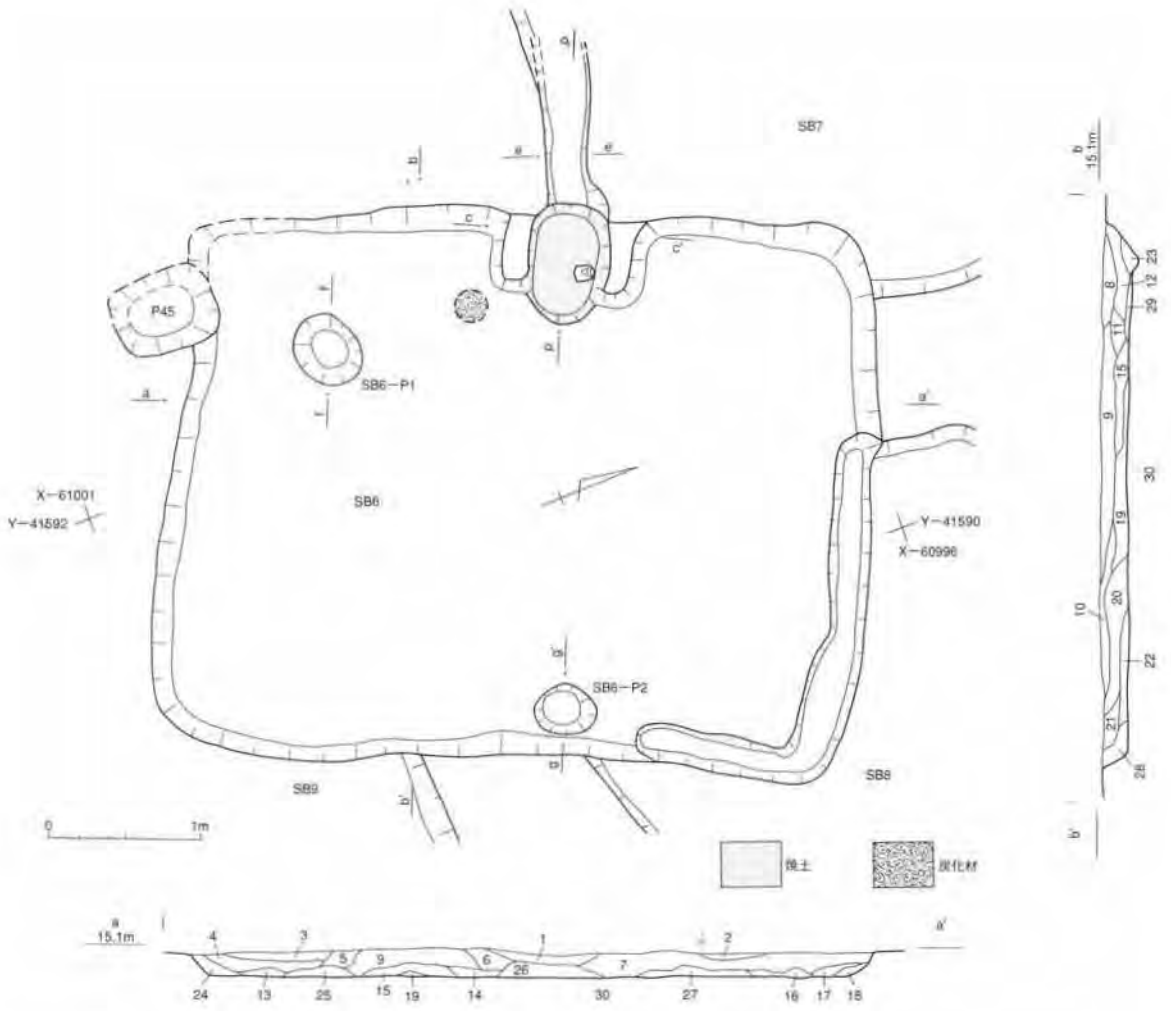
SB6 （第36図・第72図597～616）

遺構　遺構検出時において、本遺構とSB8の埋土が大変似ており、切り合い関係の判別が困難であった。遺構掘削段階ではSB8がSB6を切ると判断してSB8から掘削したが、その後、遺構・出土遺物の検討段階ではSB 6の方が新しい様相を示したため、結果SB6がSB8を切るとした。幸いにもSB6の方が深く掘り込まれていたため、住居の北隅部を検出できた。以上のことをふまえて記述を行う。

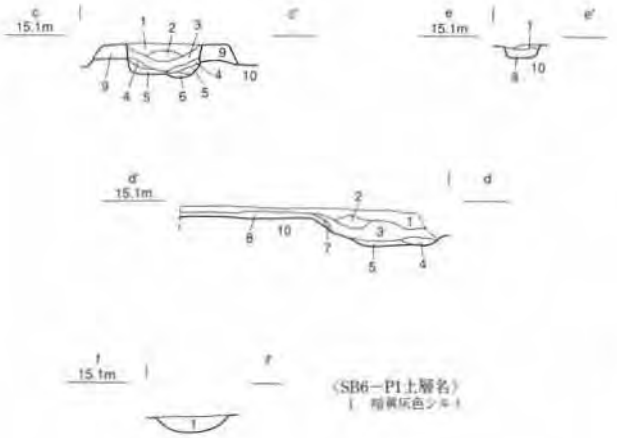
D・E区に位置し、SB7・8・9を切る。平面形は南北に長軸をとる長方形を呈する。カマドは西壁のほぼ中央部に位置し、比較的残りがよく、西に向かって直線的に構築された煙道も確認した。煙道の埋土には焼土粒が少し混じる。カマド本体は住居が掘り込まれた後に土を盛って構築されており、また底部は住居の床面を少し掘り込んでいる。カマドの中央部からは長さ約15㎝の川原石が1点出土しており、位置を考えると支脚石の可能性が高いが、この石の下にカマド使用時に堆積したと思われる焼土・炭化物がある。また、カマドの南約50㎝の所で直径約20㎝、厚さ約2㎝の炭化物密集部を確認した。床の硬化面は住居のほぼ全面で確認できたが、特にカマドの北部が硬く、また若干レベルが高くなっている。床面においてピットを2基検出した。周溝は住居の北東隅部分でのみ検出でき、その埋土中においてS字甕C類の破片が密集して出土した。しかし、本遺構にはカマドが存在し、また伊勢型甕等の遺物も出土していることから年代が合わない。SB 8、SK 7でも述べたが、周溝とした部分はSX13の一部である可能性も考えられる。

遺物　602はS字甕C類で、体部の横ハケは見られない。603は鉢である。これらは出土位置・レベルなどから本遺構に伴う遺物ではなく、SX13に伴うものと思われる。

604～606は宇田型甕、607・608は伊勢型甕である。609は甑で、口縁端部に面を持ち、外面には斜め方向のハケ調整が見られる。610は把手付き鉢で杯部は椀形を呈し、口縁端部は内彎する。カマドから出土した。611・612は須恵器の杯蓋、613は須恵器の杯身、614・615は須恵器の高杯、614は短脚で脚部にカキ目を施す。616は須恵器の甕の胴部片である。



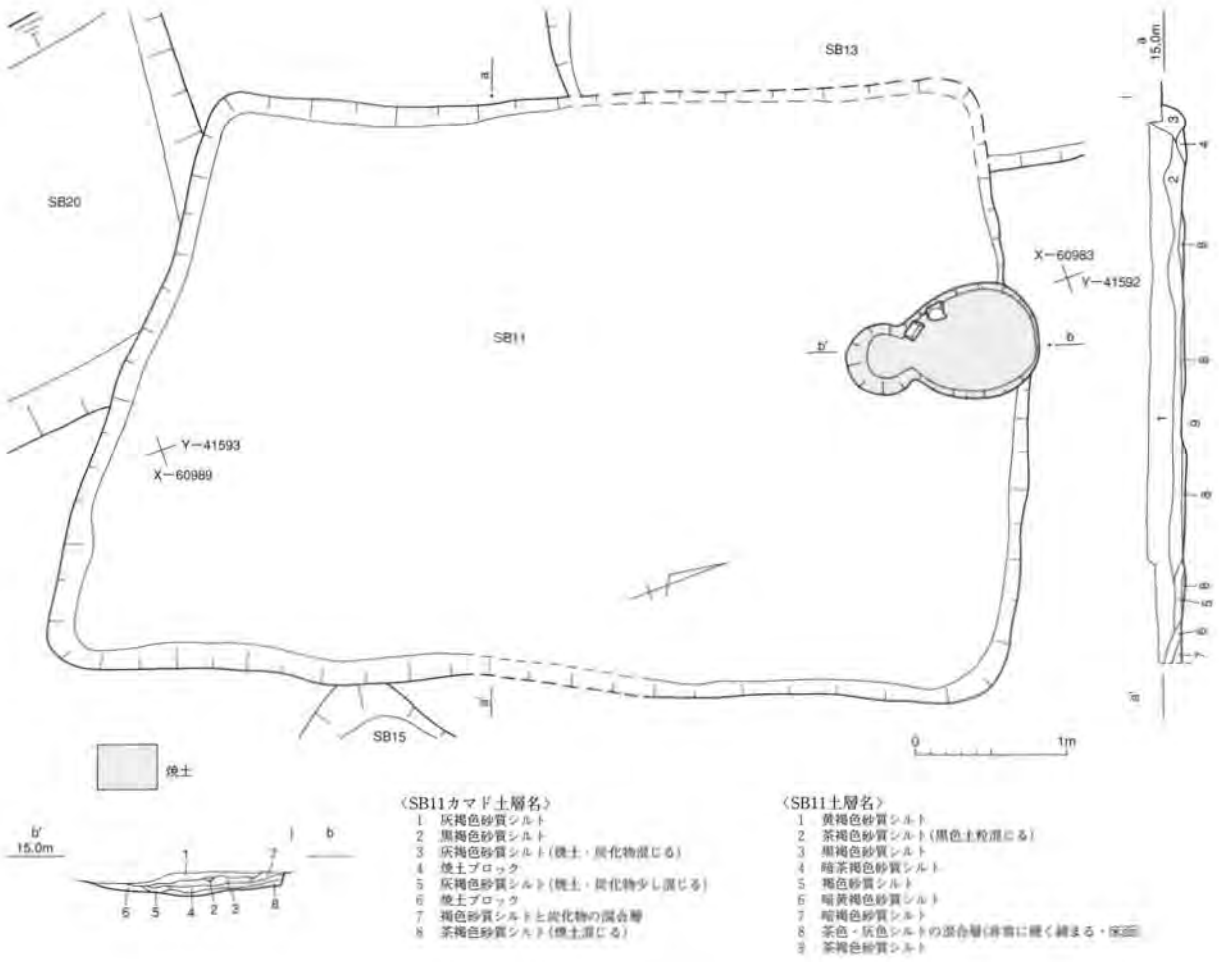
〈SB6土層名〉
1 暗黄灰色砂質シルト
2 黄色砂質シルト
3 黄灰色砂質シルト
4 暗灰色砂質シルト(黄色・褐色・灰色土ブロック混じる)
5 黄褐色砂質シルト
6 暗灰褐色砂質シルト
7 灰褐色砂質土
8 暗黄褐色砂質シルト
9 灰褐色砂質シルト(暗灰色土ブロック混じる)
10 黄灰色砂質シルト
11 茶色砂質シルト(灰色土ブロック混じる)
12 灰褐色砂質シルト(黄色土ブロック混じる)
13 暗茶褐色砂質色シルト
14 暗褐色砂質シルト
15 茶褐色砂質シルト(炭化物・灰色土ブロック混じる)
16 灰褐色砂質シルト(灰色土ブロック混じる)
17 灰褐色砂質シルト
18 暗灰褐色砂質シルト
19 灰褐色砂質シルト(炭化物少し混じる)
20 暗灰色砂質シルト(黄色土ブロック混じる)
21 暗灰褐色砂質シルト
22 暗黄灰色砂質シルト
23 褐色砂質シルト(黄灰色土ブロック混じる)
24 茶褐色砂質シルト(焼土少し混じる)
25 暗灰褐色砂質シルト
26 灰褐色砂質シルト(灰色土ブロック混じる)
27 暗褐色砂質シルト
28 灰褐色砂質シルト
29 暗黄灰色砂質シルト(炭化物混じる)
30 黄色砂質シルト



〈SB6カマド土層名〉
1 黄灰褐色砂質シルト(煙道部では焼土粒混じる)
2 灰褐色砂質シルト
3 茶褐色砂質シルト(灰色土ブロック混じる)
4 茶褐色砂質シルト(焼土混じる)
5 茶褐色砂質シルト(炭化物多く混じる)
6 焼土ブロック
7 暗褐色砂質シルト
8 灰褐色砂質シルト(炭化物混じる)
9 黄褐色砂質シルト(地)
10 明灰褐色砂質シルト

〈SB6−P1土層名〉
1 暗黄灰色シルト

〈SB6−P2土層名〉
1 灰褐色シルト

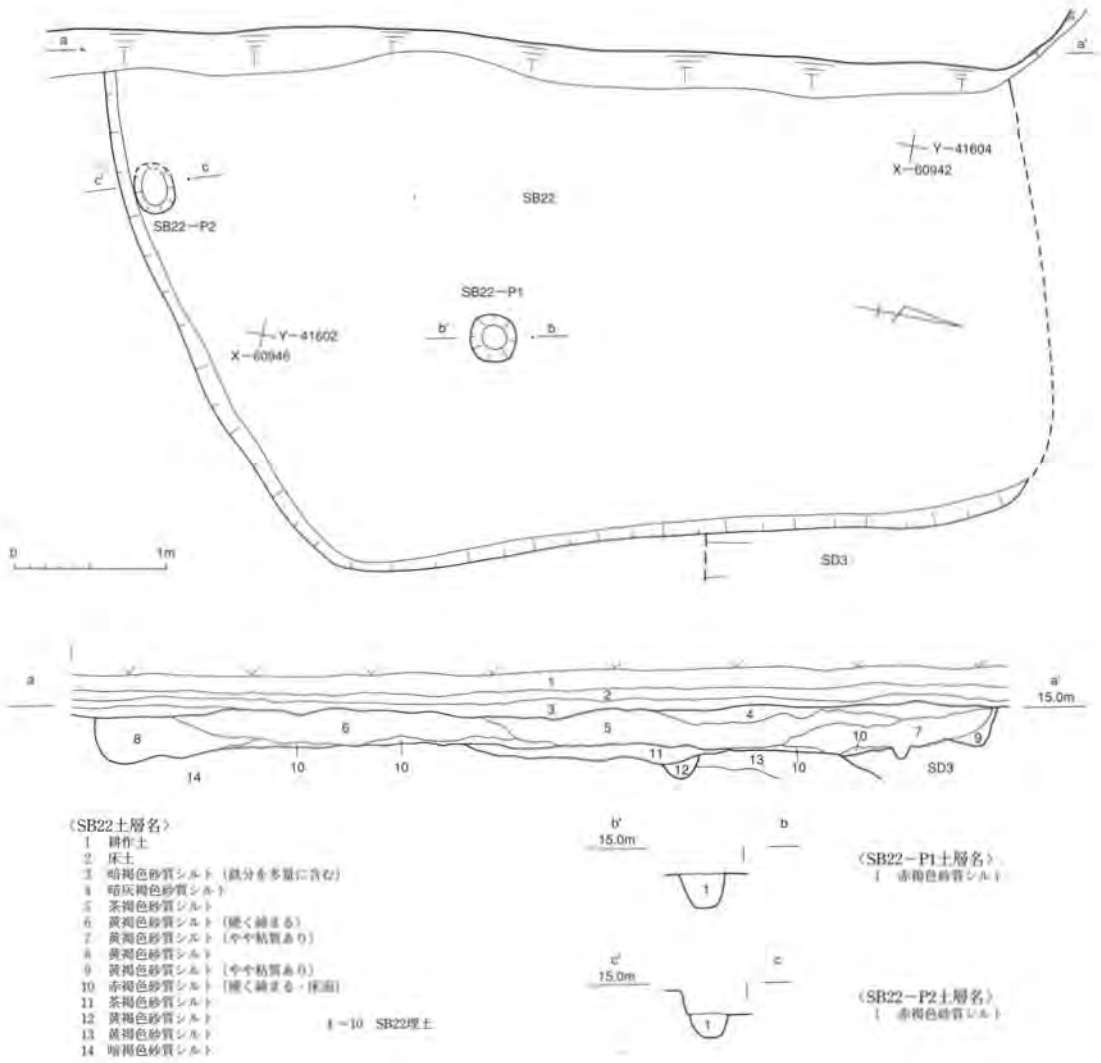


第37図　SB11遺構図

SB11（第37図・第72図617～第73図634・第81図920・921）

遺構　C・D区に位置し、SB13・15・20を切る。平面形は南北に長軸をとる長方形を呈する。床の硬化面は住居跡のほぼ全面で確認できた。北壁のほぼ中央に焼土・炭化物の密集部分があり、カマドであると考えられる。カマド底部は床面よりも若干低くなっており、焚き口と思われる浅いくぼみも確認した。カマドの堆積中には人為的に打ち欠いたと思われるような直方体の石が2点出土している。検出時には焼土の縁辺部で並んだ状態で出土しており、支脚として使用された可能性が高い。しかし、カマドの上部がトレンチによって壊されており、層位的に検証できなかった。住居の中央付近において少量ではあるが焼土を確認した。周溝・ピット等は見られなかった。

遺物　617は弥生時代中期後半の細頸壺、口縁端部に沈線、頸部に矢羽状に刺突文・竹管文を施す。618は器台の脚部。619～621は宇田型甕、622～624は伊勢型甕で、623・624はカマドから出土した。須恵器は、625～628・631が杯蓋、629・630は杯身、633は平瓶、634は大型器台である。これらは時期幅がみられ、634は古く、本遺構に伴うものではない。

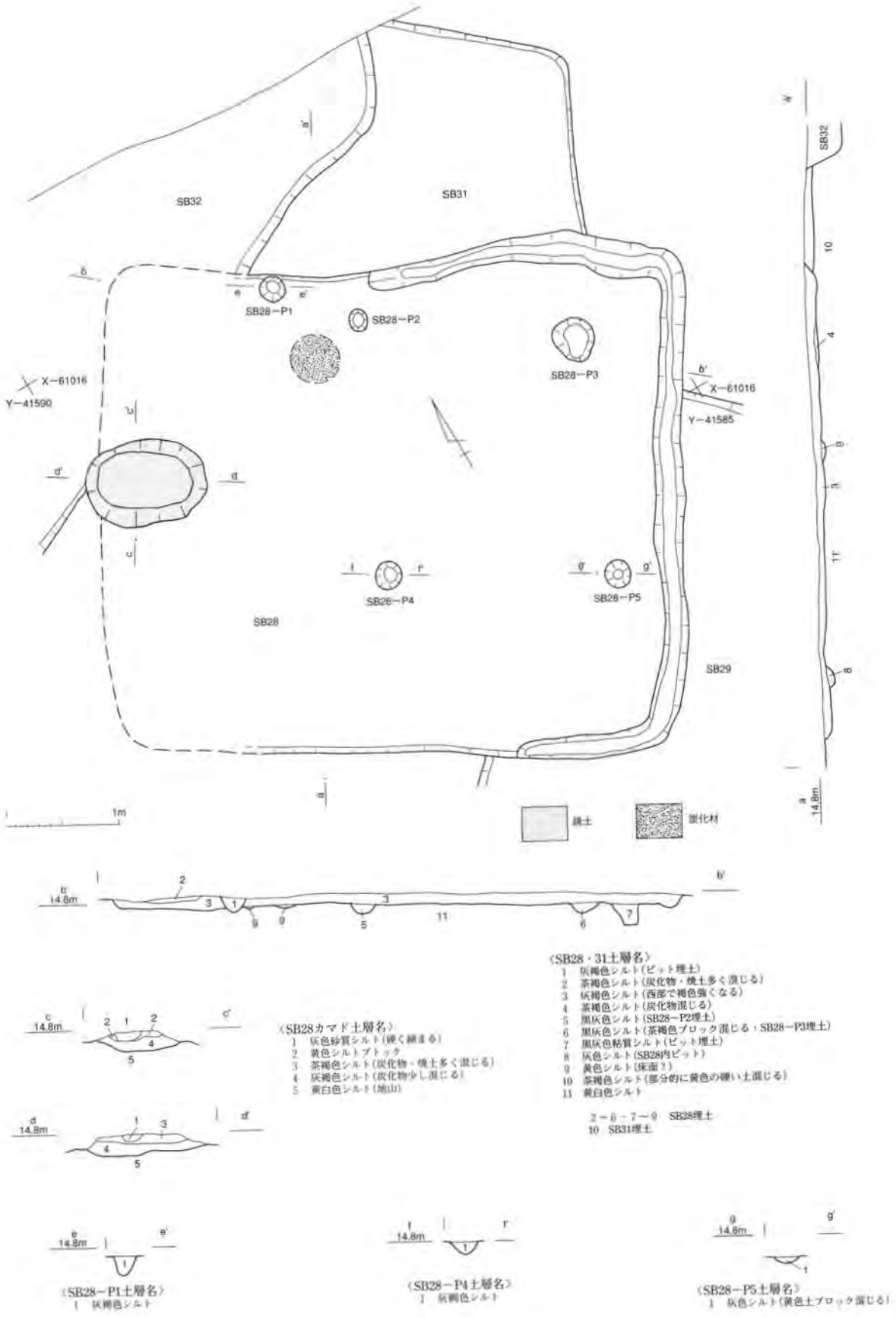


第38図　SB22遺構図

SB22（第38図・第73図635～641）

遺構　A区の北西端に位置する。SD3を切り、SD22に切られる。平面形は方形を呈すると思われる。深さは調査区西壁で約0.4 mを測る。床面は部分的にやや硬く締まる箇所があったが、硬化面とまではいえない。ピットは2基確認でき、カマドは検出できなかった。遺物はほぼ床面直上から宇田型甕や伊勢型甕の体部がまとまって出土した。

遺物　635は宇田型甕で、肩部に2条の横ナデが見られる。637は伊勢型甕である。両者の比率は口縁部では宇田型甕がかなり多く見られるが、胴部片では若干多いくらいである。図化できなかったが、杯部椀形高杯の破片が出土している。須恵器は638・639は杯蓋、639は高杯である。641は脚部にカキ目を施す高杯である。640の杯蓋はやや時代が下る。



第39図　SB28・31遺構図

SB28（第39図・第73図642～第74図655）

遺構　F区に位置し、SB29・30・31・32・34を切る。SB30でも述べたが、プランの検出ミスにより、北西角の部分をSB27の埋土として掘り下げてしまった。これにより、住居の西部4分の1は確認できていないことになるが、土層観察、住居の方向などを考え合わせて推定ラインを図示した。平面形は長方形を呈する。確認面から約10㎝のところで床面に達したが、硬化面は見られなかった。住居西壁の中央に焼土密集部を確認し、位置から考えるとカマドと考えられ、床をやや掘り込んで構築されている。袖などの構造は残存していない。カマド内またはカマドの東側では伊勢型甕の破片や炭化物が出土した。周溝は住居のほぼ東半分で確認した。ピットは5基検出したが、位置・深さから考えて、柱穴の可能性があるのはP3のみであり、それに対応する柱穴はない。また住居の中央やや北寄り、床面直上で直径40㎝、厚さ3㎝の炭化物の集中部を検出した。本住居の南西部において若干遺物片が出土した部分があり、下層遺構の存在が予想できたがプランは確認できなかった。

遺物　642は口縁端部に沈線が見られるS字甕D1類。644は口縁部内外面に羽状の刺突文を施す柳ヶ坪型壺である。この2点は下層の住居跡に伴うものと思われる。643・645はくの字甕、646～648は伊勢型甕である。須恵器は649～652は杯身、653は杯蓋、654は甕の口縁部で外面にカキ目がめぐる。655は甕の胴部ある。

SD2（第43図・別添図2・第74図656）

遺構　D区に位置し、SB7、SK3を切る。東西方向に直線状にのび、東側は調査区外で、西側は溝が浅くなり途切れている。調査で確認した長さは9.2ｍである。深さが7㎝と浅い。

遺物　本遺構からは土師器と須恵器の小片が出土。656は須恵器の杯身である。

SD16（第42図・第74図659～667）

遺構　G区に位置する。SD20を切り、SD10に切られる。東西方向にのび、両側は調査区外である。調査で確認した長さは6.7ｍで、断面形は扁平なU字形を呈する。また底部のレベルから、西から東に水が流れていたと思われる。

遺物　本遺構からは弥生土器・土師器・須恵器が出土している。659は受口口縁甕で口縁部外面に刺突文が見られる。660～663はS字甕D1類、664は宇田型甕である。665・666は須恵器の杯身、667は杯蓋である。須恵器はいづれもTK-209窯式併行である。

SD18（第42図・第74図668～671）

遺構　G区に位置し、SX6を切り、SD19・20に切られる。東西方向に直線状にのび、両側は調査区外である。調査で確認した長さは6.4ｍで、断面形は緩やかなV字形を呈する。底部のレベルから、西から東に水が流れていたと思われる。

遺物　本遺構からは、土師器・須恵器が出土している。668はS字甕C類、669・670は宇田型甕である。671は須恵器の鉢（6C末～7C初）である。

SD20 （第42図・第74図672）

遺構　G区に位置する。SD16・18に切られ、SD19を切る。北西ー南東方向に直線状にのび、北西側は調査区外で、南東側はSD18に切られている。調査で確認した長さは5.5ｍで、断面形は扁平なU字形を呈する。

遺物　本遺構からは土師器・須恵器が出土している。672は須恵器の甕で、外底部は平行叩きを施す。

その他の遺構（第74図673～675）

673～654はＰ１から出土したもので、673はＳ字甕Ｃ類、654はＳ字甕Ｄ２類、675は須恵器の杯身である。

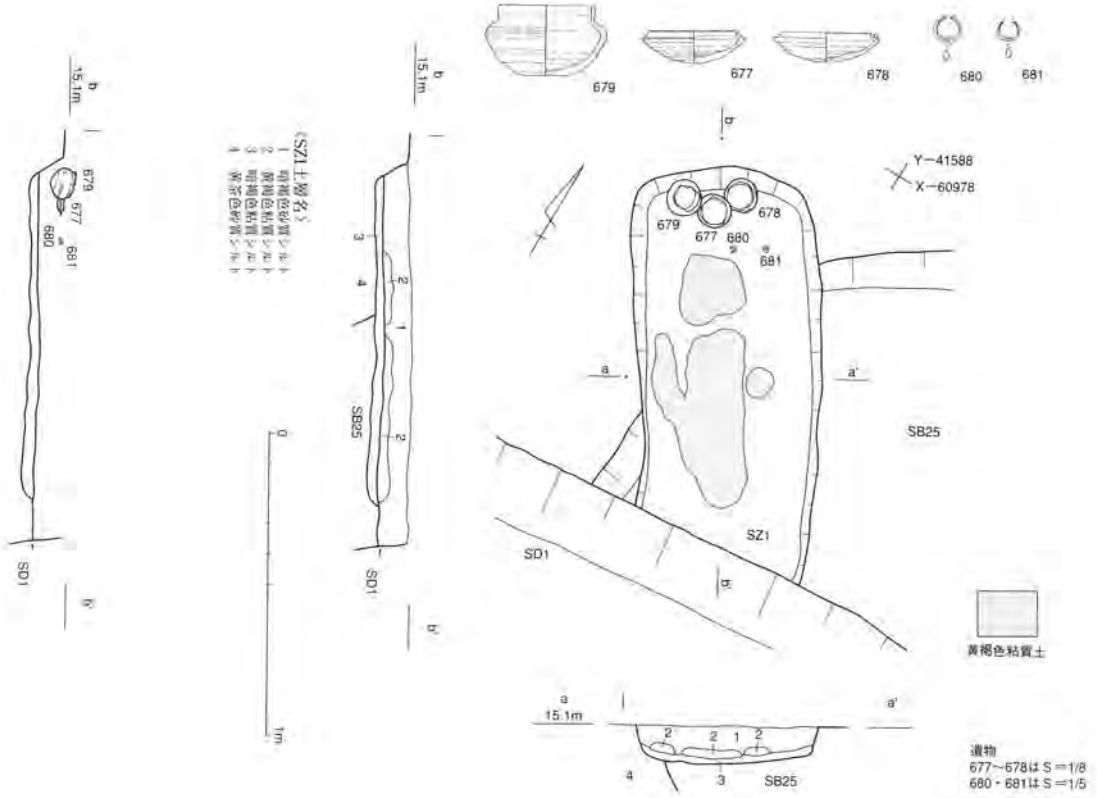
第９節　９期の遺構と遺物

SZ1（第40図・第74図676～681）

遺構　Ｃ区東側に位置する。SB25を切り、SD1に切られる。遺構検出時には須恵器の短頸壺が半分露出した状態で、耳環も検出面で出土した。墓坑は南北に長軸をとる長方形で、幅は約0.6ｍと狭く、縦辺はSD1によって切られ不明であるが検出しただけで1.35ｍを測る。またSD1よりも南で検出できなかったことから２ｍ以下であると思われる。検出面から底部分までは約14㎝である。

墓坑には一面に粘質のあるシルト質の土が敷かれていた。さらに、部分的であるがその上に黄褐色の粘質のあるシルト質の土が見られる。あるいは棺台であった可能性が考えられる。墓坑以外周溝等は検出できなかった。。遺物はこの黄褐色の土の上から出土し、墓坑の北端に西からの短頸壺１点と杯身２点が並べて置かれていた。耳環はその南側東よりに約15㎝ほど間隔をあけて並んだ状態で見つかった。これらの遺物はほぼ当時の状態を示していると思われる。

遺物　本遺構に伴う遺物として須恵器の679の短頸壺、677・678の杯身、680・681の耳環がある。杯身は蓋の一部が接着している。須恵器はいずれも７Ｃ後半のものである。耳環は腐食が激しく断面形は不明である。銅製で、内側に僅かであるが塗金が見られる。内径は680がは約1.3㎝、681が1.2㎝である。576の鏃は小片で時代も古く、本遺構に伴うものではない。



第40図　SZ1遺構図

SD10（第42図・第75図682～692）

遺構　F・G区に位置する。SD11・16を切り、SD7に切られる。東西に直線状にのび、両側は調査区外である。SD7の南北両側でプランを検出したが、埋土が酷似していたことから同一の溝と判断した。調査で確認した長さは7mで、断面形は不明である。

遺物　682は杯端部に多条沈線がある有段高杯。684は口縁端部に面をもつS字甕D1類、658は須恵器の杯蓋。686は杯身、687・688は無台杯で、688の外底部にはヘラ記号がみられる。690・691は須恵器の甕、692は土錘である。須恵器は7C後半のものが多い。

SD11（第42図・第75図693～706）

遺構　F区に位置する。SX7・9を切り、SD10に切られる。東西方向に直線状にのび、両側は調査区外である。調査で確認した長さは7.4mで、断面形は凹凸が激しい逆台形を呈する。底部のレベルから、西から東に水が流れていたと思われる。また、底部付近では埋土中に遺物の小破片が大量に混じっていた。

遺物　本遺構からは弥生土器・土師器・須恵器が出土。693・694はS字甕、695は器台、696は口縁部内外面に細かい横方向のミガキを施す小形壺である。699～702・706は須恵器の甕、703は高杯、704・705は杯蓋で、701～705は7C後半のものである。

第10節　10期の遺構と遺物

SD23（別添図1・第75図709～712）

遺構　A区に位置する南北方向の溝である。一部分しか掘削しておらず詳細は不明である。

遺物　711は土師器の把手、709・712は山茶碗、710は片口鉢である。破片であるがかわらけも出土している。山茶碗はともに東濃産で、710は瀬戸産である。

SD26（別添図1・第75図713）

遺構　B区に位置する南北方向の溝である。一部分しか掘削しておらず詳細は不明である。幅約2.2m、深さ0.25mである。SD25・27・28は平行し、埋土は非常に硬く締まる青灰褐色砂質シルトであり、同時期である可能性が高い。

遺物　出土遺物は713の灰釉陶器椀1点のみである。

SD29（別添図2・第75図707・708）

遺構　D・E区の東端に位置する南北方向の溝である。幅は約1.1m、深さ約9cmと浅い。A・B区の一連の溝と状況は酷似している。

遺物　本遺構からは須恵器・灰釉陶器・山茶碗が出土している。707は須恵器の無台杯で外底部にはヘラ記号が見られる。708は灰釉陶器椀である。

第11節　その他の遺構と出土遺物

（1）時期不明遺構

SB19（第28図）

遺構　D区に位置する。本住居跡はプランを検出したのではなく、SB7の土層記録の際に確認したものである。SB7掘削時に、床面に達した段階で土層断面の検討をしたところ、すでにSB7の床面は掘りすぎており、その下の硬化面に達していたことから本住居跡が発見された。このような理由から、SB19自体のプランは確認できず、硬化面のみの検出となってしまった。カマドもしくは炉、周溝、ピット等も検出できなかった。SB19を切るSB7から出土した遺物は一時期のものでSB19の時期を推定するような遺物は見られない。

SB21（第11図）

遺構　C区に位置する。遺構検出段階にはほぼ削ってしまて床面（硬化面）と一部の遺構の端部しか検出できず、規模などは不明で、ピットなどは確認できなかった。南側にあるSB3の状況をみると切っている可能性が高く、3期以降である可能性が高い。

SB34（第18図）

遺構　F区に位置し、SB28・29・30・31・32に切られる。平面形は方形を呈する。床の硬化面、炉、周溝等は見られなかった。ピットは3基検出した。遺構の切り合い関係から、SB30以前ということで5期以前であると考えられる。

SD1（別添図1・第15・23図・第76図714～717）

遺構　C区に位置し、SB3・13・25、SK1、SZ1を切る。東西方向に直線状にのび、両側は調査区外である。断面形はV字形を呈し、調査で確認した長さは12.6ｍである。SD26など古代から中世にかけての溝が掘削された面の上の層から掘り込まれており、中世以降に掘削されたことがわかる。

遺物　本遺構は、層位から中世以降に掘削されたと考えれらるが、出土遺物は古墳時代までのものが少量混じるのみである。715は宇田型甕・716は伊勢型甕・717は須恵器の壺の脚である。

SD4（第25図）

遺構　E区に位置する。SB10、P2に切られ、SB18を切る。東西方向に直線状にのび、西側はP2に切られ、それより西側では確認できず、また東側はSB10に切られる。調査区で確認した長さは2.8ｍである。深さが7㎝と浅いため断面形は確定できない。SB18に切られるということで6期以前と考えられる。

遺物　本遺構からは土師器片が少量出土したのみであるが、SB18出土遺物の中の420・417はSD4掘削時に溝付近から出土しており、SX3が西端で検出された溝と同一遺構であるならば、時期的にもSD4に伴う可能性が高い。

SD5（別添図１）

遺構　Ｃ区の東側に位置する東西方向の溝である。断面は半円形を呈し、深さは約18㎝である。出土遺物はなかった。

SD6（第30図）

遺構　Ａ区北東端に位置し、SB26に切られる。本遺構は重機によるトレンチで見つかり、断面でのみ確認できた。断面形は緩やかなＶ字を呈し、深さは0.65ｍを測る。

遺物　土師器片が小片しか出土しなかったが、有段高杯・ミガキを施す壺の破片があることから２・３期に比定できる。

SD7（第42図・第76図718～722）

遺構　Ｆ・Ｇ区に位置し、SD10を切る。東西方向に直線状にのび、両側とも調査区外である。調査で確認した長さは6.7ｍで、断面形は緩やかなＶ字形を呈する。

掘方の南北両側で流路と並行する杭列を検出した。土層観察により、杭は溝の掘方の傾斜に沿うように内側に傾いて打ち込まれている。また、杭先端のレベルが異なることから、杭列はおそらく段状になっていたと考えられる。南北ともに３段を確認しており、特に南側に多くの杭が打ち込まれている。杭には、断面形が丸材と角材の２種類があり、丸材の杭は木の幹をそのまま利用したものと、竹を利用したものがあり、角材の杭は木材として加工が施され、断面が方形のものと三角形を呈するものがある。本数としては丸材のものが圧倒的に多い。丸材は直径３～７㎝、長さは80㎝まで確認しており、角材は幅3.5～８㎝、長さは確認できなかった。先端部の加工について、丸材は４方向から切り出しており、角材（断面三角形の場合）は、各側面が先端に近づくにつれ緩やかに角度を変え先端部を形成している。これらの杭列の機能としては、おそらく護岸と考えて間違いないであろう。また遺構内からは近世・近代の遺物が出土したほか、ビニール製品や貝殻も確認している。確認面についても他の遺構とは違いⅢa層上面であることから、この溝がかなり新しい時期に掘削・使用されていたと考えられる。

遺物　本遺構からは土師器・須恵器・近世陶器・近世磁器・が出土。須恵器は９Ｃ初に集中し、周辺にこの時期遺構があった可能性がある。

SD8（第41図・第76図723～730）

遺構　Ｆ区に位置し、SD21を切る。東西方向にほぼ直線状にのび、両側は調査区外である。調査で確認した長さは8.5ｍで、断面形は不整逆台形を呈する。底部のレベルから、おそらく西から東に向かい水が流れていたと思われる。

遺物　本遺構からは伊勢型甕・甑（伊勢型）、が出土した。須恵器は７Ｃ後半のものが多く見られる。

SD9（第31図）

遺構　F区に位置し、SB29を切る。東西方向に直線状にのび、東側は調査区外であり、西側は溝が浅くなり途切れている。調査で確認した長さは2.6ｍで、深さは9㎝と浅い。

遺物　遺物は土師器の小片が少量出土したのみである。

SD12（第41図・第74図657・658）

遺構　G区に位置する。SX4に切られ、SD15、SX6を切る。東西方向に直線状にのび、両側は調査区外である。調査で確認した長さは6ｍで、断面形は逆台形を呈する。流路と並行して、かなりの数の円形小ピットを確認した。土層観察により、深さが30㎝で鉛直方向に入ることから、杭の痕跡と考えている。機能は護岸の可能性が高い。

遺物　657はパレス壺の頸部、658は須恵器の甕である。

SD13（第41図）

遺構　G区に位置する。SX4に切られ、SD14を切る。南北方向に直線状にのび、南側は調査区外であり、北側は溝が浅くなり途切れている。調査で確認した長さは5.5ｍで、断面形は緩やかなV字形を呈する。

遺物　本遺構の出土遺物は少量で小片であるため、図化できるものはない。

SD14（第41図）

遺構　G区に位置し、SD13に切られる。北東－南西方向にのび、両側は調査区外である。調査で確認した長さは3.9ｍで、断面形は扁平なU字形を呈する

遺物　本遺構の出土遺物は少量で小片であるため、図化できるものはない。

SD15（第41図）

遺構　G区に位置する。SD12・17、SX4に切られ、SX5を切る。北西－南東方向に直線状にのび、両側とも浅くなり途切れている。調査で確認した長さは6.9ｍで、断面形は緩やかなV字形を呈する。

遺物　本遺構の出土遺物は少量で小片であるため、図化できるものはない。

SD17（第41図・第76図731～733）

遺構　G区に位置する。SX4に切られ、SB33、SD15を切る。北東－南西方向に直線状にのび、南西側は調査区外で、北東側は溝が浅くなり途切れている。調査で確認した長さは5.8ｍで、断面形はU字形を呈する。

遺物　723は杯部外反高杯の杯部、733はその脚部、731は小形壺の口縁部である。いずれもSB33に関係するものと思われる。

SD21（第41図・第76図734～737）

遺構　F区に位置する。SD8に切られ、SK9を切る。南北方向に直線状にのび、南側は調査区外で、北側は溝が浅くなり途切れている。調査で確認した長さは6.1ｍで、また深さが5㎝浅いため断面形は確定できない。

遺物　734はＳ字甕Ｄ３類、735は広口壺の口縁端部と思われる。736は伊勢型甕、737は須恵器の甕

SK3（第43図・第76図738）

遺構　D区に位置し、SD2に切られる。平面形は南北に長軸をとる楕円形を呈する。深さは8㎝と浅く、遺物の量も少ない。SK3を切るSD2は8期と考えており、それ以前であると思われる。

遺物　出土遺物は土師器片のみで、738はくの字甕である。

SK4（第43図・第76図739～742）

遺構　本遺構については、SB8の記述で若干触れたが、SB8の床面において確認したものである。しかしながら、住居跡内の遺構にしては規模が大きく不自然であるから、SB8に伴わない遺構である可能性が高い。以下ではこれをふまえて記述を行う。

D区に位置し、SK7を切る。SB8との関係は前述の通りである。平面形はほぼ円形を呈する。底部について、SB8の記述で下層における遺構の存在を示したが、本遺構の出土遺物にも、SK7・SX13の時期に該当する遺物が存在することから、誤認による掘り過ぎの可能性が考えられるが、掘削時や土層観察においては確認できなかった。

遺物　739・740はＳ字甕Ｄ１類、741はＳ字甕Ｄ２類、742は屈折脚高杯の杯部で内外面に縦方向のミガキを施す。これらと同時期の遺物は切り合うSB8・SK7・SX13・SK8からも出土しており、一連の遺構である可能性も考えられる。しかし、須恵器も数点見られることから新しいSB8以後の遺構の可能性もある。

SX1（第43図）

遺構　C区に位置する。平面形は不整楕円形で、土坑状の掘方を持つ。中央部で石が2点出土したが、これらの間には接合関係が認められ、その面の状態は滑らかである。一方には刃のような鋭利な部分が見られたものの人為的なものか否かは判断できなかった。

遺物　土師器片が少量出土したのみで時期は不明である。

SX2（第43図）

遺構　D区に位置する。SX1の南側に位置し、平面形は不整楕円形で、土坑状の掘方を持つ。SX1と同様に中央部で川原石が3点出土した。

遺物　土師器片・須恵器片が出土したが、時期を決定できるものはない。

SX4（第43図・第76図743～750）

遺構　G区に位置し、SB33、SD12・13・15・17、SX5・6を切る。平面形は不整形で、底部も平らではなく凹凸が激しい。埋土は灰色砂質土で、ブロックなどの混じりもなく均質である。小破片であるが遺物が多く出土した。

遺物　2・5・7期以降の遺物が見られる。744は受口口縁甕、745・746はパレス壺、747・748はS字甕D1類、749・750は宇田型甕である。

SX5（第41図）

遺構　G区に位置し、SD15、SX4に切られる。プランの検出段階では、まずSD15の西側においてラインを確認し、その形状から住居跡であることが予想できた。しかしSD15の東側においては、埋土と地山の判別が困難でラインが検出できなかったため、結局は図示したような範囲のみの確認となった。

遺物　土師器は少量出土したのみで時期は不明である。

SX6（第41図）

遺構　G区に位置し、SD12・18、SX4に切られる。検出範囲が小さく、遺構の大半は調査区外である。ほぼ直線的なラインのみの確認となったため、平面形は不明である。また深さも12㎝と浅い。

遺物　土師器片が数点出土したのみである。

SX14（第24図）

遺構　D区に位置し、SB15を切る。本遺構は、焼土・炭化物の密集部分とその周囲にある硬化面のみをの確認したものである。焼土・炭化物の堆積は8㎝程度で、関連する遺構も確認できなかった。

遺物　本遺構からは土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗は出土。灰釉陶器・山茶碗については上層の可能性が高い。

SX15（第29図）

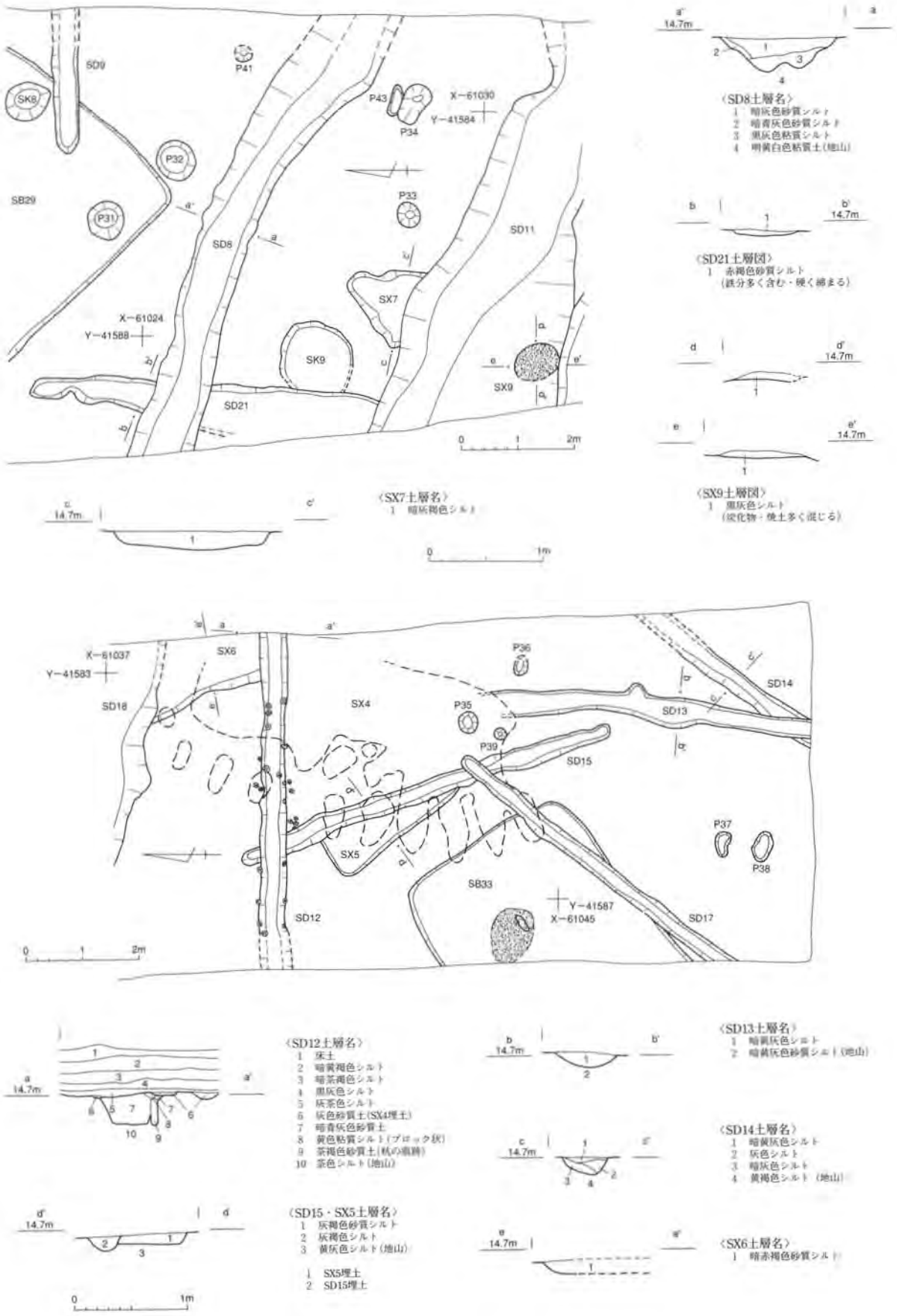
遺構　B区に位置する。SB17の南側で焼土のみを検出した遺構である。平面形は円形を呈し、直径は65㎝を測る。土層観察により焼土の堆積は3～4㎝程度であることが判明し、またその付近・下部において、貼床状・ピット状の堆積が確認されたことから、本遺構が住居内のものである可能性が考えられる。しかし検出範囲が狭いことから確証を得ることはできなかった。

遺物　本遺構からは土師器が1出土したのみで、時期は不明である。

SX16（第45図）

遺構　重機による東西方向のトレンチで確認された。SB2の基盤となる赤褐色砂質シルト層の下層にあり、遺構の底には焼土や炭化物が含まれる層がある。断面の状態から住居跡の可能性がある。

遺物　出土遺物は少なく、図化できるものはなかったが、叩きのある甕の体部数点あり、1期の遺構である可能性がある。

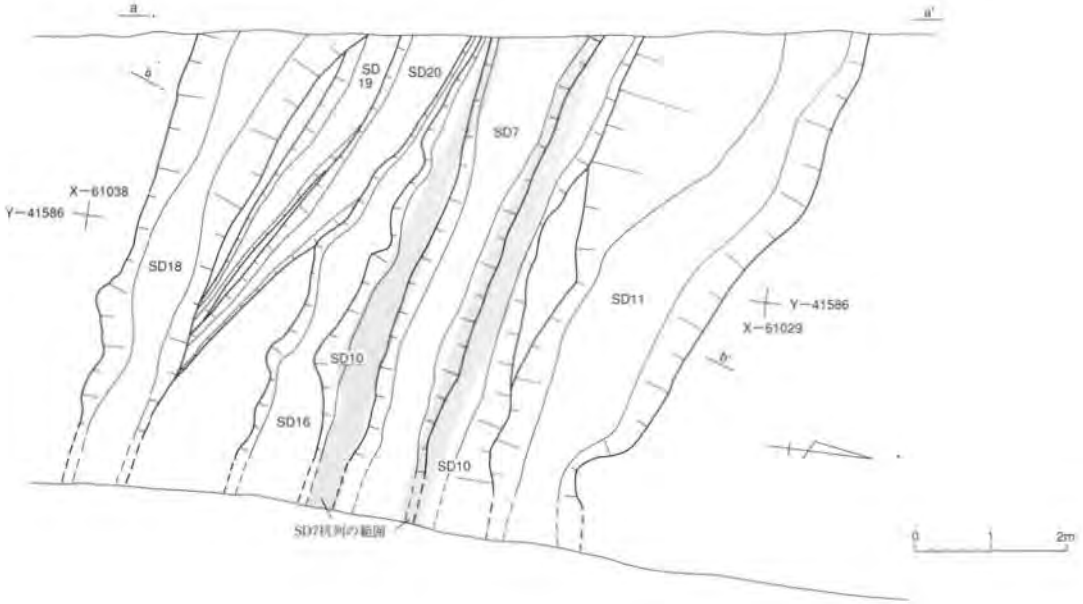


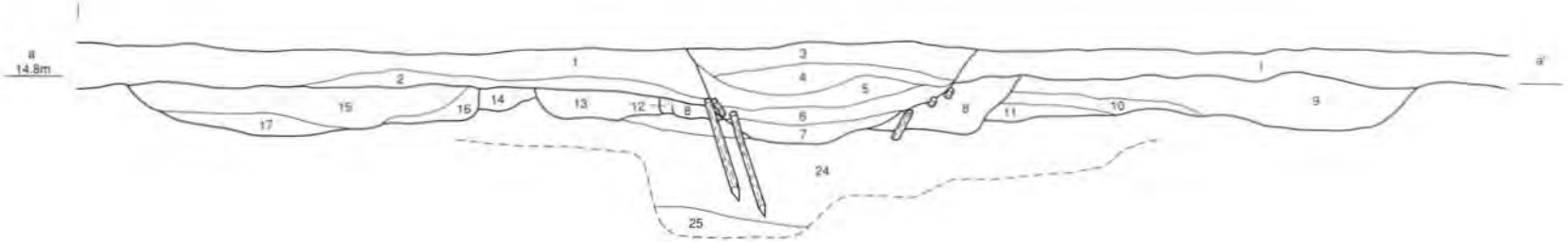
第41図 SD8・12・13・14・15・17・21・SX5・6・7・9遺構図

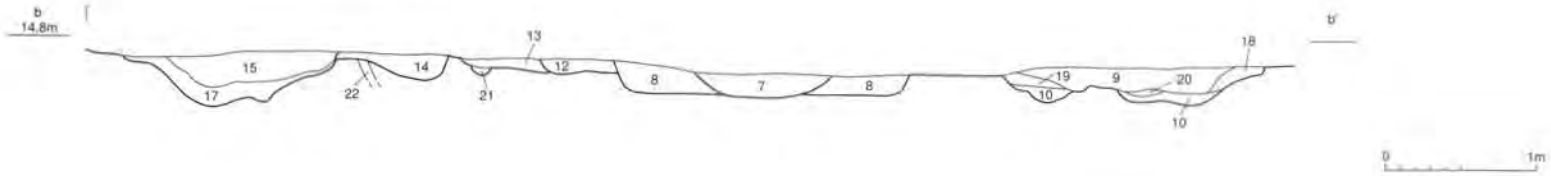
〈SD7・10・11・16・18・19・20土層名〉

1　暗黄褐色シルト(暗褐色砂質土混じる)
2　明黄灰色シルト
3　黄褐色シルト
4　暗黄灰色シルト
5　灰褐色シルト
6　黒灰色砂質シルト
7　暗灰色粘質土
8　暗灰色粘質土と黒灰色シルトの混合層
9　灰色砂質土
10　灰色砂質土と茶褐色砂質土の混合層
11　灰色シルト
12　黒灰褐色粘質シルト
13　灰褐色砂質シルト
14　暗灰色シルト
15　暗灰色砂質シルト
16　灰褐色砂質シルト
17　灰色砂質土
18　黒灰色砂質土
19　灰褐色砂質シルト(明黄色粘質ブロック混じる)
20　黒灰シルト
21　灰色シルト(黄色粘質土ブロック混じる)
22　灰色砂質土(杭の痕跡か?)
23　暗灰色砂質土(溝埋土か?)
24　茶褐色シルト(鉄分多く混じる・溝下部で粘質土に変質)
25　茶灰色砂質度土(地山)

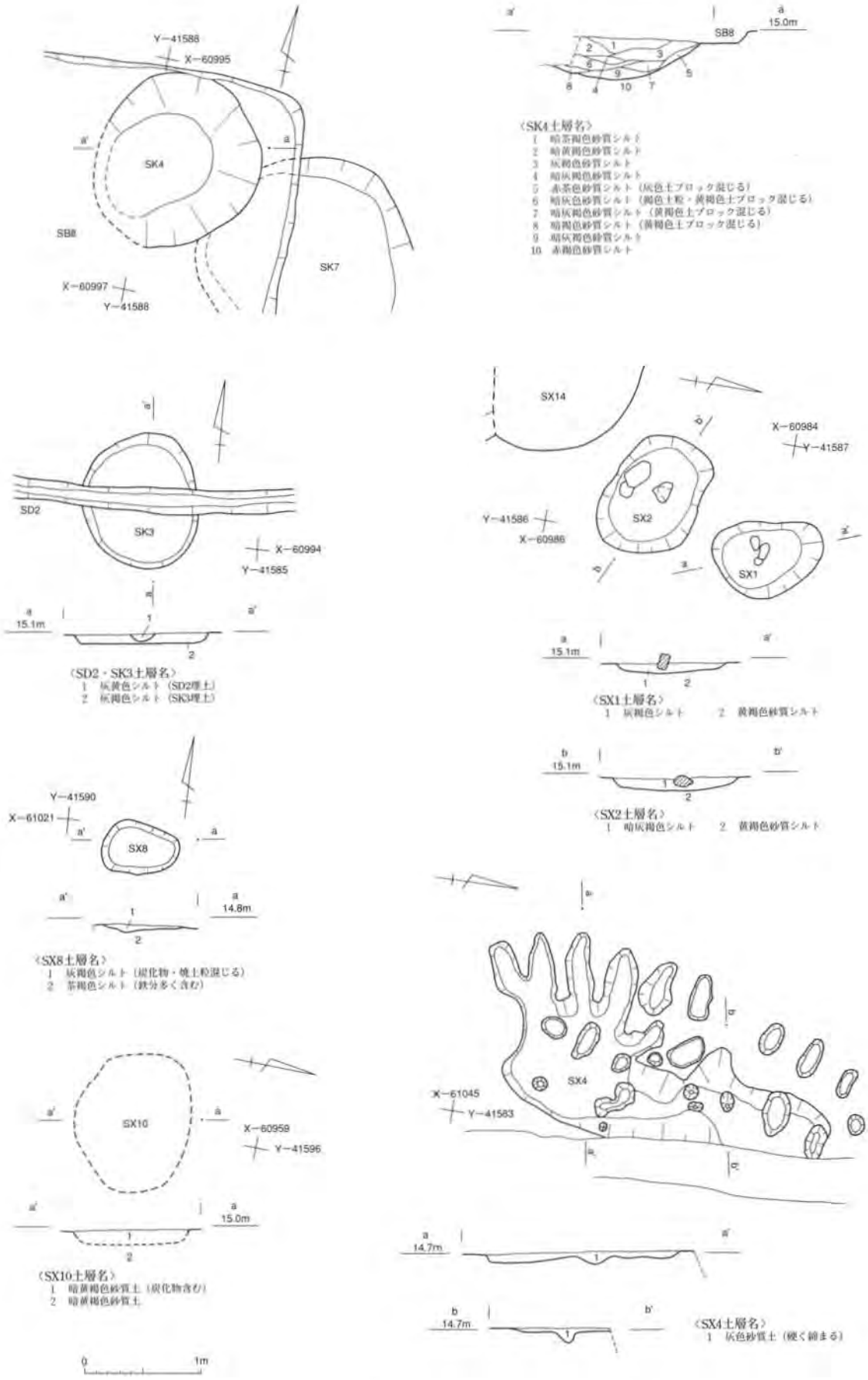
3～7　SD7埋土
8　SD10埋土
9～11・17～20　SD11埋土
12　SD16埋土
13・21　SD20埋土
14・23　SD19埋土
15～16　SD18埋土



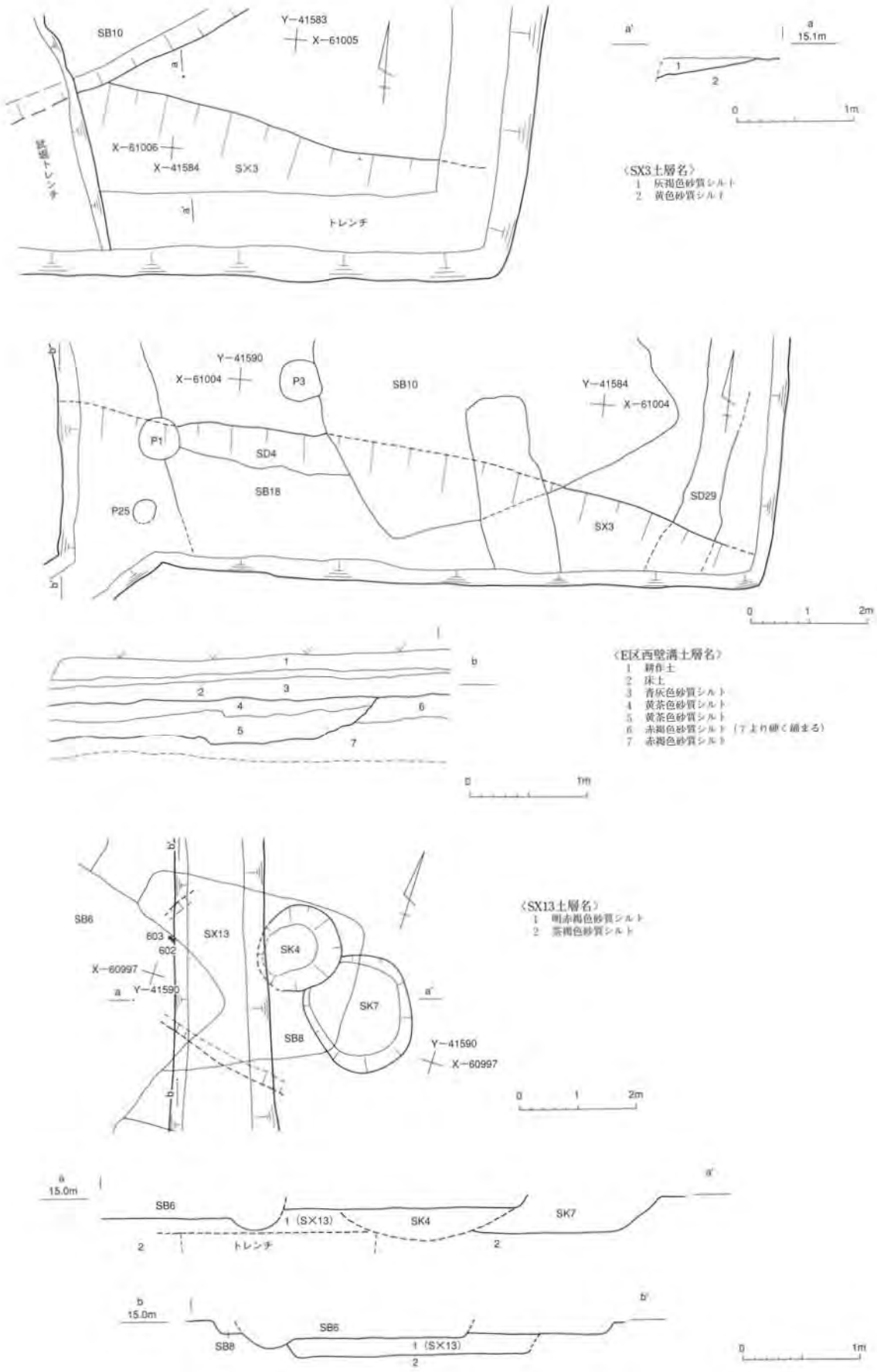




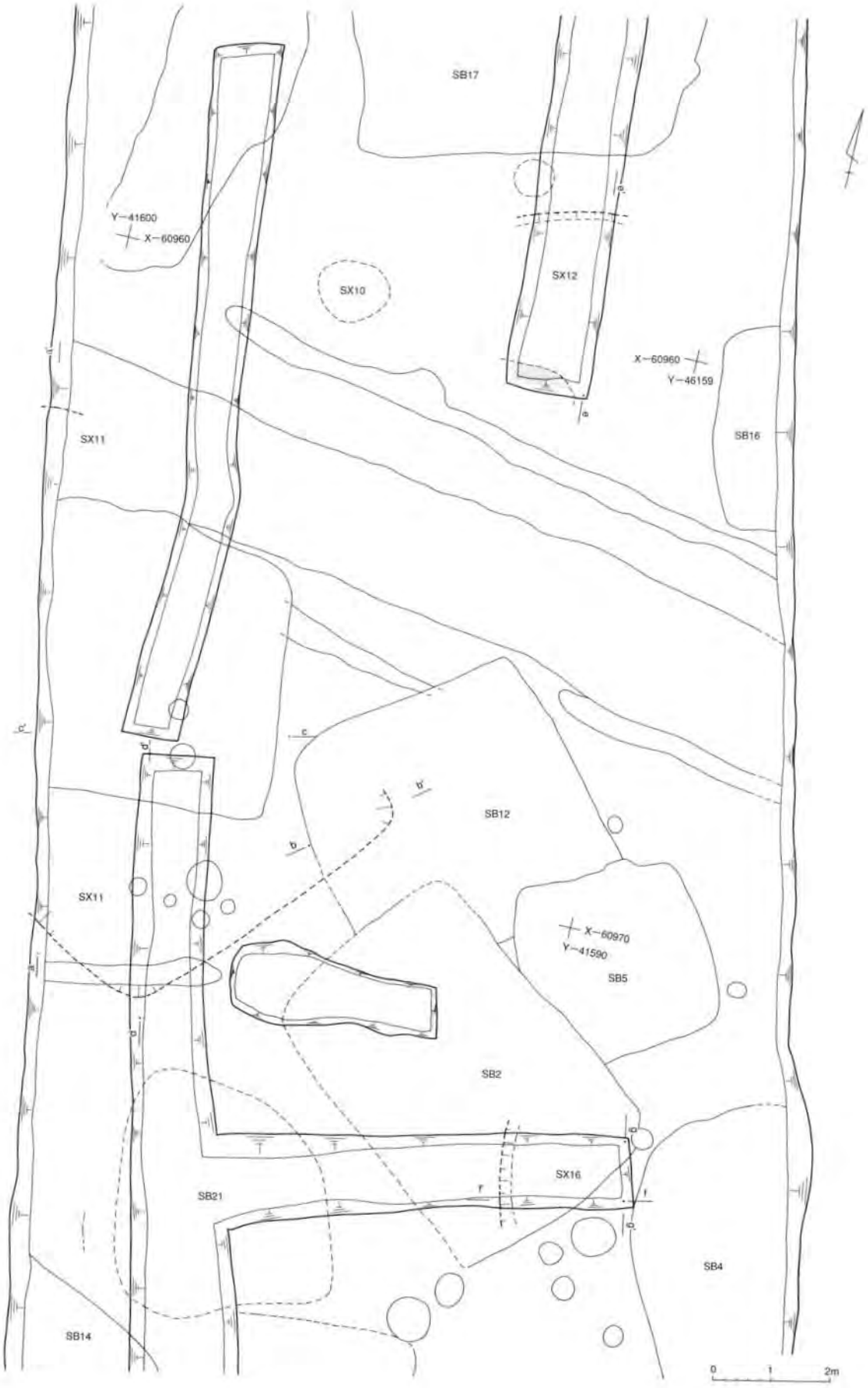
第42図　SD7・10・11・16・18・19・20遺構図



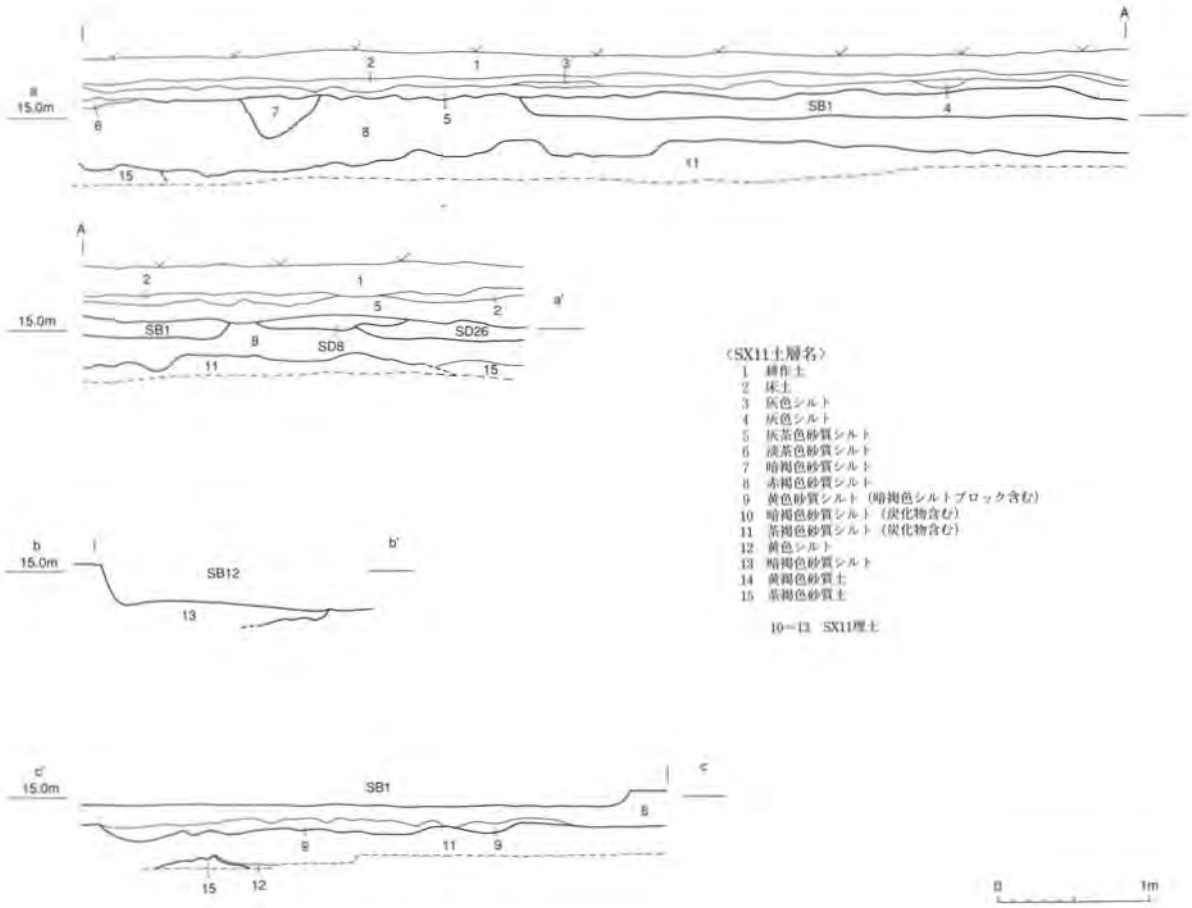
第43図　SK3・4・SX1・2・4・8・10遺構図



第44図 SX3･13遺構図

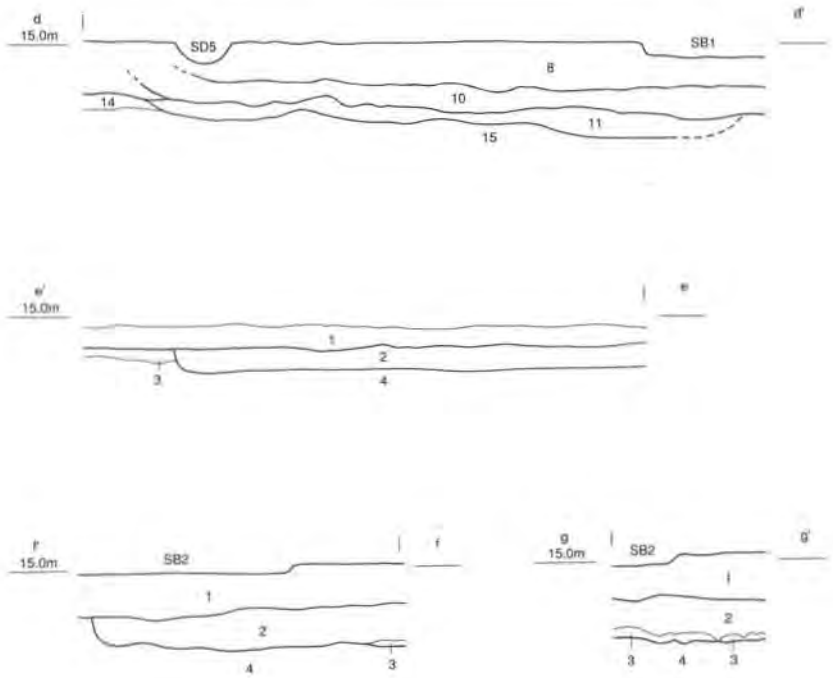


第45図 SX11・12・16遺構図（1）



〈SX11土層名〉
1 耕作土
2 床土
3 灰色シルト
4 灰色シルト
5 灰茶色砂質シルト
6 淡茶色砂質シルト
7 暗褐色砂質シルト
8 赤褐色砂質シルト
9 黄色砂質シルト（暗褐色シルトブロック含む）
10 暗褐色砂質シルト（炭化物含む）
11 茶褐色砂質シルト（炭化物含む）
12 黄色シルト
13 暗褐色砂質シルト
14 黄褐色砂質土
15 茶褐色砂質土

10～13 SX11埋土



〈SX12土層名〉
1 赤褐色砂質シルト
2 赤褐色砂質シルト（炭化物含む）
3 黄茶色砂質シルト
4 暗褐色砂質土

2 SX13埋土

〈SX16土層名〉
1 黄褐色砂質シルト（焼く締まる）
2 茶褐色砂質シルト
3 暗褐色砂質シルト
（炭化物・焼土ブロック含む）
4 茶褐色砂質土

2・3 SX16埋土

第46図 SX11･12･16遺構図（2）

（2）Ⅰ層出土遺物

本遺跡は遺構検出が難しく、多数の遺物を遺構検出時にⅠ層として取り上げてしまい、今回の出土遺物数の1/3を占める。

A区Ⅰ層　（第77図753～768）

753～760は弥生時代中期後半の土器である。753・754は叩き甕、755～760は波状文や横線文を施す壺である。764・765は有段高杯、766は宇田型甕、767は伊勢型甕である。

B区Ⅰ層　（第77図769～第78図800・第81図915）

769～783は弥生時代中期後半の土器で、769・771・772・773は叩き甕、774・775は高杯の口縁、777～781は壺、776は脚部、782は壺の脚である。

785～787は有段高杯で、758・787は杯端部に多条沈線がめぐる。本遺跡から出土した中では多条沈線幅は広い方である。795は須恵器の杯身、796～798は杯身、799は甑、800は壺の口縁部である。

C区Ⅰ層　（第78図801～838・第81図918）

一番多く遺物が出土。特に土師器類。801～814は弥生時代中期後半の土器で807は伊勢湾西岸域で見られる。808・815は瓜郷式の土器の口縁部と頸部である。831～833はパレス壺で赤彩を施す。834は柳ヶ坪型壺である。

D区Ⅰ層　（第79図839～863・第81図919）

844は広口壺、861～863は灰釉陶器の椀である。860は須恵器の杯蓋で、歪みが著しい。

E区Ⅰ層　（第79図864～882・第81図922）

866は屈折外反高杯の脚部、

E区では須恵器が目立つ。何らかの遺構があった可能性が考えられる。871～875高杯、877は広口壺、878は甕の口縁部879～881は灰釉陶器、882はかわらけである。

F区Ⅰ層　（第79図883～第80図898）

883は弥生時代中期後半の叩きを施す壺の体部である。893は平瓶の口縁部、891波状文を施す無蓋高杯、892・894は蓋で、892の天井部にはヘラ記号がある。889は鍋（伊勢型）である。

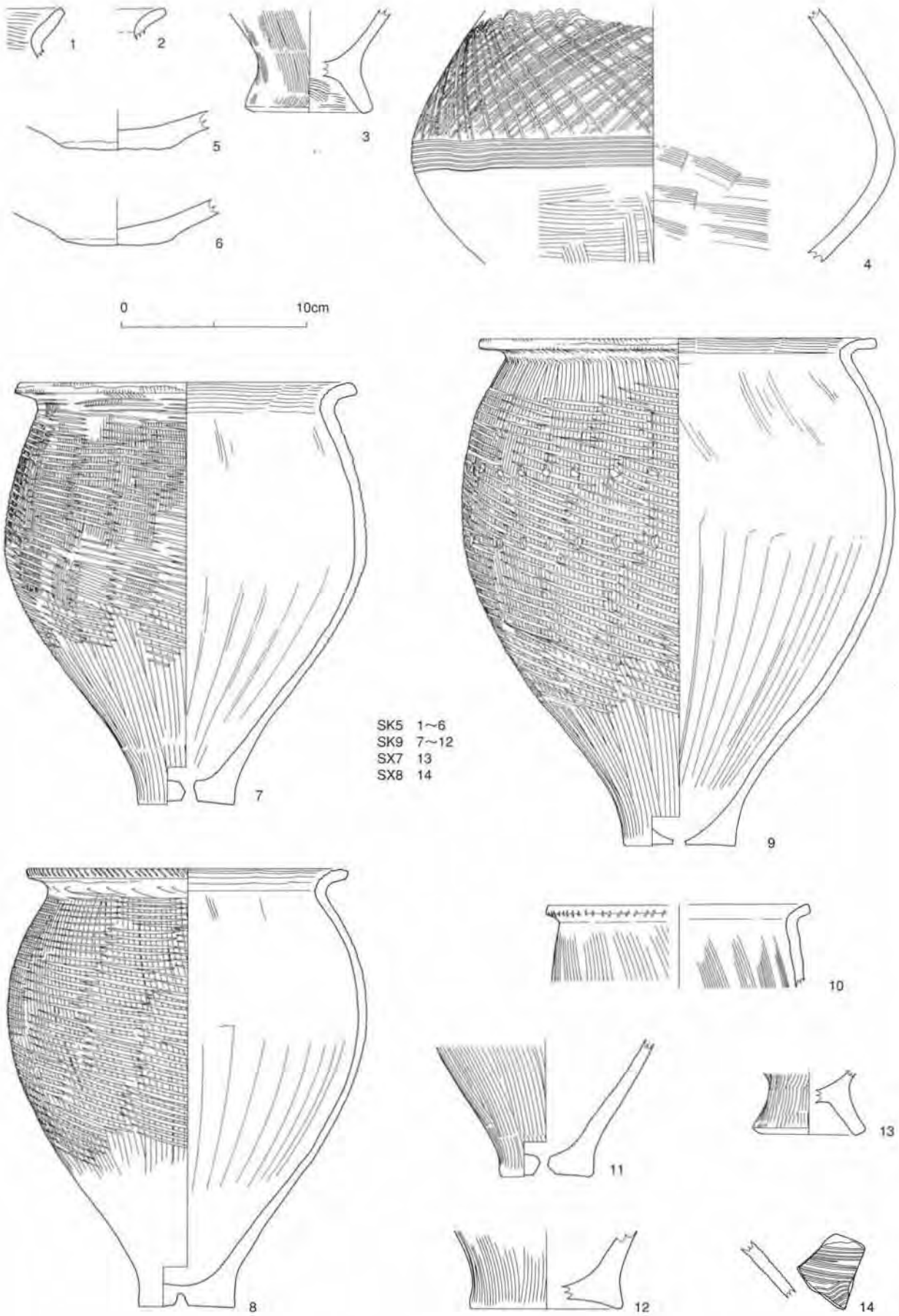
G区Ⅰ層　（第80図899～第81図914）

901は小形壺、902～904は屈折外反高杯、905は器台である。ミガキ調整が顕著で、いずれもSB33付近から出土したものである。908は無蓋高杯で波状文を施す。

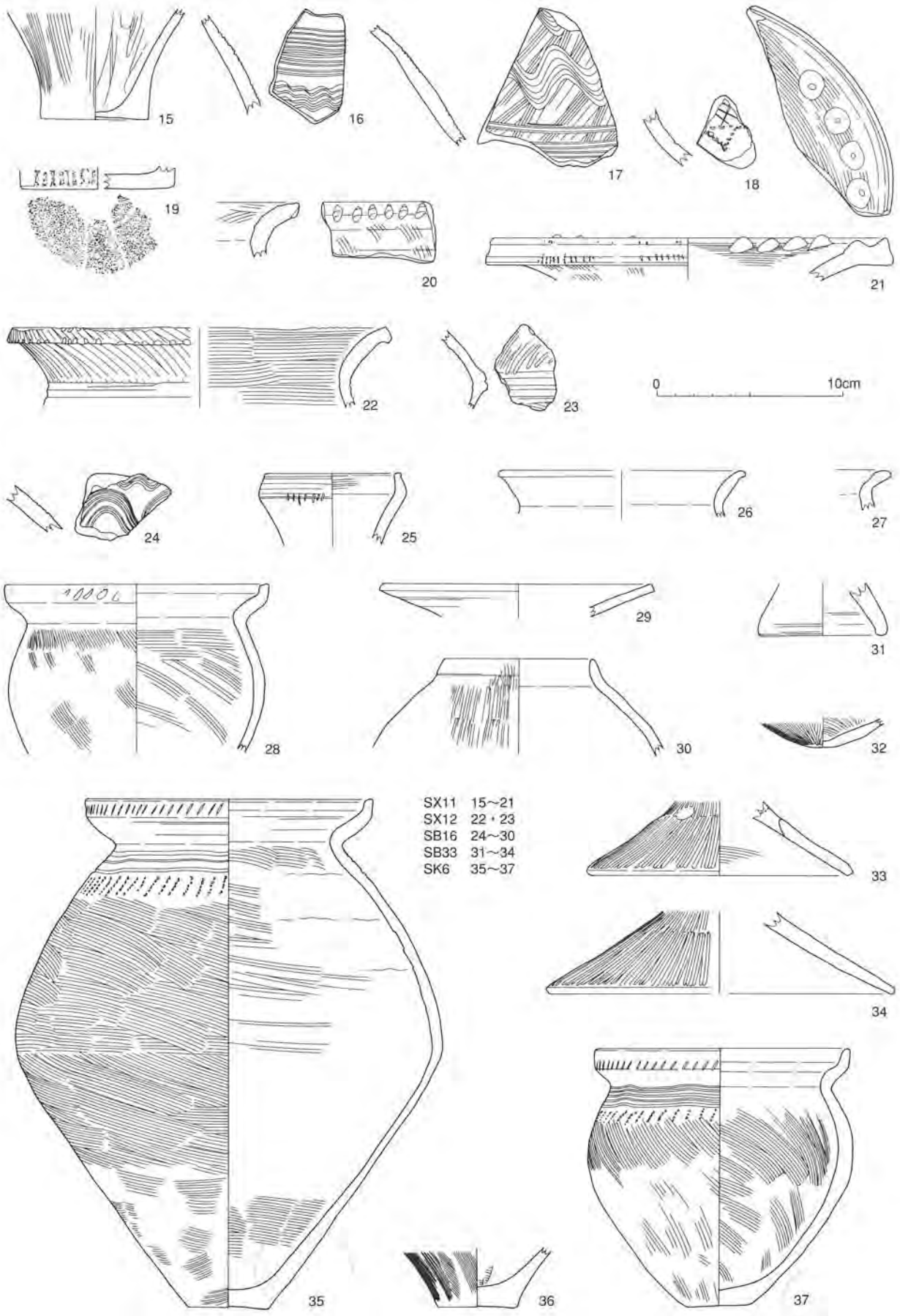
〔注〕

（1）鈴木元氏ご教示いただいた。

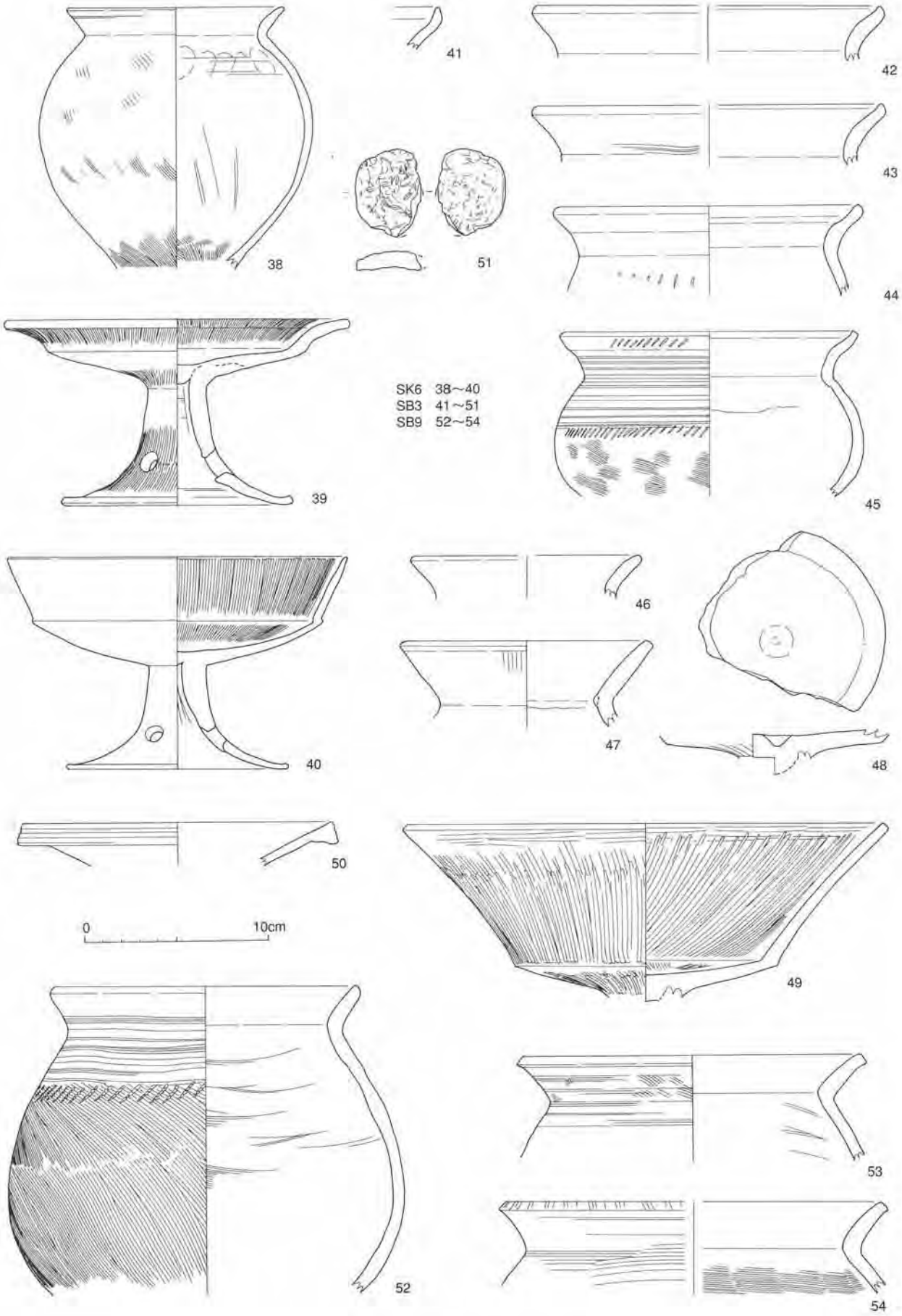
（2）内堀信雄氏にご教示いただいた。



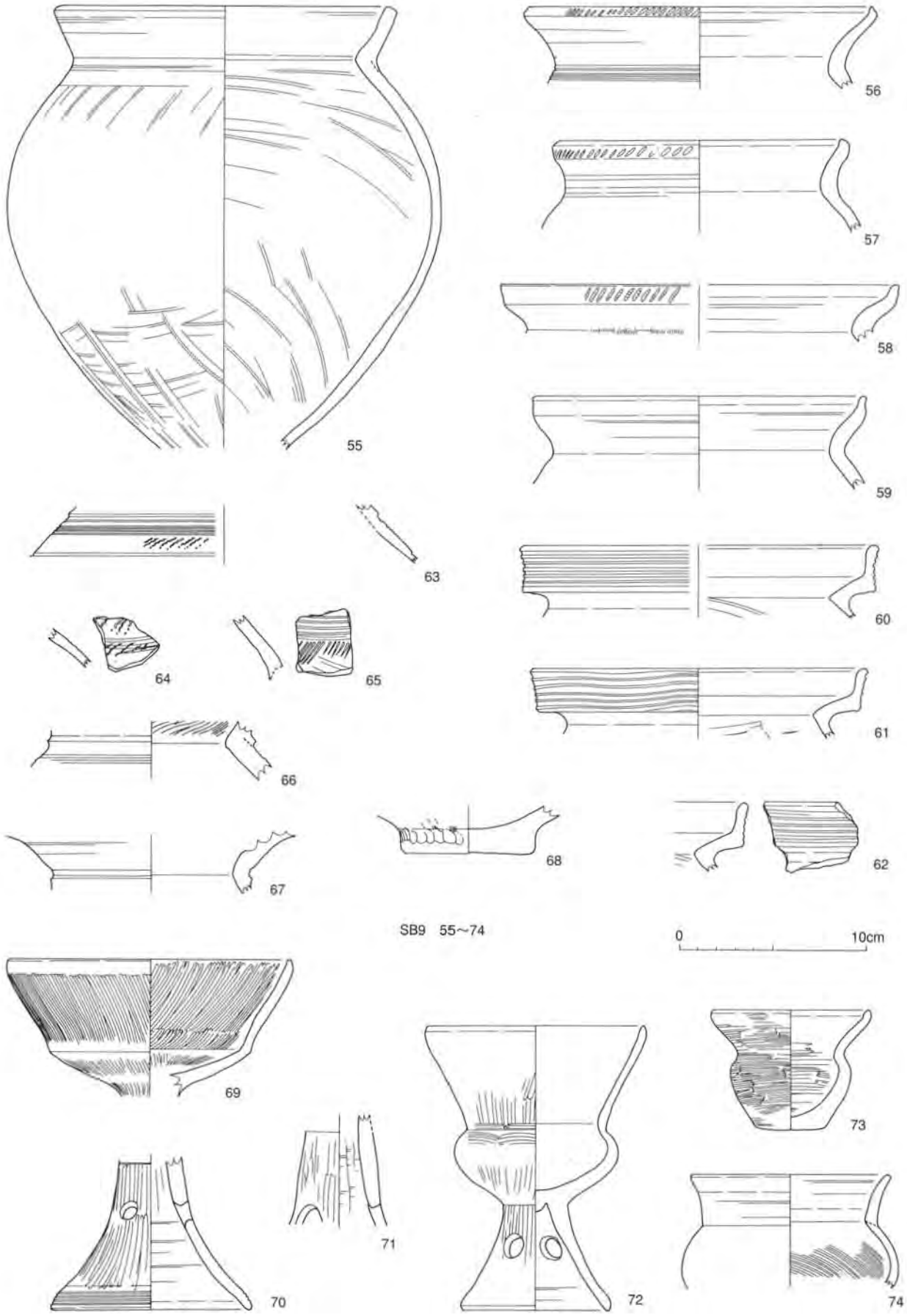
第47図　遺物実測図(1)


15
16
17
18
19
20
21
22
23
0
10cm
24
25
26
27
28
29
30
31
32
SX11 15～21
SX12 22・23
SB16 24～30
SB33 31～34
SK6 35～37
33
34
35
36
37

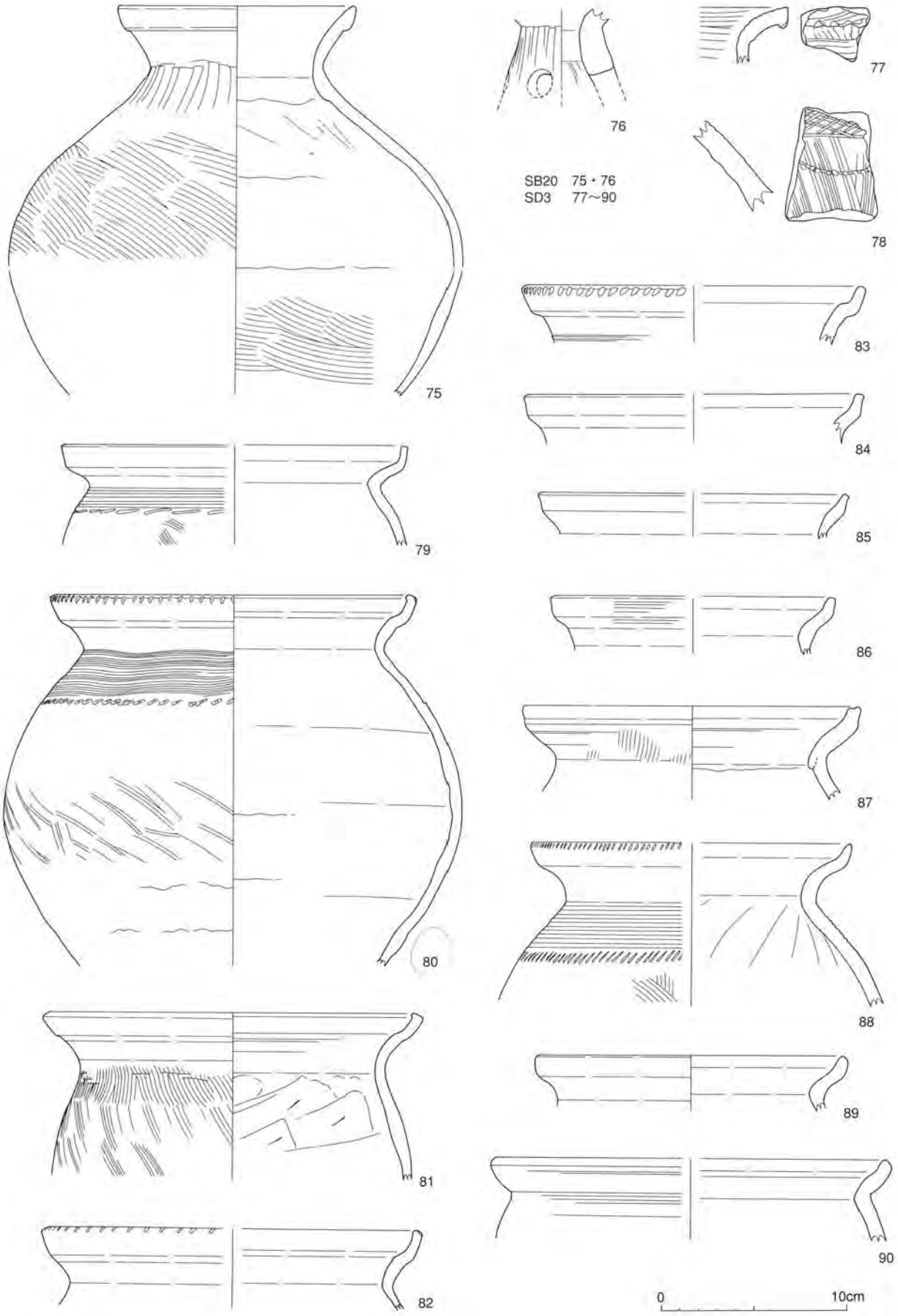
第48図　遺物実測図(2)


38
41
42
43
44
51
SK6 38～40
SB3 41～51
SB9 52～54
39
45
40
46
47
48
50
0
10cm
49
52
53
54

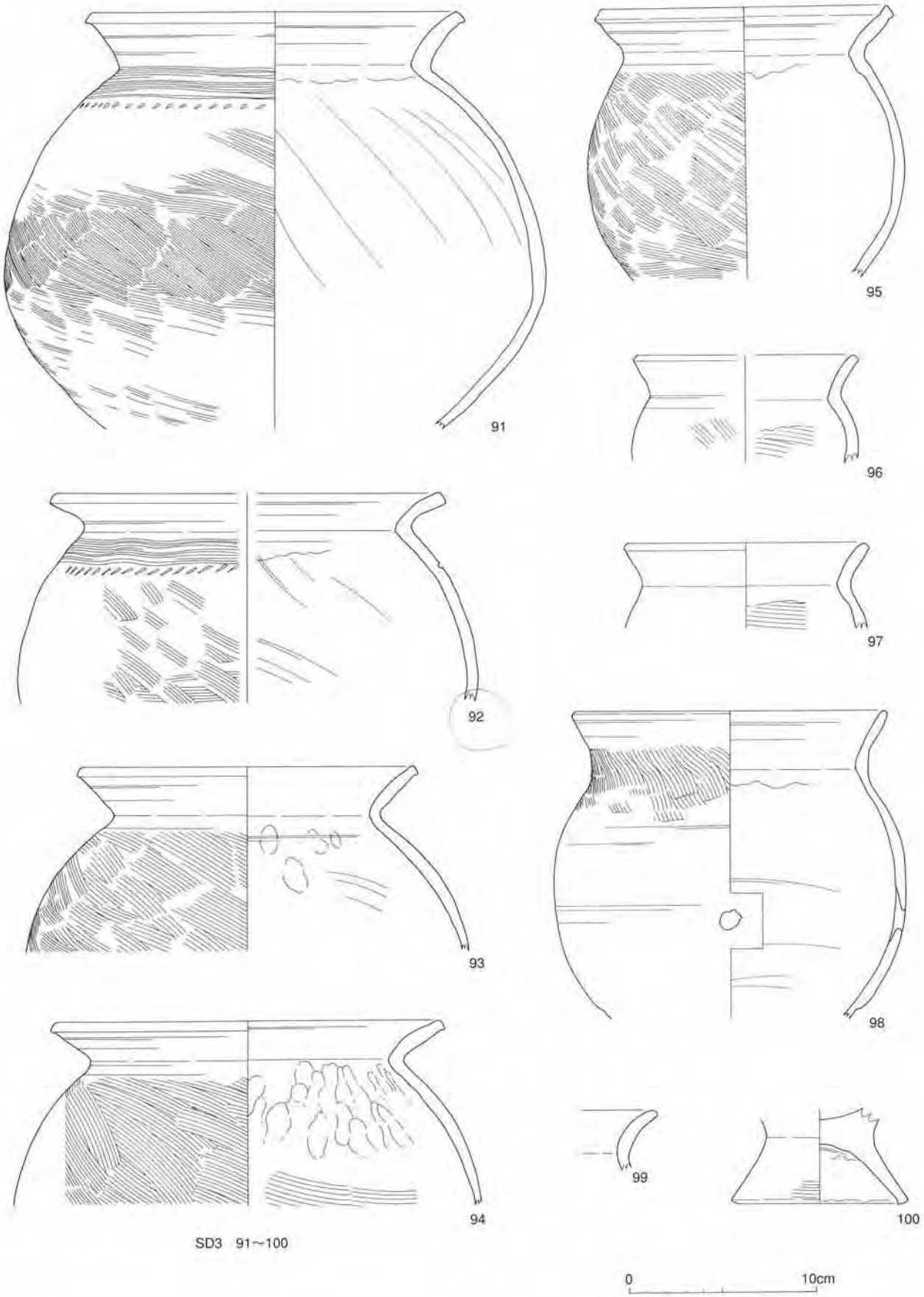
第49図　遺物実測図(3)


55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
SB9 55～74
0
10cm
69
70
71
72
73
74

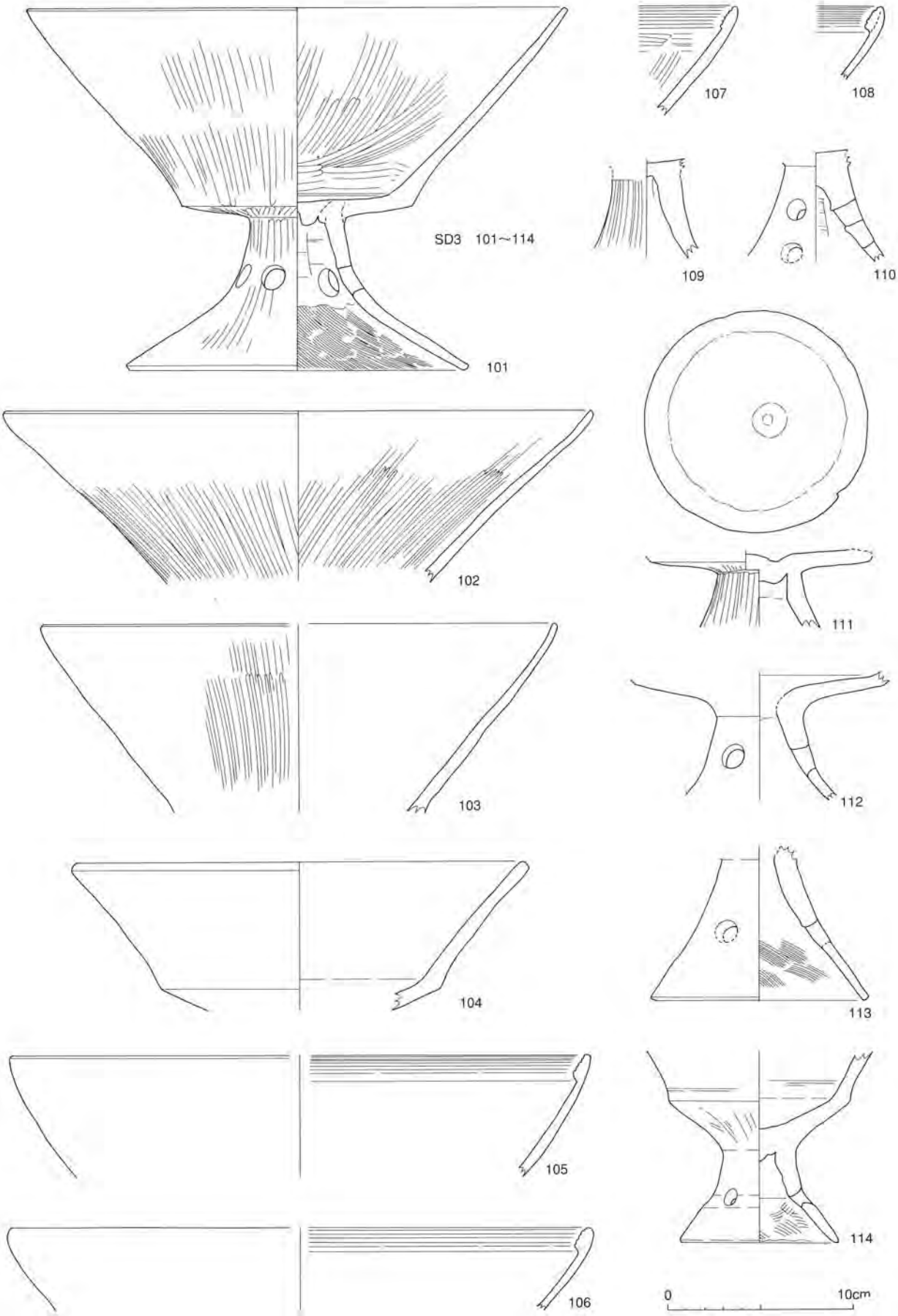
第50図　遺物実測図(4)


75
76
77
78
SB20 75・76
SD3 77～90
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
0
10cm

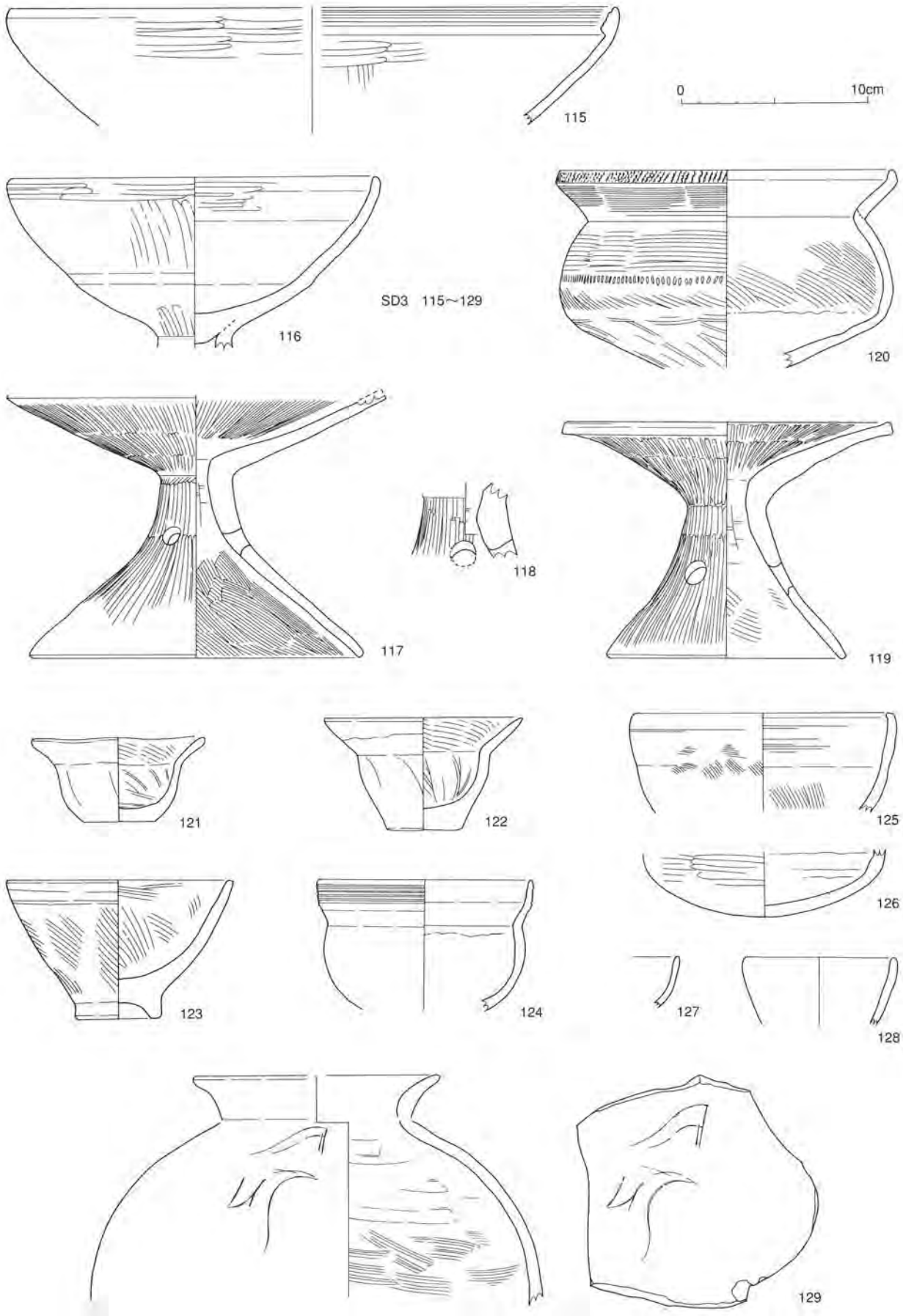
第51図　遺物実測図(5)



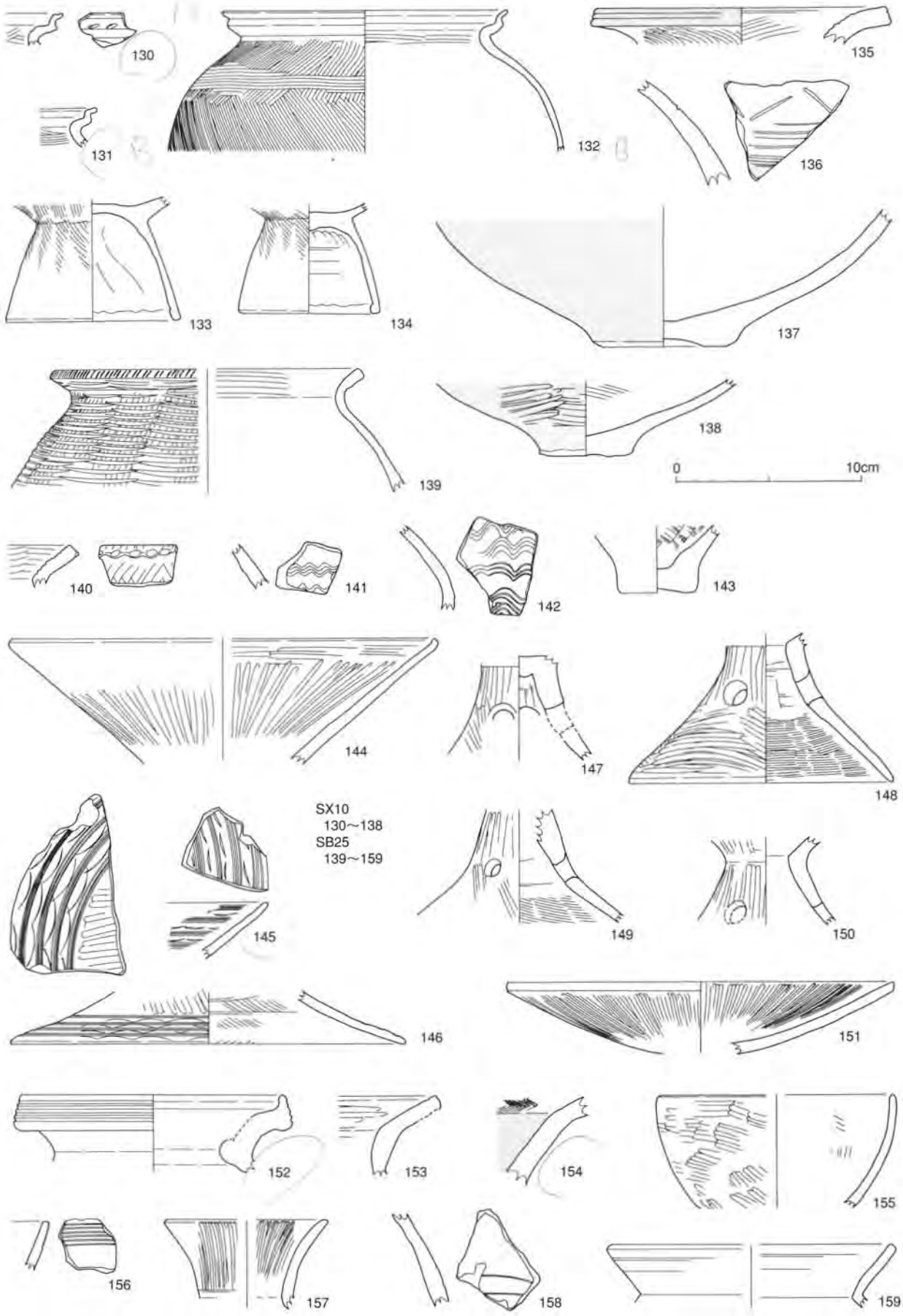
第52図　遺物実測図(6)


SD3 101～114
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
0
10cm

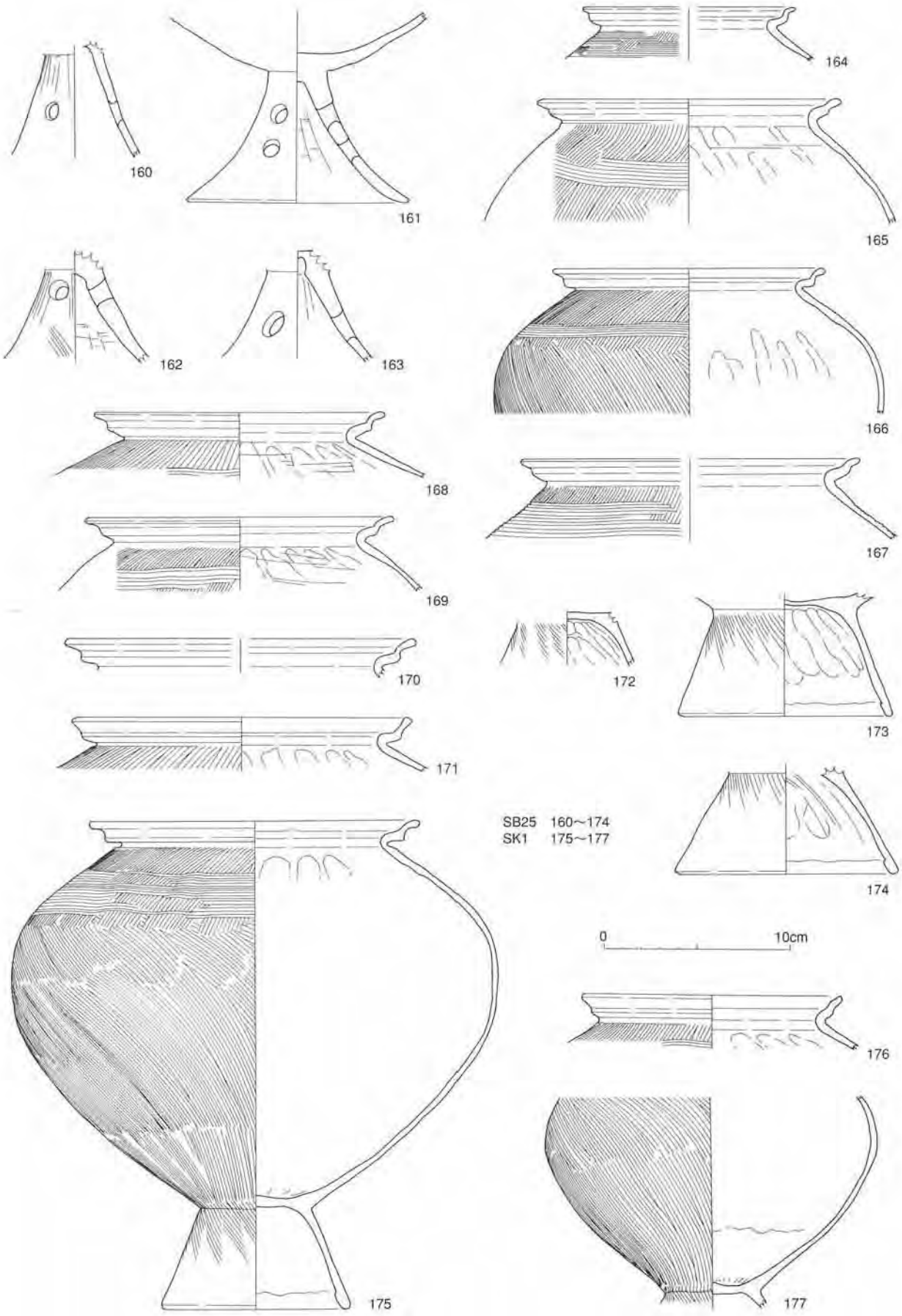
第53図　遺物実測図(7)


0
10cm
115
116
SD3 115～129
120
117
118
119
121
122
125
123
124
126
127
128
129

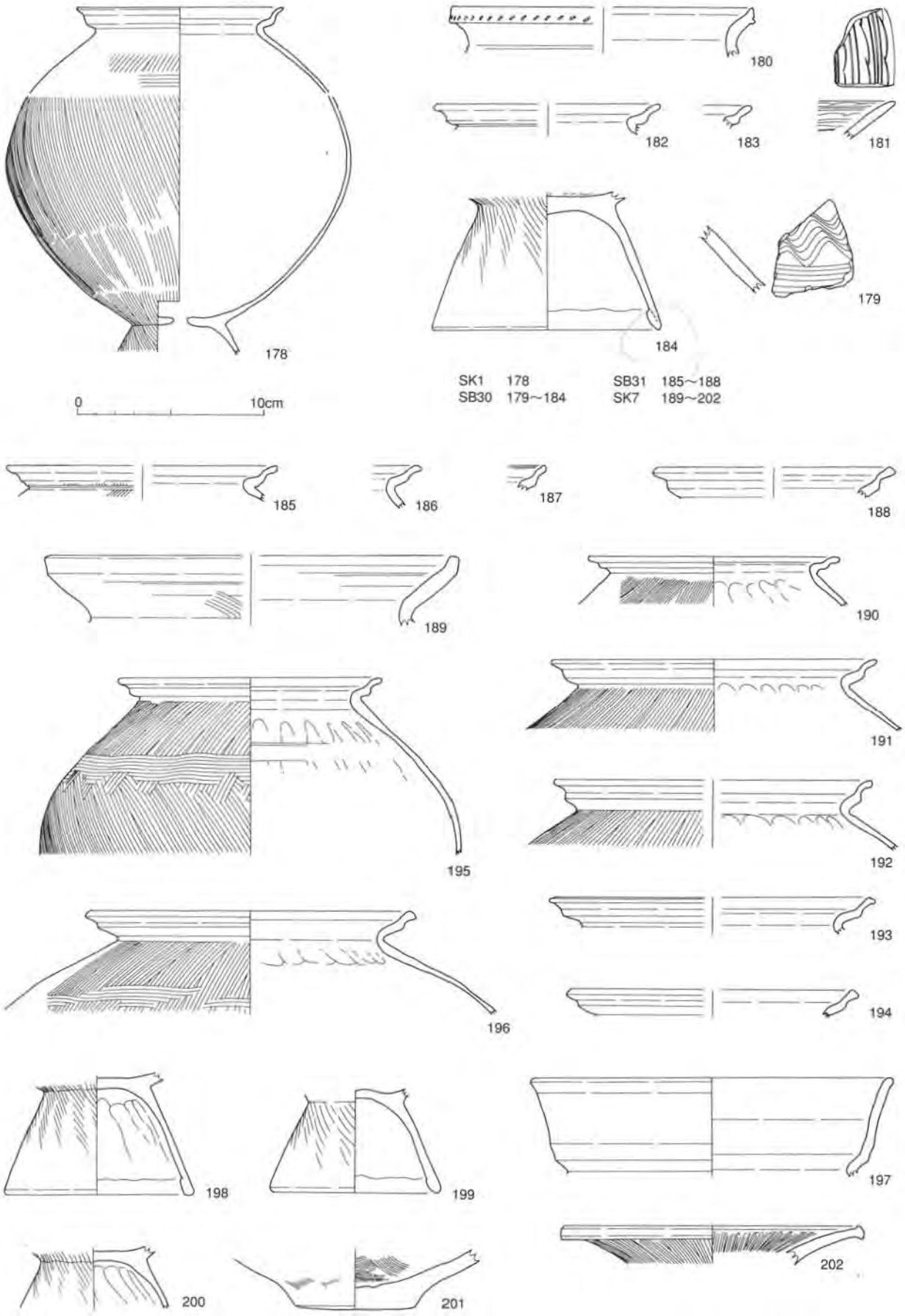
第54図　遺物実測図(8)


130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
0
10cm
140
141
142
143
144
147
148
SX10
130～138
SB25
139～159
145
149
150
146
151
152
153
154
155
156
157
158
159

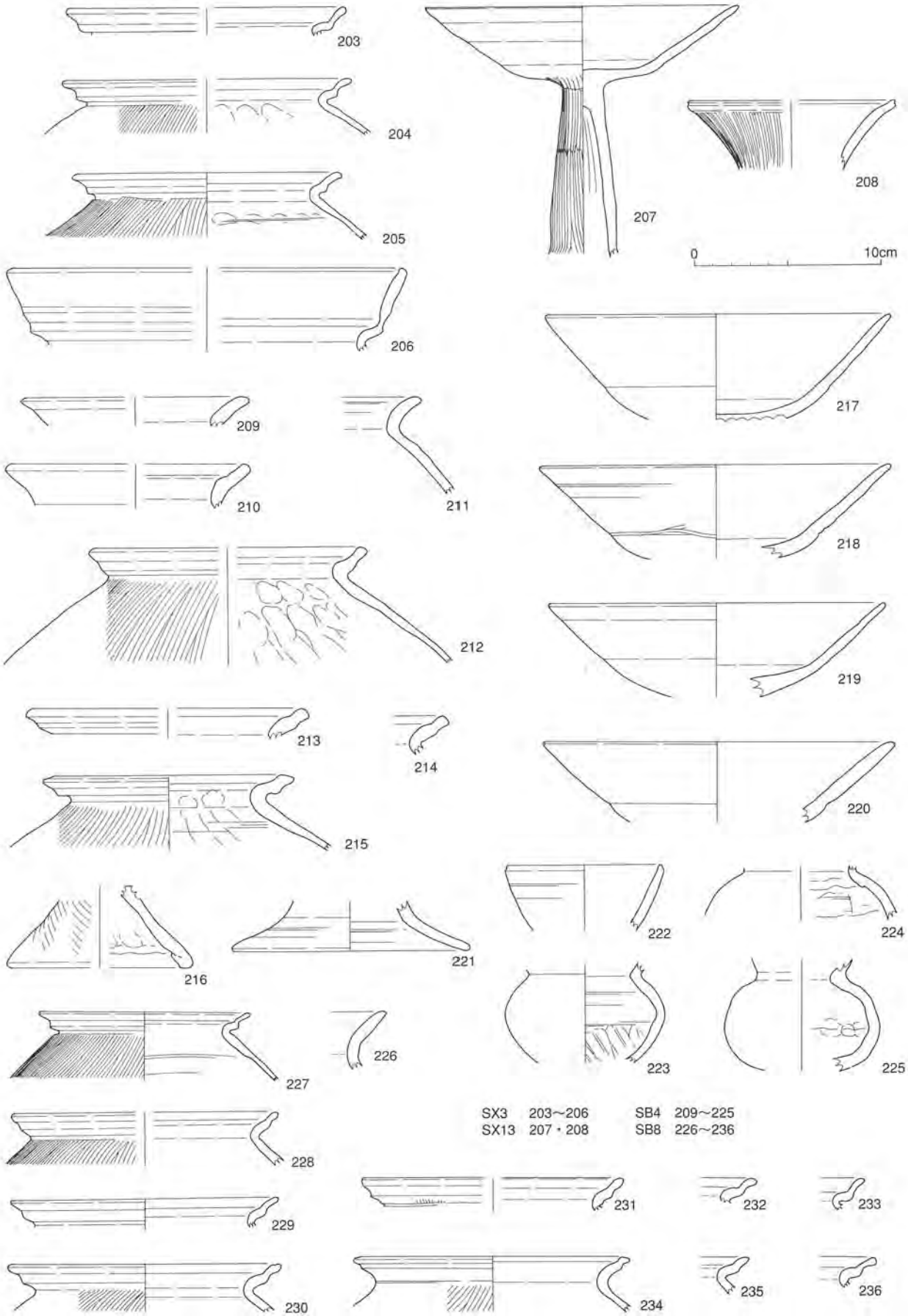
第55図　遺物実測図(9)



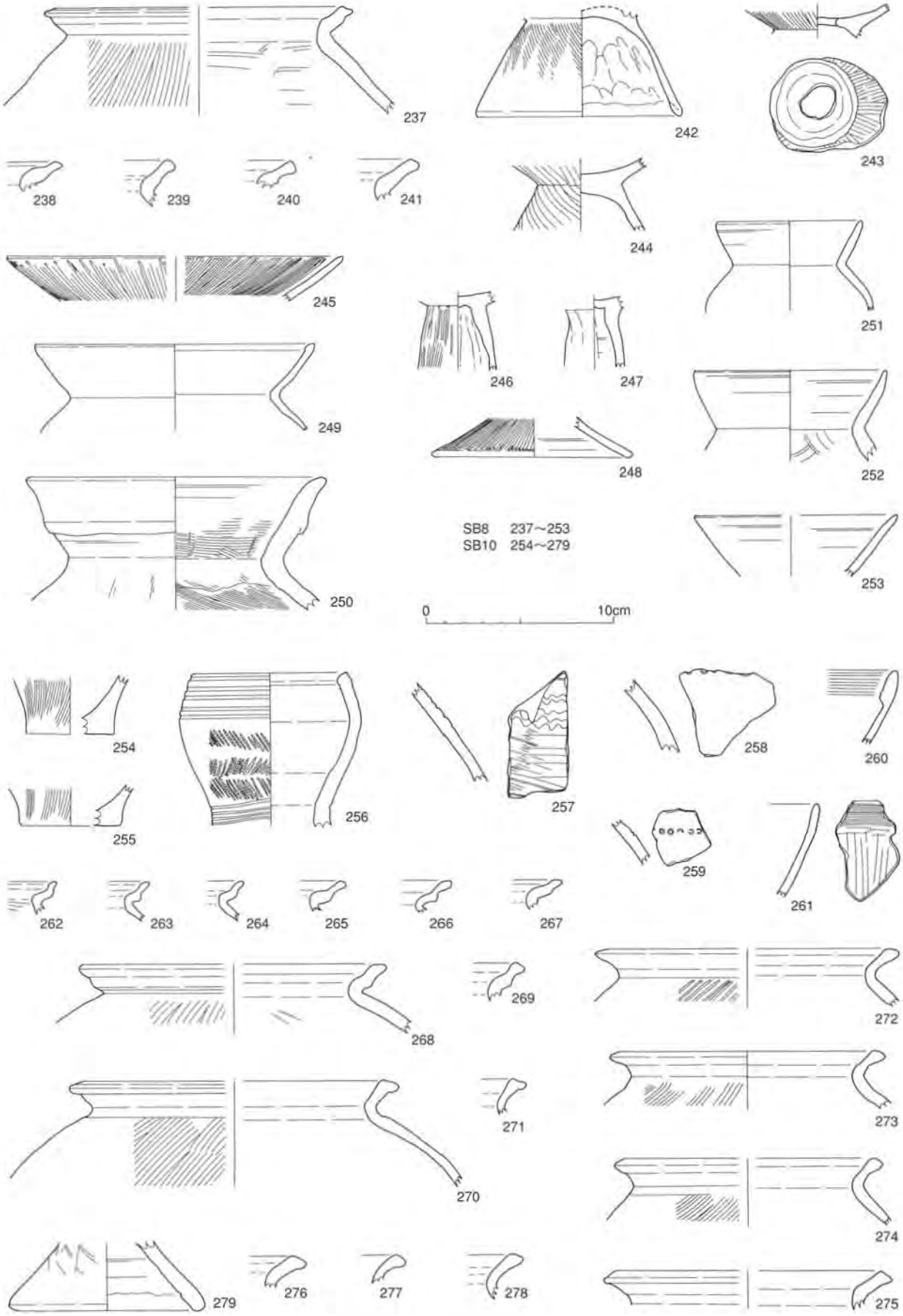
第56図　遺物実測図(10)



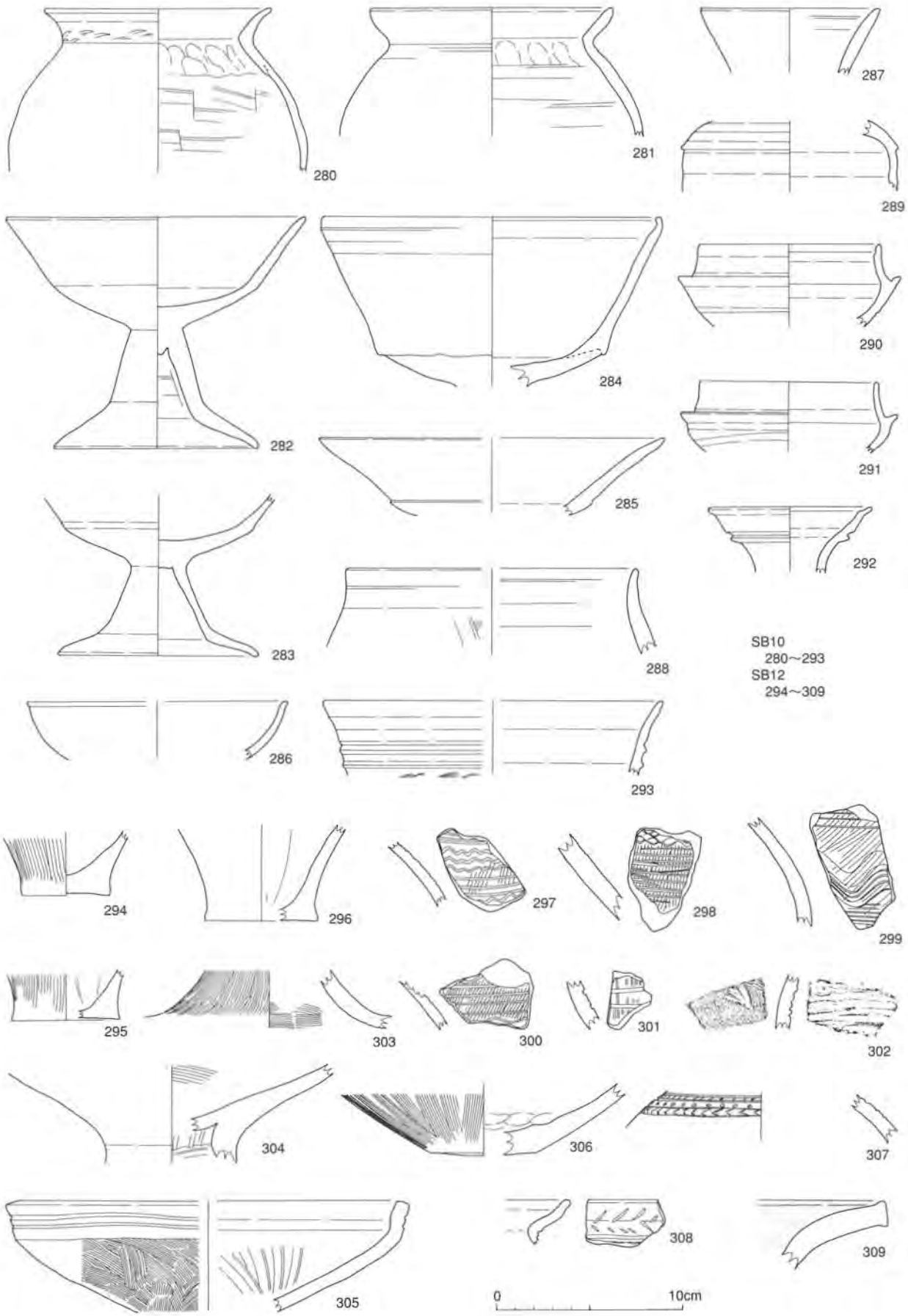
第57図　遺物実測図(11)



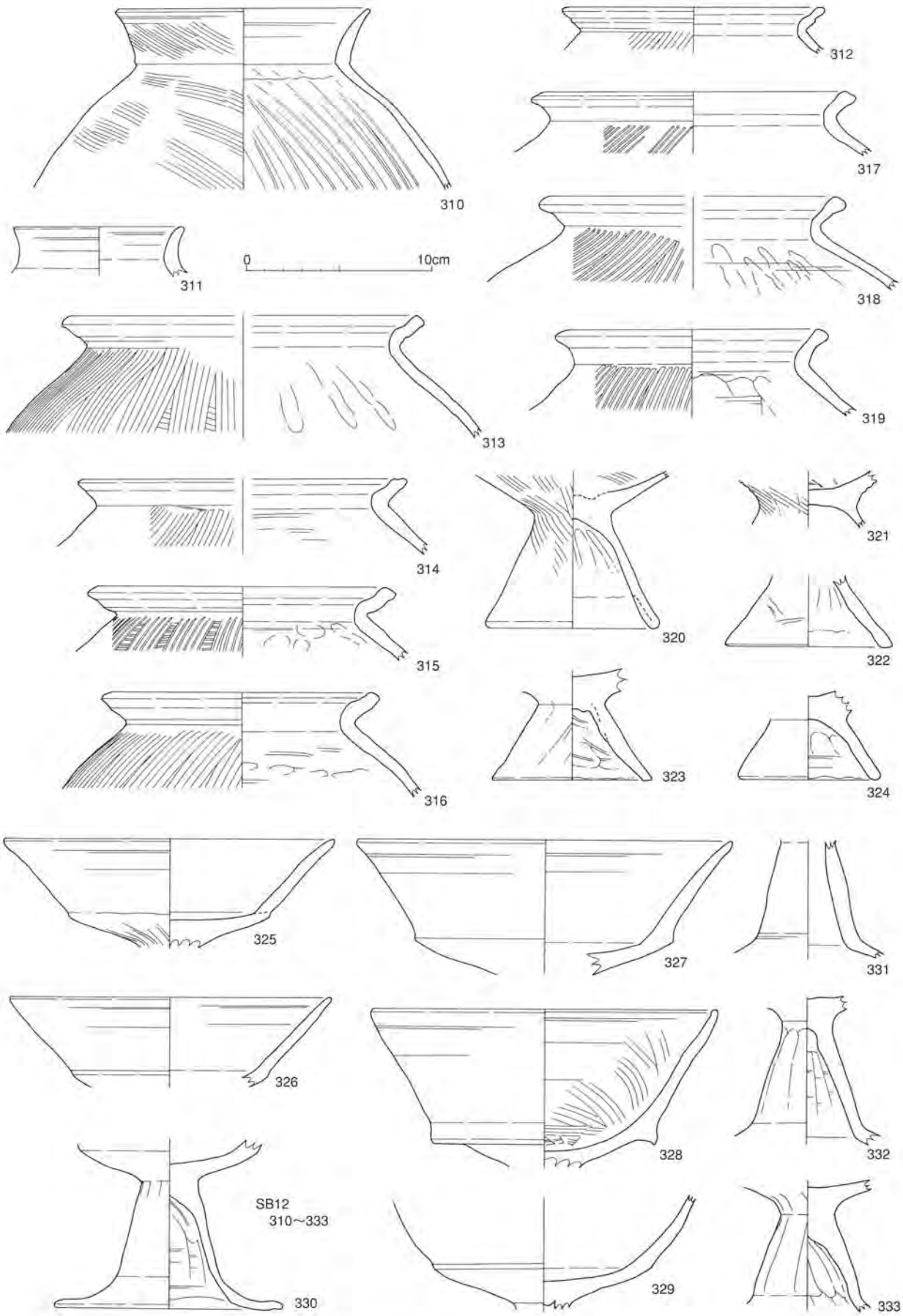
第58図　遺物実測図(12)



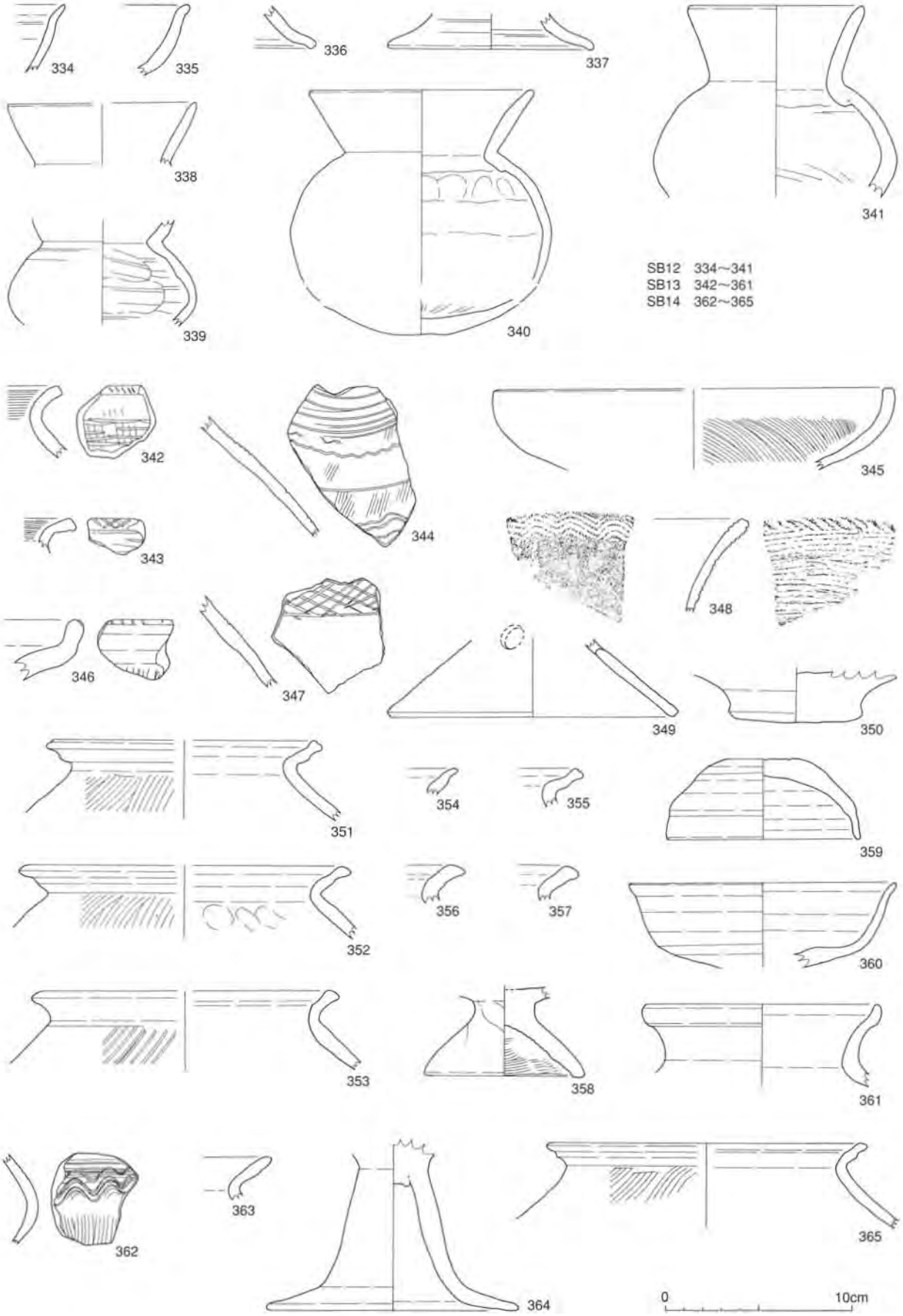
第59図　遺物実測図(13)



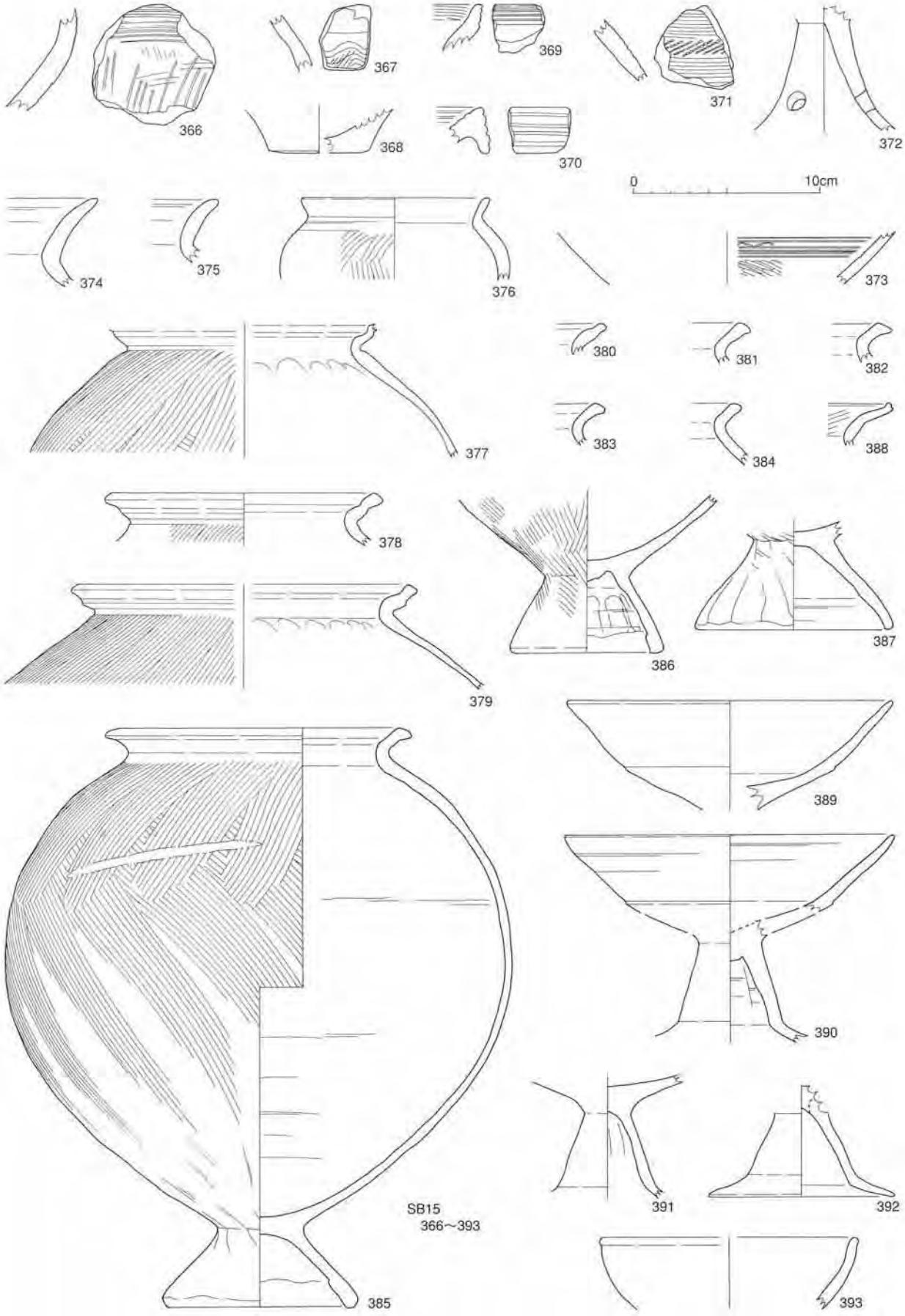
第60図　遺物実測図(14)



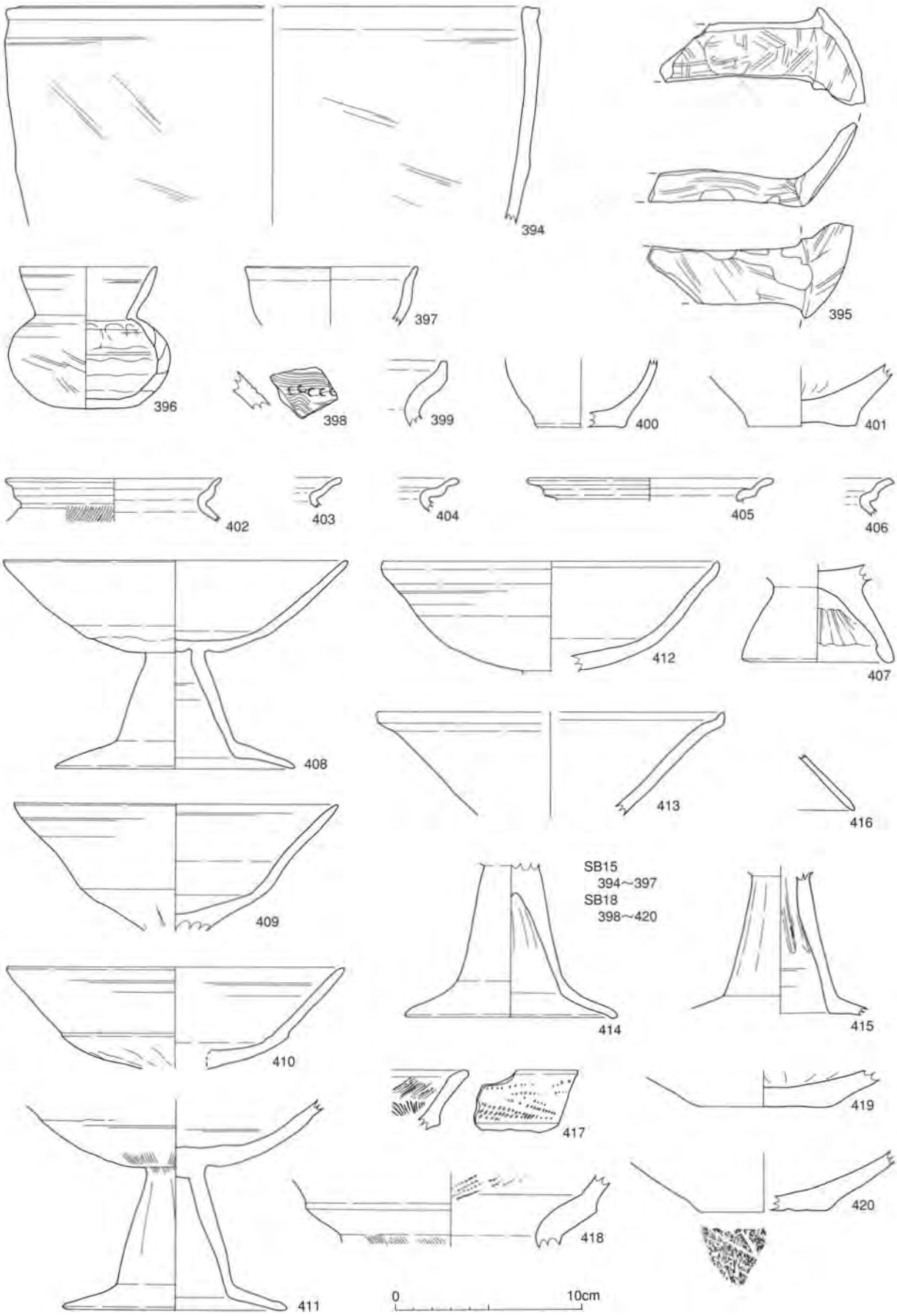
第61図　遺物実測図(15)



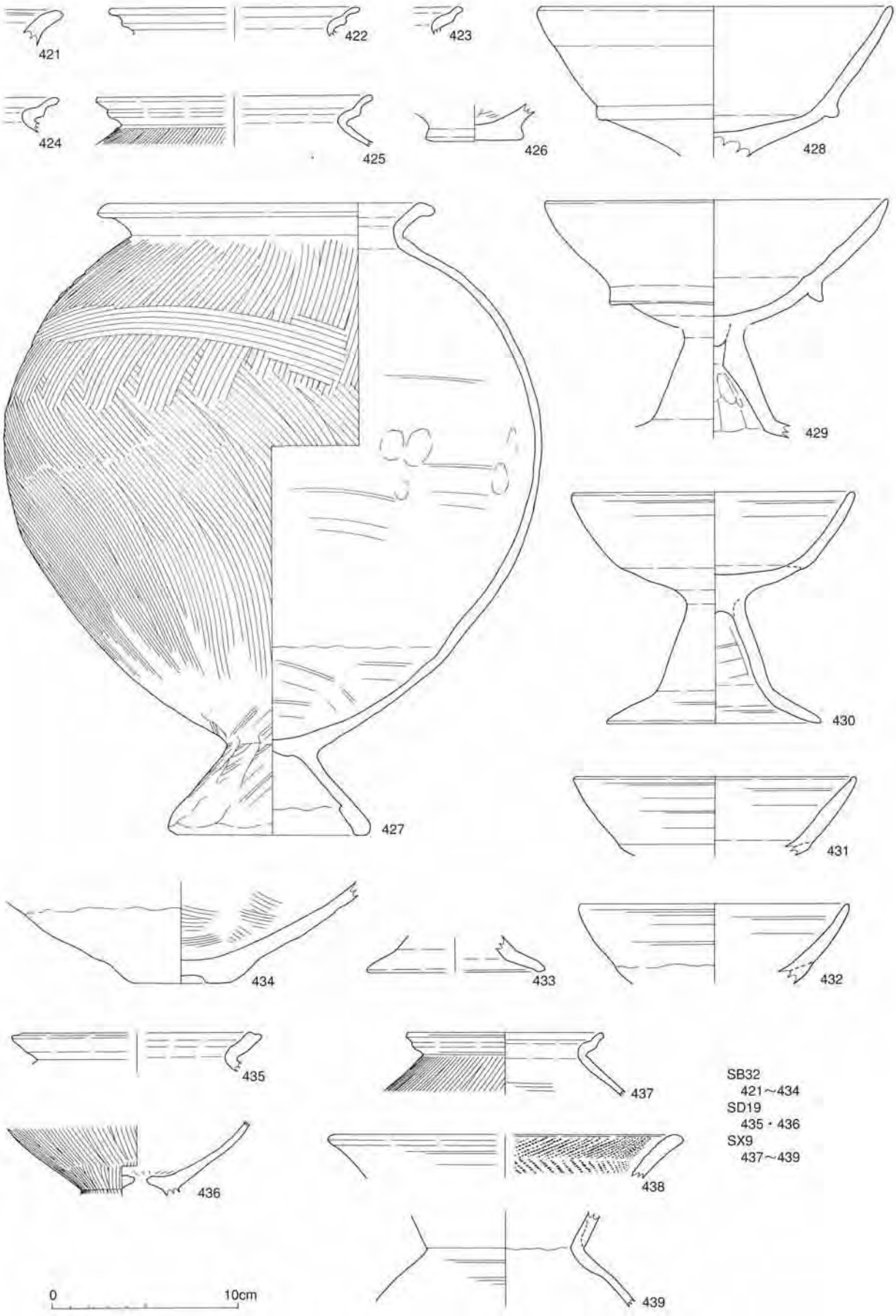
第62図　遺物実測図(16)



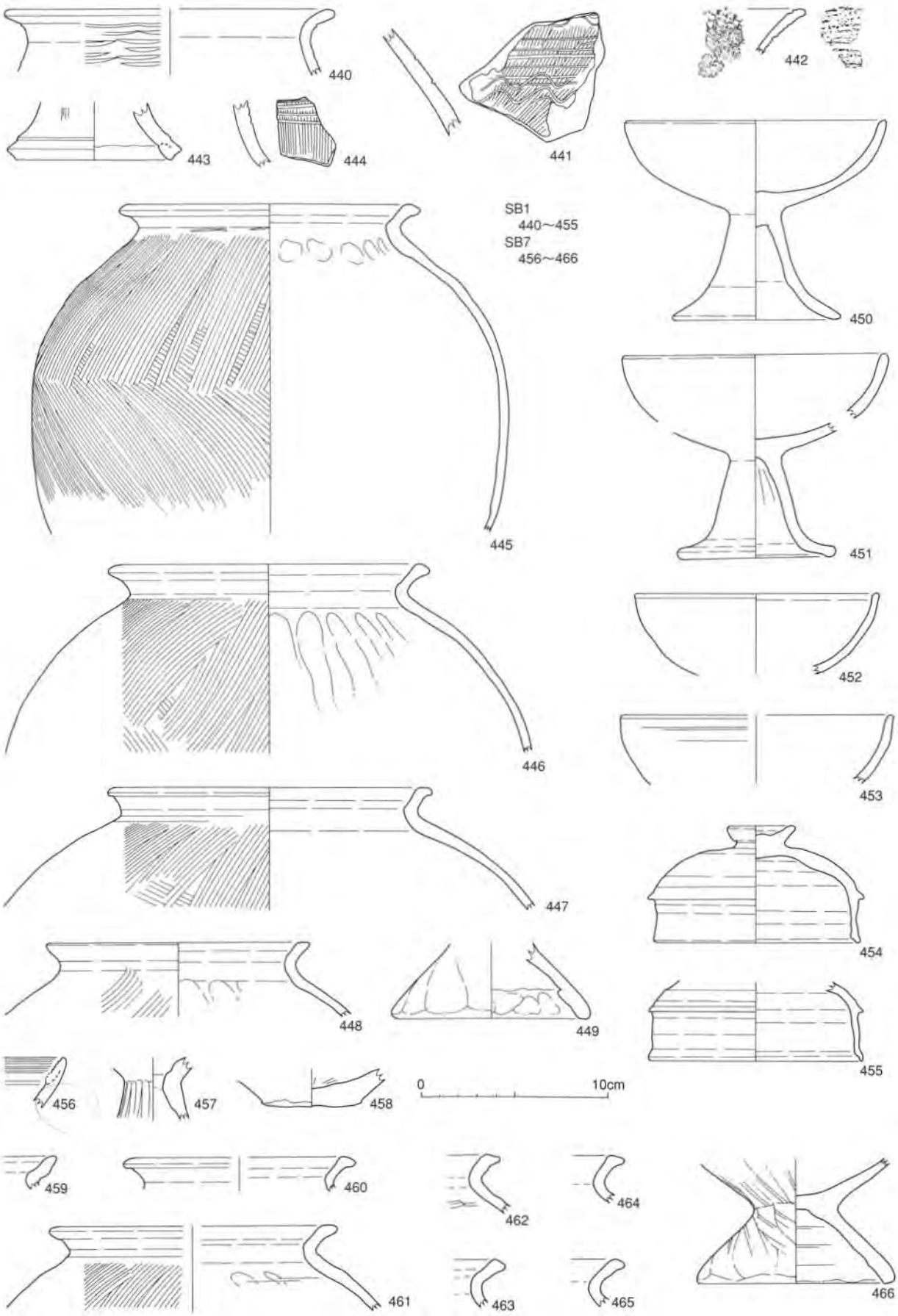
第63図　遺物実測図(17)



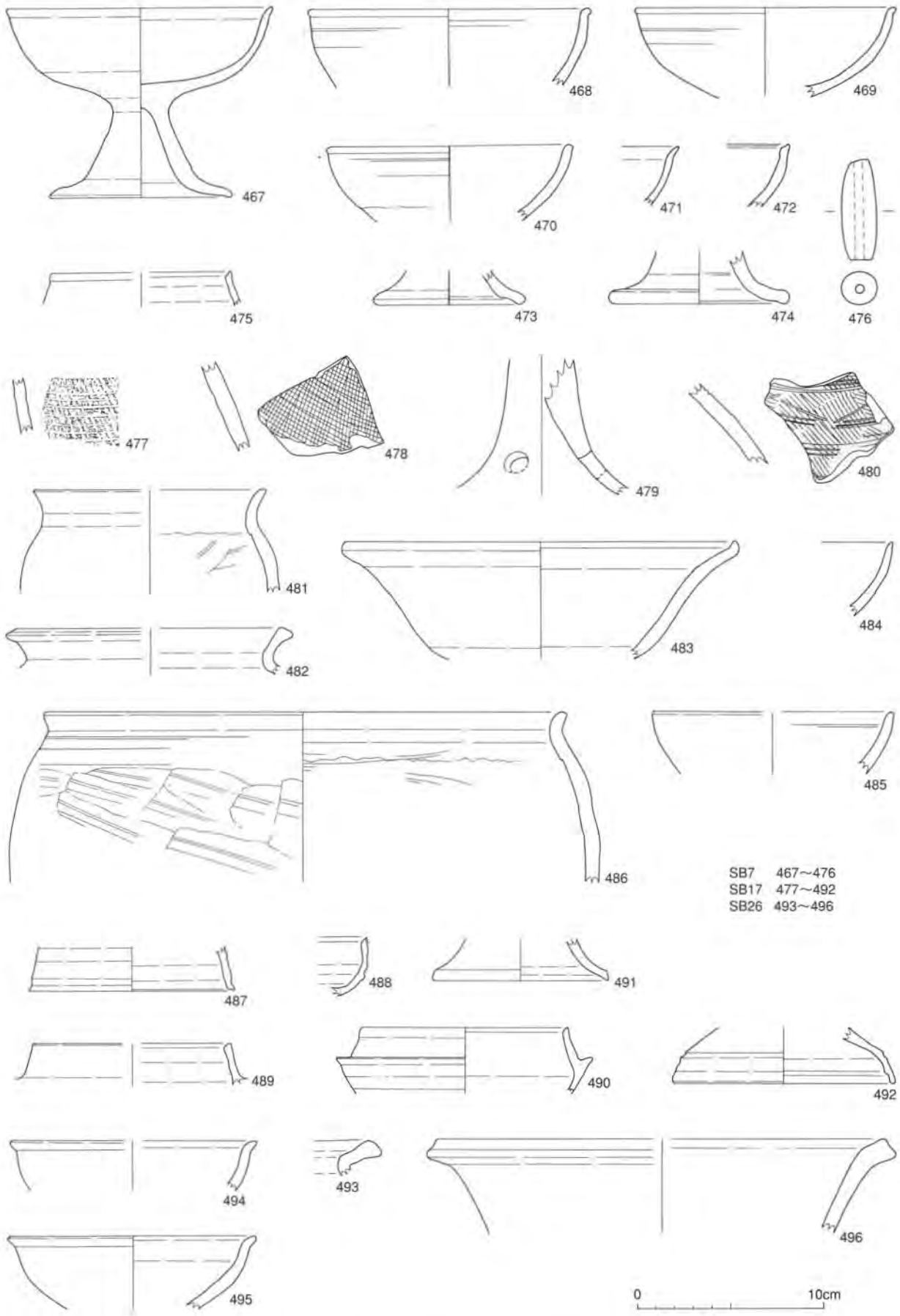
第64図　遺物実測図(18)



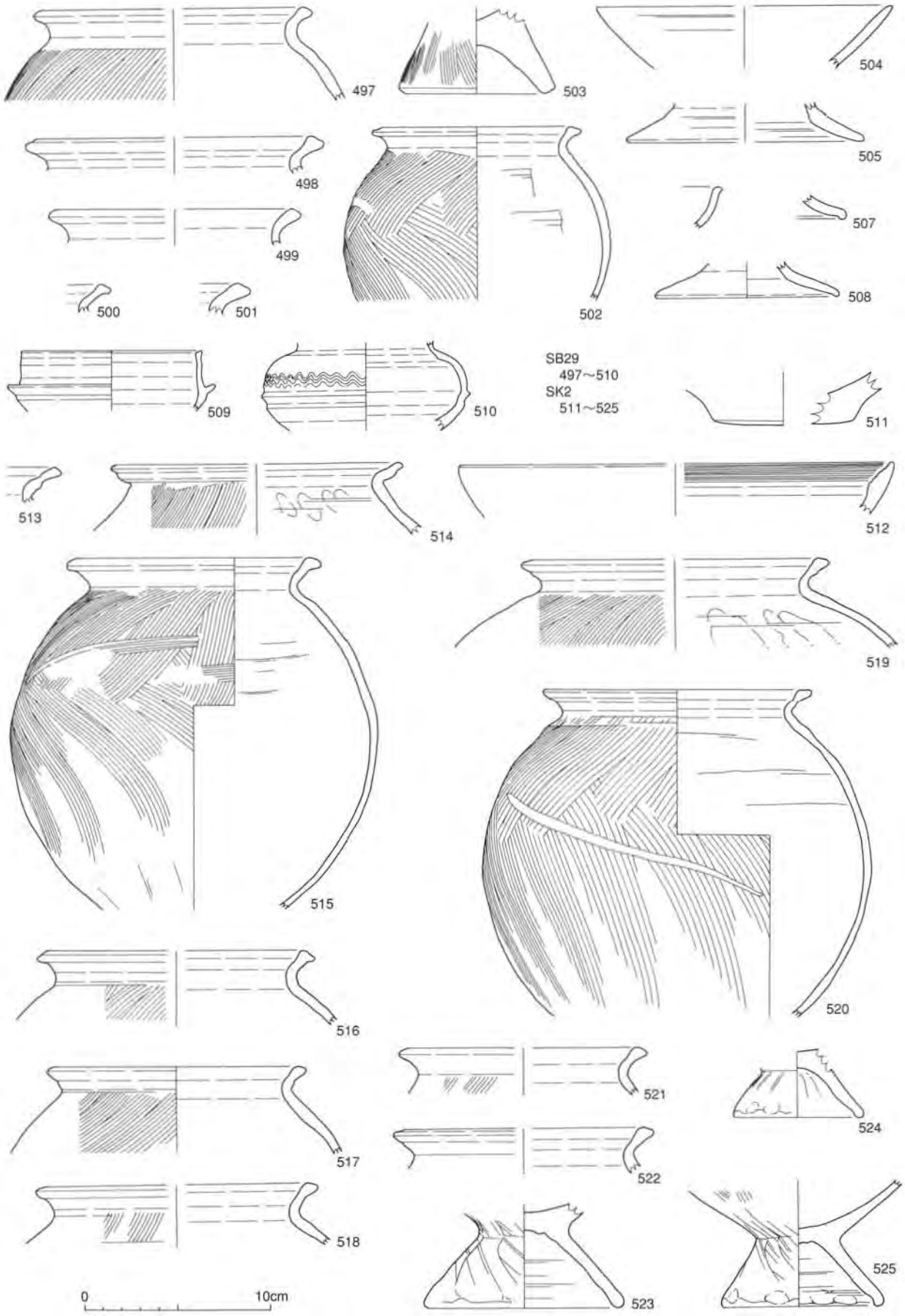
第65図　遺物実測図(19)



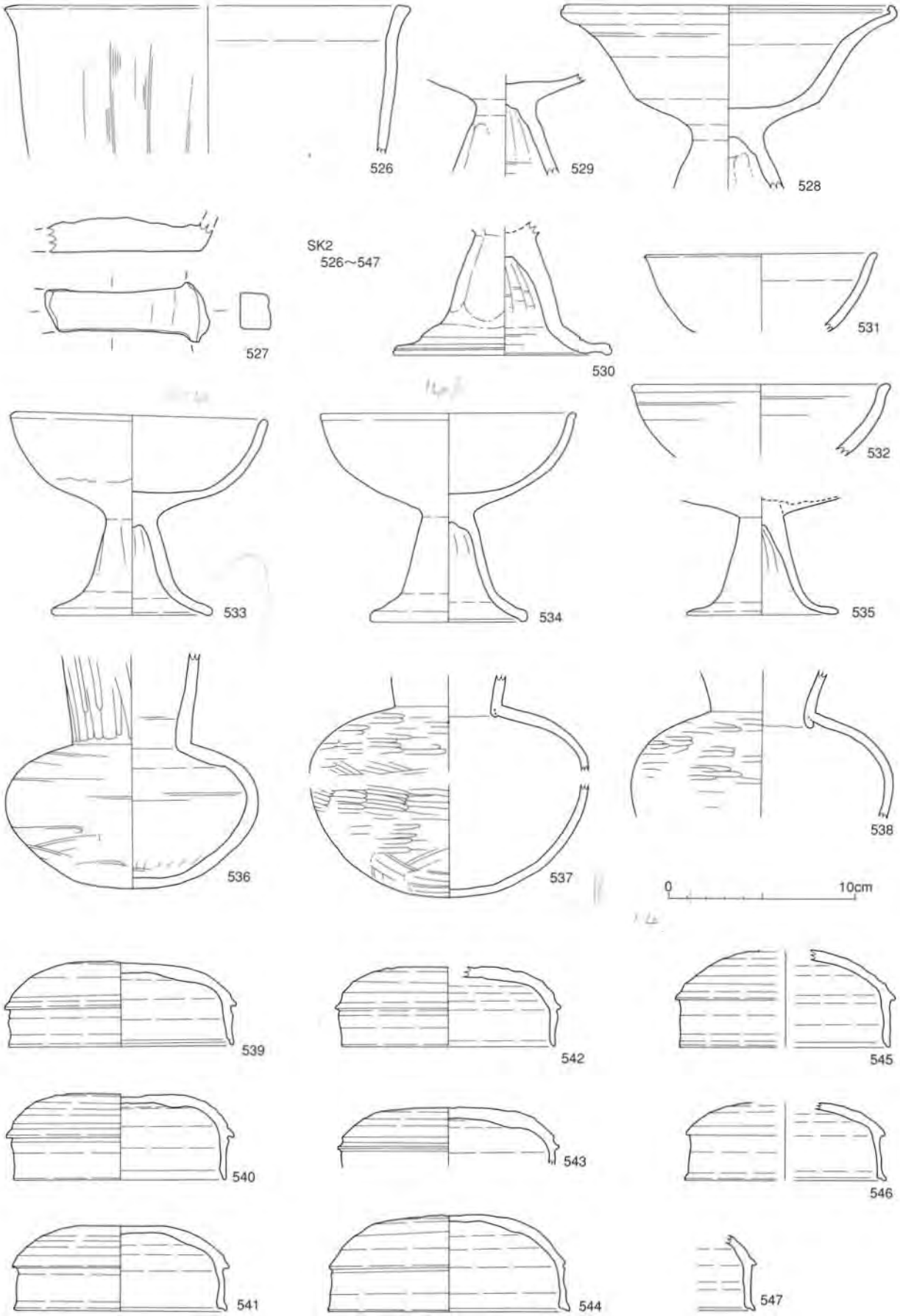
第66図　遺物実測図(20)



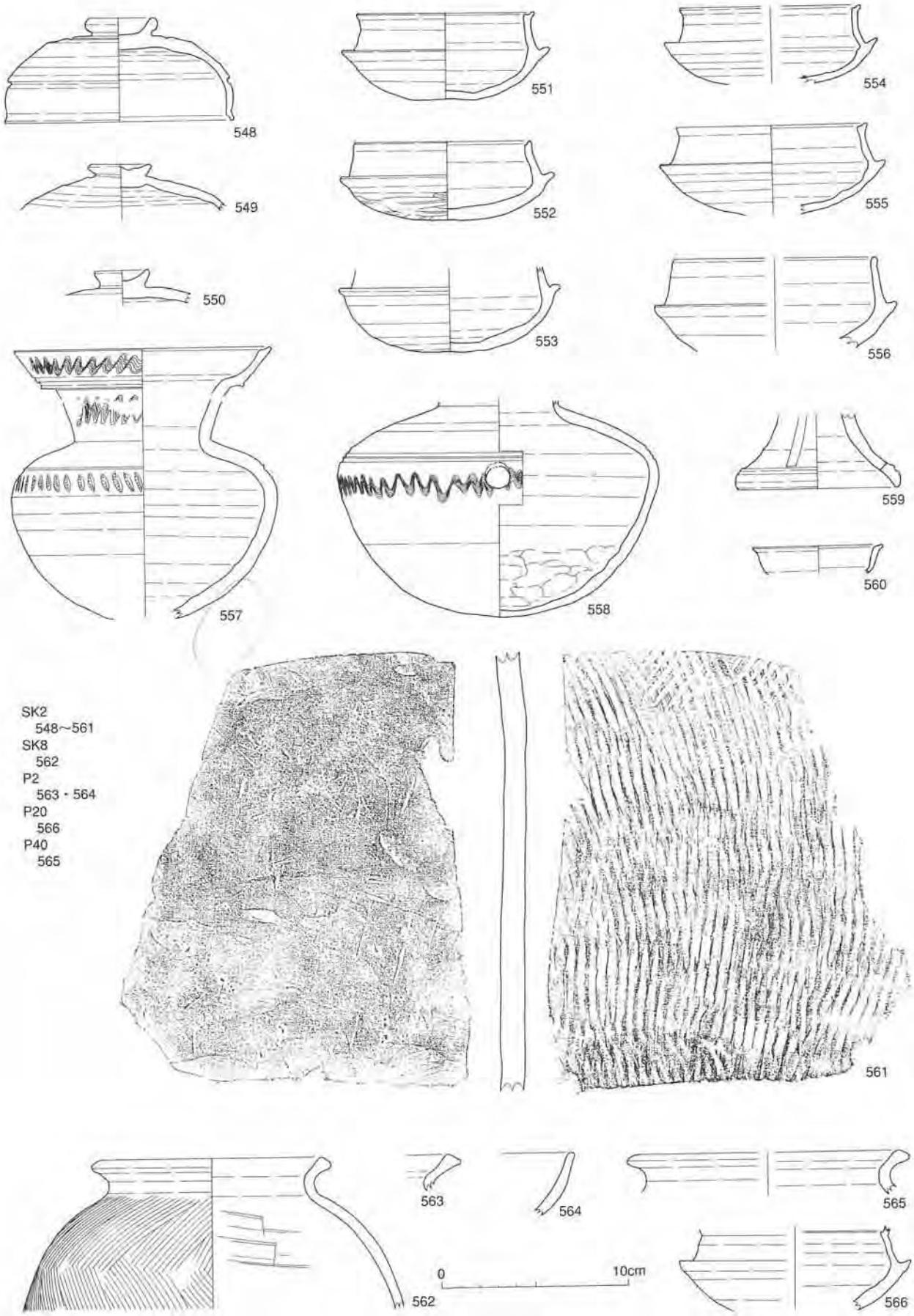
第67図　遺物実測図(21)



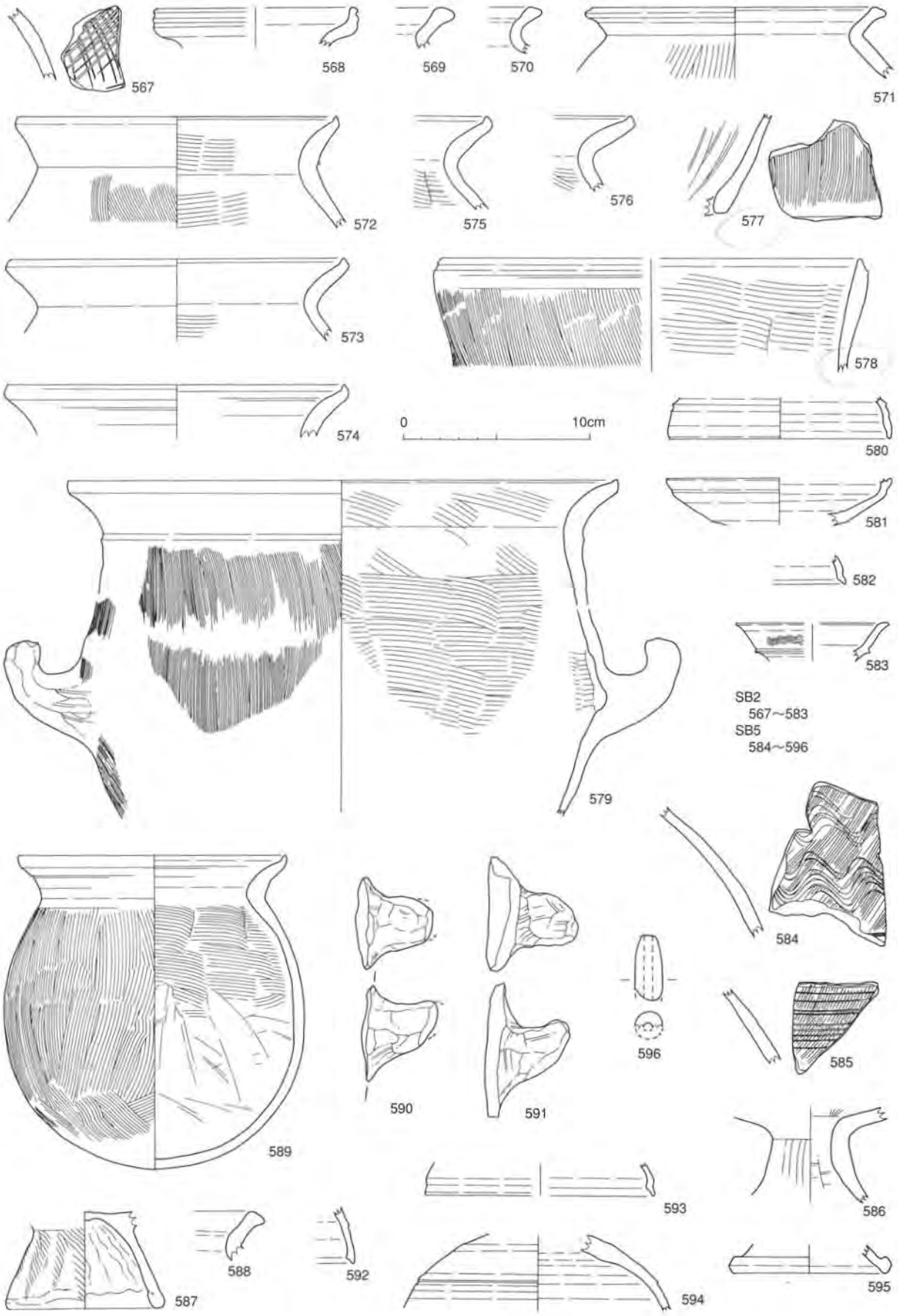
第68図　遺物実測図(22)



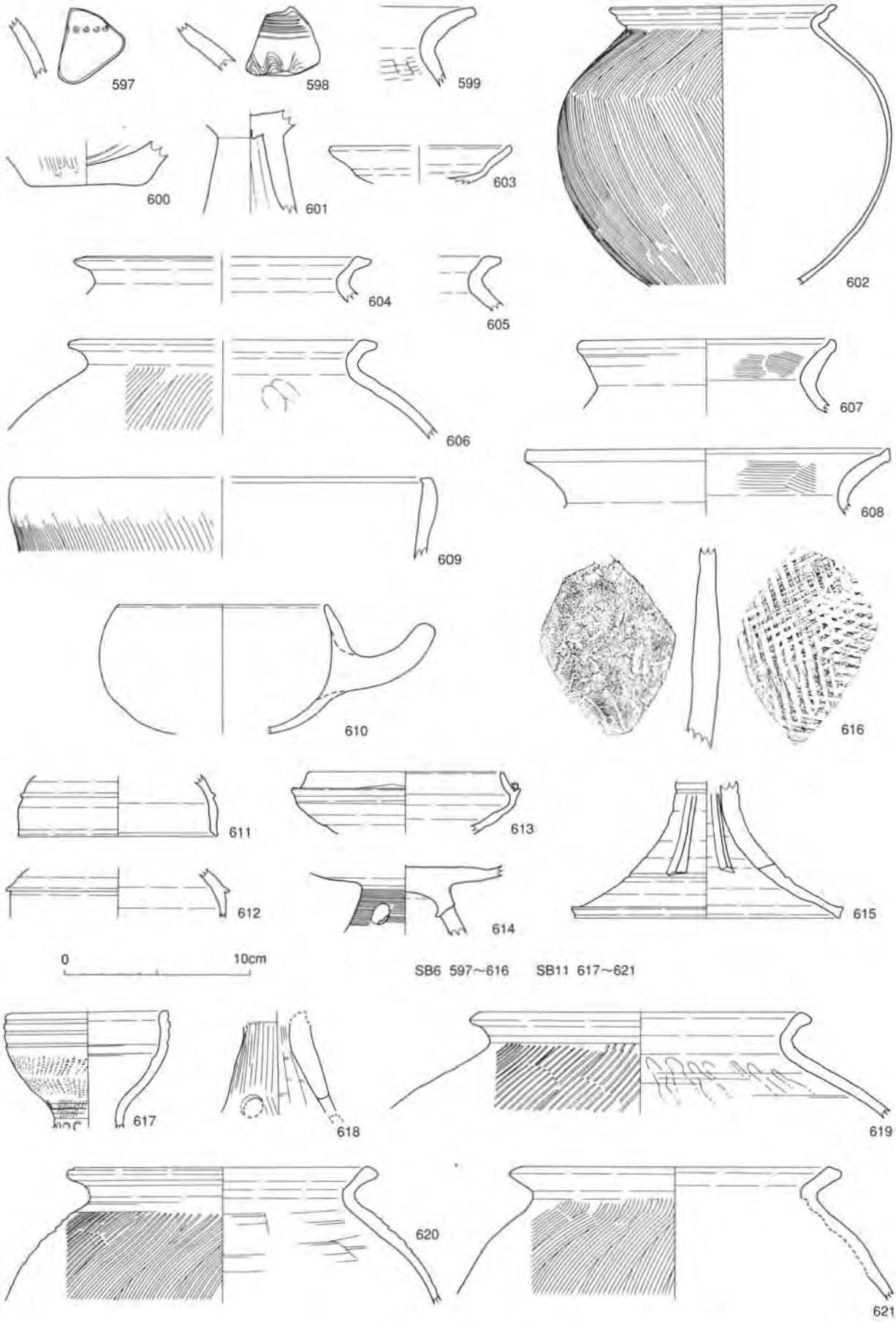
第69図　遺物実測図(23)



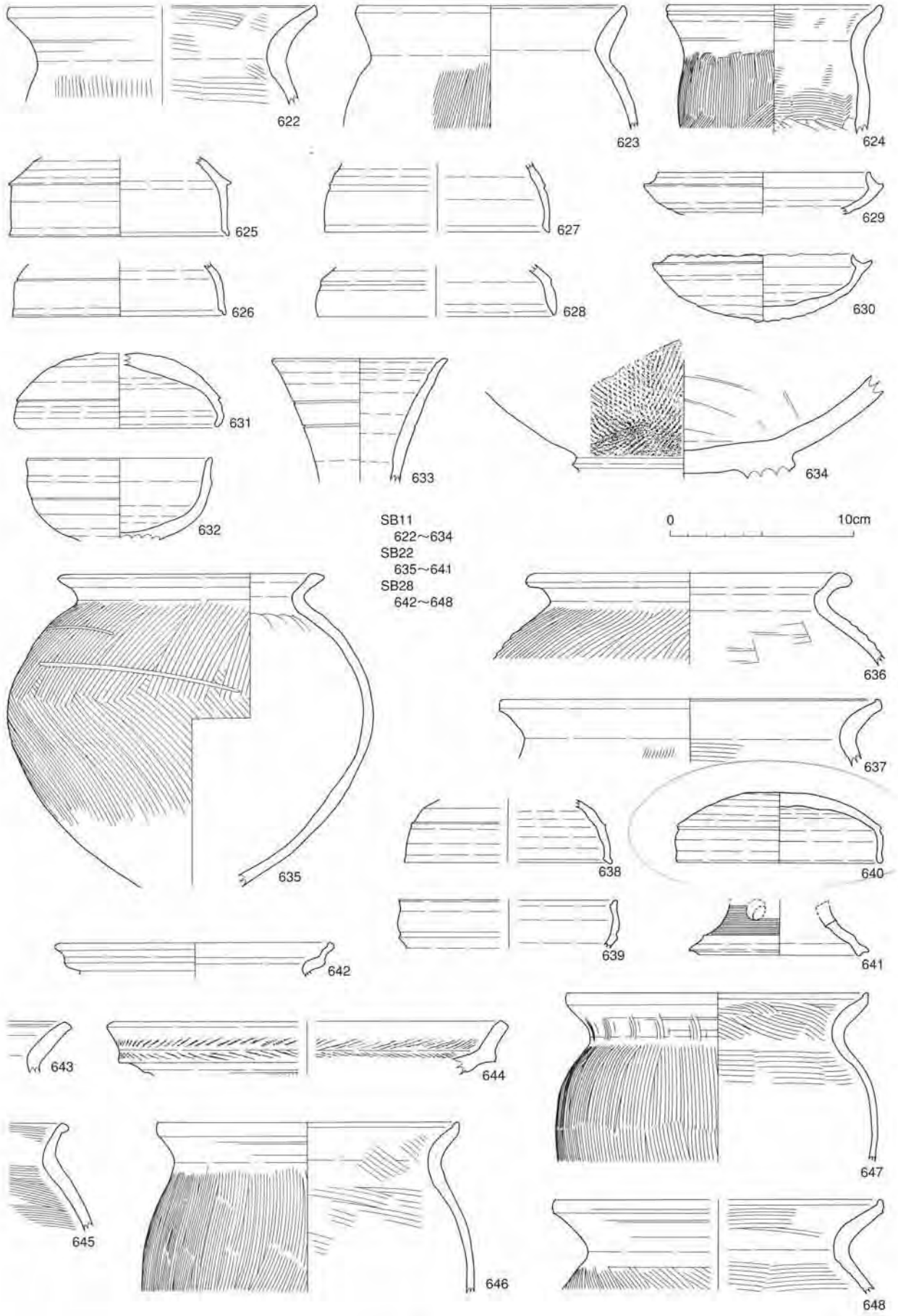
第70図　遺物実測図(24)



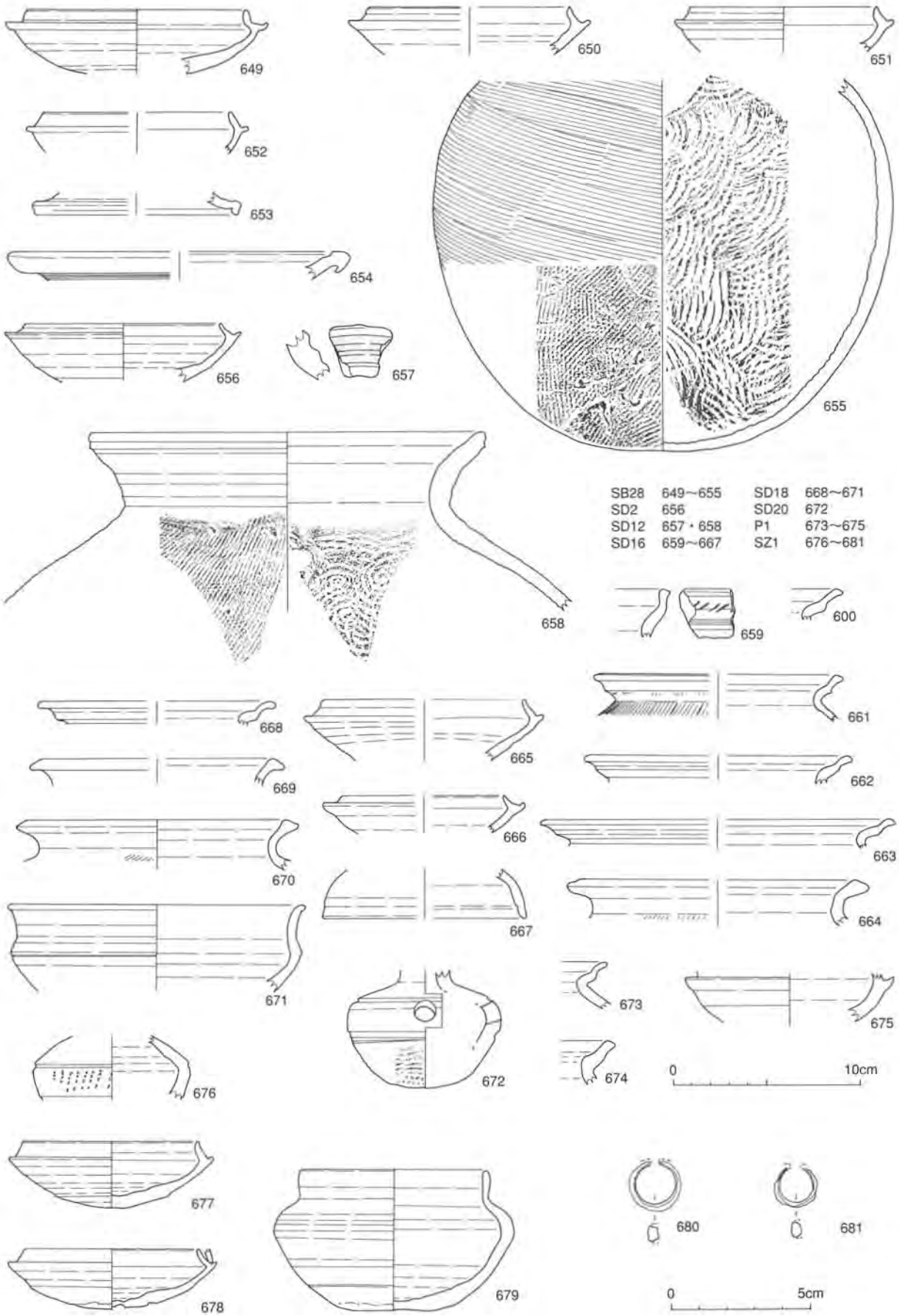
第71図　遺物実測図(25)



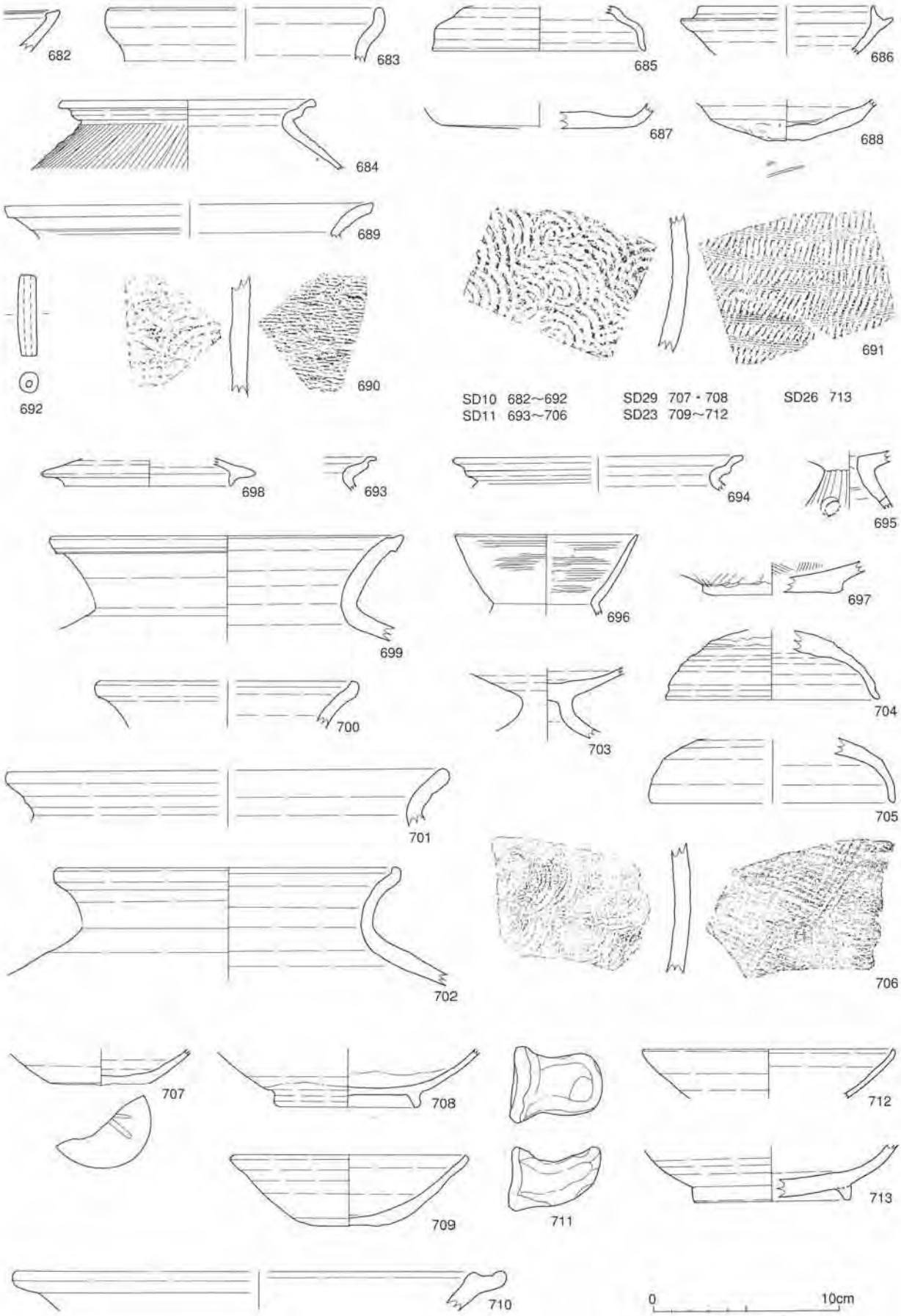
第72図　遺物実測図(26)



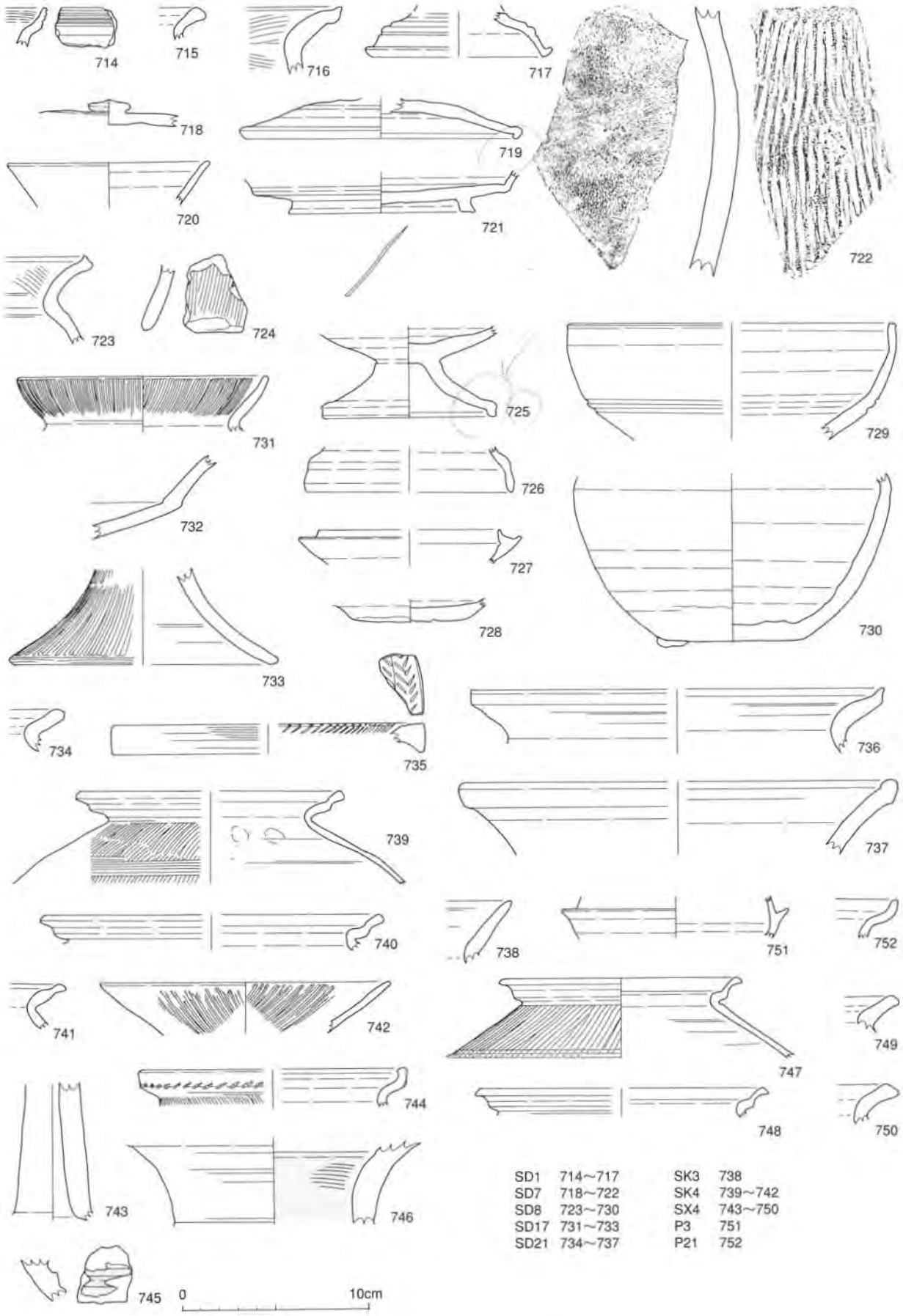
第73図　遺物実測図(27)



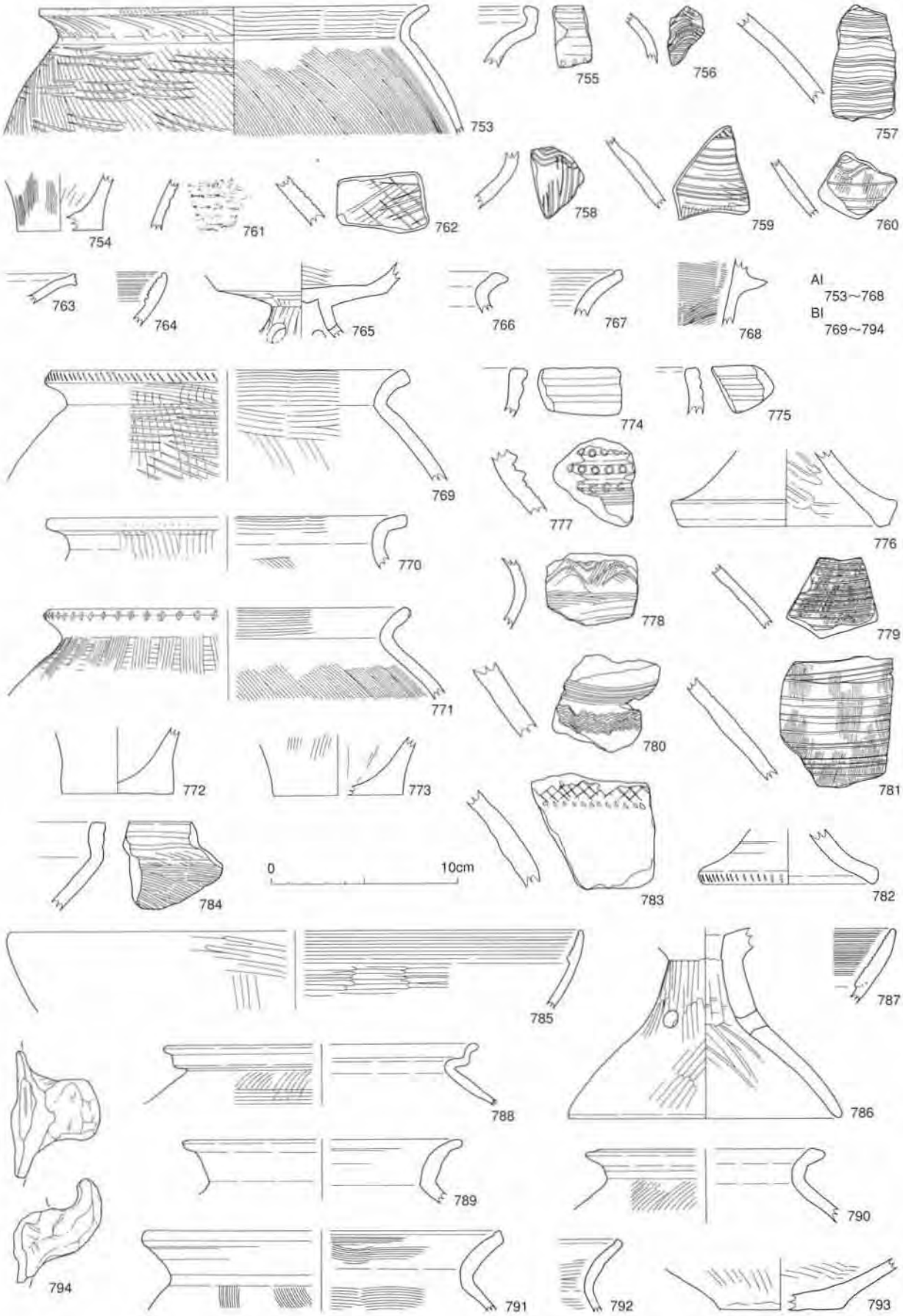
第74図　遺物実測図(28)



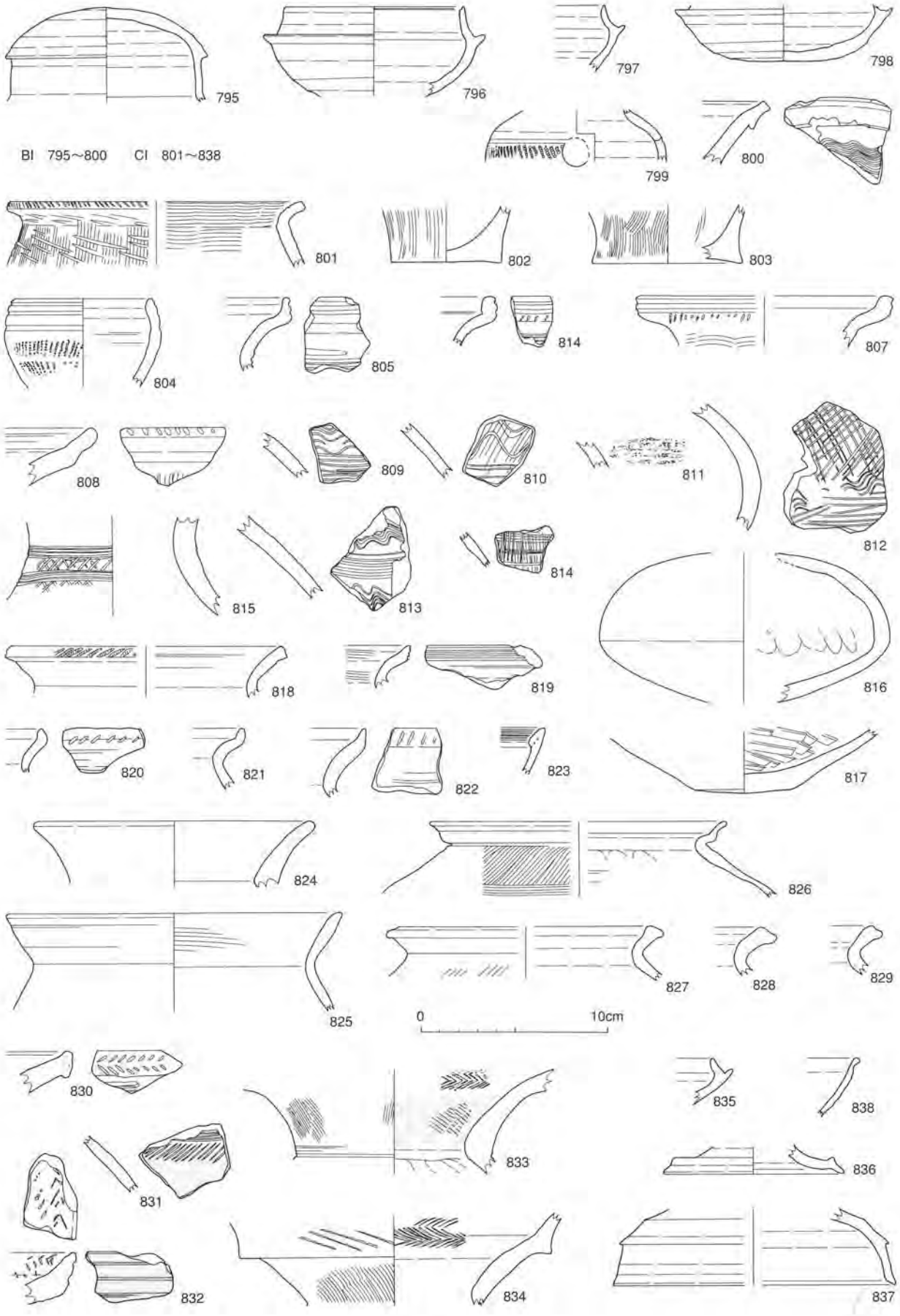
第75図　遺物実測図(29)



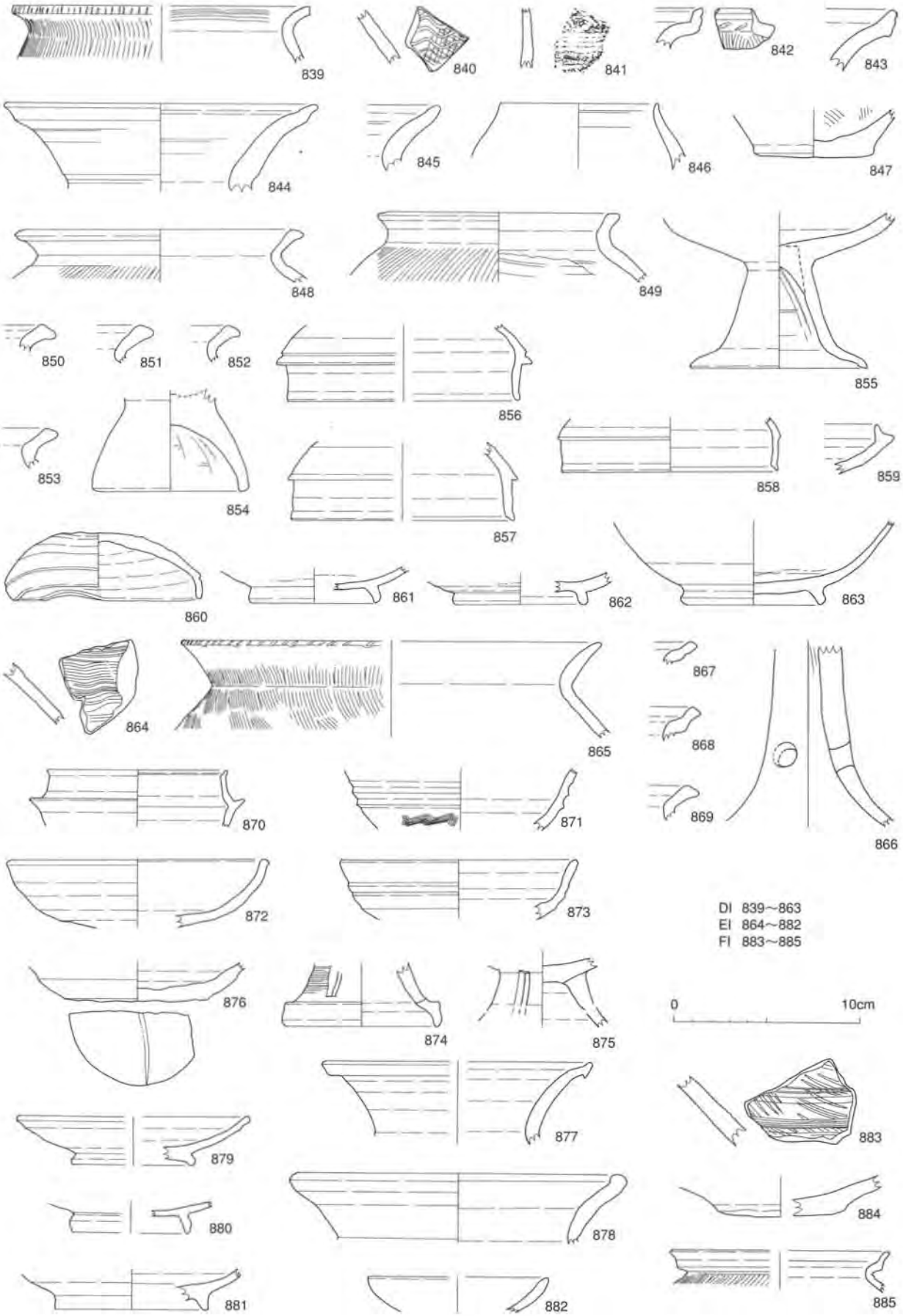
第76図　遺物実測図(30)



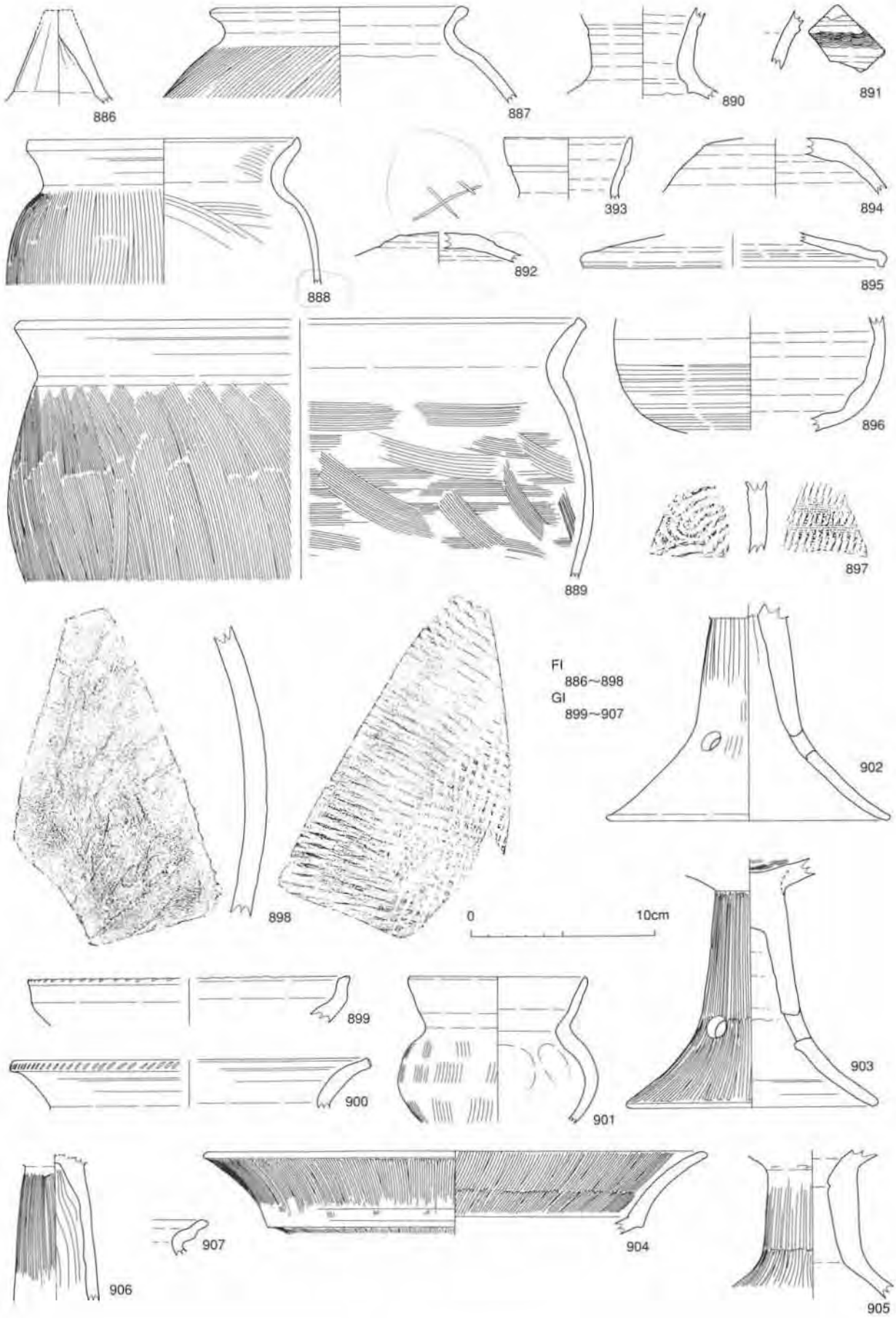
第77図　遺物実測図(31)



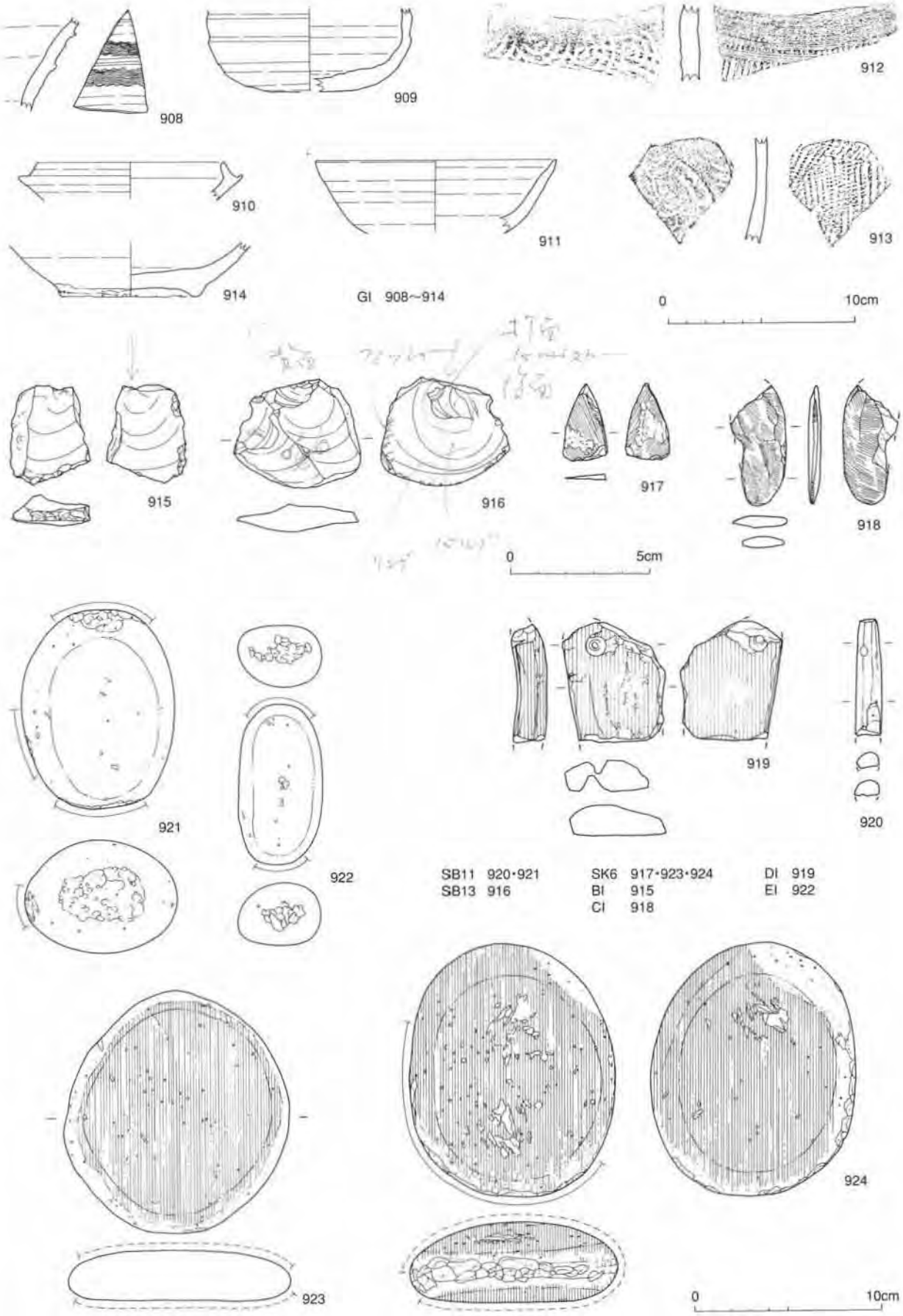
第78図　遺物実測図(32)



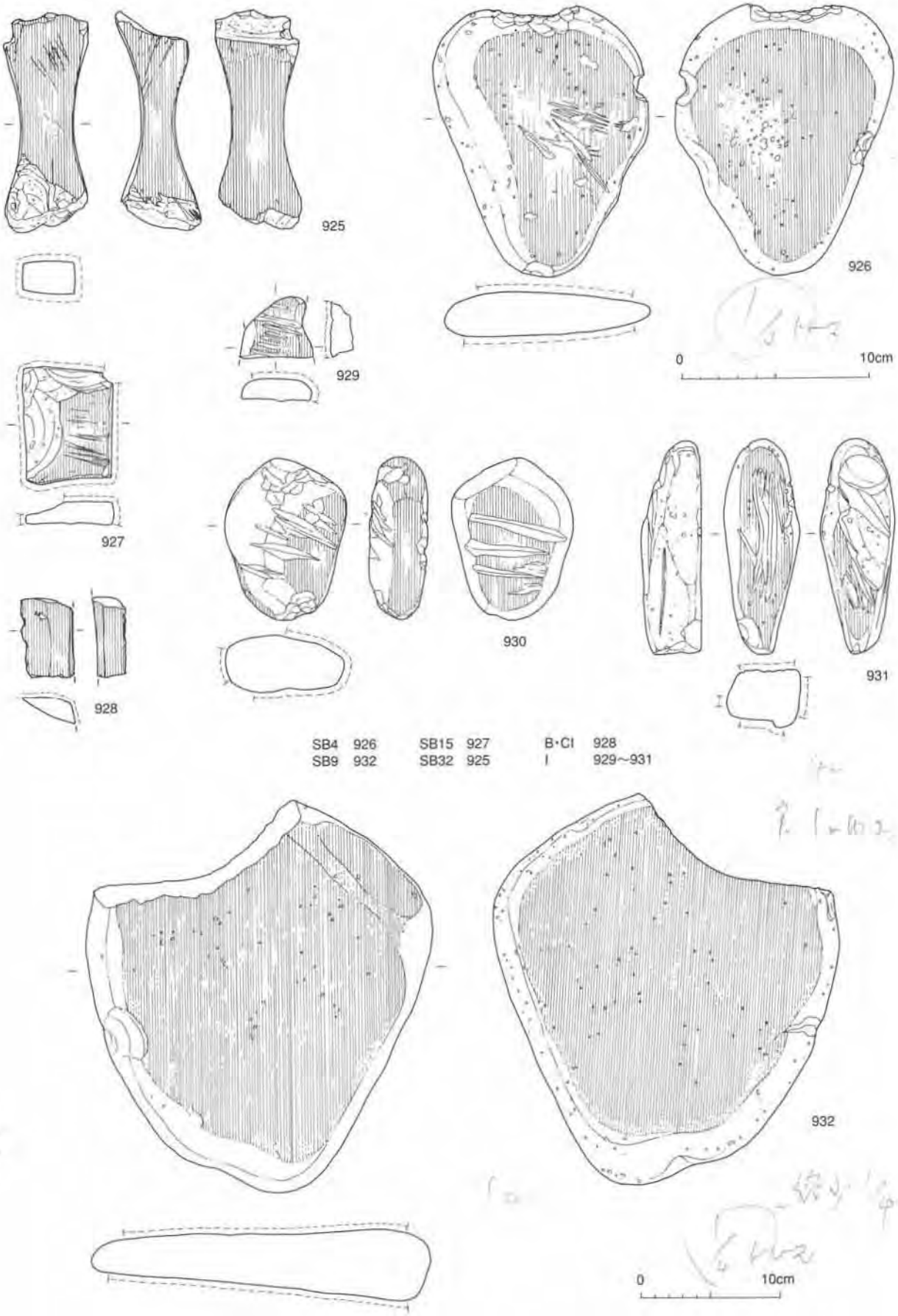
第79図　遺物実測図(33)



第80図　遺物実測図(34)



第81図　遺物実測図(35)



第82図　遺物実測図(36)

SB

番号	地区	時期	平面形	規模(m)	炉・カマド	硬化面	備考	図版
1	B	7	方形	東西4.4以上, 南北5.0, 深さ0.2	北壁中央	カマド周辺		27
2	C	8	長方形	東西4.4, 南北6.0, 深さ0.2	西壁北寄り	—		34
3	C	3	方形?	東西3.0以上, 南北3.0以上, 深さ0.4	中央	—		11
4	C	6	方形	東西2.6以上, 南北4.7, 深さ0.5	—	中央部?	焼失住居?	19
5	BC	8	正方形	一辺3.2, 深さ0.1	北壁東寄り	全面		35
6	D	8	長方形	東西3.6, 南北4.7, 深さ0.23	西壁中央	全面	周溝(?)北東隅	36
7	D	7	方形	東西4.9以上, 南北6.0, 深さ0.4	東壁北寄り	中央部?		28
8	D	6	台形	東西3.9, 南北3.4, 深さ0.15	→	—		19
9	E	3	方形	東西3.1以上, 南北5.1以上, 深さ0.1	—	部分的	周溝東壁 焼失住居	12
10	E	5	長方形	東西5.3, 南北4.2, 深さ0.35	東壁南寄り	全面		20
11	CD	8	長方形	東西4.05, 南北6.2, 深さ0.25	北壁中央	全面		37
12	BC	8	正方形	東西4.7, 南北4.5, 深さ0.4	中央	—	焼失住居	21・22
13	C	6	方形	東西5.6以上, 南北5.5, 深さ0.5	—	全面		23
14	C	6	不明	東西2.8以上, 南北1.0以上, 深さ0.44	—	—		23
15	D	8	長方形	東西4.65, 南北6.9, 深さ0.3	中央	中央部		24
16	B	2	方形	東西1.1以上, 南北3.5, 深さ0.5	—	—		9
17	AB	7	長方形	東西6.1, 南北5.1, 深さ0.15	東壁南寄り	—		29
18	E	6	方形	東西5.3, 南北5.4以上, 深さ0.2	—	全面		25
19	D	—	不明	東西1.9以上, 南北3.1, 深さ–	—	?	硬化面のみ	28
20	D	3	方形	東西2.2以上, 南北2.8以上, 深さ0.32	—	?		13
21	C	—	不明	東西4.85, 南北4.7, 深さ–	—	中央部?		11
22	A	8	方形	東西3.4以上, 南北5.95以上, 深さ0.25	—	—		38
23	欠番							
24	欠番							
25	C	3	方形	東西4.2以上, 南北5.6, 深さ0.33	—	全面		15・16
26	A	7	不明	東西3.4以上, 南北2.0以上, 深さ0.23	—	—		30
27	欠番							
28	F	8	長方形	東西5.0, 南北4.5, 深さ0.1	西壁中央	—	周溝東半部	39
29	F	7	正方形	東西4.7, 南北4.3, 深さ0.15	北壁東寄り	—	周溝北壁	31
30	F	5	方形	東西3.4以上, 南北4.0以上, 深さ0.4	—	全面	焼失住居	18
31	F	5	方形	東西2.95以上, 南北2.2以上, 深さ0.1	—	全面		39
32	F	6	方形	東西4.7以上, 南北2.8以上, 深さ0.35	—	全面		26
33	G	2	方形	東西3.8以上, 南北3.6, 深さ0.29	中央?	—		9
34	F	—	方形	東西4.6, 南北2.9以上, 深さ0.15	—	—		18

SD

番号	地区	時期	断面形	規模(m)	備考	図版
1	C	10	V字形	長さ12.6以上, 幅0.9, 深さ0.57以上		15
2	D	8	不明	長さ9.2以上, 幅0.3, 深さ0.07		43
3	A	3		長さ, 幅, 深さ0.7以上	土器集積	14
4	E	—	不明	長さ7.8以上, 幅0.7, 深さ0.07		25
5	C	—		長さ2.5以上, 幅0.5, 深さ0.18		別1
6	A	3		長さ, 幅, 深さ0.65		30
7	FG	9	緩やかなV字形	長さ6.7以上, 幅2.9, 深さ0.7	両側に杭列	42
8	F	—	不整逆台形	長さ8.5以上, 幅1.4, 深さ0.3		41
9	F	—	不明	長さ2.6以上, 幅0.5, 深さ0.09		41
10	FG	9	不明	長さ7.0以上, 幅2.45, 深さ0.4		42
11	F	9	逆台形	長さ7.4以上, 幅2.75, 深さ0.4		41・42
12	G	8	逆台形	長さ6.0以上, 幅0.5, 深さ0.28	両側に杭列の痕跡	41
13	G	—	緩やかなV字形	長さ5.5以上, 幅0.54, 深さ0.13		41
14	G	—	扁平なU字形	長さ3.9以上, 幅0.36, 深さ0.15		41
15	G	—	緩やかなV字形	長さ0.9以上, 幅0.46, 深さ0.12		41
16	G	8	扁平なU字形	長さ6.7以上, 幅1.0, 深さ0.1		42
17	G	—	U字形	長さ5.8以上, 幅0.34, 深さ0.31		8
18	G	8	緩やかなV字形	長さ6.4以上, 幅2.5, 深さ0.35		9・41
19	G	6	不明	長さ4.5以上, 幅0.4, 深さ0.2		42
20	G	8	扁平なU字形	長さ5.5以上, 幅0.85, 深さ0.2		42
21	F	—	不明	長さ6.1以上, 幅0.6, 深さ0.05		41
22	A	—		長さ7.2, 幅0.8, 深さ0.25	未掘(一部掘削)	別1
23	A	10		長さ14.0, 幅0.6, 深さ0.3	未掘(一部掘削)	別1
24	AB	—		長さ10.0, 幅2.0, 深さ4.0	未掘(一部掘削)	別1
25	B	—		長さ11.0, 幅0.4, 深さ0.1	未掘(一部掘削)	別1
26	B	10		長さ14.0, 幅2.2, 深さ0.25	未掘(一部掘削)	別1
27	B	—		長さ4.6, 幅0.4, 深さ0.15	未掘(一部掘削)	別1
28	B	—		長さ5.6, 幅0.45, 深さ0.09	未掘(一部掘削)	別1
29	DE	10		長さ9.4, 幅1.1, 深さ0.08	未掘(一部掘削)	別2

SZ

番号	地区	時期	平面形	規模(m)	備考	図版
1	C	9	長方形	東西0.6, 南北1.33以上, 深さ0.14		40

SK

番号	地区	時期	平面形	規模(m)	備考	図版
1	C	5	?	東西2.6, 南北3.05, 深さ0.4	土器集積	15・16
2	D	7	不整楕円形	長径2.05, 短径1.9, 深さ0.45	土器集積	32・33
3	D	—	楕円形	長径1.15, 短径1.0, 深さ0.08		43
4	D	—	円形	径1.5, 深さ0.36		43
5	A	1	楕円形	長径1.5, 短径0.85以上, 深さ		8
6	A	2	楕円形	長径1.8, 短径1.4以上, 深さ0.2	土器集積	10
7	D	5	楕円形	長径2.05, 短径1.75, 深さ0.3	土器集積	10
8	F	7	不整楕円形	長径0.8, 短径0.7, 深さ0.3		31
9	F	1	不整円形	径1.25, 深さ0.11	土器集積	8

P

番号	地区	時期	平面形	規模(m)	備考	図版
1	E	6	円形	径0.8, 深さ0.18	P2, P3と対?	25
2	E	7	円形	径0.7, 深さ0.18	P1, P3と対?	25
3	E	—	不整円形	径0.8, 深さ0.32	P1, P2と対?	25
4	A	—	円形	径0.3, 深さ0.11		30
5	A	—	円形	径0.3, 深さ0.07		別1
6	A	—	円形	径0.47, 深さ0.09		別1
7	A	—	円形	径0.25, 深さ0.17		別1
8	B	—	楕円形	長径0.35, 短径0.3, 深さ0.2		27
9	B	—	円形	径0.4, 深さ0.17		27
10	B	—	楕円形	長径0.7, 短径0.67, 深さ0.15		別1
11	C	—	円形	径0.3, 深さ0.11		別1
12	C	—	円形	径0.2, 深さ0.08		別1
13	C	—	円形	径0.3, 深さ0.08		別1
14	C	—	楕円形	長径0.26, 短径0.21, 深さ0.07		別1
15	B	—	円形	径0.3, 深さ0.2		21
16	C	—	円形	径0.35, 深さ0.14		34
17	C	—	楕円形	長径0.81, 短径0.7, 深さ0.29		別1
18	C	—	円形	径0.36, 深さ0.2		15
19	C	—	楕円形	長径0.6, 短径0.45, 深さ0.13		別1
20	C	7	円形	径0.7, 深さ0.13		11
21	C	—	不整円形	径0.35, 深さ0.1		15
22	C	—	不整楕円形	長径0.5, 短径0.45, 深さ0.11		別2
23	C	—	円形	径0.33, 深さ0.15		別2
24	C	—	円形	径0.36, 深さ0.17		15
25	E	—	円形	径0.38, 深さ0.19		25
26	B	—	円形	径0.27, 深さ0.1		21
27	C	—	円形	径0.36, 深さ0.14		15
28	C	—	円形	径0.31, 深さ0.2		35
29	C	—	楕円形	長径0.45, 短径0.4, 深さ0.15		34
30	C	—	不整楕円形	長径0.45, 短径0.39, 深さ0.1		別1
31	F	—	不整円形	径0.7, 深さ0.2	木材痕跡	31
32	F	—	不整円形	径0.75, 深さ0.27		31
33	F	—	楕円形	長径0.5, 短径0.4, 深さ0.12		41
34	F	—	楕円形	長径0.77, 短径0.45, 深さ0.3		41
35	G	—	円形	径0.33, 深さ0.26		41
36	G	—	楕円形	長径0.32以上, 短径0.25, 深さ0.16		41
37	G	—	不整楕円形	長径0.45, 短径0.26, 深さ0.06	SX4の一部?	41
38	G	—	楕円形	長径0.52, 短径0.33, 深さ0.06	SX4の一部?	41
39	G	—	円形	径0.22, 深さ0.15		41
40	F	7	楕円形?	長径0.5以上, 短径0.06, 深さ0.35		31
41	F	—	楕円形	長径0.18以上, 短径0.31, 深さ0.11		41
42	F	—	円形	径0.22, 深さ0.07		17
43	F	—	不整楕円形	長径0.48, 短径0.23以上, 深さ0.12		41
44	F	—	円形	径0.16, 深さ0.06		17
45	E	—	隅丸長方形	長軸0.67, 短軸0.3以上, 深さ?		36

SX

番号	地区	時期	平面形	規模(m)	備考	図版
1	C	—	不整楕円形	長径0.95, 短径0.7, 深さ0.08	土坑状	43
2	D	—	不整楕円形	長径1.1, 短径0.8, 深さ0.1	土坑状	43
3	E	5	不明	東西3.0以上, 南北0.9以上, 深さ0.15以上		44
4	G	10	不整形	東西3.2以上, 南北7.1以上, 深さ0.09		43
5	G	—	三角形?	東西0.8以上, 南北2.6以上, 深さ0.1		41
6	G	—	不明	東西1.5以上, 南北2.1以上, 深さ0.12		41
7	F	1	不整形	東西1.4, 南北1.1以上, 深さ0.17		41
8	F	1	楕円形	長径0.7, 短径0.45, 深さ0.07	炭化物密集部分	43
9	F	5	楕円形	長径0.8以上, 短径0.03以上, 深さ0.07	炭化物密集部分	41
10	B	4	不明	長径1.2以上, 短径1.0, 深さ–	土器集積のみ	43
11	B	1			SB1下層	45・46
12	AB	1			SB17下層	45・46
13	D	5			SB8下層	44
14	D	10	楕円形	東西2.3, 南北1.3, 深さ0.08	焼土・硬化面	24
15	B	—	円形	直径0.65, 深さ0.04	焼土のみ	29
16	C	—	不明			45・46

第2表　遺構表

遺構	弥生土器	土師器	その他の土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中・近世陶器	近世磁器	土製品	石製品	金属製品	その他	合計
SB1	5	194		2									201
SB2	4	543		16									563
SB2・5	1	90											91
SB3		109		1								1	111
SB4	1	1063		1						1			1066
SB5	2	256		16					1				275
SB6	6	835	10	20									871
SB7	3	1181		20			1		1				1206
SB8		1543		13									1556
SB9		278								1			279
SB10	13	1877		19									1909
SB10・18	2	155											157
SB11	14	693		18						2			727
SB12	30	1238		6									1274
SB13	31	1517		38						1			1587
SB13・14		11											11
SB14	1	26		1									28
SB15	22	1719								1			1742
SB16	12	65											77
SB17	5	304		8									317
SB18	4	548		1									553
SB20	4	152											156
SB22	1	342		5									348
SB25	6	746		1	1								754
SB26		59											59
SB28		362		10	1								373
SB29	3	468		8									479
SB30	1	161		1									163
SB31		91		1									92
SB32		188		2						1			191
SB33		16		1									17
SB34		63		2									65
SZ1	1	33		7							2		43
SD1		119		7									126
SD2		38		5									43
SD3	2	539	1	11									553
SD4		25											25
SD6		7											7
SD7		18		15			4	1				1	39
SD8	1	112		29		1							143
SD9		7											7
SD10		237		24					1				262
SD11	1	490		81									572
SD12	1	163		4									168
SD13		13		1									14
SD14		4											4
SD15		39		1									40
SD16		294		25									319
SD17		26											26
SD18		403		21									424
SD19		121		3									124
SD20		118		16									134
SD21	2	197		27			1						227
SD23		21	6		1	4							32
SD26						1							1
SD29				1	1	7							9

遺構	弥生土器	土師器	その他の土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中・近世陶器	近世磁器	土製品	石製品	金属製品	その他	合計
SK1		9											9
SK2		959		101									1060
SK3		25											25
SK4	1	316		17									334
SK5	9	47											56
SK6	1	71	1	1		1				3			78
SK7		338											338
SK8		30											30
SK9	6												6
SX1		9											9
SX2		23		2									25
SX3	1	229		4									234
SX4	1	306		20									327
SX5		26											26
SX6		4											4
SX7	4	1											5
SX8	5	1											6
SX9		56											56
SX10		97											97
SX11	21		46							1			68
SX12	25												25
SX13		26											26
SX14		32		2	2	1							37
SX15		1											1
SX16	14		5										19
P1		57		4									61
P2		39											39
P3		80		8									88
P6		1											1
P15		1											1
P17		4											4
P19	1	5											6
P20		29		2									31
P21		6											6
P22		12											12
P24		46											46
P28		6											6
P30		4											4
P31		9											9
P32		7		1									8
P33		6											6
P34		12											12
P36		1											1
P37				1									1
P38		1											1
P40		9											9
P45		4											4
A I	14	706	1	50		14	12						797
A・B I		60		6									66
B I	36	1677		108	4	16	13						1854
B・C I										1			1
C I	52	4580		133	1		13			2			4781
C・D・E I	1	63											64
D I	9	2369		104	5					1			2488
D・E I		34											34
E I	7	1851	1	208	19	8	15	1		1			2111
F I	1	590	1	71			1						664
F・G I	1							1					2
G I		491		58		3	1						553
I	5	375		26	4	4	8	1		2		2	427
合計	394	35658	72	1416	39	60	69	4	3	18	2	4	37739

第3表　出土遺物集計表

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
1	441	SK5	A	弥生土器	甕		－	－	－	－	頸部内面横ハケ	
2	793	SK5	A	弥生土器	甕		－	－	－	頸部高1.2		
3	379	SK5	A	弥生土器	台付甕	弥生中期後半	－	－	－	台端部径6.9 台基部径5.6 台高2.5		外面スス付着
4	440	SK5	A	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	胴部最大径26.0	外面波状文・斜格子文・横線文 内面横ナデ	
5	792	SK5	A	弥生土器	壺		－	－	6.8	－		
6	442	SK5	A	弥生土器	壺		－	－	5.9	－		
7	851	SK9	F	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	18.5	22.7	5.3	頸部径16.0 頸部高4.5 胴部最大径19.6	体部外面横ハケのち叩き 体部内面上半斜めハケ・下半縦ケズリ	底部穿孔 内外面スス付着
8	965	SK9	F	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	17.4	23.7	5.2	頸部径15.1 頸部高1.2 胴部最大径19.4	口縁端部キザミ 体部外面横ハケのち叩き 体部内面上半斜めハケ・下半縦ケズリ	底部穿孔(途中) 内外面スス付着
9	852	SK9	F	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	21.4	27.5	6.1	頸部径18.7 頸部高1.0 胴部最大径23.3	体部外面縦ハケのち叩き 体部内面上半斜めハケ・下半縦ケズリ・列点文	底部穿孔 内外面スス付着
10	967	SK9	F	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	13.2	－	－	頸部径11.8 頸部高1.0	体部外面斜めハケのち叩き 体部内面斜めハケ 口縁端部列点文	
11	966	SK9	F	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	5.2	－	体部外面縦ハケ	底部穿孔 内外面スス付着
12	968	SK9	F	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	8.2	－	外面縦ハケ	底部穿孔 外面スス付着
13	780	SX7	F	弥生土器	台付甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	5.1	台基部径4.3 台部高2.6	脚台部外面ハケ	
14	935	SX8	F	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面横線文・波状文	
15	447	SX11	BC	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	5.9	－	外面縦ハケ・内面縦ケズリ	内外面スス付着
16	798	SX11	BC	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	体部外面横線文・波状文	
17	797	SX11	BC	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	体部外面斜めハケのち波状文・横線文 体部内外面縦ハケ	
18	954	SX11	BC	弥生土器	壺(広頸)	弥生中期後半	－	－	－	－	体部外面斜格子文・刺突文・櫛刺突蜘蛛文	
19	796	SX11	BC	弥生土器	壺(長田町)	弥生中期後半	－	－	8.3	－	体部外面縦位条痕 外底部布目痕	
20	433	SX11	BC	弥生土器	甕	弥生中期後半	－	－	－	－	口縁端部列点文	
21	432	SX11	BC	弥生土器	壺	弥生中期後半	22.0	－	－	－	口縁部内外面ハケ 口縁端部貝殻刺突文 口縁部内面ボタン状突起	
22	481	SX12	E	弥生土器	太頸壺	弥生中期後半	(20.6)	－	－	頸部径(16.2) 頸部高3.2	口縁部内面横ハケ？・外面斜めハケ？	
23	983	SX12	E	弥生土器	壺？		－	－	－	－		
24	658	SB16	E	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面波状文	
25	125	SB16	E	弥生土器	甕	弥生中期後半	7.3	－	－	－	口縁部横線文・キザミ	
26	337	SB16	E	弥生土器	くの字甕		(13.4)	－	－	頸部径(11.0) 頸部高2.0	口縁部内外面横ナデ	
27	338	SB16	E	弥生土器	くの字甕		－	－	－	－		外面スス付着
28	246	SB16	E	弥生土器	受口口縁甕		14.2	－	－	頸部径11.8 頸部高2.1 胴部最大径13.8	口縁部内外面横ナデ・外面列点文 体部内外面斜めハケ	外面スス付着
29	339	SB16	E	弥生土器	器台		14.8	－	－	－		
30	477	SB16	E	弥生土器	鉢(ワイングラス?)		8.1	－	－	頸部径8.8 頸部高0.9	外面縦ミガキ	
31	789	SB33	G	弥生土器	くの字台付甕		(17.5)	－	－	－		外面スス付着
32	788	SB33	G	弥生土器	小型壺			－	－	－	外面斜めミガキ	
33	969	SB33	G	弥生土器	杯部外反高杯		－	－	14.4	－	脚部外面縦ミガキ 透孔(1段2方向？)	外面スス付着
34	972	SB33	G	弥生土器	杯部外反高杯		－	－	－	－	脚部外面縦ミガキ	
35	885	SK6	A	弥生土器	受口口縁平底甕		15.5	－	－	頸部径12.2 頸部高2.5 胴部最大径23.0	口縁部内外面横ナデ・外面列点文 外面横線文・刺突文 体部外面斜めハケ・内面斜め・横ハケ	
36	858	SK6	A	弥生土器	平底甕		－	－	4.3	－	外面斜めハケ	
37	958	SK6	A	弥生土器	受口口縁平底甕		13.8	14.0	3.5	頸部径11.9 頸部高2.0 胴部最大径14.3	口縁部内外面横ナデ・外面列点文 外面横線文・刺突文 体部外面斜めハケ・内面斜めハケ	内外面スス付着
38	602	SK6	A	弥生土器	くの字甕		11.9	－	－	頸部径10.0 頸部高1.5 胴部最大径14.9	口縁部内外面横ナデ 体部外面細かい斜めハケ・内面横ナデ	外面スス付着
39	884	SK6	A	弥生土器	屈折外反高杯		18.9	10.1	17.7	脚基部径3.2 脚高6.3	杯部外面縦ミガキ 脚部内面横ナデ 透孔(1段3方向)	
40	883	SK6	A	弥生土器	高杯 (屈折外反？)		18.6	11.6	12.0	脚基部径3.1 脚高5.7	内外面ミガキ(杯部内面縦ミガキ) 透孔(1段3方向)	
41	114	SB3	C	土師器	くの字甕		－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ	
42	559	SB3	C	土師器	くの字甕		(19.3)	－	－	頸部径(16.4) 頸部高2.6	口縁部外面横ナデ	外面スス付着
43	558	SB3	C	土師器	くの字甕		(19.3)	－	－	頸部径(16.1) 頸部高2.0	口縁部外面横ナデ	外面スス付着
44	121	SB3	C	土師器	受口口縁甕		16.8	－	－	頸部径14.0 頸部高2.7	口縁部内外面横ナデ 体部外面列点文	
45	288	SB3	C	土師器	鉢(受口口縁)		16.1	－	－	頸部径13.5 頸部高2.6 胴部最大径16.8	口縁部キザミ 外面横線文・キザミ 下半斜めハケ	内外面スス付着
46	503	SB3	C	土師器	くの字甕		(12.5)	－	－	－	口縁部内外面横ナデ	
47	115	SB3	C	土師器	広口壺		13.7	－	－	頸部径9.4 頸部高3.6		
48	517	SB3	C	土師器	有段高杯		－	－	－	－	外面ミガキ	杯部内底部中央に窪み
49	673	SB3	C	土師器	有段高杯		26.4	－	－	－	杯部内外面斜めミガキ・杯端部内外面横ミガキ	
50	557	SB3	C	土師器	器台		17.0	－	－	－	口縁端部擬凹線	
51	981	SB3	C	土製品	粘土塊		－	－	－	長さ4.8 幅3.6 厚さ1.0		紡錘痕？
52	546	SB9	E	土師器	くの字甕		16.9	－	－	頸部径15.0 頸部高2.5 胴部最大径21.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ 外面横線文・刺突文	
53	499	SB9	E	土師器	くの字甕		18.9	－	－	頸部径15.4 頸部高2.5	内外面横ナデ	外面スス付着
54	862	SB9	E	土師器	くの字甕		(21.2)	－	－	頸部径(18.3) 頸部高2.7	口縁部内外面横ナデ 口縁端部キザミ	
55	166	SB9	E	土師器	くの字甕		18.3	－	－	頸部径16.2 頸部高2.9 胴部最大径23.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めナデ？・内面斜めナデ？	内外面スス付着
56	204	SB9	E	土師器	くの字甕		19.0	－	－	頸部径15.6 頸部高3.2	口縁部内外面横ナデ・外面列点文 頸部横線文	外面スス付着

第4表 遺物観察表(1)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
57	437	SB9	E	土師器	くの字甕		15.9	—	—	頸部径14.6 頸部高2.8	口縁部横ナデ・外面列点文 頸部外面横線文	
58	111	SB9	E	土師器	受口口縁甕		(21.4)	—	—	頸部径(18.6) 頸部高2.5	口縁部内外面横ナデ 口縁端部列点文	
59	863	SB9	E	土師器	受口口縁甕		18.0	—	—	頸部径15.7 頸部高3.4	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
60	9	SB9	E	土師器	山陰系口縁甕		119.3)	—	—	頸部径(16.1) 頸部高3.7	体部内面横ケズリ	外面スス付着
61	474	SB9	E	土師器	山陰系口縁甕		18.1	—	—	頸部径14.1 頸部高3.0	平行沈線6条　頸部内面横ケズリ	
62	61	SB9	E	土師器	山陰系口縁甕		—	—	—	—	平行線文5条　頸部内面ケズリ	外面スス付着
63	323	SB9	E	土師器	壺		—	—	—	—	外面横線文・貝殻刺突文	
64	602	SB9	D	土師器	壺(パレス)		—	—	—	—	外面横線文　貝殻刺突文・赤彩	
65	957	SB9	E	土師器	壺		—	—	—	—	外面横線文・ヘザミ	
66	868	SB9	E	土師器	壺(パレス)		—	—	—	頸部突帯・口縁部内外面赤彩		
67	483	SB9	E	土師器	壺		—	—	—	頸部径10.5	内外面横ナデ　頸部突帯	
68	200	SB9	E	土師器	壺		—	—	7.2	—	外面ミガキ	
69	861	SB9	E	土師器	有段高杯		15.3	—	—	杯部高7.4	杯部内外面斜めミガキ・脚部内外面横ミガキ	内外面スス付着
70	199	SB9	E	土師器	有段高杯		—	—	—	脚端部径10.8 脚基部径3.4	脚部外面縦ミガキ・内面横ナデ 脚端部外面多条沈線(4条) 透孔(1段3方向)	
71	53	SB9	E	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径3.6	脚部外面縦ミガキ　透孔(1段3方向)	
72	436	SB9	E	土師器	台付鉢		11.8	15.2	8.0	脚端部径8.0 脚基部径3.5 脚高5.6	外面ミガキ 透孔(1段2方向)	内外面スス付着
73	6	SB9	E	土師器	小型鉢		8.6	6.4	3.7	胴部最大径6.8	内外面横ミガキ	
74	995	SB9	D	土師器	小型壺		10.8	—	—	頸部径9.4 頸部高2.7 胴部最大径11.7	外面横ナデ?	
75	456	SB20	A	土師器	広口壺		13.9	—	—	頸部径9.3 頸部高3.3 胴部最大径24.4	頸部外面縦ミガキ? 体部外面斜めハケ・内面上半横ナデ・下半横ハケ	外来系?
76	403	SB20	A	土師器	器台		—	—	—	脚基部径4.4	脚部外面縦ミガキ　透孔(1段2組2方向?)	
77	617	SD3	A	弥生土器	太頸壺	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部内面横ハケ?	
78	618	SD3	A	弥生土器	壺(広郷)	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜めハケのち斜格子文・連弧文	
79	563	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(18.6)	—	—	頸部径(15.7) 頸部高2.1	口縁部内外面横ナデ 外面横線文・刺突文	
80	541	SD3	A	土師器	受口口縁甕		19.7	—	—	頸部径16.2 頸部高2.9 胴部最大径24.5	口縁部内外面横ナデ・端部列点文 体部外面斜めハケ・内面横ナデ 体部外面横線文・列点文	内外面スス付着
81	540	SD3	A	土師器	受口口縁甕		20.5	—	—	頸部径16.5 頸部高3.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
82	677	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(20.5)	—	—	頸部径(17.4) 頸部高3.0	口縁端部に列点文	
83	594	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(18.5)	—	—	—	口縁部内外面横ナデ　口縁端部列点文	
84	678	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(18.4)	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
85	683	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(16.7)	—	—	頸部径(16.7) 頸部高2.2	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
86	679	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(15.3)	—	—	頸部径(12.7) 頸部高2.8	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
87	434	SD3	A	土師器	受口口縁甕		18.2	—	—	頸部径14.5 頸部高2.9	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
88	593	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(17.4)	—	—	頸部径(13.5) 頸部高3.3	口縁部内外面横ナデ　口縁端部列点文 外面横線文・体部外面列点文	外面スス付着
89	684	SD3	A	土師器	受口口縁甕		16.9	—	—	頸部径16.9 頸部高2.5		
90	687	SD3	A	土師器	受口口縁甕		(21.6)	—	—	頸部径(19.3) 頸部高1.8	口縁部から体部内外面横ナデ	外面スス付着
91	542	SD3	A	土師器	くの字甕		20.3	—	—	頸部径16.7 頸部高3.0 胴部最大径29.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面斜めケズリ 外面横線文・列点文	内外面スス付着
92	551	SD3	A	土師器	くの字甕		(21.2)	—	—	頸部径(17.5) 頸部高1.8 胴部最大径(24.6)	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面斜めナデ 外面横線文・列点文	外面スス付着
93	548	SD3	A	土師器	くの字甕		18.2	—	—	頸部径14.2 頸部高2.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	外面スス付着
94	384	SD3	A	土師器	くの字甕		21.1	—	—	頸部径16.8 頸部高2.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面上半横ナデ・下半横ハケ	内外面スス付着
95	549	SD3	A	土師器	くの字甕		16.0	—	—	頸部径12.9 頸部高2.5 胴部最大径17.0	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
96	580	SD3	A	土師器	くの字甕		(12.1)	—	—	頸部径(10.2) 頸部高2.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ハケ	
97	581	SD3	A	土師器	くの字甕		(13.1)	—	—	頸部径11.1 頸部高2.2	口縁部内外面横ナデ 体部内面横ハケ	
98	544	SD3	A	土師器	くの字甕		16.0	—	—	頸部径14.8 頸部高3.7 胴部最大径18.8	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケのち横ナデ・内面横ナデ	胴部穿孔
99	680	SD3	A	土師器	くの字甕		—	—	—	—		
100	538	SD3	A	土師器	くの字台付甕		—	—	—	台端部径9.5 台基部径5.7 台高3.7		内外面スス付着
101	575	SD3	A	土師器	有段高杯		24.2	19.5	18.5	脚基部径5.0 脚高8.2	杯部内外面斜めミガキ 脚部外面縦ミガキ・内面斜めハケ 透孔(1段2組2方向)	
102	582	SD3	A	土師器	有段高杯		31.9	—	—	—	杯部内外面ミガキ	
103	577	SD3	A	土師器	有段高杯		(27.9)	—	—	—		
104	569	SD3	A	土師器	有段高杯		24.6	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
105	387	SD3	A	土師器	有段高杯		(31.2)	—	—	—	杯端部内面に多条沈線(4条)	
106	682	SD3	A	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯端部内面に多条沈線(4条)	
107	572	SD3	A	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯部内外面斜めミガキ 杯端部内面多条沈線(5条)	
108	439	SD3	A	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯端部内面に多条沈線(4条)	
109	539	SD3	A	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径3.8	脚部外面縦ミガキ	
110	297	SD3	A	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径3.9	透孔(2段3方向)	
111	570	SD3	A	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径4.5	脚部外面縦ミガキ	杯部内面中央に窪み
112	579	SD3	A	土師器	有段高杯?		—	—	—	脚基部径4.7	穿孔(1段3方向)	

第４表　遺物観察表(2)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
113	676	SD3	A	土師器	有段高杯？		—	—	11.7	脚基部径4.0 脚高7.6	脚部内面斜めハケ 透孔(1段3方向)	
114	381	SD3	A	土師器	有段高杯		—	—	—	脚端部径8.5 脚基部径3.9 脚高5.0	杯部内外面横ナデ？ 透孔(1段3方向)	
115	671	SD3	A	土師器	有段高杯		(40.0)	—	—	—	杯部内外面ミガキ　杯端部内面多条沈線(4条)	
116	428	SD3	A	土師器	高杯(椀形)		20.0	—	—	杯部高8.5 脚基部径3.9	杯部外面縦ミガキ・内面ミガキ・杯端部内外面横ミガキ	
117	674	SD3	A	土師器	器台		—	—	17.9	脚基部径3.8 脚高9.8	杯部内外面縦ミガキ 脚部外面縦ミガキ・内面斜めハケ 透孔(1段3方向)	
118	688	SD3	A	土師器	器台		—	—	—	脚基部径4.3	脚部縦ミガキ　透孔(2方向)	
119	673	SD3	A	土師器	器台		17.8	12.7	12.9	脚基部径4.2 脚高8.2	杯部内外面縦ミガキ 脚部外面縦ミガキ・内面斜めハケ 透孔(1段3方向)	
120	390	SD3	A	土師器	鉢		18.3	—	—	頸部径14.9 頸部高2.7	口縁部内外面横ナデ・端部貝殻による刺突文 体部外面上半横線文・列点文・下半ケズリ 体部内面斜めハケ	
121	535	SD3	A	土師器	小型鉢		9.3	4.5	3.8	—	口縁部内面横ハケ	
122	536	SD3	A	土師器	小型鉢		10.0	6.0	4.0	—	口縁部内面横ハケ	
123	533	SD3	A	土師器	小型鉢		12.3	7.5	4.5	—	体部内外面斜めハケ　口縁端部内外面横ナデ	
124	386	SD3	A	土師器	小型鉢		11.5	—	—	頸部径10.3 頸部高2.5 胴部最大径10.7	内外面ミガキ 口縁端部外面多条沈線(5条)	
125	613	SD3	A	土師器	ひさご壺？		14.4	—	—	—		
126	887	SD3	A	土師器	ひさご壺		—	—	—	胴部最大径13.1	外面横ミガキ	
127	681	SD3	A	土師器	ひさご壺？		8.3	—	—	—		
128	686	SD3	A	土師器	ひさご壺？		—	—	—	—		
129	857	SD3	A	土師器	広口壺		—	—	—		体部内面横ハケ	体部外面線刻
130	98	SX10	B	土師器	S字甕	A類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ・外面押引刺突文 頸部内面横ハケ	
131	122	SX10	B	土師器	S字甕	B類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ　体部外面斜めハケ 頸部内面横ハケ	外面スス付着
132	631	SX10	B	土師器	S字甕	B類	15.5	—	—	頸部径13.5 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ　体部外面羽状ハケ・横ハケ　頸部内面横ハケ	外面スス付着
133	426	SX10	B	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径9.4 台基部径5.9 台高5.3	脚台部外面斜めハケのち縦ナデ	脚台部内外面スス付着
134	427	SX10	B	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径4.7 台基部径7.7 台高5.1	脚台部外面斜めハケ	脚台部内外面スス付着
135	504	SX10	B	土師器	広口壺		16.2	—	—	—	口縁内外面斜めハケ 口縁端部疑凹線文？・赤彩	
136	510	SX10	B	土師器	パレス壺		—	—	—	—	外面山形文・横線文・赤彩	
137	438	SX10	B	土師器	パレス壺		—	—	7.7	—	体部外面下半赤彩	
138	537	SX10	B	土師器	パレス壺		—	—	5.1	—	体部外面下半横ミガキ・赤彩　内面横ハケ	
139	502	SB25	C	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	(16.9)	—	—	頸部径(14.7) 頸部高1.6	体部外面縦ハケのち叩き 口縁端部キザミ・内面横ナデ	外面スス付着
140	799	SB25	C	弥生土器	甕	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部内面横ハケ	
141	912	SB25	C	弥生土器	甕？	弥生中期後半	—	—	—	—	外面波状文	
142	938	SB25	C	弥生土器	甕	弥生中期後半	—	—	—	—	外面波状文	
143	783	SB25	C	弥生土器	平底甕？		—	—	4.4	—		外面スス付着
144	555	SB25	C	土師器	有段高杯		23.2	—	—	—	杯部内外面ミガキ(端部内面横ミガキ)	
145	597	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯部内外面ミガキ 杯部端部内面に沈線文・連弧文	
146	377	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	脚端部径21.3	脚裾部斜めミガキ　脚端部外面に沈線文・連弧文　脚部内面斜めハケのち横ナデ	
147	90	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径4.0	脚部外面上半縦ミガキ・下半斜めミガキ 透孔(2段4方向)	
148	87	SB25	C	土師器	器台		—	—	—	脚端部径14.3 脚基部径4.2 脚高7.3	脚部外面上半縦ミガキ・下半横ミガキ 脚部内面横ハケ・横ナデ 透孔(1段3方向)	外面スス付着
149	369	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径3.6	脚部外面上半縦ミガキ・下半斜めミガキ・内面斜めハケ　透孔(1段3方向)	
150	562	SB25	C	土師器	器台		—	—	—	脚基部径4.4	脚部外面縦ミガキ　透孔	
151	591	SB25	C	土師器	器台		21.0	—	—	—	杯部内外面縦ミガキ	内面スス付着
152	48	SB25	C	土師器	広口壺		15.0	—	—	頸部径10.7 頸部高3.4	口縁部内外面横ナデ 口縁端部擬凹線(4条)	
153	47	SB25	C	土師器	広口壺		—	—	—	頸部高4.0	口縁部内面ミガキ	唐下部薄利
154	311	SB25	C	土師器	パレス壺		—	—	—	—	口縁部内面羽状刺突文　口縁部内外面赤彩	
155	648	SB25	C	土師器	ひさご壺		(13.0)	—	—	—	口縁部内外面斜めミガキ	
156	596	SB25	C	土師器	ひさご壺？		—	—	—	—	口縁部内外面ミガキ 口縁端部外面多条沈線(6条)	
157	498	SB25	C	土師器	小型壺？		(8.0)	—	—	頸部径(5.0)	内外面縦ミガキ	
158	651	SB25	C	土師器	壺		—	—	—	—	外面ミガキ	外面線刻
159	561	SB25	C	土師器	くの字甕		(15.6)	—	—	頸部径(12.0) 頸部高2.7	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
160	150	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径3.1	透孔(1段3方向)	
161	89	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	脚端部径11.8 脚基部径3.2 脚高7.0	透孔(2段3方向)	
162	94	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径3.0	脚部外面上半縦ミガキ・下半斜めミガキ	
163	46	SB25	C	土師器	有段高杯		—	—	—	脚部径3.4	透孔(1段3方向)	
164	635	SB25	C	土師器	S字甕	C類	(11.4)	—	—	頸部径(9.4) 頸部高1.1	口縁部内外面横ナデ　体部外面斜めハケ・横ハケ　体部内面横ナデ	
165	385	SB25 床直	D	土師器	S字甕	C類	16.4	—	—	頸部径13.7 頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	外面スス付着
166	549	SB25	C	土師器	S字甕	C類	14.4	16.9	—	頸部径12.0 頸部高2.3 胴部最大径10.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・横ハケ	内外面スス付着
167	560	SB25	C	土師器	S字甕	C類	(18.2)	—	—	頸部径(15.5) 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	
168	396	SB25	C	土師器	S字甕	C類	15.6	—	—	頸部径12.4 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ　体部外面斜めハケ・横ハケ　体部内面横ナデ	外面スス付着
169	197	SB25 床直	C	土師器	S字甕	C類	16.6	—	—	頸部径13.4 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	外面スス付着
170	382	SB25	C	土師器	S字甕	C類	(18.9)	—	—	頸部径(15.2) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ	内外面スス付着

第４表　遺物観察表(3)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
171	552	SB25	C	土師器	S字甕	D1類	18.2	—	—	頸部径15.6 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	
172	359	SB25	C	土師器	S字甕		—	—	—	台基部径5.4	脚台部外面斜めハケ	内外面スス付着
173	357	SB25	C	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径11.6 台基部径7.7 台高5.2	脚台部外面斜めハケ	
174	358	SB25	C	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径12.1 台基部径6.2 台高5.4	脚台部外面斜めハケ	脚台部内外面使用痕
175	468	SK1	C	土師器	S字甕	C類	17.1	26.2	10.0	頸部径14.1 頸部高1.2 台端部径10.0 台基部径5.9 台高5.4 胴部最大径25.8	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・横ハケ 脚台部外面斜めハケ・内面横ナデ	内外面スス付着
176	398	SK1	C	土師器	S字甕	C類	14.0	—	—	頸部径12.1 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	外面スス付着
177	556	SK1	C	土師器	S字甕		—	—	—	胴部最大径17.9 台基部径5.1	体部外面斜めハケ・内面横ナデ	内外面スス付着 脚台打ち欠く?
178	616	SK1	C	土師器	S字甕	C類	14.6	—	—	頸部径12.6 頸部高1.2 胴部最大径18.5 台基部径5.0	体部外面羽状ハケ・横ハケ	底部穿孔 内外面スス付着
179	910	SB30	F	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面直線文・波状文	
180	755	SB30	F	弥生土器	くの字甕		(16.2)	—	—	頸部径(14.3) 頸部高2.0	口縁部内外面横ナデ 口縁部に列点文	外面スス付着
181	771	SB30	F	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯部内外面ミガキ 杯端部内面沈線・連弧文	
182	754	SB30	F	土師器	S字甕	C類	(12.2)	—	—	頸部径(9.6) 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
183	758	SB30	F	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
184	773	SB30	F	土師器	S字甕		—	—	12.2	台基部径7.4 台高6.7	脚台部外面斜めハケ	外面スス付着
185	765	SB31	F	土師器	S字甕	C類	(14.6)	—	—	頸部径(12.2) 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
186	757	SB31	F	土師器	S字甕	C類	—	—	—	頸部高1.3	頸部内外面横ナデ	外面スス付着
187	761	SB31	F	土師器	S字甕	D1類	—	—	—	頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ　口縁端部に沈線	
188	760	SB31	F	土師器	S字甕	D1類	(13.1)	—	—	頸部径(9.9)	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
189	800	SK7	D	土師器	受口縁甕		(22.2)	—	—	頸部径(17.2) 頸部高3.4	口縁部内外面横ナデ	
190	499	SK7	D	土師器	S字甕	C類	13.4	—	—	頸部径11.0 頸部高0.9	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
191	962	SK7	D	土師器	S字甕	C類	17.5	—	—	頸部径14.6 頸部高1.5	体部外面斜めハケ	
192	974	SK7	D	土師器	S字甕	C類	(17.1)	—	—	頸部径(14.7) 頸部高1.7	体部外面斜めハケ	
193	987	SK7	D	土師器	S字甕	D1類	(17.5)	—	—	頸部径(13.9) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ	内外面スス付着
194	508	SK7	D	土師器	S字甕	D1類	(15.7)	—	—	頸部径(12.4) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
195	547	SK7	D	土師器	S字甕	C類	14.2	—	—	頸部径11.9 頸部高1.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・横ハケ　内面横ナデ	内外面スス付着
196	497	SK7	D	土師器	S字甕	D1類	17.7	—	—	頸部径14.2 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	
197	444	SK7	D	土師器	S字甕	山陰系	19.4	—	—	頸部径15.5 頸部高5.0	口縁部内外面横ナデ	内外面スス付着
198	450	SK7	D	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径10.2 台基部径5.8 台高5.6	脚台部外面斜めハケ	脚台部内外面スス付着
199	488	SK7	D	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径9.1 台基部径5.1 台高4.9	脚台部外面斜めハケ	脚台部内外面スス付着
200	489	SK7	D	土師器	S字甕		—	—	—	台基部径5.6	脚台部外面斜めハケ	脚台部内外面スス付着
201	415	SK7	D	土師器	壺		—	—	6.5	—	内底部ハケ	
202	976	SK7	D	土師器	器台		—	—	16.3	—	内外面縦ミガキ	
203	589	SX3	E	土師器	S字甕	C類	(15.1)	—	—	頸部径(12.3)	口縁部内外面横ナデ	
204	590	SX3	E	土師器	S字甕	C類	(15.6)	—	—	頸部径(12.9) 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
205	785	SX3	E	土師器	S字甕	D1類	14.5	—	—	頸部径12.0 頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
206	457	SX3	E	土師器	S字甕	山陰系	(21.4)	—	—	頸部径(16.9) 頸部高4.1	口縁部内外面横ナデ	
207	690	SX13	D	土師器	屈折脚高杯		16.9	—	—	脚基部径2.2	杯部内外面ミガキ　脚部外面縦ミガキ	内外面スス付着
208	888	SX13	D	土師器	小型丸底壺?		(11.1)	—	—	—	口縁部ミガキ	
209	73	SB4	C	土師器	くの字甕		(12.2)	—	—	—		外面スス付着
210	65	SB4	C	土師器	くの字甕		(13.1)	—	—	頸部径(10.0) 頸部高2.2	口縁部内外面横ナデ	
211	36	SB4	C	土師器	くの字甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ　体部内外面ナデ	外面スス付着
212	7	SB4	C	土師器	S字甕	D2類	(14.9)	—	—	頸部径(12.8) 頸部高(1.5)	体部外面斜めハケ	
213	473	SB4	C	土師器	S字甕	D3類	(15.2)	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
214	806	SB4	C	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
215	16	SB4	C	土師器	S字甕	D3類	13.5	—	—	頸部径10.4 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・体部内面横ナデ	内外面スス付着
216	480	SB4	C	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径(10.0) 台基部径(4.4) 台高(3.6)	脚台部外面斜めハケ	
217	491	SB4	C	土師器	屈折脚高杯		18.1	—	—	—		
218	493	SB4	C	土師器	屈折脚高杯		17.5	—	—	—	杯部外面横ナデ	
219	406	SB4	C	土師器	屈折脚高杯		18.1	—	—	杯部高5.1	杯部内面横ナデ	
220	495	SB4	C	土師器	屈折脚高杯		18.9	—	—	—	杯部外面横ナデ	
221	494	SB4	C	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚端部径12.7	脚端部内外面横ナデ	
222	414	SB4	C	土師器	小型丸底壺		8.5	—	—	—	口縁部外面横ナデ	
223	66	SB4	C	土師器	小型丸底壺		—	—	—	頸部径6.0 胴部最大径8.6	体部内面上半横ナデ・下半指ナデ	
224	72	SB4	C	土師器	小型丸底壺		—	—	—	頸部径(6.0)	体部内面横ナデ	
225	71	SB4	C	土師器	小型丸底壺		(5.4)	—	—	頸部径(4.8) 胴部最大径(8.4)		

第4表 遺物観察表(4)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
226	1010	SB8	D	土師器	くの字甕		—	—	—	—		
227	664	SB8	D	土師器	S字甕	C類	11.4	—	—	頸部径9.2 頸部高1.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
228	665	SB8	D	土師器	S字甕	D1類	(14.4)	—	—	頸部径(12.3) 頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ	
229	1012	SB8	D	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—		
230	407	SB8	D	土師器	S字甕	C類	14.7	—	—	頸部径11.7 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ　口縁端部に沈線 体部外面斜めハケ	
231	58	SB8	D	土師器	S字甕	D1類	(14.0)	—	—	頸部径(11.5) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ	
232	175	SB8	D	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
233	253	SB8	D	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
234	43	SB8	D	土師器	S字甕	D1類	14.8	—	—	頸部径12.3 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
235	322	SB8	D	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
236	127	SB8	D	土師器	S字甕	D1類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
237	8	SB8	D	土師器	S字甕	D3類	(16.6)	—	—	頸部径(14.2) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	
238	159	SB8	D	土師器	S字甕	D2類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
239	128	SB8	D	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
240	177	SB8	D	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—		
241	158	SB8	D	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
242	248	SB8	D	土師器	S字甕		—	—	11.4	台基部径5.9 台高5.3	脚台部外面斜めハケ	脚台部内外面スス付着
243	50	SB8	D	土師器	S字甕		—	—	—	台基部径4.2		底部穿孔
244	786	SB8	D	土師器	S字甕		—	—	—	台基部径4.5	脚台外面斜めハケ	脚台内面使用痕
245	977	SB8	D	土師器	屈折脚高杯		(18.2)	—	—	—	杯部内外面斜めミガキ	
246	178	SB8	D	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚基部径3.0	脚部外面縦ミガキ　杯部内底部ミガキ	外面スス付着
247	176	SB8	D	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚基部径2.7	杯部内底部ミガキ？	
248	963	SB8	D	土師器	屈折脚高杯		—	—	10.8	—	脚柱部外面縦ミガキ	
249	54	SB8	D	土師器	壺		15.0	—	—	頸部径11.2 頸部高2.9		
250	35	SB8	D	土師器	広口壺		16.1	—	—	頸部径11.6 頸部高4.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面ナデ・内面横ハケ	
251	55	SB8	D	土師器	小型丸底壺		7.9	—	—	頸部径6.1 頸部高2.3 胴部最大径9.0	口縁部内外面・体部外面ミガキ？	外面スス付着
252	791	SB8	D	土師器	小型丸底壺		10.5	—	—	頸部径8.0	口縁部内外面横ナデ	
253	975	SB8	D	土師器	小型丸底壺		11.0	—	—	—	口縁部内外面横ナデのち外面縦ミガキ	
254	198	SB10	E	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	4.7	—	体部外面斜めハケ	外面スス付着
255	228	SB10	E	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	5.5	—	体部外面縦ハケ	
256	138	SB10	E	弥生土器	細頸壺	弥生中期後半	8.5	—	—	頸部径6.4 頸部高8.1	口縁部外面凹線 頸部外面羽状刺突文・横線文	
257	659	SB10	E	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面波状文・横線文	
258	917	SB10	E	弥生土器	壺		—	—	—	—	体部外面竹管文	
259	918	SB10	E	弥生土器	壺		—	—	—	—	体部外面竹管文	
260	196	SB10	E	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯部内外面ミガキ 杯端部内面に多条沈線(7条)	
261	996	SB10	E	土師器	ひさご壺		—	—	—	—	内外面ミガキ　口縁端部外面多条沈線(5条)	
262	629	SB10	E	土師器	S字甕	B類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ　頸部内面横ハケ	
263	926	SB10	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—		
264	630	SB10	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
265	232	SB10	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	
266	326	SB10	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
267	231	SB10	E	土師器	S字甕	D2類	—	—	—	頸部高1.2		
268	162	SB10	E	土師器	S字甕	D3類	(16.5)	—	—	頸部径(13.9) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
269	229	SB10	E	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
270	161	SB10	E	土師器	宇田型甕		(17.7)	—	—	頸部径(15.3) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
271	627	SB10	E	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
272	220	SB10	E	土師器	宇田型甕		(16.3)	—	—	頸部径(13.8) 頸部高1.5	体部外面斜めハケ	
273	161	SB10	E	土師器	宇田型甕		14.9	—	—	頸部径12.6 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
274	241	SB10	E	土師器	宇田型甕		14.5	—	—	頸部径12.4 頸部高1.5	体部外面斜めハケ	
275	163	SB10	E	土師器	宇田型甕		(15.5)	—	—	頸部径(12.5) 頸部高1.9	口縁部内外面横ナデ	
276	325	SB10	E	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
277	230	SB10	E	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
278	628	SB10	E	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
279	534	SB10 床直	E	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径10.5	脚台部外面板ナデ	
280	287	SB10	E	土師器	くの字甕		12.2	—	—	頸部径10.2 頸部高1.8	口縁部内外面横ナデ 体部内面板横ナデ	内外面スス付着 比熱
281	223	SB10	E	土師器	くの字甕		13.0	—	—	頸部径10.9 頸部高1.9	口縁部内外面横ナデ 体部内面板横ナデ	内外面スス付着 比熱
282	482	SB10 カット	E	土師器	屈折脚高杯		16.1	12.5	11.1	脚端部径11.1 脚基部径2.8 脚高6.4		内外面スス付着 比熱
283	674	SB10	E	土師器	屈折脚高杯		—	—	10.8	脚基部径3.0 脚高4.8		
284	485	SB10 カット	E	土師器	屈折脚高杯 (垂下稜？)		18.3	—	—	杯部高9.1 脚基部径3.7	杯部内外面横ナデ	外面スス付着 比熱？
285	218	SB10	E	土師器	屈折脚高杯		(18.5)	—	—	—		
286	997	SB10	E	土師器	杯部椀形高杯		(13.9)	—	—	—		
287	865	SB10	E	土師器	小型丸底壺		9.7	—	—	頸部径6.3 頸部高3.4		
288	625	SB10	E	土師器	鉢？		(15.7)	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
289	399	SB10	E	須恵器	杯蓋	H-11新　尾張系	—	—	—	最大径(11.7)	天井部外面回転ヘラケズリ	
290	242	SB10	E	須恵器	杯身	H-11新　尾張系	9.7	—	—	受け部径12.0 受け部高1.8	外底部回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
291	243	SB10	E	須恵器	杯身	H-11新　尾張系	9.6	—		受け部径11.7 受け部高1.7	外底部回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
292	221	SB10	E	須恵器	甕	H-11新併行	8.8	—	—	—		
293	219	SB10	E	須恵器	無蓋高杯	H-11新併行	(18.2)	—	—	—	杯部外面に波状文	
294	455	SB12	B	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	4.8	—	外面縦ハケ	

第４表　遺物観察表(5)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
295	103	SB12	B	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	5.8	－	外面縦ハケ	外面スス付着
296	189	SB12	B	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	6.1	－	内面縦ケズリ	
297	943	SB12	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面斜めハケのち横線文・波状文	
298	925	SB12	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面斜めハケのち波状文・横線文	
299	932	SB12	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面斜めハケのち横線文・波状文	
300	933	SB12	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面斜めハケのち波状文・横線文	
301	951	SB12	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面縦ハケのち横線文	
302	911	SB12	B	弥生土器	甕(貝田町)	弥生中期後半	－	－	－	－	外面条痕？内面波状文	
303	1006	SB12	B	弥生土器	壺？	弥生中期後半	－	－	－	－	外面縦ハケ 内面横ハケ	
304	505	SB12	B	弥生土器	高杯	弥生中期後半	－	－	－	頸部径7.0	杯部内面横ハケ	
305	181	SB12	B	弥生土器	高杯	山中前期	(21.5)	－	－	－	部端部外面沈線文 杯部外面ハケ	
306	795	SB12	B	弥生土器	壺		－	－	5.7	－	外面縦ハケ	
307	599	SB12	B	弥生土器	小型壺		－	－	－	－	外面皮線文・連点文・アヤ杉文・赤彩	
308	57	SB12	B	弥生土器	受口口縁甕		－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ 外面矢羽状のキザミ	
309	515	SB12	C	弥生土器	広口壺		－	－	－	－	口縁部内面赤彩	
310	86	SB12	B	土師器	くの字甕		13.7	－	－	頸部径11.4 頸部高3.0	口縁部内面横ナデ 口縁部・体部外面斜めハケ 体部内面斜めナデ	外面スス付着
311	807	SB12	B	土師器	くの字甕		9.2	－	－	頸部径8.6 頸部高2.2	口縁部内外面横ナデ	
312	476	SB12	C	土師器	S字甕	D2類	14.2	－	－	頸部径12.2 頸部高1.3	体部外面斜めハケ	
313	475	SB12	B	土師器	S字甕	D3類	(19.5)	－	－	頸部径(16.9) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
314	12	SB12	B	土師器	宇田型甕		(17.7)	－	－	頸部径(15.7) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	外面スス付着
315	13	SB12	B	土師器	S字甕	D3類	16.6	－	－	頸部径13.5 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	外面スス付着
316	296	SB12	B	土師器	S字甕	D3類	14.9	－	－	頸部径12.3 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	
317	93	SB12	B	土師器	宇田型甕		17.5	－	－	頸部径15.4 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	内外面スス付着
318	236	SB12	B	土師器	宇田型甕		(16.5)	－	－	頸部径(13.8) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	外面スス付着
319	453	SB12	B	土師器	宇田型甕		14.6	－	－	頸部径12.6 頸部高1.9	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
320	443	SB12	B	土師器	S字甕		－	－	－	台端部径9.4 台基部径4.2 台高6.1	脚台部外面斜めハケ	
321	365	SB12	B	土師器	S字甕	D類	－	－	－	台基部径5.2	脚台部外面斜めハケ	内面スス付着
322	554	SB12	B	土師器	くの字台付甕		－	－	－	台端部径8.9		外面スス付着
323	106	SB12	B	土師器	くの字台付甕		－	－	－	台端部径8.6 台基部径3.6 台高4.1		外面スス付着
324	96	SB12	B	土師器	宇田型甕？		－	－	－	台端部径7.7 台基部径4.1 台高3.2		脚部内外面スス付着
325	973	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		17.8	－	－	－	杯部外面横ナデ	外面スス付着 比熱
326	999	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		17.3	－	－	－	杯部内外面横ナデ	
327	578	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		20.2	－	－	－	杯部内外面横ナデ	
328	91	SB12	B	土師器	屈折脚高杯 (垂下稜)		18.6	－	－	杯部高8.4 脚基部径3.8	杯部内外面横ナデ	
329	113	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		－	－	－	脚基部径2.7		
330	511	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		－	－	－	脚端部径12.4 脚基部径3.0 脚高6.8	脚裾部横ナデ	
331	553	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		－	－	－	脚基部径3.0		
332	95	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		－	－	－	脚基部径2.7		
333	564	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		－	－	－	脚基部径2.9		外面スス付着
334	1002	SB12	B	土師器	杯部椀形高杯		－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
335	479	SB12	B	土師器	杯部椀形高杯		－	－	－	－		
336	1001	SB12	B	土師器	杯部椀形高杯		－	－	－	－		
337	1000	SB12	B	土師器	屈折脚高杯		－	－	11.1	－	脚裾部横ナデ	
338	866	SB12	B	土師器	小型丸底壺		(10.2)	－	－	頸部径(7.3) 頸部高3.2		
339	92	SB12	B	土師器	小型丸底壺		－	－	－	頸部径6.5 胴部最大径9.7	体部内面横ナデ	
340	471	SB12	B	土師器	丸底壺		12.0	－	3.2	頸部径8.2 頸部高3.3 胴部最大径14.0		
341	460	SB12	B	土師器	丸底壺		9.5	－	－	頸部径7.2 頸部高4.0 胴部最大径13.0	口縁部内外面横ナデ	
342	164	SB13	C	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	－	－	外面縦ハケのち叩き	外面スス付着
343	523	SB13	C	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	－	－	－	－	頸部内面横ハケ 口縁端部キザミ	外面スス付着
344	669	SB13	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	－	－	－	－	外面斜めハケのち横線文・波状文	
345	978	SB13	C	弥生土器	高杯	弥生中期後半	(21.7)	－	－	－	杯部内面ハケ	
346	527	SB13	C	弥生土器	壺(瓜瓶)	弥生中期後半	－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ 口縁端部キザミ	
347	666	SB13	C	弥生土器	壺(瓜瓶)	弥生中期後半	－	－	－	－	体部外面斜格子文	
348	286	SB13	C	弥生土器	甕(貝田町)	弥生中期後半	－	－	－	－	体部外面横位条痕 口縁端部内面波状文	外面スス付着
349	528	SB13	C	土師器	有段高杯？		－	－	－	脚端部径15.6	透孔	外面スス付着
350	321	SB13	C	土師器	壺		－	－	7.2	－		
351	143	SB13	C	土師器	S字甕	D3類	(14.7)	－	－	頸部径(12.0) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
352	11	SB13	C	土師器	S字甕	D3類	(17.8)	－	－	頸部径(14.0) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
353	526	SB13	C	土師器	宇田型甕		(16.5)	－	－	頸部径(14.5) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
354	521	SB13	C	土師器	S字甕	C類	－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
355	524	SB13	C	土師器	S字甕	D3類	－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
356	520	SB13	C	土師器	宇田型甕		－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
357	522	SB13	C	土師器	宇田型甕		－	－	－	－	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
358	519	SB13	C	土師器	くの字台付甕		－	－	－	台端部径8.6 台基部径3.2 台高3.8	脚台部内面横ハケ	
359	430	SB13	C	須恵器	杯蓋	H-50併行 美濃	10.4	4.3	4.0	－		
360	251	SB13	C	須恵器	高杯	7C前半	14.3	－	－	－	底部外面回転ヘラケズリ	

第4表 遺物観察表(6)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
361	525	SB13	C	須恵器	壺	6C末～7C初 陶邑内系	12.9	—	—	頸部径10.4 頸部高2.7		降灰
362	620	SB14	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面擬ハケのち波状文	
363	340	SB14	C	土師器	くの字甕		—	—	—	—		
364	300	SB14	C	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚端部径13.5 脚基部径3.2 脚高7.5		
365	313	SB14	C	土師器	S字甕	D2類	(17.2)	—	—	頸部径(15.0)	体部外面斜めハケ	
366	623	SB15	D	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面横線文	
367	944	SB15	D	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面波状文	
368	284	SB15	D	弥生土器	甕？		—	—	5.5	—		
369	344	SB15	D	弥生土器	壺		—	—	—	—	口縁端部外面多条沈線(4条)	
370	252	SB15	D	土師器	壺？		—	—	—	—	口縁端部櫛回線(4条)	
371	956	SB15	D	土師器	壺		—	—	—	—	外面横線文・刺突文(ハケメ原体)	
372	294	SB15	D	土師器	屈折外反高杯		—	—	—	脚基部径2.8	透孔(1段3方向)	
373	360	SB15	D	土師器	有段高杯		—	—	—	—	内面斜めミガキ 杯部内面に沈線文・櫛歯文	
374	226	SB15	D	土師器	くの字甕		—	—	—	頸部高3.4	口縁部内外面横ナデ	
375	104	SB15	D	土師器	くの字甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
376	145	SB15	D	土師器	くの字甕		10.1	—	—	頸部径9.4 頸部高1.1	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
377	614	SB15	D	土師器	S字甕	D2類	(12.5)	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 体外面羽状ハケ	外面スス付着
378	604	SB15	D	土師器	S字甕	D3類	15.0	—	—	頸部径12.2 頸部高1.6	体部外面斜めハケ	
379	603	SB15	D	土師器	S字甕	D3類	(18.6)	—	—	頸部径(16.0) 頸部高(1.5)	体部外面斜めハケ	
380	961	SB15	D	土師器	S字甕	D2類	—	—	—	—		
381	141	SB15	D	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
382	144	SB15	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—		
383	343	SB15	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—		外面スス付着
384	142	SB15	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—		
385	601	SB15 炉上	D	土師器	宇田型甕		16.5	31.3	10.6	頸部径14.0 頸部高1.3 台基部径4.6 台高4.2 胴部最大径27.3	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・肩部に1条横ナデ	外面スス付着
386	356	SB15	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径8.3 台基部径4.6 台高4.1	体部外面斜めハケ 脚台部外面斜めナデ(板状工具)	内底部スス付着
387	446	SB15	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径10.8 台基部径4.4 台高4.8	脚台部外面斜めハケ(板状工具)	脚内面スス付着
388	156	SB15	D	土師器	伊勢型甕？		—	—	—	—	口縁部外面横ナデ 内面横ハケ	
389	496	SB15	D	土師器	屈折脚高杯		17.5	—	—	脚基部径3.0 杯部高5.9		
390	609	SB15	D	土師器	屈折脚高杯		17.8	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
391	600	SB15	D	土師器	屈折脚高杯？		—	—	—	脚基部径2.5		
392	154	SB15	D	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚端部径10.1 脚基部径2.9 脚高4.5		
393	608	SB15	D	土師器	杯部椀形高杯		(13.9)	—	—	—		
394	155	SB15	D	土師器	甑		(28.7)	—	—	胴部径(28.8)	内外面横ナデ	
395	448	SB15	D	土師器	甑		—	—	—	—		宇田型甕の胎土酷似 内外面スス付着
396	302	SB15	D	土師器	小型丸底壺		7.4	7.7	4.6	頸部径5.5 頸部高2.6	口縁部内外面横ナデ	
397	285	SB15	D	土師器	鉢？		9.3	—	—	—		
398	660	SB18	E	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面横線文・波状文・竹管文	
399	215	SB18	E	土師器	受口口縁甕		—	—	—	頸部高2.8	口縁部内外面	外面スス付着
400	244	SB18	E	土師器	鉢		—	—	5.0	—		
401	152	SB18	E	土師器	壺		—	—	5.8	—		
402	291	SB18	E	土師器	S字甕	C類	11.7	—	—	頸部径11.7 頸部高1.6	体部外面斜めハケ	
403	146	SB18	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—		
404	327	SB18	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
405	328	SB18	E	土師器	S字甕	C類	13.2	—	—	頸部径10.0 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
406	247	SB18	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
407	506	SB18	E	土師器	くの字台付甕		—	—	—	台端部径8.2 台基部径4.7 台高3.9		脚台部内面使用痕
408	671	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		18.5	11.2	12.8	脚基部径3.1 脚高6.2		
409	112	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		17.4	—	—	杯部高6.8 脚基部径3.4	杯部内外面横ナデ	
410	860	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		18.3	—	—	杯部高5.5	杯部内外面横ナデ	内外面スス付着
411	484	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		—	—	12.1	脚端部径12.1 脚基部径3.2 脚高7.3	杯部内外面横ナデ	
412	157	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		18.2	—	—	杯部高6.0 脚基部径2.9	杯部内外面横ナデ	
413	216	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		18.7	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
414	530	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚端部径11.4 脚基部径3.0 脚高8.2	脚端部横ナデ	
415	153	SB18	E	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚基部径3.1		
416	529	SB18	E	土師器	器台		—	—	—	—		
417	194	SB18	E	土師器	柳ケ坪型壺		—	—	—	—	口縁部内外面上段に羽状刺突文	
418	160	SB18	E	土師器	柳ケ坪型壺		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 口縁部内面上段に羽状刺突文	
419	458	SB18	E	土師器	壺		—	—	7.3	—		SD4か
420	459	SB18	E	土師器	壺		—	—	6.8	—	外底部に木葉痕	内面スス付着 SD4か
421	763	SB32	F	土師器	くの字甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
422	759	SB32	F	土師器	S字甕	C類	(13.0)	—	—	頸部径(10.9) 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	
423	764	SB32	F	土師器	S字甕	C類	—	—	—	頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	
424	762	SB32	F	土師器	S字甕	C類	—	—	—	頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	
425	756	SB32	F	土師器	S字甕	C類	(14.9)	—	—	頸部径(12.2) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	

第４表 遺物観察表(7)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
426	770	SB32	F	土師器	鉢?		—	—	5.3	—		
427	850	SB32	F	土師器	宇田型甕		17.7	34.2	10.9	頸部径14.6 頸部高1.7 台基部径4.9 台高4.8 胴部最大径28.8	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・屑部横ハケ・内面横ナデ	外面スス付着
428	855	SB32	F	土師器	屈折脚高杯 (垂下稜)		19.2	—	—	—		
429	854	SB32	F	土師器	屈折脚高杯 (垂下稜)		18.5	—	—	脚基部径3.2	杯部内外面横ナデ	
430	853	SB32	F	土師器	屈折脚高杯		15.3	12.4	11.6	脚基部径3.2 脚高6.3	杯部内外面横ナデ 脚裾部内外面横ナデ	
431	769	SB32	F	土師器	屈折脚高杯		15.2	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
432	768	SB32	F	土師器	屈折脚高杯		14.7	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
433	772	SB32	F	土師器	屈折脚高杯?		—	—	—	脚端部径(9.6)		
434	689	SB32	F	土師器	壺		—	—	5.7	—	内外面横ナデ	
435	819	SD19	G	土師器	S字甕	D3類	(13.5)	—	—	頸部径(10.8) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	
436	781	SD19	G	土師器	S字甕		—	—	—	台基部径5.3	体部外面斜めハケ	底部穿孔 外面スス付
437	752	SX09	F	土師器	S字甕	C類	10.1	—	—	頸部径8.8 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ 口縁端部に沈線 体部外面斜めハケ	
438	728	SX09	F	土師器	柳ケ坪型壺?		(19.3)	—	—	—	口縁部外面横ナデ・内面羽状刺突文	
439	731	SX09	F	土師器	くの字甕?		—	—	—	頸部径8.5	体部外面横ナデ	外面スス付着
440	1016	SB1	B	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面叩き痕	外面スス付着
441	667	SB1	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面斜めハケのち波状文・横線文	
442	668	SB1	B	弥生土器	甕(貝田町)	弥生中期後半	—	—	—	—	外面条痕 口縁端部内面刺突文	
443	506	SB1	B	弥生土器	壺(脚)	弥生中期後半	—	—	—	脚端部径9.4		
444	952	SB1	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	頸部外面縦ハケのち横線文	
445	462	SB1	B	土師器	宇田型甕		16.1	—	—	頸部径14.0 頸部高1.3 胴部最大径25.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ	外面スス付着
446	408	SB1	B	土師器	宇田型甕		17.2	—	—	頸部径14.9 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ	
447	486	SB1	B	土師器	宇田型甕		17.4	—	—	頸部径15.9 頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ	外面スス付着
448	409	SB1	B	土師器	宇田型甕		14.2	—	—	頸部径12.7 頸部高1.3		
449	411	SB1	B	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径10.7		外面スス付着
450	445	SB1	B	土師器	杯部椀形高杯		14.0	10.7	9.6	脚端部径9.0 脚基部径2.8 脚高5.7	杯部内面スス付着	
451	463	SB1	B	土師器	杯部椀形高杯		14.2	—	—	脚端部径8.6 脚基部径2.8 脚高5.3	脚端部横ナデ	外面スス付着
452	395	SB1	B	土師器	杯部椀形高杯		13.1	—	—	—		
453	985	SB1	B	土師器	杯部椀形高杯		(14.7)	—	—	—		外面スス付着
454	18	SB1	B	須恵器	蓋(高杯)	H-11 尾張系	11.3	6.3	—	受け部高2.3 最大径11.7 摘み径3.7 摘み高1.2	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕 降灰
455	255	SB1	B	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	11.5	—	—	受け部径11.4 受け部高2.2	天井部外面回転ヘラケズリ	
456	167	SB7	D	弥生土器	有段高杯		—	—	—	—	杯部内外面ミガキ 杯端部内面多条沈線(5条)	
457	513	SB7	D	土師器	器台		—	—	—	脚基部径3.0	脚部外面縦ミガキ	
458	69	SB7	D	土師器	壺		—	—	5.3	—		外面スス付着
459	81	SB7	D	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
460	512	SB7	D	土師器	宇田型甕		(12.5)	—	—	頸部径(10.2) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	
461	32	SB7	D	土師器	宇田型甕		(15.4)	—	—	頸部径13.1 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	
462	37	SB7	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	
463	209	SB7	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	
464	70	SB7	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
465	75	SB7	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
466	64	SB7 カマド	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径10.6 台基部径4.4 台高4.0	脚台部外面斜め板ナデ	内面・脚部内外面スス付着
467	672	SB7	D	土師器	杯部椀形高杯		14.3	10.2	9.8	脚基部径3.0 脚高4.7		
468	280	SB7	D	土師器	杯部椀形高杯		15.1	—	—	—	杯部内外面横ナデ	外面スス付着
469	514	SB7 カマド	D	土師器	杯部椀形高杯		14.1	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
470	1003	SB7 カマド	D	土師器	杯部椀形高杯		13.2	—	—	—		外面スス付着
471	79	SB7	D	土師器	杯部椀形高杯		—	—	—	—		
472	80	SB7	D	土師器	杯部椀形高杯		—	—	—	—	杯部内外面横ナデ	外面スス付着
473	1004	SB7	D	土師器	杯部椀形高杯		—	—	8.2	—		
474	994	SB7	D	土師器	杯部椀形高杯		—	—	9.8	—		
475	895	SB7	D	須恵器	杯身	H-11 尾張系	(9.8)	—	—	—		
476	34	SB7	D	土製品	土錘	—	—	—	—	長さ5.3 径2.0 孔径0.5		
477	964	SB17	AB	弥生土器	甕	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜めハケのち横線文	
478	922	SB17	AB	弥生土器	壺?	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜格子文	
479	254	SB17	AB	弥生土器	屈折外反高杯		—	—	—	—	透孔(1段3方向)	
480	329	SB17	AB	土師器	パレス壺		—	—	—	—	体部外面斜めハケのち横線文・鋸歯文・赤彩	
481	417	SB17	AB	土師器	くの字甕		(12.4)	—	—	頸部径(11.4) 頸部高1.5	外面横ナデ	
482	271	SB17	B	土師器	宇田型甕		(15.4)	—	—	頸部径(13.2) 頸部高1.7		
483	308	SB17	AB	土師器	屈折脚高杯		21.3	—	—	—		
484	886	SB17	AB	土師器	杯部椀形高杯		—	—	—	—		
485	984	SB17	AB	土師器	杯部椀形高杯		(13.1)	—	—	—		
486	405	SB17	AB	土師器	鉢・甑?		28.1	—	—	頸部径27.5 頸部高1.0	体部外面斜めナデ	
487	418	SB17	AB	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	11.0	—	—	—		口縁端部使用痕 降灰
488	419	SB17	AB	須恵器	高杯	GC末 畿内系	—	—	—	—		
489	404	SB17 カマド	AB	須恵器	杯身	H-11 尾張系	(10.6)	—	—	—		口縁端部使用痕

第４表 遺物観察表(8)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
490	245	SB17	A	須恵器	杯身	H-11 尾張系	11.2	—	—	受け部径13.7 受け部高1.6	外底部回転ヘラケズリ	
491	420	SB17	AB	須恵器	高杯	H-11 尾張系	9.4	—	—	—		
492	435	SB17	A	須恵器	杯蓋	H-50 尾張系	12.0	—	—	—	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
493	82	SB26	A	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
494	401	SB26	A	土師器	杯部椀形高杯		(13.2)	—	—	—		
495	212	SB26	A	土師器	杯部椀形高杯		13.3	—	—	—		
496	402	SB26	A	土師器	甑？		(25.1)	—	—	—	内外面横ナデ	口縁端部の形態、胎土宇田型甕に酷似
497	832	SB29	F	土師器	宇田型甕		(15.1)	—	—	頸部径(13.3) 頸部高1.4	体部外面斜めハケ	
498	831	SB29	F	土師器	宇田型甕		(16.2)	—	—	頸部径(13.7) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ	
499	839	SB29	F	土師器	宇田型甕		(13.6)	—	—	頸部径(11.3) 頸部高1.0		
500	833	SB29	F	土師器	宇田型甕		—	—	—	頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
501	834	SB29	F	土師器	宇田型甕		—	—	—	頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
502	729	SB29	F	土師器	宇田型甕		11.3	—	—	頸部径9.7 頸部高1.1 胴部最大径14.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状のハケ	内外面スス付着
503	835	SB29	F	土師器	くの字台付甕		—	—	8.5	台基部径5.2 台基部高3.7	脚台部外面斜めハケ	
504	836	SB29	F	土師器	屈折脚高杯		(15.9)	—	—	—		
505	838	SB29	F	土師器	屈折脚高杯		—	—	(12.8)	—	脚裾部内外面横ナデ	
506	737	SB29	F	土師器	杯部椀形高杯		—	—	—	—		
507	837	SB29	F	土師器	杯部椀形高杯		—	—	—	—		
508	840	SB29	F	土師器	杯部椀形高杯？		—	—	10.0	—		
509	730	SB29 ｶｸﾄﾞ	F	須恵器	杯身	H-48～H-11 尾張系	9.9	—	—	受け部径11.3	外底部回転ヘラケズリ	
510	738	SB29	F	須恵器	甕？	H-48～H-11 尾張系	—	—	—	頸部径7.2 胴部最大径11.2	外面に波状文	
511	105	SK2	D	土師器	壺		—	—	7.5	—		
512	269	SK2	D	弥生土器	有段高杯		(23.3)	—	—	—	杯部内外面ミガキ 杯端部内面多条沈線(7条)	
513	264	SK2	D	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—		
514	44	SK2	D	土師器	S字甕	D3類	(15.7)	—	—	頸部径(13.6) 頸部高(1.0)	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
515	467	SK2	D	土師器	宇田型甕		13.8	—	—	頸部径11.2 頸部高1.6 胴部最大径19.8	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・肩部2条横ハケ 内面板状工具による横ナデ	内外面スス付着
516	259	SK2	D	土師器	宇田型甕		(14.9)	—	—	頸部径(12.9) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
517	258	SK2	D	土師器	宇田型甕		13.0	—	—	頸部径12.3 頸部高1.3	体部外面斜めハケ	
518	262	SK2	D	土師器	宇田型甕		(15.2)	—	—	頸部径(13.2) 頸部高1.6	体部外面斜めハケ	
519	256	SK2	D	土師器	宇田型甕		(16.5)	—	—	頸部径(14.3) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	
520	600	SK2	D	土師器	宇田型甕		14.5	—	—	頸部径12.3 頸部高1.2 胴部最大径21.0	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・内面ろ横ナデ・肩部横ナデ	内外面スス付着
521	260	SK2	D	土師器	宇田型甕		(13.4)	—	—	頸部径(11.3) 頸部高1.5		
522	261	SK2	D	土師器	宇田型甕		(14.0)	—	—	頸部径(11.8) 頸部高1.4		
523	267	SK2	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径10.8 台基部径4.8 台高4.0	脚台部外面斜め板ナデ・内面横ナデ	内外面使用痕
524	265	SK2	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径7.1 台基部径3.8 台高2.5		
525	266	SK2	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	台端部径8.7 台基部径4.5 台高3.6	脚台部外面板ナデ・内面横ナデ	内底面スス付着
526	352	SK2	D	土師器	甑		(21.7)	—	—	—	体部外面縦ナデ・内面横ナデ	
527	59	SK2	D	土師器	甑		—	—	—	—		
528	88	SK2	D	土師器	屈折脚高杯		18.0	—	—	杯部高7.0 脚基部径3.8	杯部内外面横ナデ　杯端部つまみ上げ	
529	268	SK2	D	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚基部径3.2		
530	257	SK2	D	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚端部径11.7 脚基部径3.3 脚高6.4	脚部外面面取り・内面横ナデ 脚裾部横ナデ	
531	275	SK2	D	土師器	杯部椀形高杯		12.4	—	—	—		
532	281	SK2	D	土師器	杯部椀形高杯		13.8	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
533	470	SK2	D	土師器	杯部椀形高杯		13.8	10.8	8.6	脚端部径8.6 脚基部径2.7 脚高5.1	杯部内外面横ナデ	内外面スス付着
534	543	SK2	D	土師器	杯部椀形高杯		13.7	11.2	8.4	脚基部径2.8 脚高5.7		内外面スス付着
535	353	SK2	D	土師器	杯部椀形高杯		—	—	—	脚端部径8.2 脚基部径2.4 脚高5.2		
536	363	SK2	D	土師器	丸底壺		—	—	—	頸部径6.3 胴部最大径13.4	頸部外面縦ケズリ？ 体部外面横ケズリのち横ナデ？	
537	349	SK2	D	土師器	丸底壺		—	—	—	頸部径5.7 胴部最大径15.0	体部外面横ミガキ　外底部ケズリ	
538	351	SK2	D	土師器	丸底壺		—	—	—	頸部径5.6	体部外面横ミガキ	
539	19	SK2	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	12.0	4.6	—	受け部径2.0 最大径12.5	天井部外面回転ヘラケズリ	降灰
540	85	SK2	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	11.3	4.6	—	受け部径12.3 受け部高2.3	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕 降灰
541	23	SK2	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	11.4	4.5	—	受け部高2.2 最大径11.6	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
542	24	SK2	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	11.4	—	—	受け部径12.1 受け部高1.9	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕 降灰
543	278	SK2	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	—	—	—	受け部径11.9	天井部外面回転ヘラケズリ	天井部内面使用痕
544	451	SK2(下層)	D	須恵器	杯蓋	TK47 陶邑系	12.9	5.1	—	—	天井部回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕

第４表 遺物観察表(9)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
545	30	SK2	D	須恵器	杯蓋	TK47 陶邑系	(11.2)	(5.2)	—	受け部径(11.2) 受け部高2.5	天井部外面回転ヘラケズリ	
546	26	SK2	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	(10.8)	—	—	受け部径(10.6) 受け部高2.4	天井部外面回転ヘラケズリ	
547	149	SK2	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	—	—	—	受け部高2.4	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
548	21	SK2	D	須恵器	蓋(高杯)	H-11～61 尾張系	12.3	5.5	—	受け部高2.2 最大径11.9 摘み径4.0 摘み高0.9	天井部外面回転ヘラケズリ	
549	102	SK2	D	須恵器	蓋(高杯)	H-11 尾張系	—	—	—	摘み径3.3 摘み高0.7	天井部外面回転ヘラケズリ	降灰
550	101	SK2	D	須恵器	蓋(高杯)	H-11 尾張系	—	—	—	摘み径3.0 摘み高0.9	天井部外面回転ヘラケズリ	
551	22	SK2	D	須恵器	杯身	H-11 尾張系	9.6	4.7	—	受け部径11.2	外底部回転ヘラケズリ後回転ナデ	口縁端部使用痕
552	17	SK2	D	須恵器	杯身	H-11 尾張系	9.5	4.3	—	受け部径11.3 受け部高1.8	外底部手持ちヘラケズリ	
553	148	SK2	D	須恵器	杯身	TK47 陶邑系	—	—	—	受け部径11.9	外底部回転ヘラケズリ	
554	29	SK2	D	須恵器	杯身	H-11 尾張系	(9.7)	—	—	受け部径(11.5) 受け部高1.8	外底部回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
555	25	SK2	D	須恵器	杯身	H-11 尾張系	10.3	—	—	受け部径12.2 受け部高2.0	外底部回転ヘラケズリ	
556	27	SK2	D	須恵器	杯身	H-11 尾張系	(11.1)	—	—	受け部径(13.0) 受け部高2.5	外底部回転ヘラケズリ	内底部使用痕
557	31	SK2	D	須恵器	甕	TK47 陶邑系	13.8	—	—	頸部径7.4 頸部高(5.0) 胴部最大径14.3	口縁部・頸部に波状文 肩部に沈線(1条)・列点文	降灰
558	62	SK2	D	須恵器	大型甕	H-11 尾張系	—	—	—	頸部径6.4 胴部最大径17.2	肩部に沈線文・波状文	
559	28	SK2	D	須恵器	高杯	H-11 尾張系	—	—	8.9	—	透孔(4方向)	脚端部接地面使用痕
560	509	SK2(下層)	D	須恵器	不明	不明	7.0	—	—	—		
561	375	SK2	D	須恵器	甕	不明	—	—	—	—	外面平行叩き　内面横ナデ	
562	718	SK8	F	土師器	宇田型甕		12.9	—	—	頸部径11.1 頸部高1.8	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ・内面横ナデ	内外面スス付着
563	584	P2	E	土師器	宇田型甕		—	—	—	頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ	
564	585	P2	E	土師器	杯部椀形高杯		(17.2)	—	—	—	杯部内外面横ナデ	
565	749	P40	F	土師器	宇田型甕		(15.2)	—	—	頸部径(13.2) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
566	454	P20	C	須恵器	杯身	H-11 尾張系	—	—	—	受け部径(17.4)	外底部回転ヘラケズリ後回転ナデ	
567	926	SB2	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面ハケのち斜格子文	
568	980	SB2	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 口縁端部外面沈線(2条)	
569	149	SB2(下層)	C	土師器	宇田型甕		16.1	—	—	頸部径13.8 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
570	273	SB2(下層)	C	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
571	410	SB2(下層)	B	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
572	316	SB2	C	土師器	伊勢型甕		17.4	—	—	頸部径15.0 頸部高2.8	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部内・外面斜めハケ	
573	413	SB2	C	土師器	伊勢型甕		18.4	—	—	頸部径15.0 頸部高2.5	口縁部外面横ナデ	
574	10	SB2	C	土師器	伊勢型甕		18.5	—	—	—	口縁部外面横ナデ	
575	293	SB2	C	土師器	伊勢型甕		—	—	—	—	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部内面横ハケ	
576	15	SB2	C	土師器	伊勢型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
577	99	SB2	C	土師器	甑		—	—	—	—	体部外面縦ハケ・内面斜めケズリ	
578	39	SB2	C	土師器	甑		23.2	—	—	—	体部外面斜めハケ・内面横ハケ	外面スス付着
579	41	SB2	C	土師器	鍋(伊勢型)		29.6	—	—	頸部径25.8 頸部高2.8 胴部最大径27.2	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ 体部内面横ハケ・下半斜めケズリ	
580	412	SB2	C	須恵器	杯蓋	H-50 尾張系	12.0	—	—	—		口縁端部使用痕
581	892	SB2	C	須恵器	杯身	H-15 尾張系	—	—	—	受け部径12.3	外底部回転ヘラケズリ	
582	891	SB2	C	須恵器	杯蓋	6C代 美濃(猿内系)	(10.3)	—	—	—		口縁端部使用痕
583	873	SB2	C	須恵器	甕	H-50 尾張系	—	—	—	—	口縁部外面波状文	降灰
584	937	SB5	BC	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面斜めハケのち横線文・波状文	
585	939	SB5	BC	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面斜めハケの櫛描文	
586	187	SB5	BC	土師器	器台		—	—	—	脚基部径4.1	脚部外面縦ミガキ	
587	49	SB5	BC	土師器	S字甕		—	—	—	台端部径8.5 台基部径5.3 台高4.2	脚台部外面斜めハケ　内面指押さえ	脚台部内外面スス付着
588	77	SB5	BC	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
589	550	SB5 カマド	BC	土師器	伊勢型甕		14.7	—	—	頸部径12.3 頸部高1.1 胴部最大径20.9	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面縦ハケ・内面横ハケ・下半斜めケズリ	内外面スス付着
590	45	SB5	BC	土師器	把手		—	—	—	—		外面スス付着
591	247	SB5	BC	土師器	把手		—	—	—	—		内外面スス付着
592	894	SB5	BC	須恵器	杯蓋	MT15 猿内系	—	—	—	—		
593	893	SB5	BC	須恵器	杯蓋	H-61 尾張系	(12.3)	—	—	—		口縁端部使用痕
594	874	SB5	BC	須恵器	高杯の蓋	TK209 猿内系	—	—	—	—		
595	565	SB5 カマド	BC	須恵器	高杯	H-61 尾張系	—	—	—	脚端部径8.8		
596	331	SB5	BC	土製品	土錘		—	—	—	径1.5 孔径0.5		
597	915	SB6	D	弥生土器	壺		—	—	—	—	外面竹管文	
598	916	SB6	D	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面横線文・波状文	
599	56	SB6	D	弥生土器	壺		—	—	—	頸部高2.3		
600	51	SB6	D	土師器	甕		—	—	6.4	—	体部外面ミガキ	
601	192	SB6	D	土師器	須恵脚高杯?		—	—	—	脚基部径3.0		
602	465	SB6	D	土師器	S字甕	C類	12.2	—	—	頸部径19.3 頸部高1.1 胴部最大径18.0	口縁部内外面横ナデ 体部外面羽状ハケ	
603	592	SB6	D	土師器	鉢		(9.8)	—	—	—	内外面横ナデ	
604	507	SB6	D	土師器	宇田型甕		(16.1)	—	—	頸部径(13.7) 頸部高1.5		
605	52	SB6	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	
606	42	SB6	D	土師器	宇田型甕		(16.7)	—	—	頸部径(14.5) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
607	272	SB6 焼化材集中	D	土師器	伊勢型甕		14.0	—	—	頸部径11.8 頸部高2.5	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ	

第４表　遺物観察表(10)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
608	238	SB6	E	土師器	伊勢型甕		19.8	—	—	頸部径15.2 頸部高2.9	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ	
609	784	SB6	D	土師器	甑		(23.2)	—	—	—	外面斜めハケ・内面横ナデ	
610	350	SB6 カマド	D	土師器	把手付き鉢		11.5	—	—	—		内外面スス付着
611	320	SB6	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	10.8	—	—	受け部径10.6 受け部高2.1		口縁端部使用痕
612	900	SB6	D	須恵器	杯蓋	H-15 尾張系	—	—	—	最大径12.0		
613	40	SB6	D	須恵器	杯身	H-15 尾張系	10.5	—	—	受け部径12.3 受け部高0.9	外底部回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕 降灰
614	68	SB6	D	須恵器	高杯	6C末 畿内系	—	—	—	脚基部径4.7	脚部カキ目 透孔(3方向)	
615	67	SB6	D	須恵器	高杯	蘇原6 美濃須衛	—	—	—	脚端部径14.7 脚基部径3.4	透孔(2方向)	
616	376	SB6	D	須恵器	甕	尾張	—	—	—	—	外面平行叩き 内面横ナデ	
617	370	SB11 カマド	CD	弥生土器	細頸壺	弥生中期後半	8.8	—	—	頸部径3.7 頸部高5.8	口縁端部沈線(3条) 頸部羽条刺突文・横線文・竹管文	
618	289	SB11	CD	土師器	器台		—	—	—	脚基部径3.6	脚部外面ミガキ・内面横ケズリ 透孔(4方向)	
619	205	SB11	C	土師器	宇田型甕		18.5	—	—	頸部径16.3 頸部高1.7	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	外面スス付着
620	277	SB11	CD	土師器	宇田型甕		16.7	—	—	頸部径14.3 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	内面スス付着
621	274	SB11	CD	土師器	宇田型甕		17.8	—	—	頸部径15.4 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	内面スス付着
622	60	SB11	D	土師器	伊勢型甕		(16.8)	—	—	頸部径(13.5) 頸部高2.9	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ・内面横ハケ	SB11か・?
623	472	SB11 カマド	CD	土師器	伊勢型甕		14.7	—	—	頸部径12.9 頸部高2.8	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ・内面横ハケ	内外面スス付着
624	461	SB11 カマド	CD	土師器	伊勢型甕		11.9	—	—	頸部径9.8 頸部高3.0 胴最大径10.5	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面縦・斜めハケ 内面上半横ハケ・下半斜めケズリ	
625	210	SB11	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	11.9	—	—	受け部径12.0 受け部高2.8		口縁端部使用痕
626	429	SB11	CD	須恵器	杯蓋	MT15 陶邑系	11.6	—	—	—		口縁端部使用痕
627	195	SB11	CD	須恵器	杯蓋	MT15 陶邑系	(12.2)	—	—	受け部径(11.7) 受け部高2.5		口縁端部使用痕
628	423	SB11	D	須恵器	杯蓋	MT15 陶邑系	(13.0)	—	—	最大径(13.1)		
629	998	SB11	C	須恵器	杯身	須衛65 美濃須衛	11.7	—	—	受け部径13.1 受け部高0.7		
630	330	SB11	CD	須恵器	杯身	須衛65の後(7C中葉) 美濃須衛	10.1	3.7	—	受け部径12.0 受け部高0.4	外底部回転ヘラケズリ 内底部指ナデ	口縁端部打ち欠く
631	240	SB11	C	須恵器	杯蓋		10.9	4.4	—	受け部径11.1 受け部高1.6	天井部外面ヘラケズリ	
632	239	SB11	CD	須恵器	高杯	7C前半 美濃	10.1	—	—	—	外底部回転ヘラケズリ	
633	250	SB11	CD	須恵器	平瓶	7C後半 美濃	9.6	—	—	—		
634	371	SB11	CD	須恵器	器台	6C前半	—	—	—	台基部径11.7	体部外面平行叩き	内底部使用痕
635	464	SB22	A	土師器	宇田型甕		14.5	—	—	頸部径12.3 頸部高1.4 胴部最大径19.9	体部外面羽状ハケ・肩部横方向の沈線(2条)	内外面スス付着
636	501	SB22	A	土師器	宇田型甕		17.7	—	—	頸部径15.1 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・内面横ナデ	内外面スス付着
637	532	SB22	A	土師器	伊勢型甕		20.8	—	—	頸部径18.1 頸部高2.1	口縁部外面横ナデ	外面スス付着
638	872	SB22	A	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	(11.3)	—	—	—	天井部外面回転ヘラケズリ	
639	500	SB22	A	須恵器	杯蓋	6C末 畿内系	(11.8)	—	—	最大径(12.0)		口縁端部使用痕
640	364	SB22	A	須恵器	杯蓋	H-16～101 尾張系	11.3	3.9	—	受け部径11.3 受け部高1.8	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁部使用痕
641	376	SB22	A	須恵器	高杯	6C末 畿内系	—	—	—	脚端部径9.9	脚部外面カキ目 透孔(3方向)	
642	775	SB28	F	土師器	S字甕	D1類	15.2	—	—	頸部径12.5 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
643	826	SB28	F	土師器	くの字甕		—	—	—	頸部高2.5	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
644	774	SB28	F	土師器	柳ケ坪型壺		(20.0)	—	—	—	口縁部内外面上段に羽状刺突文	
645	830	SB28	F	土師器	くの字甕		—	—	—	頸部高1.7	口縁部内外面横ナデ 体部内面横ハケ	
646	717	SB28 カマド	F	土師器	伊勢型甕		16.6	—	—	頸部径14.6 頸部高2.2	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ・内面斜めハケ	
647	814	SB28	F	土師器	伊勢型甕		16.5	—	—	頸部径13.9 頸部高2.4 胴部最大径17.5	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ・内面横ハケ	内外面スス付着
648	776	SB28	F	土師器	伊勢型甕		(18.1)	—	—	頸部径14.3 頸部高2.8	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ・内面横ハケ	
649	708	SB28	F	須恵器	杯身	須衛65併行 畿内系	12.0	—	—	受け部径14.1		口縁端部使用痕
650	827	SB28	F	須恵器	杯身	須衛65 美濃須衛	(10.9)	—	—	受け部径(13.0) 受け部高0.7		
651	778	SB28	F	須恵器	杯身	須衛65併行 畿内系	10.1	—	—	受け部径11.8 受け部高0.7		
652	829	SB28	F	須恵器	杯身	須衛65 美濃須衛	(10.1)	—	—	受け部径(12.0) 受け部高0.8		口縁端部使用痕
653	828	SB28	F	須恵器	杯蓋	須衛65 美濃須衛	(11.2)	—	—	—		口縁端部使用痕
654	777	SB28	F	須恵器	甕	6C代 陶邑系	(18.4)	—	—	—	頸部外面カキ目	
655	869	SB28	F	須恵器	甕	蘇原6～須衛65 美濃須衛	—	—	—	胴部最大径24.8	外面下半平行叩き痕	
656	416	SD2	D	須恵器	杯身	須衛65 美濃須衛	10.6	—	—	受け部径12.2		
657	955	SD12	G	土師器	ベレス壺		—	—	—	—	頸部に突帯・赤彩	
658	706	SD12	G	須恵器	甕	蘇原6～須衛65 美濃須衛	21.3	—	—	頸部径17.4 頸部高4.0	外面平行叩き痕 内面同心円当て具痕	
659	808	SD16	G	弥生土器	受口口縁甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 外面刺突文	
660	990	SD16	G	土師器	S字甕	D1類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
661	991	SD16	G	土師器	S字甕	D1類	(13.4)	—	—	頸部径(11.0) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 口縁端部に沈線	
662	989	SD16	G	土師器	S字甕	D1類	(14.4)	—	—	頸部径(11.7) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
663	988	SD16	G	土師器	S字甕	C類	(14.2)	—	—	頸部径(13.9) 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ	
664	779	SD16	G	土師器	宇田型甕		(16.2)	—	—	頸部径(13.5) 頸部高1.7	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
665	713	SD16	G	須恵器	杯身	TK209併行 美濃	(11.0)	—	—	受け部径(12.9)		
666	714	SD16	G	須恵器	杯身	TK209併行 美濃	(8.8)	—	—	受け部径(10.9)		口縁端部使用痕
667	715	SD16	G	須恵器	杯蓋	TK209併行 美濃	(10.9)	—	—	—		口縁端部使用痕

第 4 表 遺物観察表(11)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
668	842	SD18	G	土師器	S字甕	C類	(12.8)	—	—	頸部径(9.7) 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
669	731	SD18	G	土師器	宇田型甕		13.0	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
670	722	SD18	G	土師器	宇田型甕		16.2	—	—	頸部径12.8 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ	
671	709	SD18	G	須恵器	鉢	蘇原6 美濃須衛	(15.9)	—	—	胴部最大径(15.6)		
672	679	SD20	G	須恵器	甕	須衛65 美濃須衛	—	—	—	頸部径2.2 胴部最大径8.3	外底部回転ヘラケズリのち平行叩き	
673	227	P1	E	土師器	S字甕	C類	—	—	—	頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ　体部外面斜めハケ	
674	270	P1	EE	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
675	583	P1	E	須恵器	杯身	7C前半　美濃	—	—	—	受け部径11.2	外底部回転ヘラケズリ	
676	292	SZ1	C	須恵器	甕	TK43～TK209 畿内系	—	—	—	胴部最大径8.4	体部外面に刺突文	
677	9	SZ1	C	須恵器	杯身	須衛65の後(7C中葉)　美濃	9.5	3.6	6.0	受け部径11.0	外底部回転ヘラケズリ・ヘラ切り	
678	3	SZ1	C	須恵器	杯身	須衛65の後(7C中葉)　美濃	8.4	3.2	4.7	受け部径11.2	外底部回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
679	1	SZ1	C	須恵器	短頸壺	7C後半　美濃	10.3	7.5	6.8	最大径12.8	外底部回転ヘラケズリ・ヘラ切り	口縁端部使用痕　降灰
680		SZ1	C	金属製品	耳環		—	—	—			
681		SZ1	C	金属製品	耳環		—	—	—			
682	745	SD10	FG	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯底部内面に多条沈線(3条)	
683	746	SD10	FG	土師器	受口口縁甕		(15.1)	—	—	頸部径12.9 頸部高2.8	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
684	699	SD10	FG	土師器	S字甕	D1類	13.9	—	—	頸部径11.5 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
685	697	SD10	FG	須恵器	杯蓋	TK209併行　美濃	11.4	—	—	—		
686	878	SD10	FG	須恵器	杯身	7C後半　美濃	(9.6)	—	—	受け部径(11.5) 受け部高0.7		
687	805	SD10	FG	須恵器	無台杯	7C後半　美濃	—	—	10.3	—		内底部使用痕
688	877	SD10	FG	須恵器	無台杯	7C後半　美濃	—	—	8.1	—	外底部ヘラ切り	
689	747	SD10	FG	土師器	くの字甕		(19.9)	—	—	頸部径(16.2) 頸部高1.7	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
690	905	SD10	FG	須恵器	甕		—	—	—	—	外面平行叩き痕　内面同心円当て具痕	
691	902	SD10	FG	須恵器	甕		—	—	—	—	外面平行叩き痕のちカキ目 内面同心円当て具痕	
692	676	SD10	FG	土製品	土錘		—	—	—	長さ4.4　幅1.0 厚さ1.1		
693	733	SD11	F	土師器	S字甕	C類	—	—	—	頸部径1.1	口縁部内外面横ナデ	
694	732	SD11	F	土師器	S字甕	D1類	(15.6)	—	—	頸部径(13.0) 頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
695	743	SD11	F	土師器	器台		—	—	—	脚基部径2.7	透孔(1段3方向)	
696	742	SD11	F	土師器	小型壺		9.9	—	—	頸部径5.7	口縁部内外面横ミガキ	外面スス付着
697	734	SD11	F	土師器	壺		—	—	7.6	—	外面ミガキ?	
698	721	SD11	F	須恵器	壺(壺)	TK209～TK217 畿内系	9.1	—	—	最大径11.6		降灰
699	704	SD11	F	須恵器	甕	6C後半　美濃	19.0	—	—	頸部径14.1 頸部高3.9	外面平行叩き痕	
700	896	SD11	F	須恵器	甕	7C代	(14.2)	—	—	—		降灰
701	701	SD11	F	須恵器	甕	7C後半　美濃	(23.9)	—	—	—		
702	703	SD11	F	須恵器	甕	7C後半　美濃	18.7	—	—	頸部径15.7 頸部高3.2		降灰
703	753	SD11	F	須恵器	高杯	7C後半　美濃	—	—	—	脚基部径2.6		内底部使用痕
704	702	SD11	F	須恵器	杯蓋	7C後半　美濃	11.5	—	—	—	天井部外面回転ヘラ切り	口縁端部使用痕
705	700	SD11	F	須恵器	杯蓋	7C後半　美濃	(13.2)	—	—	—	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
706	903	SD11	F	須恵器	甕	尾張	—	—	—	—	外面平行叩き　内面木製無文当て具痕	
707	389	SD29	DE	須恵器	無台杯	7C後半～8C前半　美濃須衛	—	—	5.3	—	外底部横ナデ	外底部ヘラ記号
708	388	SD29	DE	灰釉陶器	椀	K-90　猿投	—	—	7.9			
709	383	SD23	A	山茶碗	碗	脇之島3　東濃	12.8	3.8	4.5	—	外底部糸切り	
710	598	SD23	A	山茶碗	片口鉢	10型式　瀬戸	(26.5)	—	—	—		
711	449	SD23	A	土師器	把手		—	—	—	—		
712	1014	SD23	A	山茶碗	碗	生田2　東濃	—	—	—	—		
713	120	SD26	E	灰釉陶器	椀	K-14新　猿投	—	—	8.6	高台高0.9		
714	342	SD1	C	弥生土器	壺		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 口縁端部外面沈線(4条)	
715	305	SD1	C	土師器	宇田型甕		—	—	—	—		外面スス付着
716	4	SD1	C	土師器	伊勢型甕		—	—	—	—	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ	
717	5	SD1	C	須恵器	壺の脚	6C末～7C初 畿内系	—	—	(10.0)	—	透孔	
718	693	SD7	F	須恵器	杯蓋	5-1(9C初) 美濃須衛	—	—	—	摘み径2.2 摘み高0.6	天井部外面回転ヘラケズリ	
719	694	SD7	F	須恵器	杯蓋	5-1(9C初) 美濃須衛	15.4	—	—	—	天井部外面回転ヘラケズリ	降灰
720	809	SD7	F	須恵器	杯身	5-1(9C初) 美濃須衛	10.9	—	—	—		口縁端部・内面使用痕
721	692	SD7	F	須恵器	有台盤	5-1(9C初) 美濃須衛	—	—	10.0	台高0.7		外底部ヘラ記号　高台接地部・内底部使用痕
722	996	SD7	F	須恵器	甕	尾張	—	—	—	—	外面平行叩き　内面横ナデ	
723	690	SD8	F	土師器	伊勢型甕		—	—	—	—	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ	
724	816	SD8	F	土師器	瓶(伊勢型)		—	—	—	—	外面斜めハケ	
725	815	SD8	F	須恵器	高杯	7C前半　美濃	—	—	9.3	脚基部径3.4 脚部高3.0		
726	875	SD8	F	須恵器	杯蓋	須衛65～那加5 美濃須衛	(11.2)	—	—	—		口縁端部使用痕
727	876	SD8	F	須恵器	杯身	須衛65～那加5 美濃須衛	(9.8)	—	—	受け部径(11.9) 受け部高0.4		口縁端部使用痕
728	897	SD8	F	須恵器	無台杯	7C後半　美濃	—	—	6.4	—	外底部ヘラ切り	
729	695	SD8	F	須恵器	鉢	～須衛65 美濃須衛	(17.7)	—	—	最大径(17.8)		金属器写し
730	801	SD8	F	須恵器	壺	7C代　美濃	—	—	7.3	胴部最大径17.1	外底部平行叩き痕	降灰
731	890	SD17	G	弥生土器	壺		13.5	—	—	頸部径10.4 頸部高2.5	口縁部内外面縦ミガキ	SB33か?
732	971	SD17	G	弥生土器	屈折外反高杯		—	—	—	—	杯部内外面ミガキ	SB33か?
733	970	SD17	G	弥生土器	屈折外反高杯		—	—	(14.4)	—	脚部外面斜めミガキ・内面横ナデ	SB33か?
734	821	SD21	F	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	
735	817	SD21	F	弥生土器	加飾壺		(16.9)	—	—	—	口縁端部擬凹線? 口縁端部内面矢羽状のキザミ	

第４表　遺物観察表(12)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
736	822	SD21	F	土師器	伊勢型甕		(22.3)	—	—	頸部径(18.2) 頸部高2.6	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ	
737	707	SD21	F	須恵器	甕	7C後半 美濃	(23.6)	—	—	—		
738	588	SK3	D	土師器	くの字甕		—	—	—	頸部高2.8	口縁部内外面横ナデ	
739	346	SK4	D	土師器	S字甕	D1類	(14.5)	—	—	頸部径(10.9) 頸部高1.5	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	外面スス付着
740	394	SK4	D	土師器	S字甕	D1類	(18.4)	—	—	頸部径(15.4) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	
741	225	SK4	D	土師器	S字甕	D1類?	—	—	—	頸部高1.4		
742	347	SK4	D	土師器	短脚脚高杯		15.6	—	—	—	杯部内外面斜めミガキ	
743	847	SX4	G	土師器	高杯		—	—	—	脚基部径2.9		
744	727	SX4	G	弥生土器	受口口縁甕		(14.5)	—	—	頸部径(12.2) 頸部高1.8	口縁部内外面横ナデ・外面列点文	
745	959	SX4	G	土師器	パレス壺		—	—	—	—	頸部突帯・赤彩	
746	723	SX4	G	土師器	パレス壺		—	—	—	頸部径10.8	口縁部内外面横ナデ・赤彩	
747	871	SX4	G	土師器	S字甕	D1類	13.1	—	—	頸部径10.6 頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
748	725	SX4	G	土師器	S字甕	D1類	(15.8)	—	—	頸部径(13.3) 頸部高1.3	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
749	726	SX4	G	土師器	平田型甕		—	—	—	頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ	
750	724	SX4	G	土師器	平田型甕		—	—	—	頸部高1.7	口縁部内外面横ナデ	
751	586	P3	E	須恵器	杯身	5C代	—	—	—	受け部径12.3		
752	587	P21	C	土師器	受口口縁甕		—	—	—	頸部高2.0	口縁部内外面横ナデ	
753	100	I	A	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	(20.0)	—	—	頸部径(18.8) 頸部高1.6	体部外面叩きのち斜めハケ 体部内面横ハケ	
754	76	I	A	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	4.6	—	外面縦ハケ	
755	349	I	A	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ・端部沈線(2条) 頸部列点文	
756	923	I	A	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜めハケのち波状文	
757	924	I	A	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面縦から横線文	
758	942	I	A	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面波状文	
759	934	I	A	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜めハケのち横線文	
760	624	I	A	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面斜めハケのち波状文・横線文	
761	909	I	A	弥生土器	甕	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面横位の条痕	
762	908	I	A	弥生土器	壺(広頸)	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜格子文	
763	309	I	A	土師器	器台?		—	—	—	—		
764	237	I	A	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯部内外面ミガキ 杯端部内面多条沈線(6条)	
765	595	I	A	土師器	有段高杯		—	—	—	脚基部径3.1	ミガキ 穿孔(1段1対2方向)	
766	84	I	A	土師器	平田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
767	341	I	A	土師器	伊勢型甕		—	—	—	—	口縁部外面ナデ・内面横ハケ	
768	186	I	A	土師器	羽釜		—	—	—	—	体部内面斜めハケ	
769	137	I	B	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	(19.6)	—	—	頸部径17.2 頸部高2.6	体部外面斜めハケのち叩き 口縁部から頸部内面横ハケ 口縁端部キザミ	
770	139	I	B	弥生土器	甕	弥生中期後半	(19.4)	—	—	頸部径(17.0) 頸部高1.7	口縁部外面縦ハケ・内面横ハケ	
771	355	I	B	弥生土器	甕		(19.8)	—	—	頸部径(17.7) 頸部高1.6	体部外面斜めハケのち叩き 口縁端部に列点文	
772	134	I	B	弥生土器	平底甕(叩き)		—	—	6.0	—		外面スス付着
773	133	I	B	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	6.9	—	外面縦ハケ 内面縦ケズリ	外面スス付着
774	636	I	B	弥生土器	高杯	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部沈線(2条)	
775	642	I	B	弥生土器	高杯	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部沈線(3条)	
776	173	I	B	弥生土器	高杯	弥生中期後半	—	—	—	台端部径12.1		
777	74	I	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	頸部内面横ハケ 頸部突帯・竹管文・沈線	
778	621	I	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部波状文	
779	169	I	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部斜めハケのち直線文	
780	282	I	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面横線文・波状文	
781	171	I	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面斜めハケのち横線文	
782	653	I	B	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	台端部径9.7	台端部キザミ	
783	619	I	B	弥生土器	壺(広頸)	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜格子文・列点文	
784	136	I	B	弥生土器	高杯		—	—	—	—	杯端部外面沈線(2条) 杯部外面横ハケ	
785	180	I	B	土師器	有段高杯		(30.9)	—	—	—	内外面ミガキ(口縁端部横ミガキ) 杯端部内面に多条沈線(6条)	
786	299	I	B	土師器	有段高杯		—	—	—	脚端部径14.7 脚基部径4.0 脚高8.5	脚部外面上半縦ミガキ・下半斜めミガキ 透孔(1段3方向)	外面スス付着
787	1005	I	B	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯端部内面に多条沈線(13条ヵ)	
788	213	I	B	土師器	S字甕	C類	(16.9)	—	—	頸部径(14.4) 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	
789	110	I	B	土師器	くの字甕		(15.1)	—	—	頸部径(12.2) 頸部高2.3	口縁部内外面横ナデ	
790	83	I	B	土師器	平田型甕		(12.8)	—	—	頸部径10.6 頸部高1.6	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
791	97	I	B	土師器	伊勢型甕		(19.4)	—	—	頸部径(16.2) 頸部高2.4	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ・内面横ハケ	
792	185	I	B	土師器	伊勢型甕		—	—	—	—	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ	内外面スス付着
793	107	I	B	土師器	壺		—	—	6.7	—	内外面斜めハケ	外面スス付着
794	639	I	B	土師器	把手		—	—	—	—		
795	870	I	B	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	—	—	—	最大径11.0	天井部外面回転ヘラケズリ	天井部内面使用痕
796	332	I	B	須恵器	杯身	H-11 尾張系	9.7	—	—	受け部径11.9 受け部高1.5	外底部回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
797	124	I	B	須恵器	杯身	TK43 畿内系	—	—	—	—		口縁端部使用痕
798	361	I	B	須恵器	杯身	H-11 尾張系	—	—	—	受け部径11.7	外底部回転ヘラケズリ回転ナデ	
799	880	I	B	須恵器	甕	不明	—	—	—	胴部最大径(9.8)	体部列点文	
800	632	I	B	須恵器	広口壺	H-11 尾張系	—	—	—	—	口縁部外面に波状文	
801	982	I	C	弥生土器	甕(叩き)	弥生中期後半	(16.1)	—	—	頸部径(14.4) 頸部高1.3	外面縦ハケのち叩き・内面横ハケ 口縁端部キザミ	
802	362	I	C	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	6.0		外面縦ハケ	外面スス付着
803	392	I	C	弥生土器	平底甕(叩き)	弥生中期後半	—	—	8.1	—	外面ハケ	外面スス付着
804	135	I	C	弥生土器	細頸壺	弥生中期後半	7.7	—	—	—	口縁端部沈線(3条)	
805	116	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ・頸部沈線(2条) 頸部横線文	外面スス付着
806	172	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁端部沈線(2条)	
807	130	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	(13.9)	—	—	—	口縁端部縦沈線(2条)・キザミ 頸部外面横ハケ	
808	132	I	C	弥生土器	壺(広頸)	弥生中期後半	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 口縁端部列点文	
809	927		C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面波状文・横線文	
810	931	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面斜めハケのち波状文	
811	913	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面櫛状文	

第4表 遺物観察表(13)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
812	953	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部外面上半斜めハケのち斜格子文・波状文 体部下半横ハケ 内面横ハケ	
813	622	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部波状文・横線文	
814	929	I	C	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面縦ハケのち横線文	SB1・12周辺
815	317	I	C	弥生土器	壺(広頸)	弥生中期後半	—	—	—	頸部径9.0	外面横線文・斜格子文	
816	518	I	C	弥生土器	壺		—	—	—	—	外面ミガキ?	
817	131	I	C	弥生土器	壺		—	—	5.3	—	底部内面横ナデ?	
818	100	I	C	弥生土器	くの字甕		(15.2)	—	—	頸部径(11.9) 頸部高2.2	口縁部内外面横ナデ 口縁端部列点文	外面スス付着
819	310	I	C	弥生土器	壺		—	—	—	—	口縁部内面横ハケ・外面横ナデ 口縁端部沈線(3条)	
820	207	I	C	土師器	受口口縁甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 口縁部外面に列点文	外面スス付着
821	202	I	C	土師器	受口口縁甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
822	208	I	C	土師器	くの字甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ 口縁端部列点文	
823	109	I	C	土師器	有段高杯		—	—	—	—	杯部内外面ミガキ 杯端部内面に多条沈線(5条)	
824	345	I	C	土師器	くの字甕		15.2	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
825	187	I	C	土師器	くの字甕		18.1	—	—	頸部径15.4 頸部高2.7	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
826	568	I	C	土師器	S字甕	C類					口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ・横ハケ	
827	183	I	C	土師器	宇田型甕		(14.9)	—	—	頸部径(12.7) 頸部高(1.4)	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	外面スス付着
828	303	I	C	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
829	184	I	C	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
830	129	I	C	土師器	壺		—	—	—	—	口縁部内外面ミガキ 口縁端部羽状列点文	
831	38	I	C	土師器	壺(パレス壺)		—	—	—	—	外面横線文・斜状文 赤彩	
832	20	I	C	土師器	壺(パレス壺)		—	—	—	—	口縁部擬凹線・赤彩 内面羽状刺突文	
833	249	I	C	土師器	パレス壺		—	—	—	頸部径10.5	口縁部内外面斜めハケ 口縁端部内面羽状刺突文 口縁部内面赤彩	
834	165	I	C	土師器	柳ケ坪型壺		—	—	—	—	口縁部内外面上段羽状刺突文 頸部外面斜めハケ	
835	235		C	須恵器	杯身	須衛65～ 美濃須衛	—	—	—	—		口縁端部使用痕
836	306	I	C	須恵器	高杯	H－11 尾張系	—	—	—	脚端部径9.7		降灰
837	644	I	C	須恵器	杯蓋	H－11 尾張系	(15.3)	—	—	—	天井部外面回転ヘラケズリ	
838	641	I	C	灰釉陶器	椀	虎渓山1 美濃	—	—	—	—		
839	663	I	D	弥生土器	甕	弥生中期後半	(15.9)	—	—	頸部径(14.1) 頸部高1.3	口縁部内面横ハケ 口縁部から体部外面縦ハケ	外面スス付着
840	945	I	D	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面斜めハケのち波状文	
841	919	I	D	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面廉状文	
842	979	I	D	土師器	受口口縁甕		—	—	—	—	口縁部外面列点文 頸部縦ハケ	
843	634	I	D	土師器	壺		—	—	—	—		
844	452	I	D	土師器	広口壺		16.9	—	—	頸部径9.9 頸部高4.5	口縁部内外面横ナデ	
845	233	I	D	土師器	くの字甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
846	670	I	D	土師器	鉢?		8.5	—	—	—	外面ミガキ	
847	342	I	D	土師器	壺?(底部)		—	—	6.5	—		
848	211	I	D	土師器	宇田型甕		15.5	—	—	頸部径13.0 頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ 体部外面斜めハケ	
849	14	I	D	土師器	宇田型甕		13.0	—	—	頸部径11.8 頸部高1.6	口縁部外面横ナデ 体部斜めハケ	
850	318	I	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—		
851	204	I	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
852	203	I	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
853	179	I	D	土師器	宇田型甕		—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	
854	691	I	D	土師器	くの字台付甕		—	—	8.4	脚端部径8.4 台基部径4.8 台高4.9		
855	206	I	D	土師器	杯部椀形高杯		—	—	—	台端部径9.6 脚基部径3.5 脚高5.3		
856	108	I	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	(12.5)	—	—	受け部径(13.7) 受け部高2.0	天井部外面回転ヘラケズリ	口縁端部使用痕
857	650	I	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	(12.0)	—	—	最大径(12.3)	天井部外面回転ヘラケズリ	
858	234	I	D	須恵器	杯蓋	H-11 尾張系	11.6	—	—	受け部径12.0 受け部高1.8		口縁端部使用痕
859	640	I	D	須恵器	杯身	須衛65～	—	—	—	—		
860	63	I	D	須恵器	杯蓋	H-50～I-17 尾張系	(11.2)	3.6	—	受け部径(11.0) 受け部高1.1	天井部外面回転ヘラケズリ	降灰
861	637	I	D	灰釉陶器	椀	K-90～O-53	—	—	7.1	高台高0.9		
862	424	I	D	灰釉陶器	椀	K-14 猿投	—	—	7.2	高台高0.6		
863	657	I	D	灰釉陶器	椀	K-90 猿投	—	—	7.8	高台高1.1		
864	940	I	E	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	外面横線文・波状文	
865	656	I	E	土師器	くの字甕		(22.6)	—	—	頸部径(19.4) 頸部高2.5	頸部外面縦ハケ	外面スス付着
866	354	I	E	弥生土器	屈折外反高杯		—	—	—	脚基部径3.6	透孔(1段)	
867	366	I	E	土師器	S字甕	D2類	—	—	—	—		
868	324	I	E	土師器	S字甕	D3類	—	—	—	—	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
869	367	I	E	土師器	宇田型甕		—	—	—	—		
870	333	I	E	須恵器	杯身	H-11 尾張系	9.6	—	—	受け部径11.6 受け部高1.6		口縁端部使用痕
871	336	I	E	須恵器	無蓋高杯	H-11 尾張系	—	—	—	—	杯部外面に波状文	内面降灰
872	174	I	E	土師器	杯部椀形高杯		14.1	—	—	杯部高3.7		
873	422	I	E	須恵器	高杯	MT15 陶邑系	12.8	—	—	—		
874	334	I	E	須恵器	高杯	H-11 尾張系	—	—	—	脚基部径8.6	脚部にカキ目 透孔	
875	119	I	E	須恵器	高杯	GC末 畿内系	—	—	—	脚基部径4.6	透孔(3方向)	
876	421	I	E	須恵器	無台杯	8C代 美濃須衛	—	—	7.6	—	内底部当て具痕	外底部ヘラ記号
877	633	I	E	須恵器	広口壺	TK209～TK217 美濃	(14.6)	—	—	頸部径(8.8) 頸部高3.9		
878	368	I	E	須恵器	甕	TK209～TK217 畿内系	181.1	—	—	頸部径12.8 頸部高3.5		降灰
879	304	I	E	灰釉陶器	皿	虎渓山1 美濃	(12.5)	2.6	(6.6)	高台高0.6		
880	640	I	E	灰釉陶器	深椀	虎渓山1 美濃	—	—	(6.5)	高台高1.0		
881	638	I	E	灰釉陶器	椀	K-90 猿投	—	—	(8.2)	高台高0.7		
882	652	I	E	土師器	皿(かわらけ)		(9.7)	—	—	—		
883	947	I	F	弥生土器	壺	弥生中期後半	—	—	—	—	体部内面斜めハケ・外面叩きのち横線文	
884	846	I	F	土師器	壺		—	—	6.8	—		

第４表 遺物観察表(14)

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	編年・年代観 分類・産地	法量(cm) 口径	器高	底径	その他	製作技法・調整・施文・文様	備考
885	735	1	F	土師器	S字甕	C類	(11.8)	—	—	頸部径(10.0) 頸部高1.2	口縁部内外面横ナデ	外面スス付着
886	848	1	F	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚基部径2.3	脚部面取り	
887	813	1	F	土師器	宇田型甕		14.1	—	—	頸部径12.4 頸部高1.4	体部外面斜めハケ	
888	719	1	F	土師器	伊勢型甕		14.9	—	—	頸部径13.1 頸部高2.5	口縁部外面横ナデ 体部外面縦ハケ 内面横ハケ	SB28周辺
889	803	1	F	土師器	鍋(伊勢型)		(31.0)	—	—	頸部径(28.0) 頸部高3.0 胴部最大径(31.8)	口縁部外面横ナデ・内面横ハケ 体部外面斜めハケ・内面横・斜めハケ	SB28周辺
890	879	1	F	須恵器	提瓶	不明	—	—	—	頸部径5.5		降灰
891	849	1	F	須恵器	無蓋高杯	5C代	—	—	—	—	杯部外面に波状文	
892	845	1	F	須恵器	蓋	7C代 美濃	—	—	—			天井部外面ヘラ記号
893	810	1	F	須恵器	平瓶	須衛65 美濃須衛	7.0	—	—	頸部径5.4 頸部高3.0		降灰
894	844	1	F	須恵器	蓋	7C代 美濃	—	—	—	—		
895	710	1	F	須恵器	杯蓋	8C代 美濃	(16.7)	—	7.7	—		
896	802	1	F	須恵器	平瓶?		—	—	—			
897	907	1	F	須恵器	甕		—	—	—	—	外面平行叩き痕のちカキ目 内面同心円当て具痕	
898	936	1	F	須恵器	甕	尾張	—	—	—	—	外面平行叩き痕 内面横ナデ	外面使用痕
899	790	1	G	弥生土器	受口口縁甕		—	—	—	台端部径7.0	口縁部内外面横ナデ 口縁端部キザミ	外面スス付着
900	804	1	G	弥生土器	くの字甕		(19.6)	—	—	頸部径(15.2) 頸部高2.5	口縁部内外面横ナデ 口縁端部列点文	
901	812	1	G	弥生土器	小型壺		9.8	—	—	頸部径7.8 頸部高2.8 胴部最大径10.0	体部外面縦ミガキ	外面スス付着
902	964	1	G	弥生土器	屈折外反高杯		—	—	15.4	脚基部径4.1 脚高11.0	脚部外面縦ミガキ 透孔(1段3方)	SB33周辺
903	856	1	G	弥生土器	屈折外反高杯		—	—	13.8	脚基部径3.8	脚部外面縦ミガキ 透孔(1段3方向)	SB33周辺
904	889	1	G	弥生土器	屈折外反高杯		24.7	—	—	—	杯部内外面縦ミガキ 口縁端部外面・屈曲部横ミガキ	SB33周辺
905	859	1	G	弥生土器	器台		—	—	—	脚基部径4.8	脚部外面縦ミガキ	SB33周辺
906	782	1	G	土師器	屈折脚高杯		—	—	—	脚基部径3.2	脚部外面縦ミガキ	
907	744	1	G	土師器	S字甕	D2類	—	—	—	頸部高1.4	口縁部内外面横ナデ	
908	730	1	G	須恵器	無蓋高杯	5C代	—	—	—	—	杯部外面に波状文	
909	864	1	G	須恵器	杯身	蘇原6 美濃須衛	—	—	—	胴部最大径11.1		降灰
910	750	1	G	須恵器	杯身	須衛65 美濃須衛	(10.2)	—	—	受け部径(12.0)		
911	711	1	G	須恵器	杯身	蘇原6 美濃須衛	(12.9)	—	—	—		
912	901	1	G	須恵器	甕		—	—	—	—	外面平行叩き痕のちカキ目 内面同心円当て具痕	
913	904	1	G	須恵器	甕		—	—	—	—	外面平行叩き痕 内面同心円当て具痕?	
914	712	1	G	山茶碗	碗	5型式 尾張	—	—	—	高台径7.7 高台高0.6		

報告番号	実測番号	遺構・層位	地区	種類	器種	法量(cm・重さg)	備考
915	794	SX11	BC	石器	掻器	長さ3.6 径2.4 厚さ1.1	石材:チャート
916	1020	SB13	C	石器	剥片		石材:チャート
917	647	SK00	A	石製品	磨製石鏃	長さ2.8 径1.6 厚さ0.16 重さ0.8	
918	646	1		石製品	石製模造品	長さ(4.6) 径(2.0) 厚さ0.4 重さ(4.6)	
919	899	1		石製品	石製模造品	長さ(4.3) 径(3.5) 厚さ(1.1) 重さ(26.1)	
920	654	SB11	C	石製品	石製模造品	長さ(4.2) 径(1.0) 厚さ(0.5) 重さ(3.0)	
921	380	SB11	C	石製品	敲石	長さ10.7 径8.1 厚さ6.3	石材:砂岩
922	374	1		石製品	敲石	長さ8.6 径4.5 厚さ3.3 重さ197.0	石材:砂岩
923	611	SK06	A	石製品	磨石	長さ13.0 径12.1 厚さ2.6	
924	616	SK06	A	石製品	磨・敲石	長さ13.6 径11.0 厚さ4.3	
925	716	SB32	F	石製品	砥石	長さ11.7 径4.6 厚さ4.3	
926	393	SB04	C	石製品	砥石	長さ14.5 径11.6 厚さ2.4 重さ466.0	
927	373	SB15	D	石製品	砥石	長さ6.3 径4.3 厚さ1.2 重さ(58.3)	
928	811	1		石製品	砥石	長さ(4.3) 径(2.8) 厚さ(1.3) 重さ(19.1)	石材:結板岩
929	372	1		石製品	砥石	長さ(3.4) 径(4.0) 厚さ(18.9) 重さ(18.7)	石材:砂岩
930	431	1		石製品	砥石	長さ8.7 径6.5 厚さ3.1 重さ220.0	石材:砂岩
931	391	1		石製品	砥石	長さ11.5 径4.0 厚さ3.2 重さ187.0	
932	992	SB09	E	石製品	石皿・台石	長さ(28.2) 径24.8 厚さ5.1	

第４表 遺物観察表(15)

第5章　まとめ・考察

第1節　下西郷一本松遺跡の土器組成

はじめに

下西郷一本松遺跡は今回の発掘調査により弥生時代後期から古墳時代の長期間にわたって存続した集落であることがわかった。そこで、どのように土師器甕と高杯が変化していくかを数値化し、検討してみたい。

S字甕D３類から宇田型甕、伊勢型甕への変化については内堀信雄氏が分析を行っている[1]ので、これと同様の方法でおこなう。方法は口縁部計測法[2]により２期から８期までの主要ま遺構を取り上げ、遺構ごとの土師器甕の各器種と高杯の各器種の比率を出し、グラフ化した。

時期ごとの土師器甕・高杯の組み合わせと変遷（第５表・第83図）

本遺跡の時期区分にしたがって変遷を説明したい。各期の土師器の組み合わせ、伴う須恵器は以下のとおりである。

２期　甕：受口口縁甕・くの字甕　高杯：屈折外反高杯

３期　甕：受口口縁甕・くの字甕　高杯：有段高杯

４期　甕：S字甕（A）・B類・C類　高杯：（有段高杯）

５期　甕：S字甕C類・D１類　高杯：屈折脚高杯

６期　甕：S字甕D２類・D３類・宇田型甕　高杯：屈折脚高杯・杯部椀形高杯

７期　甕：宇田型甕　高杯：杯部椀形高杯　須恵器（H-11・TK-47窯式併行）

８期　甕：宇田型甕・伊勢型甕　高杯：なし　須恵器（H-61・MT-15窯式併行～須衛65窯式併行）

この中で６期についてはS字甕D２・D３類・屈折脚高杯のみの組み合わせのものと、それに宇田型甕・杯部椀形高杯が加わるものとで細分できる。６期の宇田型甕と杯部椀形高杯のセットをもって宇田式とする見方もあるが、本遺跡では須恵器の出現を重視し、これをもって７期とする。

８期についても宇田型甕と伊勢型甕の両者が伴うものと伊勢型甕だけのものとで細分が可能である。細分したものは遺構の切り合い関係からも矛盾はない。

まとめ

２・３期は甕の組成は受口口縁甕とくの字甕で、S字甕はみられない。４期になるとS字甕が登場し、５期にはS字甕C類がそのほとんどを占め主体となる。S字甕の口縁部が肥厚したD２・３類が出現する６期にはS字甕の比率は減少し、くの字甕が一定量見られるようになる。そして宇田型甕が出現するとまたその比率のほとんどを占めるようになる。８期になると伊勢型甕が見られるうよになるが、宇田型甕と入れ変わるだけで、その他の甕は見られない。

２・３期の甕で口縁部から底部まで全体がわかる資料少なく、断定はできないが、２期のSK６から出土した受口口縁甕、底部は平底であり、３期のSD3からは脚台しか出土しておらず、平底から台

期		遺構	弥生土器・土師器																														須恵器							
			甕													高杯							器台	壺					鉢	鍋	甑	その他	杯身	杯蓋	高杯	高杯蓋	甕	壺	その他	年代観
			叩き	受口	くの字	山陰	S字甕							平田	伊勢	屈折外反	有段	屈折脚			杯部椀形	その他		広口	中形	小形	小型丸底	その他												
							A	B	C	D1	D2	D3	山陰					ミガキ	屈折	垂下																				
1		SK9	4 / 26.2																																					
2		SB16		1 / 1.0	2 / 2.0																		2 / 1.0									1 / 1.2								
		SB33			1 / 5.0																																			
		SK06		2 / 16.0	1 / 9.0											1 / 10.0						1 / 7.3																		
3		SB3		1 / 3.3	4 / 5.1																		1 / 1.4	1 / 2.0	1 / 1.1				1 / 1.0											
		SB9		3 / 5.6	7 / 34.3	3 / 2.7											1 / 6.3									1 / 1.1			2 / 11.0											
		SB20															3 / 2.6							1 / 11.0																
		SD3		15 / 26.3	10 / 41.6												20 / 25.8					1 / 8.9	3 / 5.0			6 / 7.8			5 / 50.2			1 / 1.1								
4		SX10					1 / 0.3	2 / 7.3																1 / 1.7																
5		SB25			1 / 1.1			1 / 0.3	6 / 16.9	1 / 1.0							3 / 2.4							2 / 2.3			3 / 3.0													
		SK1							3 / 15.3																															
		SB30			1 / 1.0				2 / 1.1								1 / 0.8																							
		SB31							2 / 1.2	2 / 1																														
		SK7		1 / 0.6	1 / 1.2				5 / 19.6	3 / 4.3			1 / 1.5			1 / 0.3																								
		SX3							2 / 2.0	1 / 1.0			1 / 1.3																											
6	古	SB4		3 / 1.1	10 / 11.3				1 / 0.9		1 / 0.5	3 / 4.0				1 / 1.2			5 / 21.5								1 / 2.0													
		SB8			2 / 2.3				6 / 9.4	4 / 5.3	1 / 1.0	5 / 5.2						1 / 1.2						1 / 2.0	1 / 1.5		3 / 6.1						2 / 2.1							
		SB14									1 / 1.2																													
		SB18		3 / 2.2	4 / 2.7				6 / 6.4								1 / 0.7							1 / 1.0		1 / 0.3	1 / 1.3													
	新	SB32			1 / 1.6									1 / 12.0					4 / 12.5	2 / 21.7																				
		SB10	1 / 0.3		5 / 22.7			1 / 1.0	8 / 6.8	1 / 0.4	3 / 1.4	3 / 3.2		12 / 12.2			2 / 1.2									1 / 0.7	1 / 3.7	1 / 2.5	1 / 1.0				6 / 6.9	1 / 0.1	1 / 1				1 / 2.7	(H-11新)
		SB12		1 / 1.0	4 / 4.4						1 / 2.0	3 / 3.4		5 / 8.2					2 / 13.5	1 / 1.0	6 / 7.8	1 / 1.3		3 / 3.1		2 / 23.8	2 / 3.9					1 / 1.0								
		SB13	2 / 1.0						1 / 0.8			3 / 4.3		4 / 3.6			1 / 1.0					1 / 2.8						1 / 1						1 / 1.5	1 / 1.0			1 / 6.0		
		SB15		2 / 1.1	6 / 5.6						3 / 2.1	3 / 8.0		9 / 14.2			2 / 0.7		9 / 17.7		7 / 7.3			3 / 3.0			1 / 12.0				1 / 3.5									
7		SB1	1 / 1.1											4 / 16.7							4 / 10.8												1 / 0.1	1 / 1.2			1 / 9.1			H-11
		SB7		2 / 1.4	1 / 0.9							1 / 0.8		8 / 11.3			1 / 0.3				10 / 24.0		1 / 0.7										2 / 2.1							H-11
		SB17			2 / 2.2			1 / 1.0						2 / 2.9					1 / 2.1		2 / 2.1									1 / 2.3			2 / 2.6	2 / 4.4	1 / 0.5					H-11
		SB26										1 / 1.3									2 / 2.6											1 / 1.1								
		SB29	1 / 0.6	1 / 1.0										6 / 11.4					1 / 1.0		3 / 4.0												1 / 2.7							H-48～H-11
		SK2							1 / 0.4	2 / 0.8		2 / 3.1		10 / 30.3			1 / 1.0		2 / 2.9		4 / 15.9										1 / 1.3		10 / 25.2	10 / 23.6	1 / 4.1				1 / 2.5	H-11 TK-47
8	古	SB5			2 / 2.1						1 / 1.0			1 / 0.4	2 / 12.4																		2 / 4.6	1 / 1.0		2 / 1.5				H-61 MT-15・TK-209
		SB6			1 / 0.3				2 / 13.3			2 / 1.1		8 / 4.3	4 / 5.4					1 / 1.5					1 / 1.2		1 / 1.2		2 / 3.5		1 / 1.0		2 / 4.6	1 / 1.0			1 / 0.5			H-15 蘇原6
		SB11		2 / 1.8	3 / 2.4									5 / 12.3	4 / 9.7		2 / 0.6		3 / 11.8	1 / 5.6	1 / 1.6		1 / 0.5										2 / 12.9	5 / 10.2	1 / 5.5			1 / 7.8		MT-15
		SB22			2 / 1.2									5 / 16.7	1 / 2.1																			4 / 14.7						
	新	SB2													6 / 7.7															1 / 2.0	1 / 2.0			1 / 1.0					1 / 1.1	H-50・H-15
		SB28			1 / 0.8					1 / 2.3				3 / 2.3	4 / 12.4									1 / 0.5									5 / 7.8	1 / 0.5			1 / 0.5			須衛65
9		SZ1																															2 / 18.0					1 / 5.0		須衛65の後

上段　口縁部個体数(接合後)
下段　口縁部残存率(X／12)

（網掛け）個体数5以上　口縁部残存率　10．0以上

第５表　遺構別出土遺物集計表

付へと変換したことが推測される。

高杯は２期・３期の間で甕は変化しないが、屈折外反高杯から有段高杯へとかわる。有段高杯から屈折脚高杯への変遷は資料がなく不明である。６期にＳ字甕から宇田型甕が主体をしめるようになるのと同じくして屈折脚高杯から杯部椀形高杯へと変換する。そして、伊勢型甕が出現すると姿を消す。

供膳形態の変化については、須恵器の登場による供膳形態の変化について城之内遺跡で分析されている[3]が、組成の変遷を①土師器煮炊具（Ｓ字甕Ｄ３類・くの字甕主体）と土師器供膳具（屈折脚高杯）②土師器煮炊具（宇田型甕主体）と須恵器供膳具（高杯・蓋杯）、③土師器煮炊具（伊勢型甕主体）＋須恵器供膳具（高杯・蓋杯）の３つ段階があることを指摘している。下西郷一本松遺跡では、須恵器が良好な状況ではなく、単純に比較できないが、宇田型甕が主体である７期では供膳具は須恵器もあるが、土師器の杯部椀形高杯も一定量存在する。伊勢型甕が登場する８期になると杯部椀形高杯がなくなる。

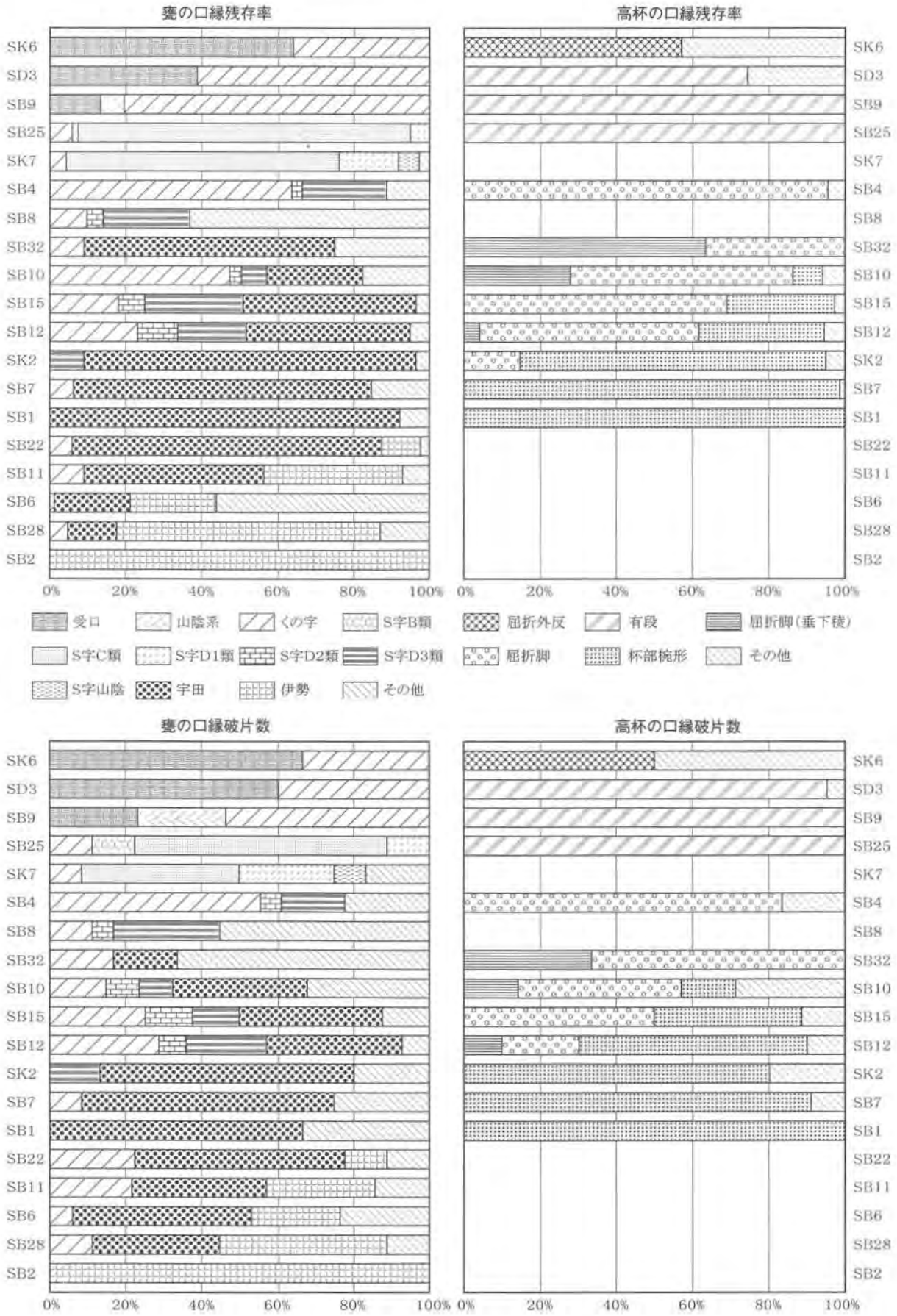
〔注〕

（１）内堀信雄「宇田甕から伊勢型甕へ－岐阜市における事例検討－」『Ｓ字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会　2000

（２）小野木　学「まとめ」『堀田城之内遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター　1997

（３）内堀信雄「宇田甕出現期前後の土器組成について」岐阜市教育委員会『城之内遺跡－長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査－』（第Ｉ分冊）1999

グラフ作成には恩田裕之氏の協力を得た



第83図　甕・高杯の組成グラフ

第２節　下西郷一本松遺跡の遺構変遷

今回の調査では弥生時代中期後半から中世にいたる遺構が確認された。ここでは時期区分に従い10期に区分し、さらに前節で、ある程度器種組成によって細分できる期があることがわかった。このことも踏まえて各期ごとに住居跡、溝、土坑などの主要な遺構の変遷を見てみたい。（第84図）

１期　弥生時代中期後半、凹線紋期・高蔵期である。弥生時代末から古墳時代にかけての遺構の検出面より下層で確認にされる。

遺構はの土坑２（SK5・9）、不明遺構４（SX7・8・11・12）の６基の遺構が確認された。この内SX12は住居跡の可能性がある。また、SB２の下層にあるSX16もこの時期の遺構である可能性がある。これら以外にも遺構は検出できなかったが、SB13・15周辺でもこの時期の土器が集中するる部分があり、遺構が存在する可能性が高い。検出した遺構の分布には偏りが見られるが、遺物は南のＧ区を除いて全体的に見られる。

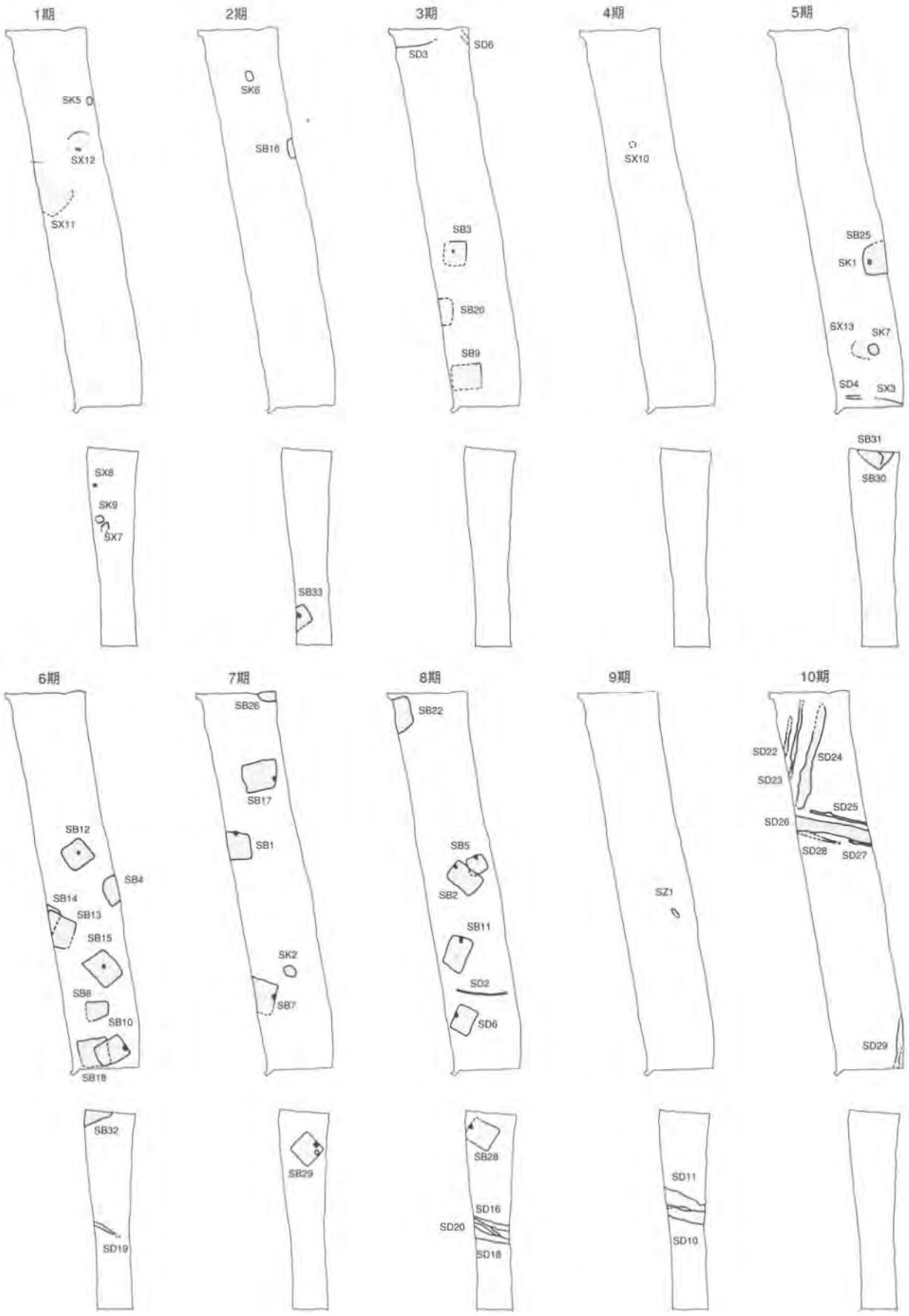
この時期の遺構・遺物は岐阜市内では寺田遺跡でみられるのみで貴重な資料となった。また、岐阜市内でも東に位置する寺田遺跡とは様相が異なる。

２期　弥生時代後半、本遺跡において遺構・遺物は希薄で時期幅があると思われるが一期にまとめた。屈折外反高杯が見られる時期である。遺構は住居跡２（SB16・33）、土坑１（SK６）の３基の遺構がある。遺物は少量であるが、一定量見られることから他にも遺構が存在する可能性がある。SB33は今回の調査で見つかった住居跡の中で一番南に位置する。

３期　この時期から住居跡が多く見られる。遺構は住居跡３（SB3・9・20）、溝１（SD3）（SD6も可能性あり）４基の遺構が確認された。北区の南側に住居跡が集中する。北端の溝SD3は明確な規模は不明であるが、判明しているだけでも幅は2.5ｍ以上ある。遺物は南側から廃棄されており、集落の境界を示す可能性がある。

４期　Ｓ字甕が見られるようになる時期で、遺構がほとんどみられない。調査区全体を見てもＳ字甕Ｂ類の出土は少ないことから希薄な時期であることが考えられる。遺構はSX10のみである。しかし、SB25でこの時期の遺物が多く混入することから、SB25付近に遺構があった可能性がある。

５期　Ｓ字甕Ｃ類・Ｄ１類が伴う時期である。この時期になると遺構が見られるようになる。
住居跡３（SB25・30・31）・土坑２（DK1・7）、不明遺構１（SX3）の６基の遺構が確認された。これらの遺構の中心は３期と同様、北区の南半分と南区北端である。



第84図　主要遺構変遷図

6期　甕はS字甕D2・D3類と宇田型甕、高杯は屈折脚高杯・杯部椀形高杯が見られる時期である。遺構は住居跡9（SB4・8・10・12・13・14・15・18・32）、溝1（SD19）の10基の遺構がある。一番住居跡が多く見られる時期である。

6期は前節で述べたように、古段階・新段階に分けられる。住居跡も重なりがみられ、古段階と新段階にわけも遜色はない。古段階の住居跡はSB4・8・14・18、新段階の住居跡はSB10・12・13・15・32である。遺構の中心は北区の南半分と南区の北端である。ここまでの住居跡には炉跡がみられ、カマドはみられない。ただしSB10についてはカマドが存在し、前述したように時期の決定が難しいが6期とするならば本遺跡の調査区内においては最初にカマドを導入した住居跡となる。

7期　土師器は宇田型甕と杯部椀形高杯、そして須恵器が伴うようになる。須恵器はH-11窯式併行である。遺構は住居跡5（SB1・7・17・26・29）、土坑2（SK2・8）が見られる。調査区の北端まで住居跡の範囲が広がる。ただし住居跡の間隔は変化しない。また住居跡にはすべてカマドが伴う。

8期　土師器は宇田型甕と伊勢型甕、土師器の高杯は極少量杯部椀形高杯がみられるが、基本的にはない。遺構は住居跡6（SB2・5・6・11・22・28）、溝4（SD2・16・18・20）の10基の遺構が確認されている。前節で述べたように、宇田型甕と伊勢型甕が混在するもの、伊勢型甕だけのものの2時期に細分できる。古段階の住居跡はSB5・6・11・22、新段階の住居跡はSB2・28である。分布状態は古段階は7期同様北部分へ広がった同様の状態である。しかし、新段階になると住居の数が減少する。

9期　7世紀後半のこの時期になると住居跡は見られなくなり、土坑墓（SZ1）と溝が確認されたのみである。集落域から墓域へと土地の利用が変化がみられ、集落の中心が移動したと考えられる。遺構は検出できなかったが、北区の南E区でこの時期の遺物が一定量みられることから何らかの遺構が存在した可能性がある。また、南区の東西方向の溝内からも須恵器が多く出土している。

10期　灰釉陶器・山茶碗が見られる時期で、いくつかの直行する南北・東西の溝がある。これらの遺構から遺物は極少量見られるのみである。この溝と平行する溝が南区でも見られ、出土遺物から古くしたり、時期不明のものがいくつかあるが、この中には10期の遺構であるものも含まれている可能性がある。これらの溝は土地を区画したものと考えられる。

第３節　下西郷一本松遺跡で検出した竪穴住居について

今回の調査では31基の竪穴住居を検出した。決して多い数字ではないが、本節では、住居を構成する要素（大きさ、方位、炉・カマド）について美濃地方の他の集落（城之内遺跡、川合遺跡群、牧野小山遺跡）と比較し、若干の考察を試みる。また、下西郷一本松遺跡では９期以降の住居はないが、他の集落に関しては９期に含まれる資料（７ｃ後半～９ｃ前葉）についても触れる。

〔大きさ〕（第６表）

大きさについて、調査では必ずしも住居の全範囲が検出できるわけではないことから、完全に検出した一辺を対象とし検討を行う。また、全範囲を検出した住居については長辺を対象とする。

下西郷一本松遺跡について、まず２・３・５期（SB16、33、3、9、20、25、30、31）では、一辺を完全に検出したものがほとんど無いため傾向を捉えることが難しい。SB16（２期）は一辺が3.5ｍとなるが、大部分が調査区外であることからこれが長辺か短辺か判断できない。SB25（５期）は一辺が5.6mを測り、今回検出した住居の中でも比較的大きなものである。６期（SB4、8、10、12、13、14、15、18、32）について、SB14、32以外は検討することができ、SB８が3.9ｍとなる以外は4.5～６ｍの範囲に入る。７期（SB1、7、17、26、29）について、SB26以外は検討することができ、６期同様にほぼ4.5～６ｍの範囲に入る（SB17のみ6.1ｍ）。８期（SB2、5、6、11、22、28）について、SB5が一辺3.2ｍとなる以外は、前の６・７期同様、ほぼ4.5～６ｍの範囲に入る（SB11のみ6.2ｍ）。対象とした数が少ないことから傾向を述べるのは難しいが、敢えて述べるならば６期以降の住居については4.5～６ｍのものが多く、また７期以降に６ｍを越えるものが登場するということになる。

美濃地方の他の集落について、２期に比定される住居はなく、また３期に比定できるのは城之内遺跡の住居だけであるが、ここでは３～８ｍの様々な大きさのものがあり統一性が見られない。さらに６ｍ以上のものが約３分の１を占めている。４期について、城之内遺跡では３～５ｍ台のものが多くなり、川合遺跡群では集中が見られない。また両遺跡を通じて、３期と同様に６ｍを越えるものが一定量（17件中５件、29.4％）ある。５期についても城之内遺跡と川合遺跡群の住居が比定できるが、城之内遺跡では６ｍを越えるものがなくなり、規模の縮小化が見られる。川合遺跡群では５ｍ台にピークがあるが、依然として６ｍ以上のものが一定量（16件中４件、25％）ある。６期については、資料数が少ないが３～６ｍの範囲に入り、特に５ｍ台に若干の集中が見られる。７・８期も基本的な傾向は６期と同じであるが、牧野小山遺跡においてはピークが４ｍ台に移る。また、城之内遺跡と牧野小山遺跡では依然として６ｍ以上の住居が無いのに対し、川合遺跡群では６ｍを越えるものが存在する。９期については、城之内遺跡では３～５ｍに集中し縮小傾向が進むのに対し、川合遺跡群でも３～６ｍに集中が見られるものの、６ｍ以上のものは依然として存在する。牧野小山遺跡では６ｍを越えるものが若干見られるが、ピークは３～５ｍ台にある。

さらに大きさに関する要素として床面積がある（第７表）。今回扱った全ての遺跡について、５期以降に10～30㎡に集中が見られる。また９期については20㎡までの小規模なものが増え、ここでも縮小傾向が見られるが、川合遺跡群では30～50㎡の住居が一定量存在する。

以上、長辺と床面積について検討をした。下西郷一本松遺跡では、時期が下るにつれて規模が若干

拡大するという傾向があるが、資料が少ないため断定することはできない。また、美濃地方の他の遺跡で5期以降に縮小傾向が見られたものの、川合遺跡群だけはその傾向に沿いながら常に大きな住居が存在するという特徴が見られた。

〔住居の方向〕（第8表）

北を主軸とし最も近い辺の角度をとることで、住居がどの方向に向けて造られるかを見る。宮之脇遺跡の報告においても検討されており、報告者も「意味があるかどうか疑問」があると述べているが、住居の方向を揃えるという意識の有無を見るために検討を行うことにする。便宜的に西から東までの180度を6等分しその集中の様子を検討する。

下西郷一本松遺跡について、5期までは資料の少なさから傾向を読みとることは難しいが、3期においては北北西から北北東、5期においては北東から東に向く。6期は北西から西、7期は北北西から北北東、8期は北東から東にまとまりが見られるが、それほど強い集中ではない。

美濃地方の他の集落について、城之内遺跡では6期までは方向にまとまりが見られないものの、7期以降はほとんどの住居が北北東から北東方向に向き、9期についてもその傾向は続く。川合遺跡群では、5期では北北西から北東に、6期以降には北から西方向に集中が見られる。牧野小山遺跡ではそれほど強い傾向性は見られないものの、6期以降に北から東方向の住居が多くなる。

以上の結果は、遺跡毎・時期毎に違いはあるが、ある時期以降に住居の方向を統一して造るという意識があったことを示してはいないだろうか。しかしながら、方向を統一するという現象の理由については未だ掴めておらず今後の課題である。

〔炉・カマド〕（第9・10表）

炉が検出されているのは6期までであり、炉を持つ住居の数は36基と大変少ないことから、下西郷と他の集落の比較ではなく、全体の傾向を述べるに留める。炉の位置については、その大半が柱穴に囲まれる住居の中央に存在することから（36基中32基、88.9％）、中央部分を方形に9等分し、北を主軸として北西から南東に向けて1～9の番号を付けて位置の分類を行った。

下西郷一本松遺跡ではSB33（2期）、SB3（3期）、SB12、15（6期）で炉を検出した。SB33、3については住居の全範囲を検出していないことから位置は確定できないが、おそらく中央部分にあると思われる。また、SB12、15は中央部分にある。本遺跡の住居全体に言えることだが、柱穴を検出した住居がほとんど無いため、これ以上の位置の特定は難しい。

各期を通じて炉が設置される最も多い場所は中央西寄り（4）（32件中14件、41.3%）と中央北寄り（2）（32件中6件、18.8％）である。中央部分（5）にあるものも1割近くあるが、そこから若干ずれた位置にあるという以上の結果は、住居内の空間利用とも関わる数字であると思われる。

カマドについては、全体の傾向として出現した時からそのほとんどが北壁に造られ、各時期を通じて常に割合が高い。その他の位置で多いのが東壁、北東壁（住居の軸が北からずれた場合の壁の名称。北西、南東、南西についても同じ）である。

下西郷一本松遺跡だけ見ても同様の傾向となる。SB1、5、11、29は北壁にあり、SB7、10、17は東壁にある。また7期に北壁と東壁、8期に北壁、西壁に造られるという点も興味深い。

またカマドの出現期であるが、美濃地方における最古のカマドは6期に比定される牧野小山遺跡の

Ｈ４とSB18である。その後７期以降にカマドの数は激増し、美濃地方において一気に定着するのである。また９期においては住居の南壁に造られるカマドはほぼなくなり、北壁に造られるという傾向はさらに強くなる。

〔土地利用〕

下西郷一本松遺跡では３期のSB3・9・20、６期のSB4・13・15・8・10（18）・32、８期のSB2・11・6など、各時期ごとで住居がほぼ等間隔に位置するという現象が見られる。これは集落における土地利用に関係することと考えられる。しかしながら他の集落においてはこの現象はあまり明確には見られなかった。

以上、下西郷一本松遺跡で検出した住居と他の集落との比較検討を進めてきたが、細かな部分で差異は見られたものの、炉の位置、カマドの出現・定着などで見れば、他の集落の傾向と大差がないと言えるのではないだろうか。また、今回扱った要素以外にも、貯蔵穴、炉の構造、柱穴及び上部構造、床面の構造、住居内の空間利用など検討しなければならない要素は多い。また、今回扱った以外の集落や前後の時期の住居についても検討が必要であり、問題は山積みである。しかしながら、資料数や検討する項目が増えるほど、各集落の特徴がより明確に現れてくるのではないかと考えている。

〔報告書〕
可児市教育委員会『川合遺跡群』1994
岐阜県教育委員会『城之内遺跡』1990
岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会『牧野小山遺跡』1973
㈶岐阜県文化財保護センター『堀田城之内遺跡』1997
㈶岐阜県文化財保護センター『牧野小山遺跡　Ｃ地点』1998
岐阜市遺跡調査会『堀田・城之内』1996
岐阜市教育委員会『平成９・10年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』1999
岐阜市教育委員会『城之内遺跡－長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査－（第Ⅰ分冊）』1999
㈶岐阜市教育文化振興事業団『堀田・城之内Ⅱ』1997
㈶岐阜市教育文化振興事業団『城之内遺跡－北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査－』1999

	下西郷一本松遺跡							城之内遺跡								川合遺跡群								牧野小山遺跡							
	2	3	4	5	6	7	8	2	3	4	5	6	7	8	9	2	3	4	5	6	7	8	9	2	3	4	5	6	7	8	9
2.1～3.0m						1					1		1		1								1						1		
3.1～4.0m	1				1		1		4	4	1	2	1	3	2			1				1	10					1	3	2	5
4.1～5.0m					3		2		2	3	3		2	5	4			1	3	1	2	2	13					1	7	4	4
5.1～6.0m				1	3	1	2		3	1	1	3	3	6				2	9	1	1	2	12					3	2	3	
6.1～7.0m							1		5	1								2	2			2	9								2
7.1～8.0m									1									2	1				3								
8.1m～																			1												

第６表 竪穴住居長辺の時期別件数

	下西郷一本松遺跡							城之内遺跡								川合遺跡群								牧野小山遺跡							
	2	3	4	5	6	7	8	2	3	4	5	6	7	8	9	2	3	4	5	6	7	8	9	2	3	4	5	6	7	8	9
～10㎡							1			1	1				2								7						2		4
10.1～20㎡					1	1	2		4	2	2	1	2	3	3			1	3	2	1	2	8					3	9	4	4
20.1～30㎡					3	1	2		1		1	2	2	2				1	5		1	4	1					2	1	1	
30.1～40㎡									3									3	1				8							2	2
40.1～50㎡																		1	1				2								
50.1㎡～																			1												

第７表 床面積の時期別件数

	下西郷一本松遺跡							城之内遺跡								川合遺跡群								牧野小山遺跡							
	2	3	4	5	6	7	8	2	3	4	5	6	7	8	9	2	3	4	5	6	7	8	9	2	3	4	5	6	7	8	9
W45～W31	1				2	1			1	1		1						1	2	1	1	2	9					1	3		
W30～W16					2		1		2	2	2	1						2	2	1	1	1	18						2	3	2
W15～W1	1	1		1	1	2	1		3		2	1		2				2	4		2	2	14						2		2
O～E15		2			2	1			7	6		2	7	4	4			1	3			1	12					3	2	3	5
E16～E30				1			2		5	5	2	2	4	9	3				4				2					1	2	2	1
E31～E45				1			2			1				1	1				1			1	2						3	1	2

第８表 竪穴住居方向の時期別件数

	2	3	4	5	6
1		1	1	1	1
2		1	2	2	1
3				1	
4		4	3	7	
5		2		1	1
6			1		
7			1		
8		1			
9					

第９表 炉位置の時期別件数

	6	7	8	9
北壁	1	11	14	41
北東壁		4	5	
北西壁			1	12
東壁	1	9	5	8
西壁		1	3	2
南東壁		1	2	
南西壁	1			
南壁		1		1

第10表 カマド位置の時期別件数

第４節　下西郷一本松遺跡出土土師器煮炊具の使用痕

はじめに

下西郷一本松遺跡から出土した多数の土師器煮炊具について、外面のススや内面の炭化物の状態を検討した。扱った遺物の出土遺構、帰属時期は第11表のとおり。特に脚台部内面の使用痕の状態に留意した。

使用痕の分類

別稿でまとめた分類案[1]を使用する。

Ａタイプ（図版１－７・175）

内面底部付近に円形に炭化物が付着するもの。台付甕では炭化物の中心が円形に抜けるものが大多数を占める。宇野隆夫氏の指摘によれば、Ａタイプは「水分を飛ばす調理」であり、「ご飯を炊いた」ものが多いと考えられる[2]。Ａタイプは、他の使用痕との組み合わせなどからいくつかに細分できる。

Ｂタイプ（図版１－589）

Ａタイプの使用痕に加えて内面胴部上半に帯状に連続する汚れ（変色域）あるいは炭化物が見られるもの。Ｂタイプも変色域の形状で細分可能である。帯状の汚れあるいは炭化物については、宇野氏の指摘によれば「水分が多い汁物を調理した結果」によるものと考えられる。

Ｃタイプ

胴部内面のほとんどに汚れ（変色域）あるいは炭化物が付着するもの。Ｃタイプについては調理法がわからない。

Ｄタイプ（図版１－427）

胴部内面に使用痕が認められないもの。宇野氏の指摘によれば、「甑をのせて調理を行う」＝「湯釜」に相当する。

Ｆタイプ

胴部上半部に帯状の汚れ（変色域）あるいは炭化物が付着するもの。Ｂタイプの内面底部の使用痕が見られないもの。

Ｇタイプ

胴部内面に１～数個のパッチ状の汚れあるいは炭化物が付着するもの。Ｇタイプは甕を横にして加熱した結果できたと考えられる。

脚台内使用痕（図版１－198）

脚台部接地部側内面に変色域やススが見られるものを上述のタイプと別個に脚台内使用痕とする。脚台内使用痕の成因は今のところわからない

使用痕の様相（第85・86図）

時期別に内面の使用痕を中心に述べる。

１期（SK9：７・８・９）

いずれも胴部内面下半部に炭化物が付着するＡタイプ。底部付近で円形に使用痕が見られない部分がある。７・８は下半部の使用痕の上部に隣接してパッチ状の使用痕が認められる。９は下半部の使用痕の上部の広い面積に非常に薄い黒色変色域が見られる。外面は頸部と胴部下半部以外の全面にススが付着する。

２期（SK6：38・37・35）

35･38は内面に使用痕が見られないＤタイプ。38は内面底部付近（底部から立ち上がり部）と胴部に使用痕が見られるＢタイプ。

３期（SB3：45、SB9：55・52、SD3：80・81・91～95・100･120）

80・91はＡタイプ。45・95・120はＤタイプ。大垣市今宿遺跡の調査では45・120のような鉢形の器形のものにＤタイプが多く、今回も同様の傾向を示す。55は胴部外面に１カ所パッチ状のススが見られるもので、内面の対応する位置にも炭化物が付着する。なお、口縁部から底部付近にかけて内外面にやや斜めを向いた上下方向で帯状の赤化域が認められた。この成因についてはわからない。81・92～94は特定の類に帰属させるのが困難なもので、94はＡ・Ｂ・Ｃタイプのいずれか、92はＡ・Ｃタイプのいずれか、81・93はＡ・Ｄタイプのいずれかの可能性が高い。52は炭化物の付着による使用痕は全く見られないもので、胴部上半～口縁部内外面に被熱赤変と表面の剥離が顕著に認められる。98は全く使用痕が認められない。甕形の器形であるが、胴部に穿孔が施されていることからみて、液体を注ぐなど別の機能を持っていた可能性が高い。100は台付甕の脚台部で接地部側内面天井部に円形の脚台内使用痕が見られる。

４期古段階（SX10：133・134）

いずれもＳ字甕の脚台部で脚台内使用痕が見られる。

５期古段階（SB25：166・172・174、SK1：175・177、SK7：195・198～200）

Ｓ字甕175はＡタイプの使用痕と脚台内使用痕が認められる。166・177・195は分類がはっきりしないもので、166はＢ・Ｆタイプのいずれか、177はＢ・Ｃタイプのいずれかの可能性が高い。174・172・200・198・199は脚台内使用痕が認められるものでいずれもＳ字甕。199は広い範囲で変色域が認められる。

５期新段階（SB8：242）

SB８出土遺物は５期新段階と６期古段階の両者が見られるが、242は５期新段階の脚台内使用痕が認められるＳ字甕。

６期新段階（SB12：321～324、SB15：385～387、SB32：427）

385・427はいずれもＤタイプの宇田甕。385は脚台内使用痕も認められる。321はＳ字甕Ｄ３類か宇田甕、386は宇田甕でＡ・Ｂいずれかのタイプ。脚台内使用痕も認められる。386は脚台接地部にスス付着。324・322・323はくの字台付甕の脚台部、387は宇田甕の脚台部で、いずれも脚台内使用痕が認められる。

７期（SB7：466、SB29：502、SK2：515・520・525・523）

515はＡタイプの使用痕をもつ宇田甕で、内面炭化物は下方が濃く、上方が薄い。520はＢタイプの使用痕をもつ宇田甕。内面上方の使用痕は途中で大きな段差を持つ。下方の使用痕と上方の使用痕の

間にパッチ状の使用痕が見られる。502は残存部全面に黒色変色域が広がる宇田甕で、胴部最大径付近に帯状に色の抜けた部分がある。胴部下半が無いため断定はできないが、類例からみてCタイプになる可能性が高い。525はA・Bいずれかのタイプの宇田甕。523・466は脚台内使用痕の見られる宇田甕。

8期（SB5：589、SB6：610、SB11：624、SB22：635）

610は把手付の鉢でAタイプ使用痕が見られる。589はBタイプの使用痕が見られる伊勢型甕。胴部内面の帯状黒色変色域は斜めになり、外面にそれと対応するススと被熱赤化部分の境界が走る。胴部内面の使用痕が付着した時、甕が斜めにして使われていた結果と思われる。624はA・Cタイプいずれかになる可能性の高い小型の伊勢型甕。635は宇田甕で、胴部内面に帯状の変色域が巡るFタイプが見られる。

まとめ

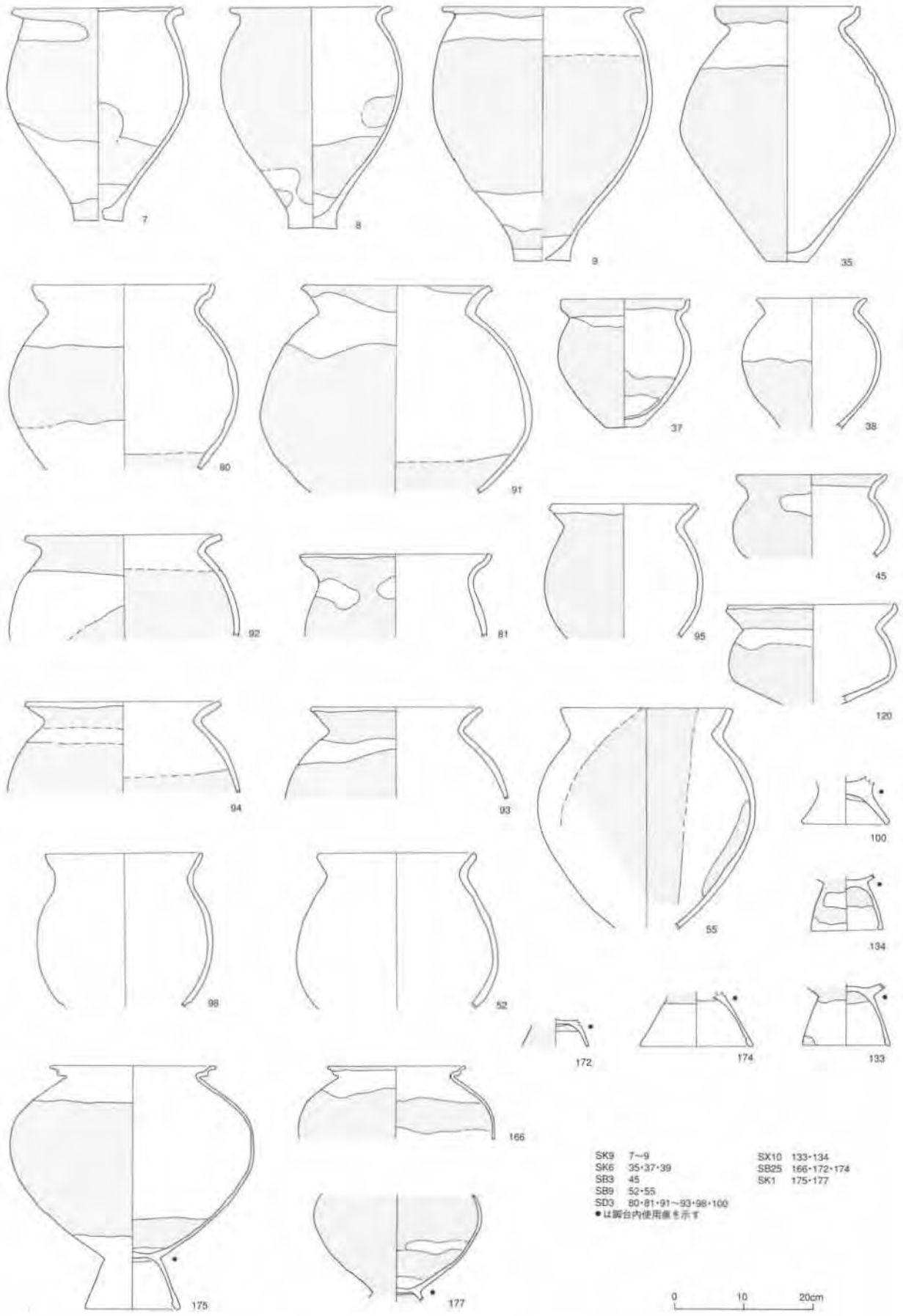
資料の制約はあるものの各時期をつうじてAタイプとDタイプが普遍的に見られる傾向があり、これにBタイプが伴う。言い換えれば、ご飯を炊く調理（Aタイプ）、ご飯＋汁物調理（Bタイプ）が各時期を通じて普遍的に見られた。また、湯を沸かす使用法（Dタイプ）も一般的である。この状況は、美濃西部域におけるこれまでの検討結果とおおよそ整合する。美濃西部域では、8期以降に伊勢型甕の普及に伴い、長胴の伊勢型甕＝Dタイプ、短胴の伊勢型甕＝A・Bタイプという器形と機能の分化が顕著になると予想しているが、今回の検討では資料が少なくはっきりとはわからなかった。この機能分化についての検証と伊勢型甕と同時期の宇田甕にも見られるのかどうかなど、今後の課題としたい。

脚台内使用痕については、今回はじめて詳しく検討した。その結果、各時期を通じてかなりこの使用痕が認められることがはっきりしてきた。本当に使用痕かというか、使用痕ならば、どのような使い方が想定できるかなど今後検討する必要がある。

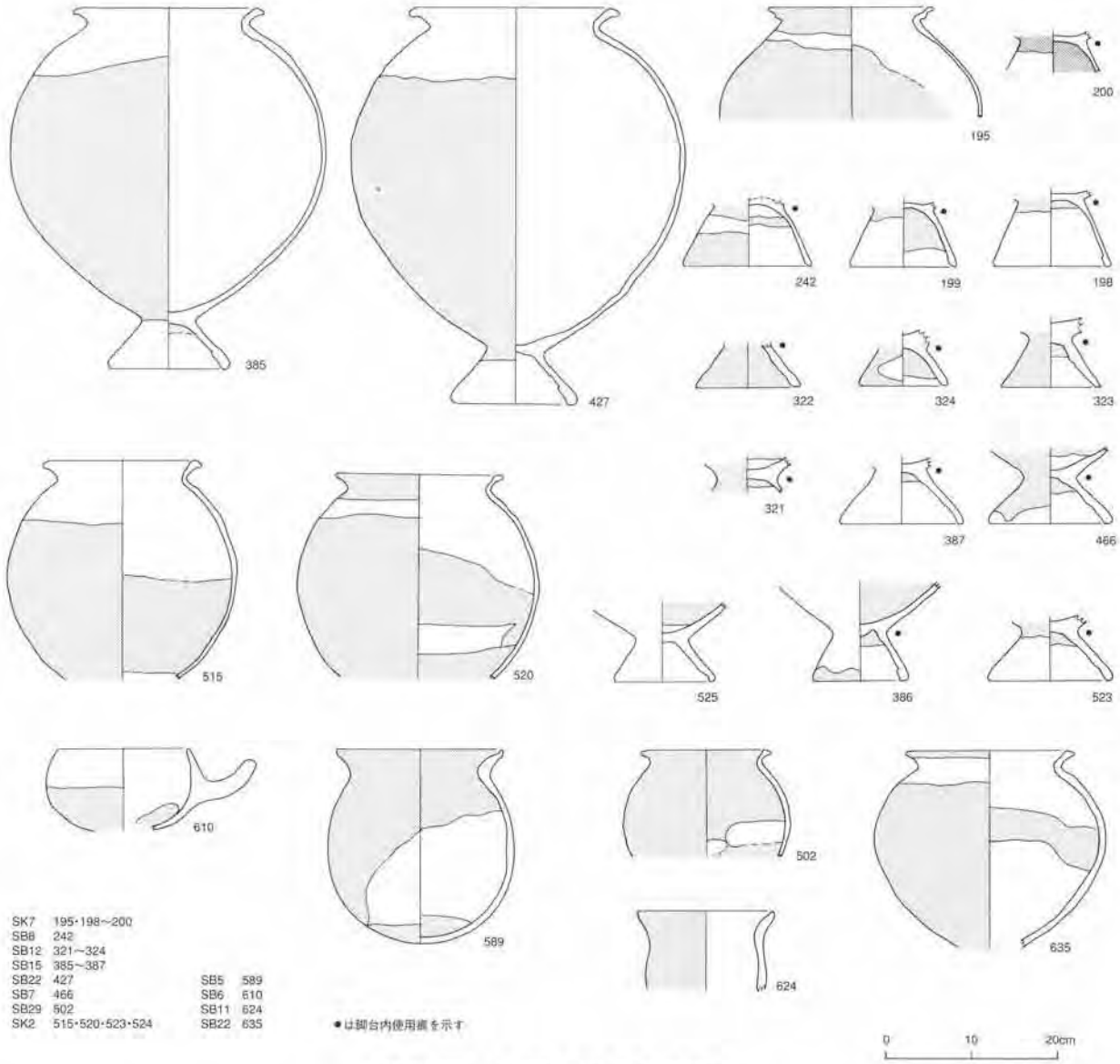
〔注〕

（1）内堀信雄「美濃における古墳時代土師器煮炊具の様相－地域色と使用痕－」仮題『美濃・飛騨の古代－古墳・氏族・寺院－』に寄稿中。

（2）宇野隆夫「古墳時代中・後期における食器調理法の革新－律令製的食器様式の確立過程－」『日本考古学』第7号　日本考古学協会　1999



第85図　土師器煮炊具使用痕(1)



第86図　土師器煮炊具使用痕(2)

期		遺構	分類							
			A	B	C	D	F	G	不明・その他	脚台内使用痕
1期		SK9	7・8・9							
2期		SK6		37		35・38				
3期		SB3				45				
		SB9						55	52	
		SD3	80・91			95・120			81・92・93・94・98	100
4期	古	SX10								133・134
5期	古	SB25							166	172・174
		SK1	175						177	
		SK7							195	198・199・200
5期	新	SB8								242
6期		SB12								321・322・323・324
		SB15				385				386・387
		SB32				427				
7期		SB7								466
		SB29			502					
		SK2	515	520					525	523
8期		SB5		589						
		SB6	610							
		SB11							624	
		SB22					635			

第11表 土師器煮炊具使用痕時期別分類一覧

7

427

589

427

198

175

198

図版１　土師器煮炊具使用痕

第6章　自然科学分析

第1節　SB12炉跡焼土の焼成年代

藤根 久・Lomtatize Zauri（パレオ・ラボ）

1．はじめに

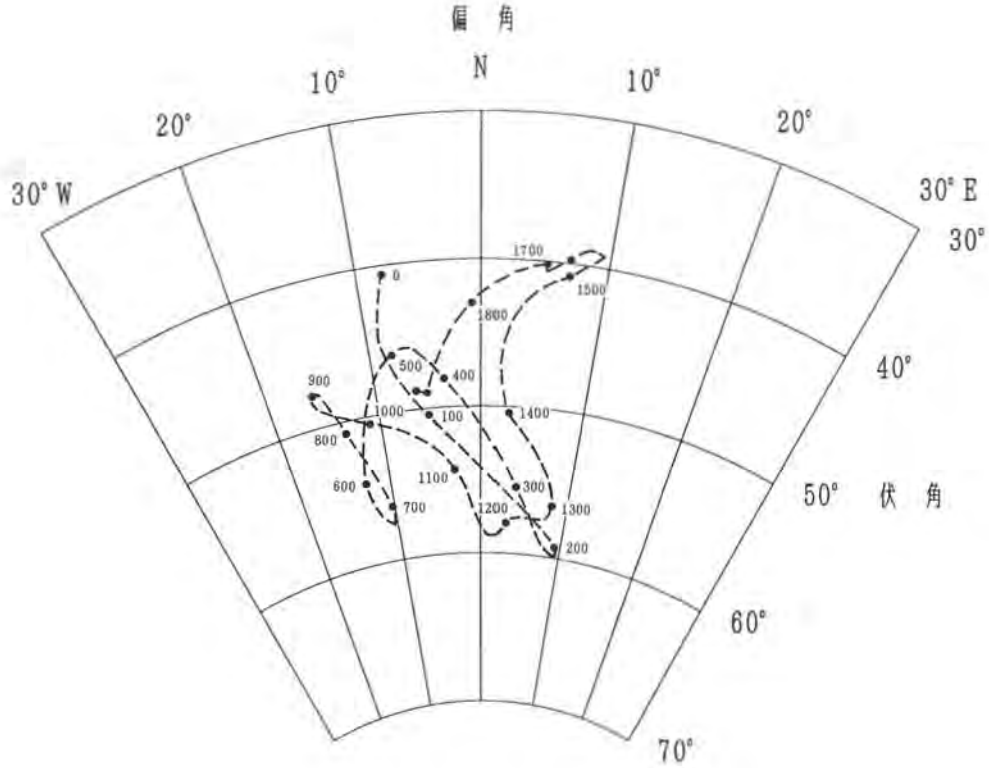
下西郷一本松遺跡は、岐阜市下西郷地内に所在する弥生後期から古墳時代にかけての住居跡などの遺構からなる遺跡である。住居跡SB12では中央部において赤化した炉跡焼土が検出された。ここでは、この炉跡焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から焼成年代を推定した。

2．考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約6.87°、伏角は約48.69°、全磁力（水平分力）は約30656.9（nT）である（理科年表、1993；いずれも1990年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界の地磁気三要素の観測データ解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁鉄鉱など）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977、Shibuya、1980；第87図）。また、湖や浅海の堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている（Hyodoほか、1993）。

年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、



第87図　過去2,000年間の磁気永年変化曲線（Shibuya, 1980）

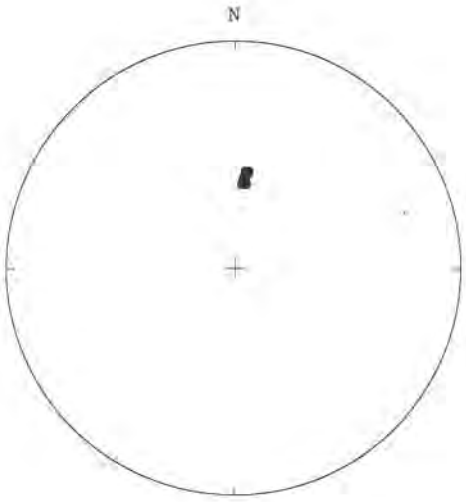
この方法は、^{14}C年代測定法など他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、焼き物等の年代が参考となる。

3．試料採取と残留磁化測定

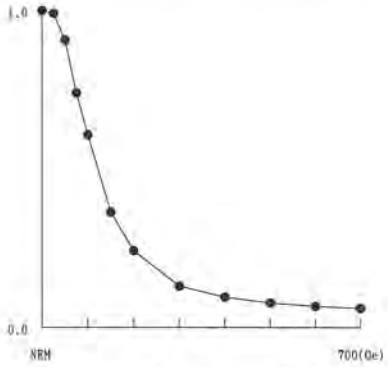
考古地磁気による年代推定は、a）測定用試料の採取および整形、b）残留磁化測定および統計計算を行い、c）地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

a．測定用試料の採取および整形

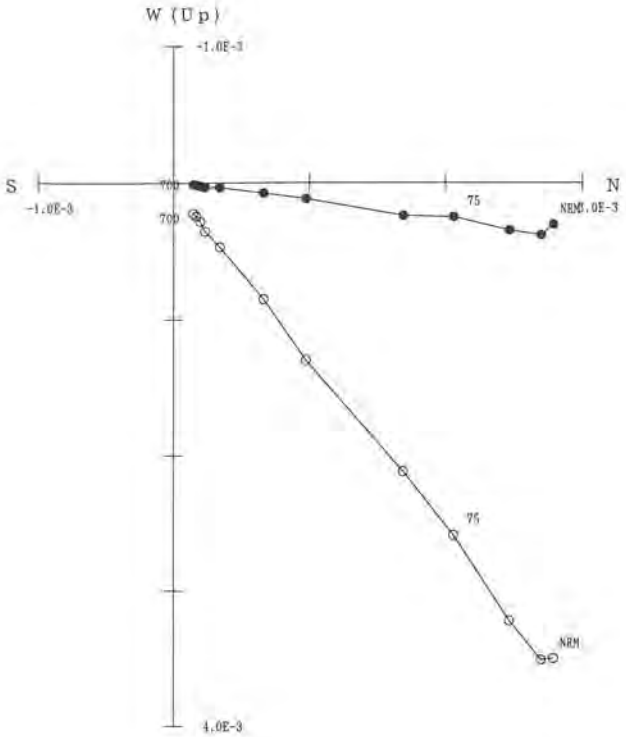
試料は、炉跡焼土面において、①一辺約4㎝の立方体試料を取り出すため、ヘラなどを用いて対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや硬め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5㎝の正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5㎝・厚さ2㎝程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、いずれも炉跡焼土から12試料を採取した。



［ a．シュミット・ネット投影図 ］



［ b．残留磁化の相対強度 ］



座標系 → ●：N－S－E・W　○：N－S－Up・Down
消磁レベル（Oe）：NRM- 25- 50- 75-100-150-200-300-400-500-600-700

［ c．ジダーベルト図（単位：emu） ］

第88図　試料No.11の段階交流消磁測定結果

b．段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：㈱夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料No.11について交流消磁装置（DEM-8601：㈱夏原技研製）を用いて段階的に消磁し、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した（第88図）。その結果、試料の磁化強度は10^{-3}～10^{-4}emuと比較的強い。また、磁化保持力については、NRM（自然残留磁化）に対する相対強度は、75 Oe消磁において約74%と高い値である（b．残留磁化の相対強度）。また、磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録している（c．ジダーベルト図）。

以上の理由から、75Oeで消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、75Oe消磁した後に残留磁化を測定した。

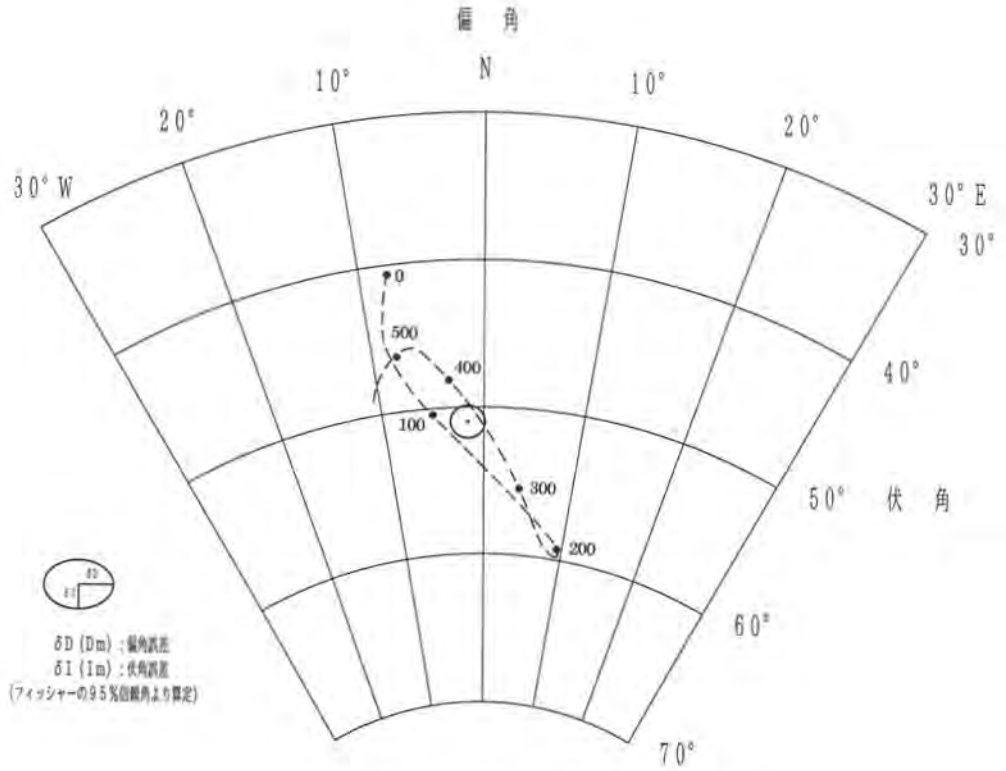
複数試料の測定から得た偏角（Di）、伏角（Ii）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（Dm、Im）を求めた。信頼度計数は、1006.61～1788.81と大きな値であり、各誤差も小さな値となった（第12表）。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地

理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した6.87°Wを使用した。その結果は、Shibuya（1980）による地磁気変化曲線とともにプロットした。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

遺構名	試料No.	偏角(°E)	伏角(°)	強度(x10^{-3} emu)	備考	統計処理項目	統計値
SB12 (75 Oe消磁)	1	2.1	53.6	1.550		試料数（n）	12
	2	8.6	50.5	7.200			
	3	5.8	50.4	6.440		平均偏角Im（°E）	5.25
	4	3.0	51.3	2.150			
	5	5.3	49.7	3.850		平均伏角Dm（°）	51.00
	6	7.7	52.8	3.930			
	7	5.2	50.2	6.970		誤差角δD（°）	1.76
	8	6.7	48.5	2.790			
	9	1.5	51.9	2.610		誤差角δI（°）	1.11
	10	6.8	52.2	4.390			
	11	6.9	51.3	3.320	段階交流消磁	信頼度計数（k）	1531.46
	12	3.2	49.3	5.370			
	13					平均磁化強度 (x10^{-3} emu)	4.21
	14						

第12表　炉跡焼土の残留磁化測定と統計計算結果（偏角補正前）



第89図　地磁気永年変化曲線（Shibuya, 1980）の一部とSB12炉跡の磁化方向

c．住居炉跡の焼成年代

第89図には、Shibuya（1980）による地磁気永年変化曲線の一部とともに炉跡焼土の磁化方向を示した。この図を見ると、焼土の磁化方向は、100～200年間あるいは300～400年間の永年変化曲線付近に位置する。

測定した磁化方向の中心を最も近い曲線上に移動した場合、A.D.115±10年とA.D.365±15年が推定される（第13表）。なお、この住居跡からは松河戸Ⅱ式併行の土器が出土していることから、後者の年代が有力である。

遺　構	遺物による年代	考古地磁気推定年代（A.D.）
ＳＢ１２炉跡	松河戸Ⅱ式併行	115±10年，365±15年

第13表　SB12炉跡焼土の残留磁化測定による焼成年代

〔引用文献〕

Fisher, R.A.（1953）Disparsion on a sphere.Proc.Roy.Soc.London, A. 217, 295-305.

Hyodo, M.,C.Itota and K.Yaskawa（1993）Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan, J.Geomag.Geoelectr., 45, 669-696

理科年表（1993）国立天文台編，丸善，952p

Shibuya, H.（1980）Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p

第2節　高杯類胎土の材料分析

藤根 久・今村美智子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

土器胎土は、粘土とこれに混入された砂粒などから構成されるが、肉眼観察によりある程度識別されるものの、粘土の種類やミクロ的な構成物は、顕微鏡観察によらなければならない。最近では、胎土中に含まれる珪藻化石や骨針化石などの記載により、粘土の種類について知ることができることが分かってきた（車崎ほか、1996）。こうした土器胎土の材料を調べることは、形態や形式とともに土器の構成要素として必要な情報であり、土器製作技法などを考える場合に非常に重要である。

下西郷一本松遺跡では、山中式・欠山式・元屋敷式・松河戸式・宇田式等の土器を伴った住居跡や溝などが検出された。ここでは、住居跡や溝あるいは土坑などの遺構から検出された高杯類を対象に、土器の薄片を作成し顕微鏡による観察・記載を行った。

2．方法と記載

ここでは、土器の薄片を作成し偏光顕微鏡による観察による方法を行った。土器試料は、住居跡や溝あるいは土坑から出土した高杯26試料・鉢1試料・器台1試料である（第14表）。試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。なお、試料は、比較的平坦部を選び出し、面積約6㎠程度を作成した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02㎜前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数する。同定・計数は、100μm格子目盛を用いて任意の位置における約50μm（0.05㎜）以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50μm前後）を対象とし、微化石類と石英·長石類以外の粒子が約100個以上になるまで行った。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

3．分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類する（菱田ほか、1993）。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載と

その特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[胞子化石]

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO^2%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。

カコウ岩などのSiO^2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO^2%が少ない深成岩、SiO^2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO^2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO^2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO^2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるものをいう。完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。発泡斑晶質は、石基状のガラス質の部分に発泡した穴を伴うものである。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。なお、褐色斑晶質あるいは褐色完晶質は、斑晶質あるいは完晶質とは別に扱った。

[凝灰岩質]

非晶質でモザイックな文様構造を示し、石英・長石類やガラスなどが含まれるものをいう。火山砕屑物が固化したもので、起源となる火山によって鉱物組成が変化する。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01㎜未満のものを微細、0.01～0.05㎜のものを小型、0.05～0.1㎜のものを中型、0.1㎜以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類(等粒)は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06㎜以上のものを砂岩質とし、約0.06㎜未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

4．各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第15表）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1㎜前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

№1：70～500μmが多い（最大粒径1.2㎜）。石英･長石類》複合石英類（微細）〉ガラス質〉砂岩質、褐色斑晶質、複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン、カリ長石（パーサイト）、珪藻化石（不明種）、植物珪酸体化石

№2：70～400μmが多い（最大粒径600μm）。石英･長石類》複合石英類（微細）〉ガラス質〉砂岩質、複合石英類、凝灰岩質、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン、カリ長石（パーサイト）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

№3：60～300μmが多い（最大粒径600μm）。石英･長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、ガラス質、角閃石類、雲母類、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

№4：70～400μmが多い（最大粒径700μm）。石英･長石類》複合石英類〉複合石英類（微細）〉ガラス質、褐色斑晶質、雲母類、ジルコン、珪藻化石（陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№5：70～500μmが多い（最大粒径600μm）。石英･長石類》複合石英類〉複合石英類（微細）〉ガラス質、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、カリ長石（微斜長石）、斜方輝石、珪藻化石（淡水種 *Cymbella*属、*Diploneis*属、陸域指標種群 *Pinnularia obscura*）、骨針化石、植物珪酸体化石

№6：80～500μmが多い（最大粒径650μm）。石英･長石類》複合石英類（微細）〉砂岩質、複合石英類、片理複合石英類、凝灰岩質、ガラス質、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、骨針化石、植物珪酸体化石

№7：100～500μmが多い（最大粒径950μm）。石英･長石類》複合石英類〉複合石英類（微細）、凝灰岩質、ガラス質、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、雲母類、ジルコン、植物珪酸体化石

№8：70～600μmが多い（最大粒径1.2㎜）。石英･長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、砂岩質、ガラス質、褐色粒子、単斜輝石、骨針化石、植物珪酸体化石

№9：100～500μmが多い（最大粒径1.3㎜）。石英･長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、カリ長石（パーサイト）、砂岩質、ガラス質、ジルコン、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い、微細褐色粒子多い

No.10：60～350μmが多い（最大粒径1.1㎜）。石英·長石類》複合石英類（微細）〉砂岩質、複合石英類、凝灰岩質、ガラス質、角閃石類、ジルコン、珪藻化石（不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石、稲穎、微細褐色粒子多い

No.11：40～200μmが多い（最大粒径500μm）。石英·長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、ガラス質、褐色斑晶質、ジルコン、雲母類、珪藻化石（淡水種*Eunotia monodon*）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、微細褐色粒子多い

No.12：50～350μmが多い（最大粒径900μm）。砂質胎土。石英·長石類》複合石英類（微細）〉砂岩質〉複合石英類、斜長石（双晶）、単斜輝石、雲母類、ジルコン、ガラス質、珪藻化石（不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石、植物珪酸体化石集合塊

No.13：80～400μmが多い（最大粒径1.6㎜）。石英·長石類》複合石英類〉複合石英類（微細）、ガラス質、角閃石類、ジルコン、雲母類、斜方輝石、カリ長石（微斜長石）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.14：60～500μmが多い（最大粒径850μm）石英·長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、ガラス質、紋象岩、黒褐色粒子、角閃石類、ジルコン、珪藻化石（淡水種*Eunotia biareofera*、*Eunotia*属、不明種）。胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No.15：50μm前後が多く、大型粒子を含む（最大粒径1.8㎜）。複合石英類（微細）〉砂岩質、褐色斑晶質、複合石英類、ガラス質、石英·長石類、角閃石類、珪藻化石（淡水種Synedra ulna）、植物珪酸体化石、微細褐色粒子多い

No.16：60～250μmが多い（最大粒径650μm）。複合石英類（微細）〉石英·長石類〉砂岩質、複合石英類、ガラス質、ジルコン、単斜輝石、珪藻化石（淡水種*Melosira italica*、*Cymbella*属）、骨針化石、植物珪酸体化石、微細褐色粒子多い、焼成温度低い

No.17：60～400μmが多い（最大粒径950μm）。石英·長石類》複合石英類（微細）〉複合石英類、ガラス質、凝灰岩類、角閃石類、ジルコン、カリ長石（パーサイト）、珪藻化石（淡水種*Eunotia*属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石、微細褐色粒子多い

No.18：60～200μmが多い（最大粒径900μm）。石英·長石類》複合石英類（微細）、複合石英類、ガラス質、凝灰岩類、褐色粒子、雲母類、ジルコン、単斜輝石、珪藻化石（淡水種*Pinnularia*属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.19：60～200μmが多い（最大粒径600μm）。石英·長石類》複合石英類（微細）、砂岩質、凝灰岩類、雲母類、ジルコン、植物珪酸体化石

No.20：60～300μmが多い（最大粒径1.5㎜）。石英·長石類》複合石英類（微細）、砂岩質、複合石英類、ガラス質、黒褐色粒子、褐色完晶質、ジルコン、珪藻化石（淡水種*Epithemia*属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.21：90～700μmが多い（最大粒径2.4㎜）。複合石英類（微細）〉石英·長石類〉砂岩質、ガラス質、褐色粒子、褐色完晶質、片理複合石英類、斜長石（双晶）、ジルコン、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石（陸域指標種群*Hantzschia amphioxys*）、骨針化石、植物珪酸体化石、微細褐色粒子多い

No.22：80～250μmが多い（最大粒径950μm）。石英·長石類〉複合石英類（微細）、褐色完晶質、

複合石英類、砂岩質、褐色粒子、ガラス質、ジルコン、斜長石（双晶）、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Neidium iridis*、*Eunotia praerupta var.bidens*、淡水種 *Epithemia turgida*、*Pinnularia*属、Surirella属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

№23：100～600μm前後が多い（最大粒径1.6㎜）。複合石英類（微細）＞石英･長石類＞砂岩質＞複合石英類、斑晶質、ガラス質、黒色粒子、完晶質、凝灰岩類、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石（中～下流性河川指標種群 *Cymbella turgidula*、淡水種 *Epithemia turgida*、*Eunotia biareofera*、陸域指標種群 *Navicula mutica*）、植物珪酸体化石

№24：70～150μmが多い（最大粒径1.4㎜）。複合石英類（微細）＞石英･長石類＞砂岩質、褐色粒子、ガラス質、ジルコン、珪藻化石（淡水種Surirella属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

№25：40～200μmが多い（最大粒径1.5㎜）。石英･長石類≫複合石英類、複合石英類（微細）、ガラス質、カリ長石（微斜長石）、斜方輝石、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia*属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、微細褐色粒子多い

№26：80～250μmが多い（最大粒径1.9㎜）。砂質胎土。石英･長石類≫複合石英類（微細）、複合石英類、ガラス質、雲母類、角閃石類、ジルコン、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、珪藻化石（不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

№27：70～250μmが多い（最大粒径1.0㎜）。砂質胎土。石英･長石類≫複合石英類（微細）、複合石英類、ガラス質、雲母類、角閃石類、ジルコン、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus*属／*Thalassiosira*属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№28：80～300μmが多い（最大粒径4.6㎜）。石英･長石類≫複合石英類、複合石英類（微細）、ガラス質、褐色粒子、ジルコン、単斜輝石、骨針化石、植物珪酸体化石、植物遺体

5．化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度）、放散虫化石が数百μm、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2㎜である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は輪胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、a）淡水成粘土を用いた胎土、b）水成粘土を用いた胎土、c）その他の粘土を用いた胎土、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。

a）淡水成粘土を用いた胎土（№5,№11,№14～№18,№20,№22～№25；12試料）

これらの胎土中には、指標となる淡水種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。なお、試料№14・№

22・№23以外では、指標となる淡水種珪藻化石は少ない（第16表では（淡水成）とした）。試料№14では*Eunotia biareofera*や*Eunotia*属が含まれ、試料№22では沼沢湿地付着生指標種群の*Eunotia praerupta* var.*bidens*や*Epithemia turgida*など、試料№23では中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*や*Epithemia turgida*などが含まれていた。

b）水成粘土を用いた胎土（№1, №2, №4, №6, №8～№10, №12, №21, №26～№28；12試料）

これらの胎土中には、水成を指標する珪藻化石あるいは骨針化石が含まれていた。含まれていた珪藻化石は破片であり、淡水成あるいは海成などの堆積環境は不明である。なお、試料№27は海水種と思われる珪藻化石を1個体含んでいた。

c）その他の粘土を用いた胎土（№3, №7, №13, №19；4試料）

これらの胎土は、前述のような珪藻化石あるいは骨針化石は含まれていなかった。

6．砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第16表）。岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類（大型）や複合鉱物類（含輝石類・含角閃石類・含雲母類）が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、片理複合石英類が片岩類、褐色斑晶質や褐色完晶質が褐色火成岩類、ガラスがテフラ（火山噴出物）である。

これらは、起源岩石の種類および組み合わせによりA群とB群に分類した。ただし、ガラスからなるテフラは分類には考慮していない。

A群は、主として堆積岩類からなり深成岩類などを含む胎土である。なお、堆積岩類からなり深成岩類を含む胎土をA_1群、稀に褐色火成岩類を伴う胎土をA_2群、稀に凝灰岩類を伴う胎土をA_3群、稀に火山岩類を伴う胎土をA_4群、稀に片岩類と凝灰岩類を伴う胎土をA_5群、稀に凝灰岩類と褐色火成岩類を伴う胎土をA_6群に細分した。ただし、これら細分した分類群は極端な違いはないものと考える。大半の試料はこの分類群である。

B群は、堆積岩類や深成岩類のほか火山岩類を明瞭に含む胎土である。この砂粒をもつ胎土は№23のみである。

7．考察

検討した高杯類は、堆積環境を指標する微化石類により淡水成粘土・水成粘土・その他粘土の3種類の粘土が識別された。淡水成粘土あるいは水成粘土は各12試料見られた。ただし、指標とした珪藻化石は少ない試料が多い。

また、含まれる砂粒の推定岩石により2分類群が識別された。これら分類群は、主として堆積岩か

らなり深成岩類などを伴うA群とこれらに火山岩類を伴うB群に分類されたが、B群はNo.23の屈曲高杯のみであった。なお、ここで識別された砂粒組成は、深成岩類の出現傾向に違いが見られるものの、長良川や木曽川の現砂組成（藤根、1998）と大きく矛盾するものではないことから、大きくは在地の砂粒組成と考えられる。

城之内遺跡から出土した甕類の胎土材料と比較した場合（藤根・古橋、1999）、外洋成粘土や海成粘土などこの地域には分布していない地層粘土を使用した土器を除外した場合、全体的に淡水成粘土と推定された胎土では珪藻化石が少ない場合が多く、砂粒は主に堆積岩類や深成岩類からなる組成を示す胎土が多いことから、類似した組成と考えられる。

材料粘土について見ると、珪藻化石の少ない粘土を用いた胎土が特徴的であるが、この地域の材料が胎土の粘土として利用されたものと仮定した場合、周辺域の基盤はチャートや砂岩などの硬い中・古生層が分布することから、対象となる粘土層は沖積層あるいは洪積層が対象となる。沖積層としては、平成5年～7年にかけて岐阜市遺跡調査会により調査された城之内遺跡では、北側の1区や2A区において確認されたⅧ層前後以降の堆積物が相当する（岐阜市堀田土地区画整理組合・岐阜市遺跡調査会、1996）。また、洪積層は、Ⅸ層～sⅩ層の礫層に相当し、Ⅸ層の白色～淡黄白色粘土やⅩ層の緑灰色砂質粘土など粘土質堆積物が見られた。この洪積層は、平成6～7年度の㈶岐阜県文化財保護センターによる城之内遺跡の調査において段丘崖として見られた（岐阜県土木部・㈶岐阜県文化財保護センター、1997）。なお、これらの粘土質堆積物は、珪藻化石が堆積後の溶出等により非常に少ないことが分かってきた。こうした珪藻化石の少なさが胎土の粘土材料に反映したことが予想され、在地材料としての可能性がより高いものと推定される。

下西郷一本松遺跡が立地する地域は、沖積面であり沖積層が堆積する地域と考えられ、珪藻化石が少ないと言った特徴を示す沖積層の粘土質堆積物が利用された可能性が考えられる。さらに、胎土中の砂粒組成は、砂堆積物中の砂粒組成を反映し、堆積岩類を主体として深成岩類を含むようなA群の特徴を示すものと考える。

この地域における粘土あるいは砂粒の特徴は、遺跡の基盤堆積物の特徴を調べないと断定的な事は言えないため、発掘調査において堆積物を採取して調査・分析する必要がある。この点については今後の課題としたい。

8. その他の特徴

ここでは、胎土材料に関するその他の特徴について若干まとめておく.

No.9～No.11・No.15～No.17・No.21・No.25の胎土中では、顕微鏡下において確認される数～数十ミクロンの微細な褐色あるいは黒褐色粒子が高密度に含まれていた。これらは、鉄分の多い赤味のある粘土を焼いた時に同様の微細粒子が見られたことから（藤根・古橋、1999）、褐鉄鉱などの鉄分の多い粘土であることが推定される。

No.2やNo.14の胎土中には、イネ科植物の葉身に形成される植物珪酸体が多量に含まれていた。この植物珪酸体化石（一般的にプラント・オパールと呼ばれ、稲作推定として土壌分析として利用される）は、イネ科植物を焼いた時にそのまま残ることから、焼いた時にできる灰質を除粘材として利用した

可能性が考えられる（藤根、1998）。なお、No.12の胎土中には、こうした灰質物を類推させるような植物珪酸体化石の塊が含まれていた。

No.1やNo.6などの胎土中には、テフラ起源と推定される火山ガラスが多く含まれているが、材料としてテフラが分布する地域で作られたことを示す。

9. おわりに

ここでは下西郷一本松遺跡から出土した高杯類胎土の材料について検討した。ここで記載した特徴が今後土器研究にどのように関わっていくかは明確でないが、土器作りにおける基本的な事柄であるため非常に重要と考えている。ただし、ここで行った方法は、一部とは言え土器の破壊を伴うこと、考古学的な形質・形態を記載する方法とは異なり全ての土器胎土について調べることが出来ないこと、土器胎土のミクロ的な記載であり岩石学的・古生物学的記述が含まれ土器研究者には容易に理解されないこと、など問題もある。こうした問題はあるものの、胎土材料についてはある程度実体を把握するまで調べなければならないと考えている。

〔引用文献〕

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、2、73-88。

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』、平凡社、1612p。

岐阜市堀田土地区画整理組合・岐阜市遺跡調査会（1996）「堀田・城之内遺跡」。299p。

岐阜県土木部・㈶岐阜県文化財保護センター（1997）「堀田城之内遺跡」。147p.

菱田　量・車崎正彦・松本　完・藤根　久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について－弥生時代後期の土器を例にして－、日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集、34-35。

藤根　久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料。第6回東海考古学フォーラム岐阜大会，土器・墓が語る、P.108－117。

藤根　久・古橋美智子（1999）「城之内遺跡」、㈶岐阜市教育文化振興事業団、P.127-153。

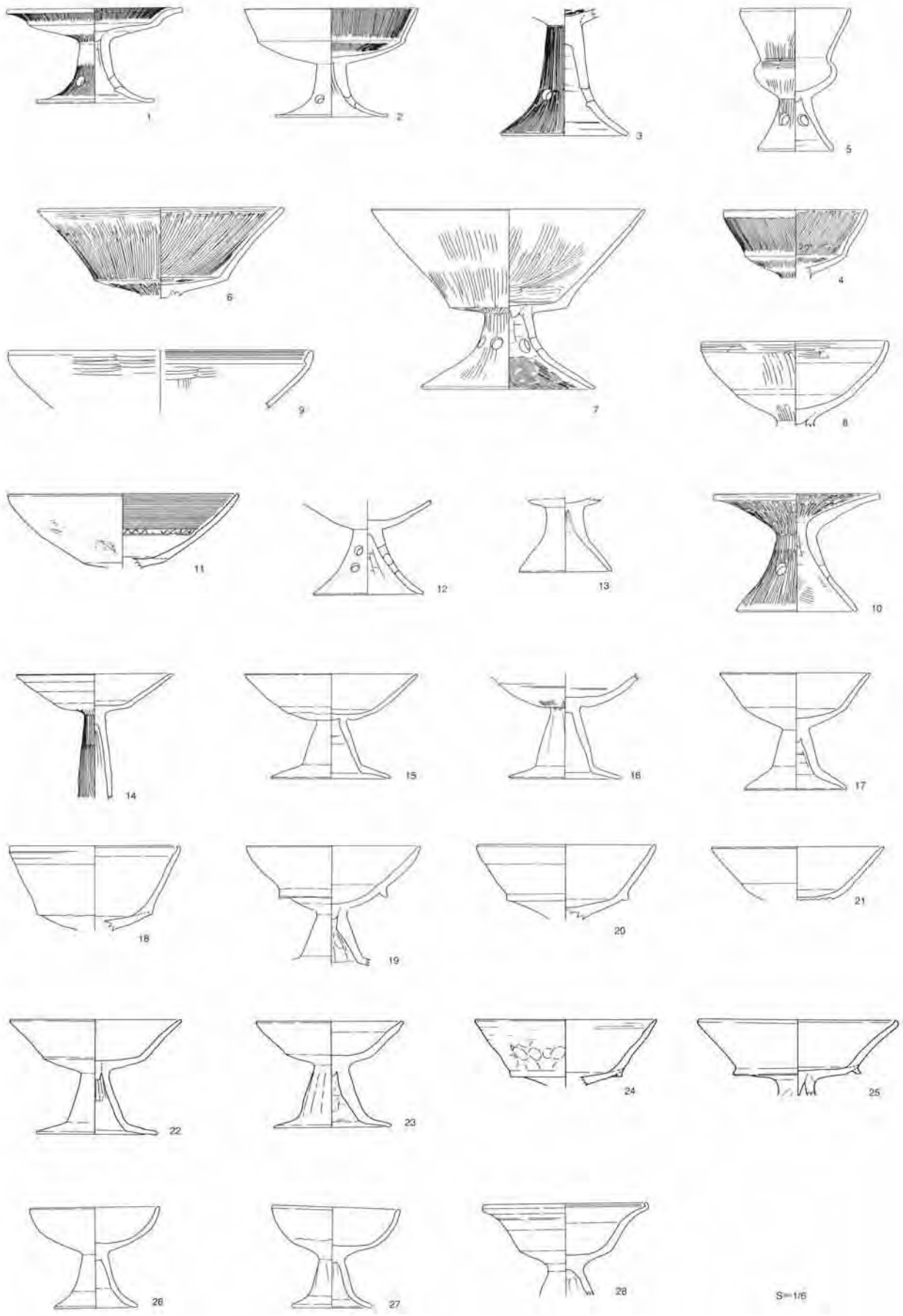
藤根　久・古橋美智子（1999）付編7。第5次調査出土土器胎土および粘土採掘坑粘土の材料分析。埋蔵文化財調査報告書30「三王山遺跡」、名古屋市教育委員会，199-207。

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究、27,1-20。

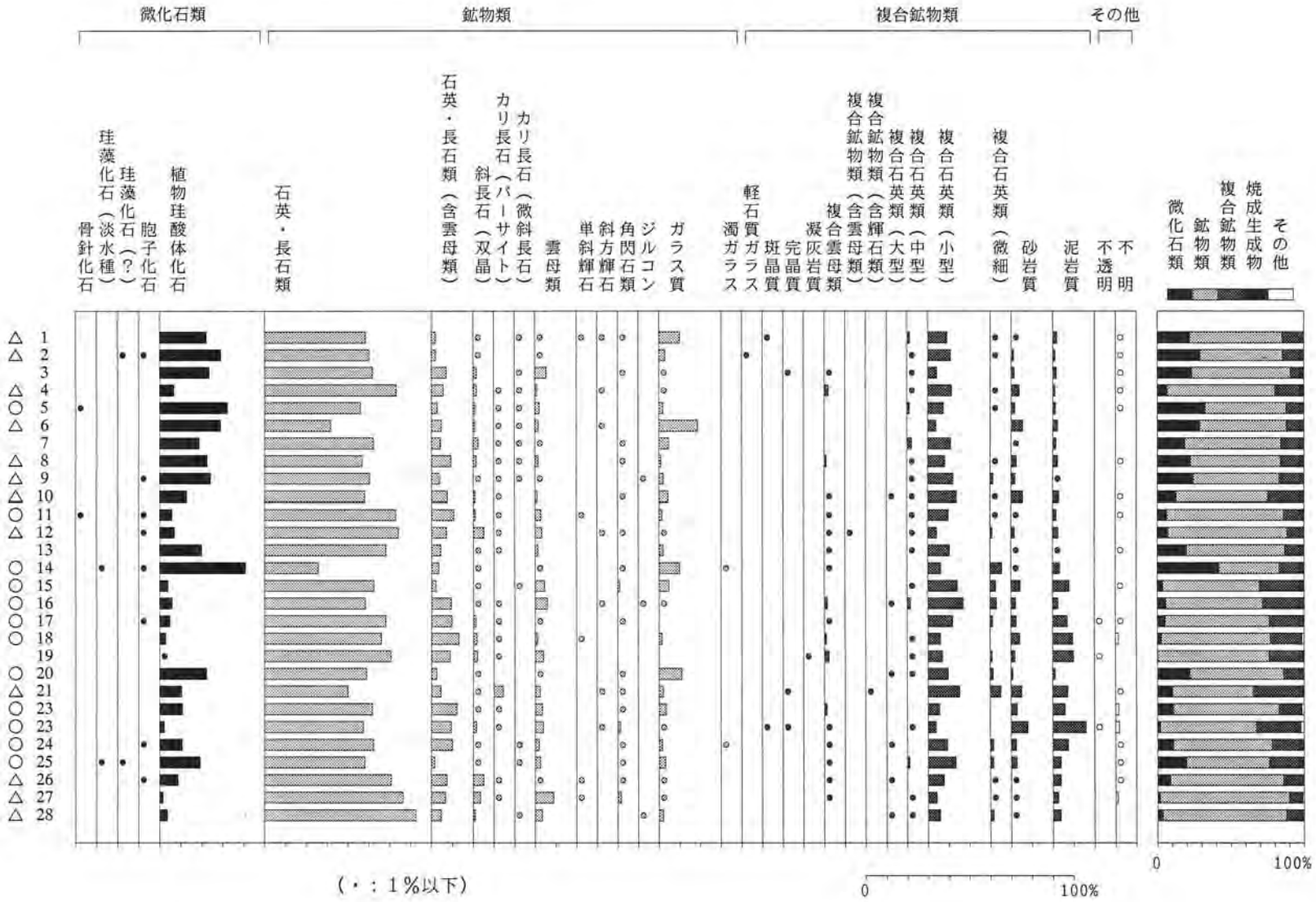
車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）（39）土器胎土の材料－粘土の起源を心中に－。
日本考古学協会第162回大会研究発表要旨、153-156。

No.	器　種	遺　跡	遺　構	報告No.	期	色相 明度/彩度	色	中黒層の有無	その他
1	屈折外反高杯	下西郷一本松	SK6	39	2	5YR 7/6	橙	無	
2	高杯	下西郷一本松	SK6	40	2	10YR 7/6	明黄褐	濃有	
3	屈折外反高杯	下西郷一本松	F I	903	2	10YR 5/4	にぶい黄褐	淡有	
4	有段高杯	下西郷一本松	SB9	69	3	2.5Y 8/1	灰白	不明瞭有	
5	脚付き鉢	下西郷一本松	SB9	72	3	5Y 8/1	灰白	不明瞭有	
6	有段高杯	下西郷一本松	SD3	213	3	7.5YR 7/6	橙	淡有	
7	有段高杯	下西郷一本松	SD3	101	3	2.5Y 8/3	淡黄	濃有	表面塗布？7.5YR 8/6浅黄橙
8	高杯	下西郷一本松	SD3	116	3	5YR 7/8	橙	濃有	籾？１固体含む
9	有段高杯	下西郷一本松	SD3	115	3	10YR 8/3	浅黄橙	淡有	砂粒多い
10	器台	下西郷一本松	SD3	119	3	7.5YR 7/4	にぶい褐	無	砂粒多い
11	有段高杯	城之内（枝広）	SD26	129	4	10YR 8/2	灰白	無	
12	有段高杯	下西郷一本松	SB25	161	5	5YR 6/8	橙	無	砂粒多い
13	有段高杯	城之内（堀田）	SK44	232	4	2.5Y 8/4	淡黄	無	
14	屈折脚高杯	下西郷一本松	SX13	207	5	5YR 7/8	橙	濃有	
15	屈折脚高杯	下西郷一本松	SB18	408	6	10YR 8/4	浅黄橙	無	粘土木目細かい
16	屈折脚高杯	下西郷一本松	SB18	411	6	5Y 8/1	灰白	無	粘土木目細かい
17	屈折脚高杯	下西郷一本松	SB10	282	6	7.5YR 7/6	橙	無	
18	屈折脚高杯	下西郷一本松	SB10	284	6	5YR 5/4	にぶい赤褐	無	
19	屈折脚高杯	下西郷一本松	SB32	429	6	2.5YR 6/8	橙	無	シルト質
20	屈折脚高杯	下西郷一本松	SB32	428	6	10YR 7/4	にぶい黄橙	無	10YR 4/3にぶい黄褐色粒子斑点状多い
21	屈折脚高杯	下西郷一本松	SB4	221	6	7.5YR 8/4	浅黄橙	無	砂粒多い
22	屈折脚高杯	城之内（枝広）	SD32下層	173	6	2.5YR 6/8	橙	無	
23	屈折脚高杯	城之内（枝広）	SD32下層	175	6	2.5Y 8/2	灰白	無	
24	屈折脚高杯	城之内（枝広）	SD32下層	170	6	2.5Y 8/4	淡黄	無	
25	屈折脚高杯	城之内（枝広）	SD32下層	169	6	7.5Y 8/6	浅黄橙	無	砂粒少ない
26	杯部椀形高杯	下西郷一本松	SB1	450	7	5YR 6/8	橙	無	
27	杯部椀形高杯	下西郷一本松	SK2	533	7	5YR 7/6	橙	淡有	
28	屈折脚高杯	下西郷一本松	SK2	528	7	2.5YR 6/8	橙	淡有	砂粒少ない

第14表　高杯類の胎土分析試料



第90図　胎土材料分析遺物実測図



第91図　土器胎土中の粒子組成図（全分類群を基数とした百分率で表示）

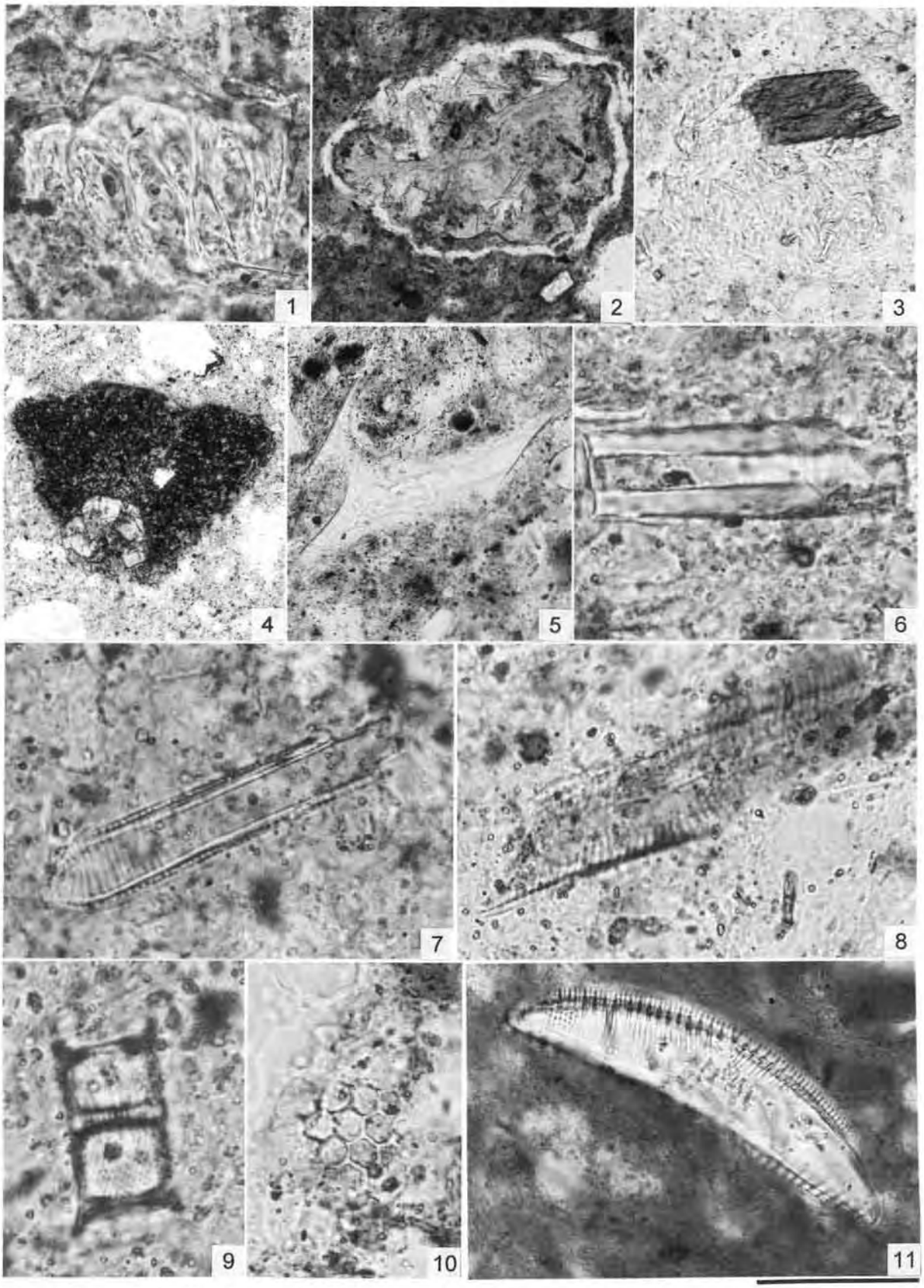
［粘土の区分］
○：淡水成粘土（淡水種珪藻化石などの出現）　△：水成粘土（不明種珪藻化石などの出現）　無：その他粘土（微化石類を含まない）

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	23	23	24	25	26	27	28
微化石類																												
骨針化石	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（淡水種）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
珪藻化石（？）	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
胞子化石	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	3	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
植物珪酸体化石	89	169	120	26	179	87	76	87	107	38	23	27	104	166	11	15	15	8	1	89	26	35	5	33	69	37	6	18
鉱物類																												
石英・長石類	193	290	262	240	254	94	210	179	222	141	246	248	302	104	149	124	179	154	181	194	99	167	110	162	172	258	248	359
石英・長石類（含雲母類）	8	12	36	22	16	14	17	36	17	22	42	27	22	14	6	24	30	36	26	10	11	39	22	31	6	31	25	23
斜長石（双晶）	2	4	9	7	6	3	10	6	3	3	4	20	5	2	1	1	4	5	6	1	2	2	4	1	1	22	13	5
カリ長石（パーサイト）	-	-	-	1	5	1	3	1	1	1	1	1	1	-	-	1	2	1	1	-	11	1	1	-	-	2	1	-
カリ長石（微斜長石）	1	-	1	2	2	2	1	1	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1
雲母類	3	2	28	4	12	5	4	6	4	3	11	13	7	3	13	15	2	3	12	3	6	11	9	6	9	4	33	17
単斜輝石	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
斜方輝石	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
角閃石類	2	-	2	-	-	-	1	3	-	1	-	3	-	1	3	-	1	-	-	1	1	1	3	1	2	4	6	-
ジルコン	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ガラス質	40	17	3	2	11	56	19	4	9	13	6	2	11	41	14	2	-	4	-	44	5	11	1	5	11	4	2	10
濁ガラス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
複合鉱物類																												
軽石質ガラス	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
斑晶質	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
完晶質	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-
凝灰岩質	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
複合雲母類	-	-	3	8	-	-	-	4	-	1	2	2	2	3	-	4	1	3	7	-	-	4	2	1	1	1	3	-
複合鉱物類（含雲母類）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
複合鉱物類（含輝石類）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
複合石英類（大型）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-	1
複合石英類（中型）	5	4	1	2	7	-	9	1	3	2	2	3	4	-	1	4	-	1	2	1	-	-	1	-	4	-	1	2
複合石英類（小型）	37	64	22	44	42	12	45	32	54	41	39	17	55	26	41	44	37	17	21	39	38	18	9	29	48	33	16	29
複合石英類（微細）	4	2	-	1	1	-	-	3	6	1	2	4	-	23	8	8	4	-	3	6	13	-	-	5	6	3	3	8
砂岩質	4	7	8	15	10	17	4	10	9	17	3	7	2	4	13	6	8	12	6	4	13	10	19	8	10	4	1	1
泥岩質	8	6	9	4	7	7	6	9	4	9	7	11	4	14	23	7	22	27	30	5	18	19	37	23	14	17	10	19
その他																												
不透明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明	1	1	3	2	1	-	-	3	-	1	1	-	3	-	2	-	1	4	-	-	1	5	4	1	2	1	4	-
総ポイント数	400	581	508	381	555	299	405	385	443	295	393	388	522	407	286	258	309	276	299	398	248	323	232	310	358	424	373	494

第15表 土器胎土中の粒子組成一覧表

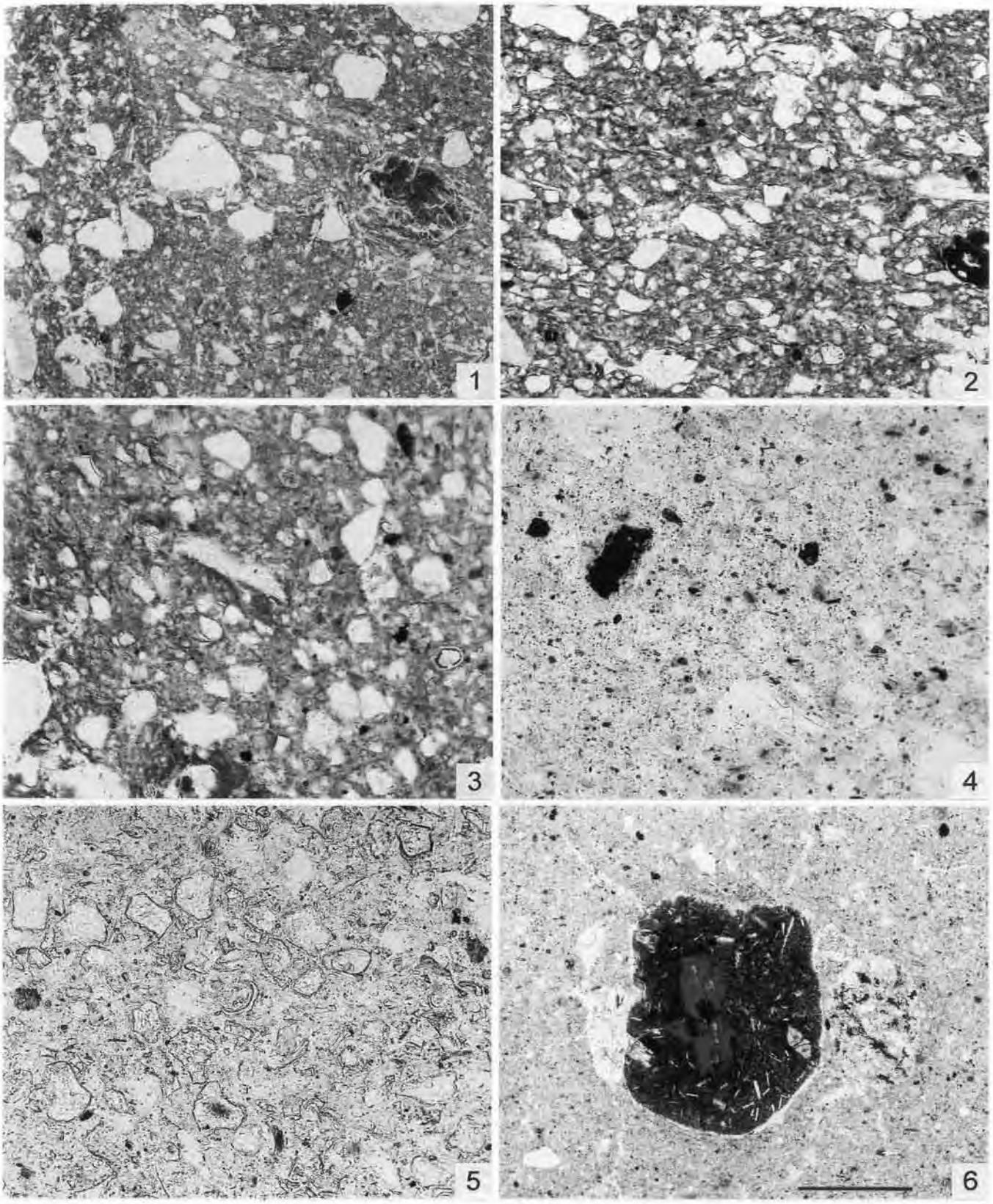
試料	器種	期	粘土の特徴				砂粒の特徴					
			分類	種　類	起　源	その他	粒度(μm)	最大粒径	分類	頻度順（》は極端な場合、［］は稀）	その他1	その他2
1	屈折外反高杯	2	△	水　成			70～500	1.20	A_1	堆積岩類、テフラ、深成岩類	ガラス高出現	
2	杯部外反高杯？	2	△	水　成			70～400	0.60	A_3	堆積岩類、深成岩類、テフラ、［凝灰岩類］		植物珪酸体化石多産
3	屈折外反高杯	2		その他			60～300	0.60	A_1	堆積岩類、深成岩類、テフラ		
4	有段高杯	3	△	水　成			70～400	0.70	A_2	堆積岩類、深成岩類、テフラ、［褐色火成岩類］		
5	脚付き鉢	3	○	（淡水成）			70～500	0.60	A_1	深成岩類、堆積岩類、テフラ		
6	有段高杯	3	△	水　成			80～500	0.65	A_5	堆積岩類、テフラ、深成岩類、［片岩類、凝灰岩類］	ガラス高出現	
7	有段高杯	3		その他			100～500	0.95	A_3	深成岩類、堆積岩類、テフラ、［凝灰岩類］		
8	（椀形）高杯	3	△	水　成			70～600	1.20	A_4	堆積岩類、深成岩類、テフラ		
9	有段高杯	3	△	水　成		微細褐色粒子高密度	100～500	1.30	A_1	堆積岩類、深成岩類、テフラ		
10	器台	3	△	水　成		微細褐色粒子高密度	60～500	1.10	A_3	堆積岩類、深成岩類、テフラ、［凝灰岩類］		稲穎珪酸体
11	有段高杯	4	○	（淡水成）		微細褐色粒子高密度	40～200	0.50	A_2	堆積岩類〉深成岩類、テフラ、［褐色火成岩類］		
12	有段高杯	5	△	水　成			50～350	0.90	A_1	堆積岩類、深成岩類、テフラ	砂質胎土	植物珪酸体集合塊
13	有段高杯	4		その他			80～400	1.60	A_4	深成岩類〉堆積岩類、テフラ、［火山岩類］		
14	屈折脚高杯	5	○	淡水成	沼沢地類		60～500	0.85	A_1	堆積岩類》テフラ、深成岩類	ガラス高出現	植物珪酸体化石多産
15	屈折脚高杯	6	○	（淡水成）		微細褐色粒子高密度	50～150、大型	1.80	A_2	堆積岩類〉褐色火成岩類、深成岩類、テフラ		
16	屈折脚高杯	6	○	（淡水成）		微細褐色粒子高密度	60～250	0.65	A_1	深成岩類、堆積岩類、テフラ	焼成温度低い	
17	屈折脚高杯	6	○	（淡水成）		微細褐色粒子高密度	60～400	0.95	A_3	堆積岩類〉深成岩類、テフラ、［凝灰岩類］		
18	屈折脚高杯	6	○	（淡水成）			60～200	0.90	A_3	堆積岩類〉深成岩類、テフラ、［凝灰岩類］		
19	屈折脚高杯	6		その他			60～200	0.60	A_3	堆積岩類〉テフラ、［深成岩類、凝灰岩類］		
20	屈折脚高杯	6	○	（淡水成）			60～300	1.50	A_2	堆積岩類、テフラ、深成岩類、［褐色火成岩類］	ガラス高出現	
21	屈折脚高杯	6	△	水　成		微細褐色粒子高密度	90～700	2.40	A_2	堆積岩類〉深成岩類、テフラ、褐色火成岩類		
22	屈折脚高杯	6	○	淡水成	沼沢地類		80～250	0.95	A_6	堆積岩類〉深成岩類、テフラ、［凝灰岩類、褐色火成岩類］		
23	屈折脚高杯	6	○	淡水成	沼沢地類		100～600	1.60	B	堆積岩類》火山岩類〉深成岩類、テフラ、［凝灰岩類］		
24	屈折脚高杯	6	○	（淡水成）			70～150	1.40	A_1	堆積岩類》テフラ、［深成岩類］		
25	屈折脚高杯	6	○	（淡水成）		微細褐色粒子高密度	40～200	1.50	A_1	堆積岩類、深成岩類、テフラ		
26	杯部椀形高杯	7	△	水　成			80～250	1.90	A_1	堆積岩類〉深成岩類、テフラ	砂質胎土	
27	杯部椀形高杯	7	△	水　成			70～250	1.00	A_1	堆積岩類、深成岩類、［テフラ］	砂質胎土	
28	屈折脚高杯	7	△	水　成			80～300	4.60	A_1	深成岩類、堆積岩類、テフラ		

第16表 高杯胎土の粘土および砂粒の特徴



図版2　土器胎土中の砂粒顕微鏡写真（スケール；No.1・11；40μm、No.2・3；100μm、No.4；200μm、No.5～10；20μm）

1．稲穎珪酸体 No.10
2．凝灰岩質（開放ニコル） No.18
3．斑晶質（直交ニコル） No.13
4．斑晶質（直交ニコル） No.4
5．ガラス質（開放ニコル） No.20
6．骨針化石 No.20
7．珪藻化石（*Eunotia* 属） No.23
8．珪藻化石（*Pinnularia* 属） No.25
9．珪藻化石（*Melosira italica*） No.16
10．珪藻化石（*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属） No.27
11．珪藻化石（*Epithemia turgida*） No.22



図版3　土器胎土中の粒子顕微鏡写真（スケール；No.1・2・6は500ミクロン、No.3は200ミクロン、No.4・5は100ミクロン）

1．高杯胎土の状況写真（No.14）
2．高杯胎土の砂質胎土（No.12）
3．植物珪酸体化石高密度に含む胎土（No.14）
4．微細褐色粒子高密度に含む胎土（No.15）
5．灰質様植物珪酸体化石密集塊（No.12）
6．褐色火山岩石類（No.15）

第３節　下西郷一本松遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

当遺跡の弥生時代終末期～古墳時代後期の異なる時期の６件の住居跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。炭化材が検出され樹種同定を実施した住居跡は、当遺跡における時期区分３期のSB9、５期のSB30、６期のSB4とSB12、８期SB5とSB6である。

当遺跡は、根尾川と長良川に挟まれた扇状地性の低地に立地している。当地域周辺における弥生時代～古墳時代の低地に立地した住居跡の建築材樹種に関する資料は、岐阜市の城之内遺跡（植田、1997）、大垣市の今宿遺跡（植田、1998）などがあるが、あまり多くは知られていない。従って当遺跡における樹種調査は、地域一帯の建築材の樹種利用や木材の供給源であった周辺森林の様相を理解する資料の蓄積となる。

２．炭化材樹種同定の方法

先ず、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で、針葉樹材・散孔材・環孔材などのおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリなどは、横断面の管孔配列が特徴的であり実体顕微鏡下の観察で同定可能であるが、それ以外の分類群については更に３方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成し、走査電子顕微鏡で拡大して組織を観察し、同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

３．結果

樹種同定結果の一覧を第17表に示し、各住居跡ごとの検出樹種とその点数を第18表に示した。当遺跡の住居跡６件の出土炭化材樹種を調査した結果、針葉樹・常緑広葉樹・落葉広葉樹・イネ科の約17分類群が特定できた。針葉樹は、モミ属・マツ属複維管束亜属・ヒノキ・ヒノキ属の４分類群が検出され、そのほかに保存が悪く針葉樹であることまでしか確認できなかった試料が多かった。常緑広葉樹はアカガシ亜属・シイノキ属・サカキ・ヒサカキの４分類群、落葉広葉樹はクリ・クワ属・サクラ属・カマツカ？・イヌエンジュ・カエデ属・エゴノキ属の７分類群であった。そのほかに保存が悪いため散孔材や広葉樹材であることまでしか確認できなかったものがある。イネ科ではタケ亜科（タケ・ササ類）と草本性のイネ科の稈が確認された。

以下に樹種同定の根拠とした材組織の観察結果を分類順に記載する。

(1)　モミ属 *Abies* マツ科　図版４　1a-1c（SB9-7）

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型とヒノキ型、１分野に１～４個、炭化材では孔口の大きさが不揃いに見える。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道に生育するトドマツの５種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版４ 2a-2c.（SB4-1）

垂直・水平樹脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状である。放射仮道管が放射組織の上下端にあり、その内壁には肥厚が認められた。放射仮道管内壁の肥厚が、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別できる場合もあるが、いずれの試料も内腔に張り出た肥厚部分が欠落しているため、アカマツとクロマツの識別はできなかった。

アカマツは二次林の代表樹種である。また自然分布ではアカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多いといわれている。材は耐湿性に優れている。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. 図版４ 3a-3c（SB6-1）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は非常に少ない。放射組織の壁は平滑、分野壁孔の孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型でおもに２個が水平に整然と配列している。

(4) ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科

分野壁孔の輪郭は丸くヒノキ型であるが、保存が悪いため分野壁孔の特徴が充分観察できず、ヒノキとサワラの識別が出来なかった試料である。なお、サワラの分野壁孔の孔口はヒノキより大きく開口している点で識別している。

ヒノキ属は温帯に分布し、本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

(5) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版５ 4a-4c（SB12-42）

集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列と広放射組織があり、道管との壁孔は大きくて、柵状・交互状に配列している。

アカガシ亜属は常緑性でいわゆるカシの仲間で、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性がある。

(6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版５ 5a-5c（SB30-1）

年輪の始めに大型の管孔が密接して並び、除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性のみで、道管との壁孔は大きくて、柵状・交互状に配列している。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

(7) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版５ 6a-6c（SB12-19）

年輪の始めに中型からやや小型の管孔が間隔を開けて配列し、除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性である。年輪始めの管孔が間隔を開けて配置していることからクリとは異なりシイノキ属であることが判る。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブラジイと福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。材は堅い。

(8) クワ属 *Morus* クワ科　図版6　6a-6c（SB12-19）

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では小型や非常に小型の管孔が集合がして分布する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～4細胞幅の紡錘形、上下端に方形・直立細胞があり、道管との壁孔は大きて交互状に配列している。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。材は重硬・強靭で心材は特に保存性が高い。

(9) サクラ属 *Prunus* バラ科　図版6　8a-8c（SB5-1）

小型の管孔が年輪の始めはやや密に分布し、その後放射方向・接線方向・斜状に複合している散孔材。道管の穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な属で多くの種を含み、モモ・ウメ・スモモなどの栽培種も含む。材は粘り気があり強く、保存性も高い。

(10) カマツカ？ *Pourthiaea villosa*（Thunb.）Decaisne var.*laevis*（Thunb.）Stapf バラ科 図版8 14a-14c（SB12-32）

非常に小型の管孔が主に単独で一様に分布している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にはらせん肥厚がある。放射組織は平伏細胞と方形細胞からなる異性、主に5細胞幅である。

カマツカは丘陵や低山地に普通の落葉低木である。材は重堅強靭である。

(11) イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. subsp. *buergeri*（Maxim.）Kitamura マメ科 図版6 9a-9c（SB30-17）

年輪の始めに大型の管孔が配列し、徐々に径を減じ、晩材部では非常に小型から極めて小型の管孔が塊状や集合帯となり分布する環孔材。周囲状・帯状柔組織が顕著で、接線断面においてやや層階状が見られた。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚が認められた。放射組織は異性、1～5細胞幅、上下端に方形細胞が見られる。

イヌエンジュは北海道から中部地方の温帯の川原や山地の林縁に生育する落葉高木である。材はやや重硬で強度もあり、芯材は耐朽性が高い。

(12) カエデ属　*Acer* カエデ科　図版7　10a-10c（SB12-11）

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して分布しており、年輪界は不明瞭な散孔材。道管の穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

(13) サカキ *Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科　図版7　11a-11c（SB12-35）

非常に小型で多角形の管孔が密に分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒の数が多い階段穿孔。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

サカキは本州の茨城県および石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。材は強靭・堅硬で割裂困難であり丈夫である。

(14) ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb. ツバキ属　図版7　12a-12c（SB12-1）

非常に小型で多角形の管孔が密に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒が多い階段穿孔。放射組織は異性、主に2細胞幅、道管との壁孔は交互状・階段状である。

ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。現在では小物器具や薪炭材の利用が知られている。

(15) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科　図版8　13a-13c（SB12-30）

やや小型の管孔が単独または2～4個が放射方向に複合し、晩材部では径が小さくなり分布密度も減少する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒が少ない階段穿孔。放射組織は異性、1～4細胞幅、多列部の上下端は方形・直立細胞からなる単列部が延び、道管との壁孔は小型で交互状配列である。

エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木で、エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。材の利用は柄や器具に多く使われる。

(16) タケ亜科　Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科　図版8　15a（SB30-2）

やや硬質の稈の破片。稈の内側に表皮層が認められたことから、中空な稈であることが判る。維管束は不整中心柱で同心円状に配置している。稈の外周に位置する維管束鞘は特に厚く発達し、厚壁の繊維細胞だけの塊も島状に密在し、稈を堅く支持している様子がわかる。このような形質からイネ科のタケとササ類を含むタケ亜科であると同定した。

いわゆるタケ・ササの仲間で12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多く。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

(17) 草本性イネ科 図版8　16a（SB9-9）

試料は、細く軟質で脆い稈の集合である。稈は完形ではなく、中心部は崩れている。維管束が散在する不整中心柱であり、厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘は外周の維管束では非常に細胞層が厚い。保存が悪いため、草本性のイネ科の稈であることまでしか判らない。

4．まとめ

当遺跡の住居建築材には、針葉樹と常緑性および落葉性の広葉樹を含む複数の樹種が使われていたことが明らかになった。全般的には、ヒノキやヒノキ属の針葉樹とアカガシ亜属とシイノキ属の常緑広葉樹が多い傾向が見られ、落葉広葉樹は多種類が検出されたが各種類の検出点数は少ない。従って当遺跡の住居跡は、ヒノキ・ヒノキ属の針葉樹材とアカガシ亜属・シイノキ属の常緑広葉樹材を主体として、複数の落葉広葉樹材を利用していた傾向が読み取れた。また、3期のSB9は針葉樹材が主体であるが、5期のSB30や6期のSB4とSB12では針葉樹に加え常緑広葉樹も多くなり、8期のSB5

と SB6 では針葉樹が減少または検出されず常緑広葉樹が主体となる。このように、3 期から 8 期に向かい針葉樹材主体から常緑広葉樹材主体に徐々に樹種利用が変化したように思われる。しかし、一つの遺跡においてこのように詳細な時期に基ずき、住居材を調査した事例はあまりないようなので、当遺跡の変化が当地域全般に普遍的なものであるかは、今後の事例の蓄積を待つ必要がある。

なお、今宿遺跡の弥生時代後期の複数の焼失住居跡の炭化材は、ほとんどが針葉樹であり、その樹種はヒノキやヒノキ属が圧倒的に多く検出されている（植田、1998）。また岐阜市の城之内遺跡の古墳時代前期の住居跡からはクリとシイノキ属が確認され、それ以外の保存の悪い炭化材もクリまたはシイノキ属であった（植田、1997）。これらの事例は、当遺跡の各時期の結果と調和的であるようにも思える。

〔引用文献〕

植田弥生、1997、竪穴住居から出土した炭化材の樹種、125-126、図版 24、「堀田城之内遺跡」、㈶岐阜県文化財保護センター。

植田弥生、1998、弥生時代後期の焼失住居跡から出土した炭化材樹種同定、31-37、「今宿遺跡（第 2 分冊）」、㈶岐阜県文化財保護センター。

住居跡	試料No.	分類群
SB4	1	マツ属複維管束亜属
SB4	2	クリ
SB4	3	クリ
SB4	4	シイノキ属
SB4	5	シイノキ属
SB4	6-1	マツ属複維管束亜属
SB4	6-2	シイノキ属
SB4	7	タケ亜科(φ8mm)
SB4	8-1	マツ属複維管束亜属
SB4	8-2	シイノキ属
SB4	9	タケ亜科
SB4	10	シイノキ属
SB4	11-1	マツ属複維管束亜属
SB4	11-2	アカガシ亜属
SB4	11-3	クリ
SB5	1	サクラ属
SB5	2	サカキ
SB5	3	アカガシ亜属
SB5	4	サカキ
SB6		ヒノキ
SB9	1	針葉樹
SB9	2	ヒノキ
SB9	3	ヒノキ属
SB9	4	ヒノキ
SB9	5	ヒノキ
SB9	6	モミ属
SB9	7	モミ属
SB9	8	草本性イネ科
SB9	9-1	草本性イネ科
SB9	9-2	ヒノキ
SB9	10	不可
SB9	11	アカガシ亜属
SB9	12	針葉樹
SB9	13	針葉樹
SB9	14	不可
SB9	15	針葉樹
SB9	16	針葉樹
SB9	17	カマツカ？
SB9	18	不可
SB9	19	針葉樹
SB9	20	針葉樹

住居跡	試料No.	分類群
SB9	21	針葉樹
SB9	22	針葉樹
SB9	23	針葉樹
SB9	24	針葉樹
SB9	25	ヒノキ
SB9	26	タケ亜科
SB9	27	アカガシ亜属
SB9	28	針葉樹
SB9	29	針葉樹
SB9	30	不可
SB9	31	不可
SB9	32	針葉樹
SB9	33	針葉樹
SB9	34	不可
SB12	1	ヒサカキ
SB12	2	針葉樹
SB12	3	不可
SB12	4	イネ科
SB12	5	広葉樹
SB12	6	イネ科
SB12	7	不可
SB12	8	ヒサカキ
SB12	9	不可
SB12	10	イネ科
SB12	11	カエデ属
SB12	12	不可
SB12	13	クワ属
SB12	14	不可
SB12	15	広葉樹
SB12	16	散孔材
SB12	17	アカガシ亜属
SB12	18	針葉樹
SB12	19	シイノキ属
SB12	20	不可
SB12	21	広葉樹
SB12	22	シイノキ属
SB12	23	アカガシ亜属
SB12	24	アカガシ亜属
SB12	25	イネ科
SB12	26	シイノキ属
SB12	27	広葉樹

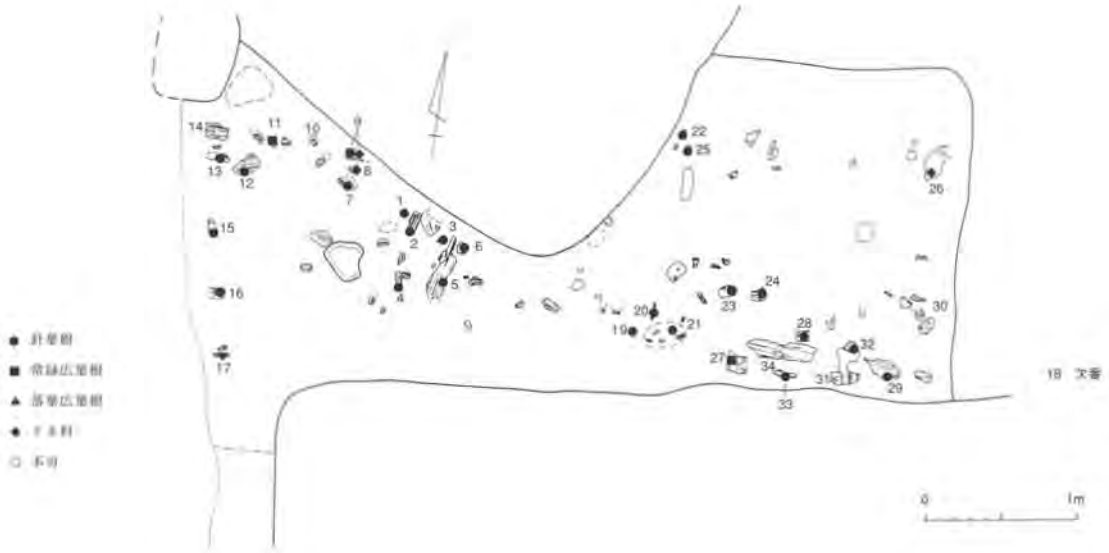
住居跡	試料No.	分類群
SB12	28	不可
SB12	29	散孔材
SB12	30	エゴノキ属
SB12	31	不可
SB12	32	カマツカ？
SB12	33	ヒサカキ
SB12	34	サカキ
SB12	35	サカキ
SB12	36	サカキ
SB12	37	サカキ
SB12	38	サカキ
SB12	39	シイノキ属
SB12	40	サカキ
SB12	41	アカガシ亜属？
SB12	42	アカガシ亜属
SB30	1	クリ
SB30	2-1	クリ
SB30	2-2	タケ亜科(タケ・ササ類)
SB30	3	イネ科
SB30	4	ヒノキ属
SB30	5	ヒノキ属
SB30	6	ヒノキ属
SB30	7	アカガシ亜属
SB30	8	不可
SB30	9	針葉樹
SB30	10	イネ科
SB30	11	アカガシ亜属
SB30	12	アカガシ亜属
SB30	13	不可
SB30	14	アカガシ亜属
SB30	15	不可
SB30	16	イネ科
SB30	17	イヌエンジュ
SB30	18	針葉樹
SB30	19	不可
SB30	20	不可
SB30	21	アカガシ亜属
SB30	22	広葉樹
SB30	23	ヒノキ属
SB30	24	ヒノキ属
SB30	25	イネ科

第17表 下西郷一本松遺跡住居跡出土炭化材樹種同定結果

分類群		住居跡 時期	SB9 3期	SB30 5期	SB4 6期	SB12 6期	SB5 8期	SB6 8期	合計
針葉樹	モミ属		2						2
	マツ属複維管束亜属				4				4
	ヒノキ		5					1	6
	ヒノキ属		1	5					6
	針葉樹		15	2		2			19
常緑広葉樹	アカガシ亜属		2	5	1	5	1		14
	シイノキ属				5	4			9
	サカキ					6	2		8
	ヒサカキ					3			3
落葉広葉樹	クリ			2	3				5
	クワ属					1			1
	サクラ属						1		1
	カマツカ？		1			1			2
	イヌエンジュ			1					1
	カエデ属					1			1
	エゴノキ属					1			1
	広葉樹			1		4			5
	散孔材					2			2
イネ科	タケ亜科		1	1	2				4
	草本性イネ科		2						2
	イネ科			4		4			8
合計			29	21	15	34	4	1	104

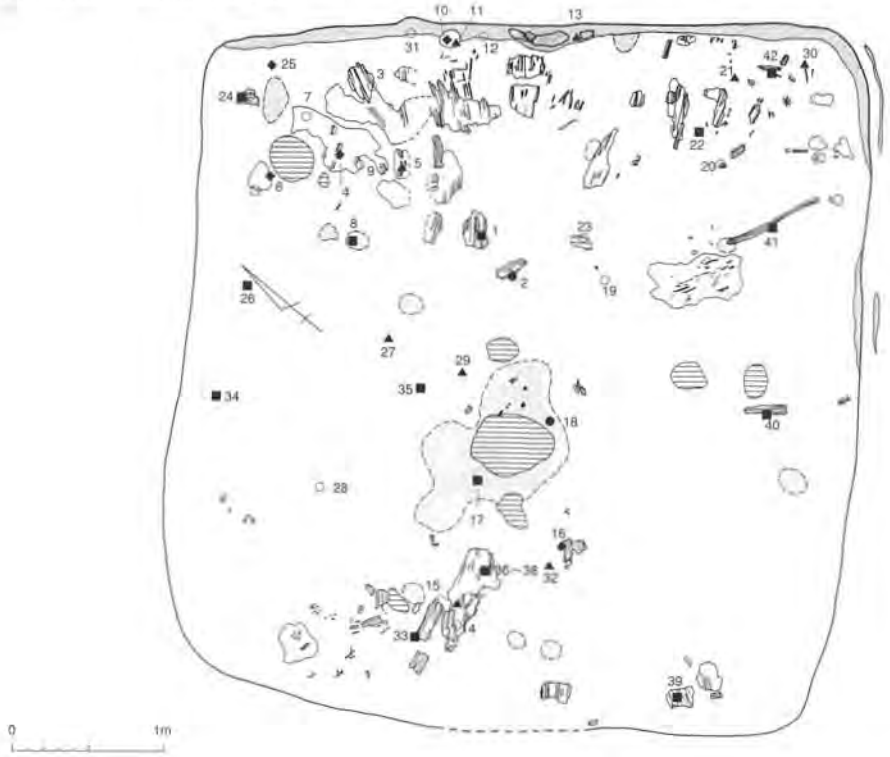
第18表　下西郷一本松遺跡住所別の検出樹種比較

SB 9 樹種同定試料出土位置図



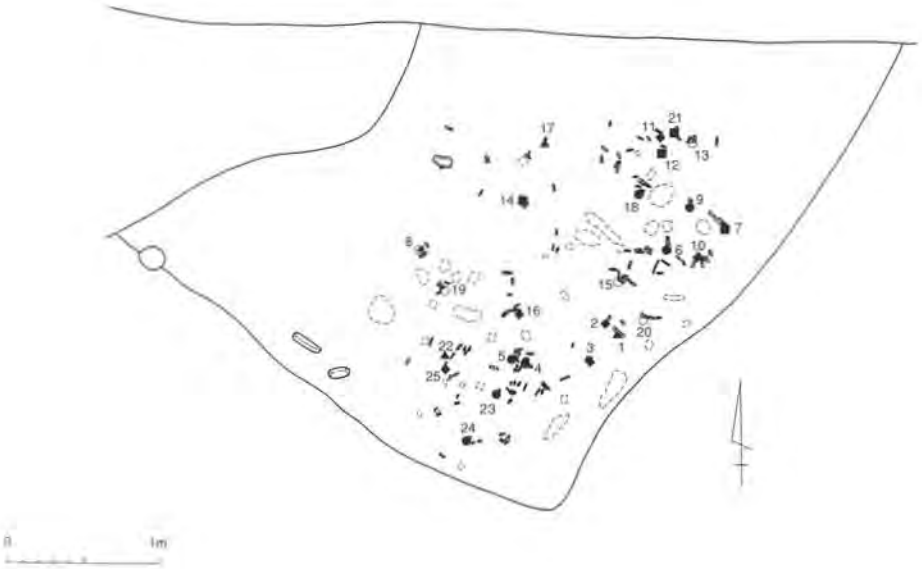
第92図　樹種同定試料出土位置図(1)

SB12樹種同定試料出土位置図



● 針葉樹
■ 常緑広葉樹
▲ 落葉広葉樹
◆ イネ科
○ 不可

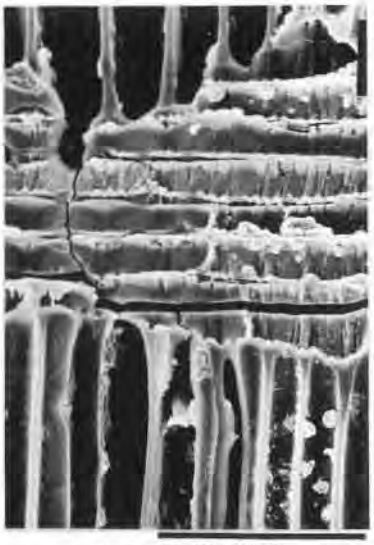
SB30樹種同定試料出土位置図



第93図　樹種同定試料出土位置図(2)

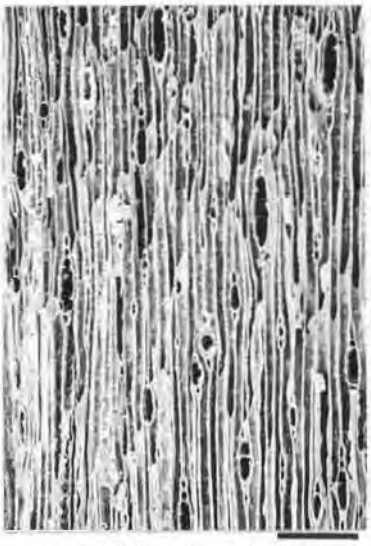
1a モミ属（横断面）
SB9-7　bar:0.5㎜

1b モミ属（接線断面）
SB9-7　bar:0.1㎜



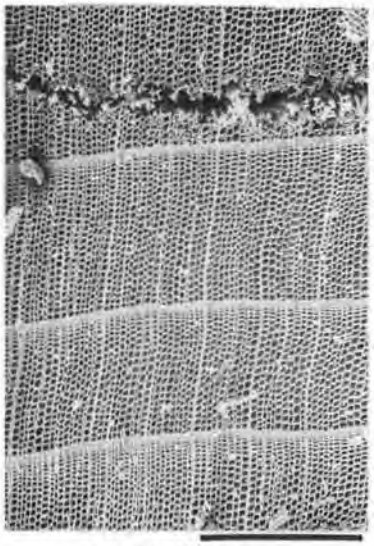
1c モミ属（放射断面）
SB9-7　bar:0.1㎜

2a マツ属複維管束亜属（横断面）
SB4-1　bar:0.5㎜



2b マツ属複維管束亜属（接線断面）
SB4-1　bar:0.1㎜

2c マツ属複維管束亜属（放射断面）
SB4-1　bar:0.05㎜

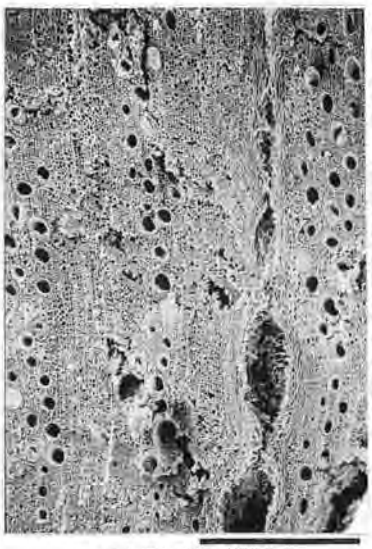


3a ヒノキ（横断面）
SB6-1　bar:0.5㎜

3b ヒノキ（接線断面）
SB6-1　bar:0.1㎜

3c ヒノキ（放射断面）
SB6-1　bar:0.05㎜

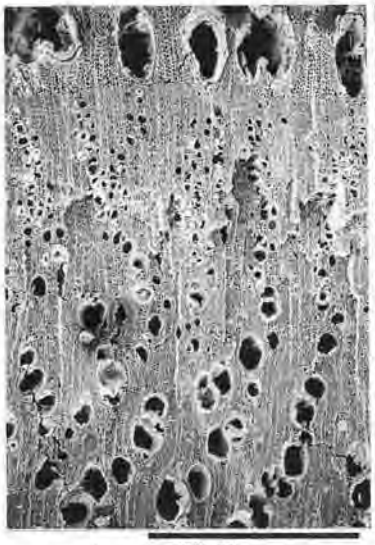
図版４　住居跡出土炭化材の組織写真(1)



4a アカガシ亜属（横断面）
SB12-42　bar:0.5㎜

4b アカガシ亜属（接線断面）
SB12-42　bar:0.1㎜

4c アカガシ亜属（放射断面）
SB12-42　bar:0.1㎜



5a クリ（横断面）
SB30-1　bar:1.0㎜

5b クリ（接線断面）
SB30-1　bar:0.1㎜

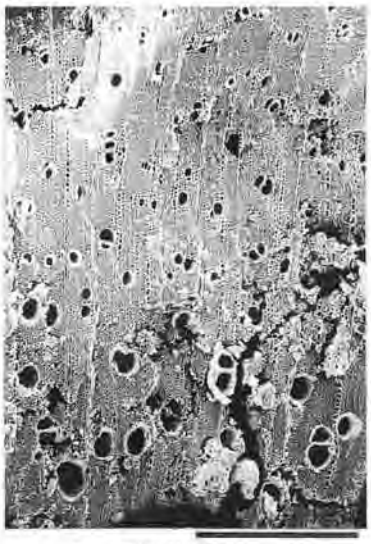
5c クリ（放射断面）
SB30-1　bar:0.1㎜

6a シイノキ属（横断面）
SB12-19　bar:0.5㎜

6b シイノキ属（接線断面）
SB12-13　bar:0.1㎜

6c シイノキ属（放射断面）
SB12-13　bar:0.1㎜

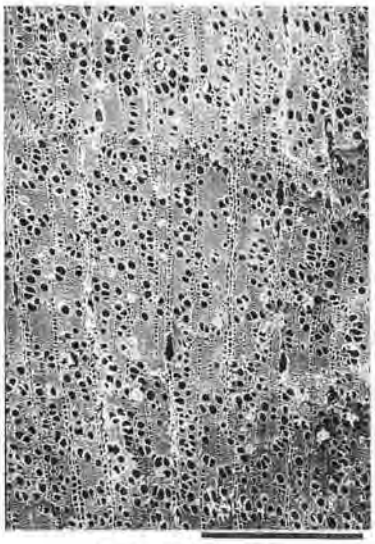
図版５　住居跡出土炭化材の組織写真(2)



7a クワ属（横断面）
SB12-13　bar:0.5㎜

7b クワ属（接線断面）
SB12-13　bar:0.1㎜

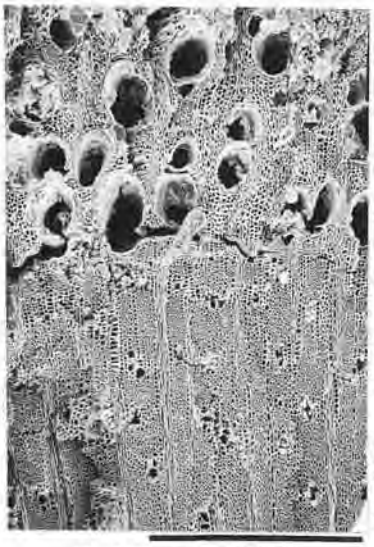
7c クワ属（放射断面）
SB12-13　bar:0.1㎜



8a サクラ属（横断面）
SB5-1　bar:0.5㎜

8b サクラ属（接線断面）
SB5-1　bar:0.1㎜

8c サクラ属（放射断面）
SB5-1　bar:0.1㎜

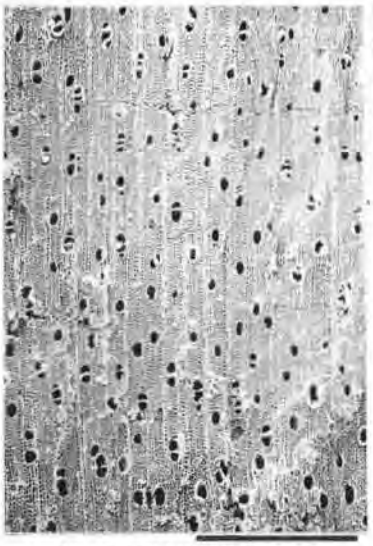


9a イヌエンジュ（横断面）
SB30-17　bar:0.5㎜

9b イヌエンジュ（接線断面）
SB30-17　bar:0.1㎜

9c イヌエンジュ（放射断面）
SB30-17　bar:0.1㎜

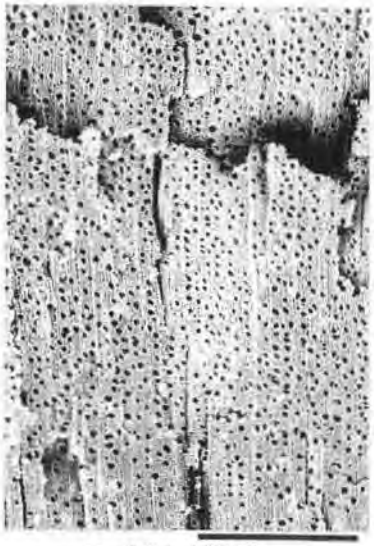
図版 6　住居跡出土炭化材の組織写真(3)



10a カエデ属（横断面）
SB12-11　bar:0.5㎜

10b カエデ属（接線断面）
SB12-11　bar:0.1㎜

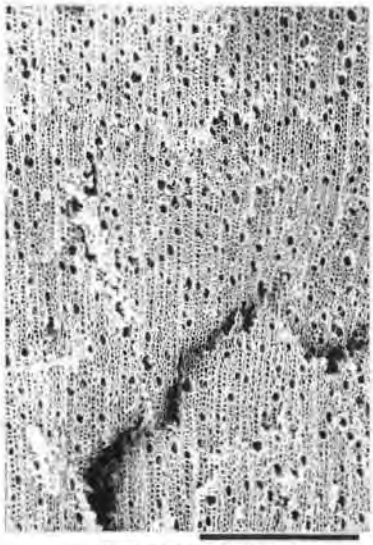
10c カエデ属（放射断面）
SB12-11　bar:0.1㎜



11a サカキ（横断面）
SB12-35　bar:0.5㎜

11b サカキ（接線断面）
SB12-35　bar:0.1㎜

11c サカキ（放射断面）
SB12-35　bar:0.1㎜

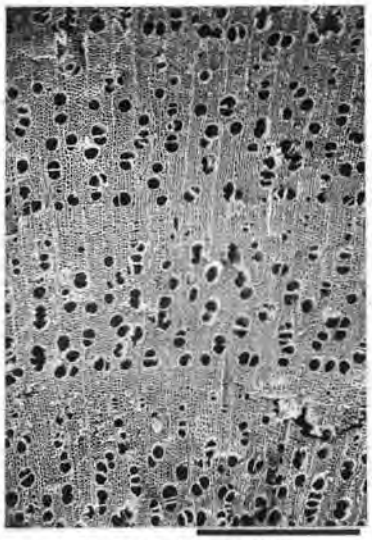


12a ヒサカキ（横断面）
SB12-1　bar:0.5㎜

12b ヒサカキ（接線断面）
SB12-1　bar:0.1㎜

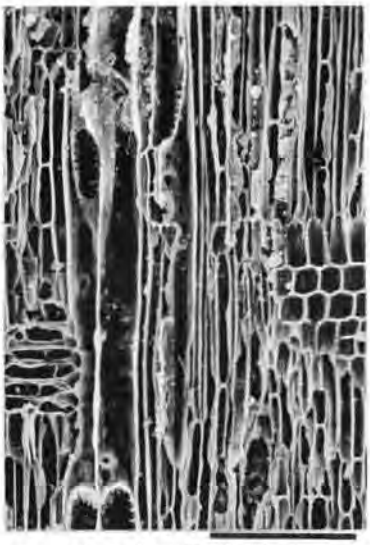
12c ヒサカキ（放射断面）
SB12-1　bar:0.1㎜

図版７　住居跡出土炭化材の組織写真(4)



13a エゴノキ属（横断面）
SB12-30　bar:0.5㎜

13b エゴノキ属（接線断面）
SB12-30　bar:0.1㎜

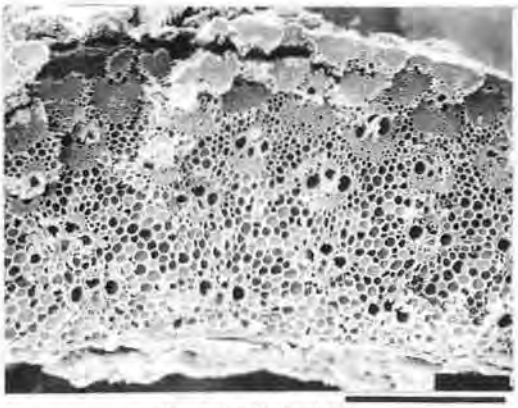


13c エゴノキ属（放射断面）
SB12-30　bar:0.1㎜

14a カマツカ？（横断面）
SB12-32　bar:0.5㎜

14b カマツカ？（接線断面）
SB12-32　bar:0.1㎜

14c カマツカ？（放射断面）
SB12-32　bar:0.1㎜

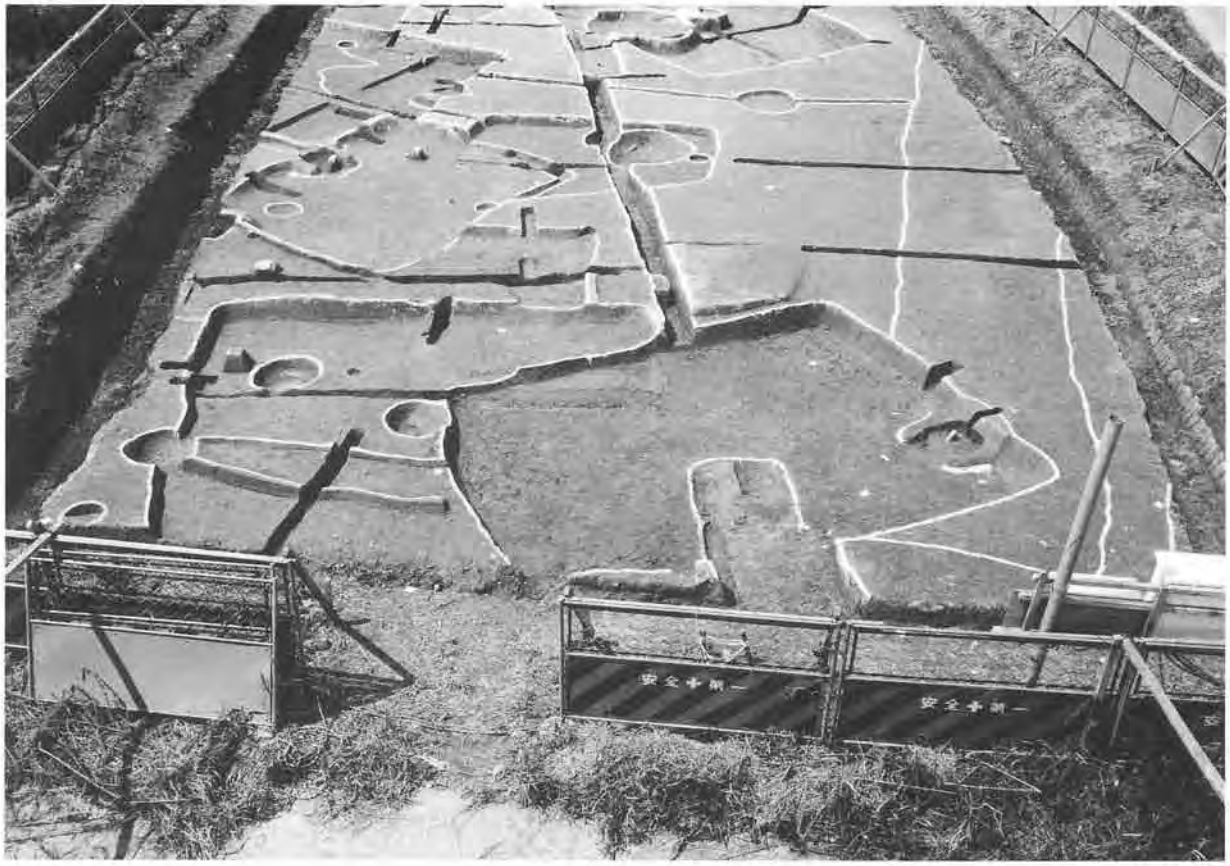


15a タケ亜科（横断面）
SB30-2　bar:0.5㎜

16a 草本性イネ科（横断面）
SB9-9　bar:0.5㎜

図版 8　住居跡出土炭化材の組織写真(5)

図　版



D・E区全景（南から）

南区全景

図版10

北区調査前全景（北から）

南区調査前風景（南から）

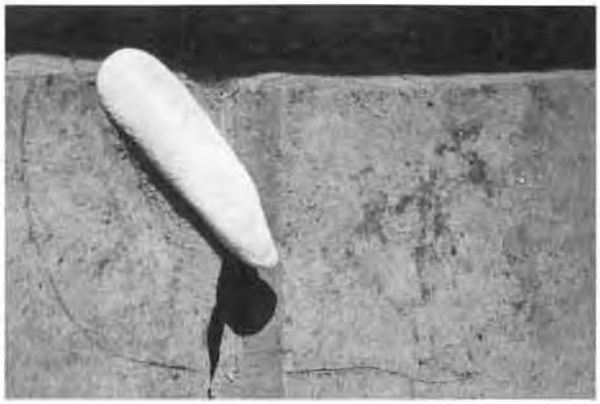
表土除去作業（南から）

発掘風景（南から）

SK9遺物出土状況（北から）

SB16完掘（西から）

SB33完掘（西から）



SB33炉（東から）

SK6 遺物出土状況（西から）

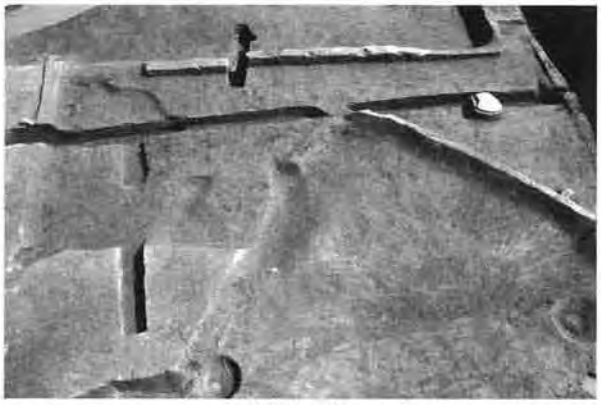
SK6 完掘（北から）

SB9 遺物出土状況（南から）

SB9 遺物出土状況（東から）

SB9 炭化物検出状況（東から）

SB9 炭化物（北から）



SB9 完掘（北から）

図版12

SD3遺物出土状況（北から）

SD3遺物出土状況（北から）

SX10遺物出土状況（南東から）

SB30完掘（南西から）

SB25完掘（西から）

SB25土層（西から）

SK7遺物出土状況（南西から）

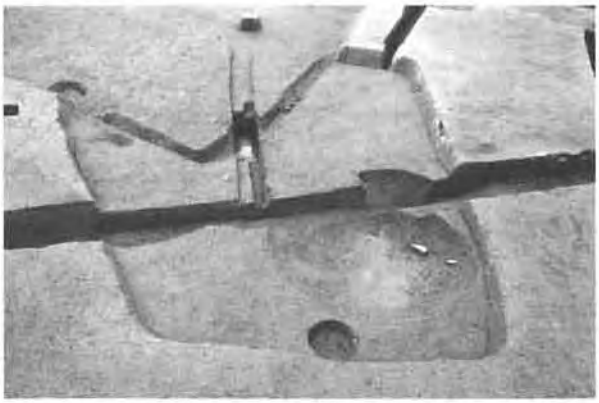
SK7完掘（北西から）

SK1 遺物出土状況（南から）

SK1 S字甕出土状況（東から）

SK1 土層（東から）

SB4 完掘（西から）



SB8・SK4 完掘（東から）

SB10 完掘（北西から）

SB10 カマド（西から）

図版 14

SB12 炭化物検出状況（北東から）

SB12 炭化物（北から）

SB12 炭化物（北から）

SB12 炉（西から）

SB12 完掘（南西から）

SB13 完掘（南東から）

SB15 掘削状況（南西から）

SB15 炉遺物出土状況（北から）

SB15 炉（南から）

SB32 完掘（南西から）

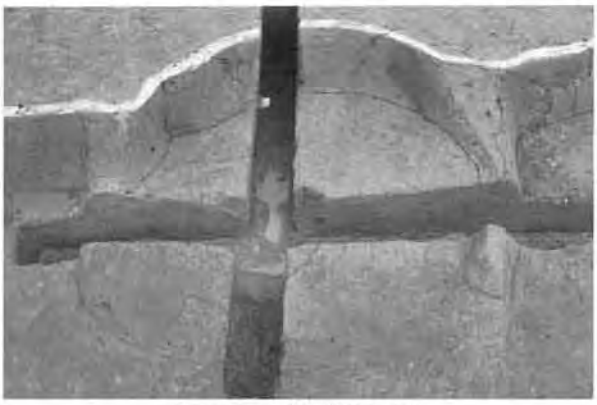
SB32-P2 遺物出土状況（北から）

SB1 完掘（東から）

SB1 カマド（南から）

図版16

SB7完掘（北から）

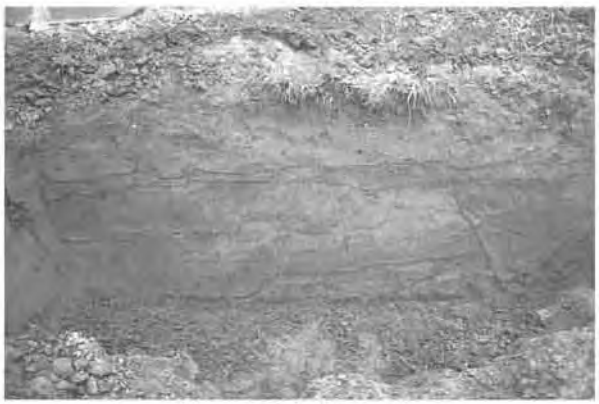


SB7カマド（西から）

SB17完掘（南から）

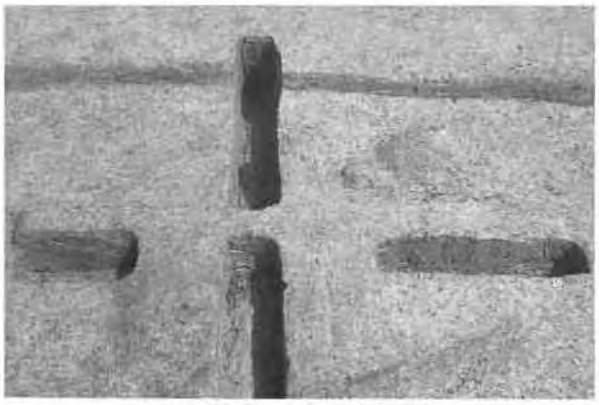
SB17カマド（西から）

SB26完掘（南西から）



SB26土層（西から）

SB29完掘（西から）



SB29カマド（南から）

SK2 遺物検出状況（東から）

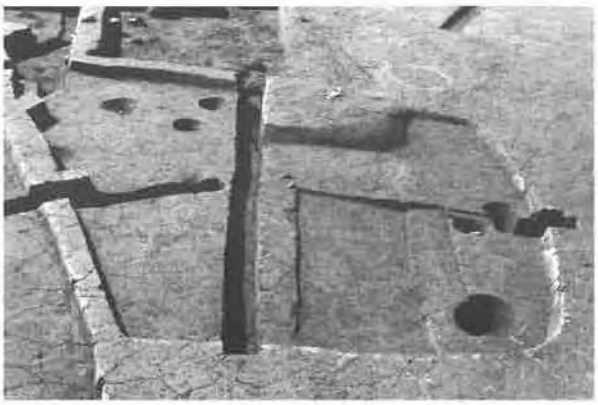
SK2 掘削風景（西から）

SK2 掘削状況（東から）

SK2 最下部土器出土状況（南東から）

SB2 完掘（北西から）

SB2 カマド（北東から）



SB5 完掘（南から）

SB5 カマド（南から）

図版18

SB6完掘（東から）

SB6カマド（東から）

SB11完掘（南東から）

SB11カマド（南東から）

SB22完掘（東から）

SB22遺物出土状況（東から）

SB28完掘（南西から）

SB28カマド（南東から）

SZ1 検出状況（南から）

SZ1 遺物出土状況（南から）

SZ1 耳環出土状況（南から）

SD7 完掘（西から）

SD7 土層（東から）

SD10・16・18～20 完掘（西から）

SX4 完掘（南東から）

図版20

9

7

4

35

38

40

903

39

69

39

70

72

73

図版22

55

91

52

80

95

98

101

119

116

117

129

114

123

122

124

図版24

75

45

166

132

175

148

175

161

602

207

195

407

341

411

280

282

図版26

385

376

389

427

429

430

445

450

520

467

515

528

530

図版28

534

557

536

558

539

540

544

548

552

551

589

610

510

454

640

631

630

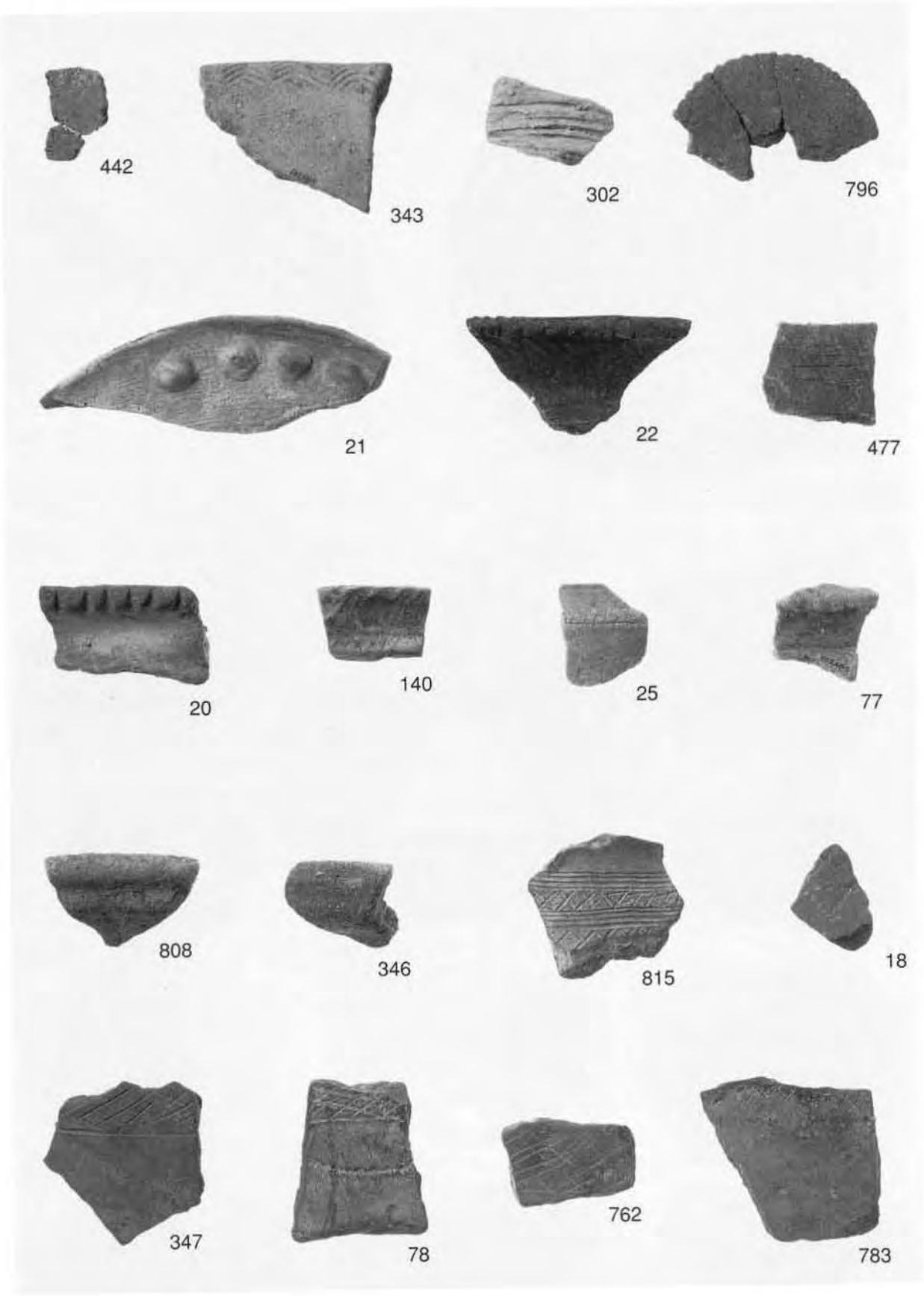
672

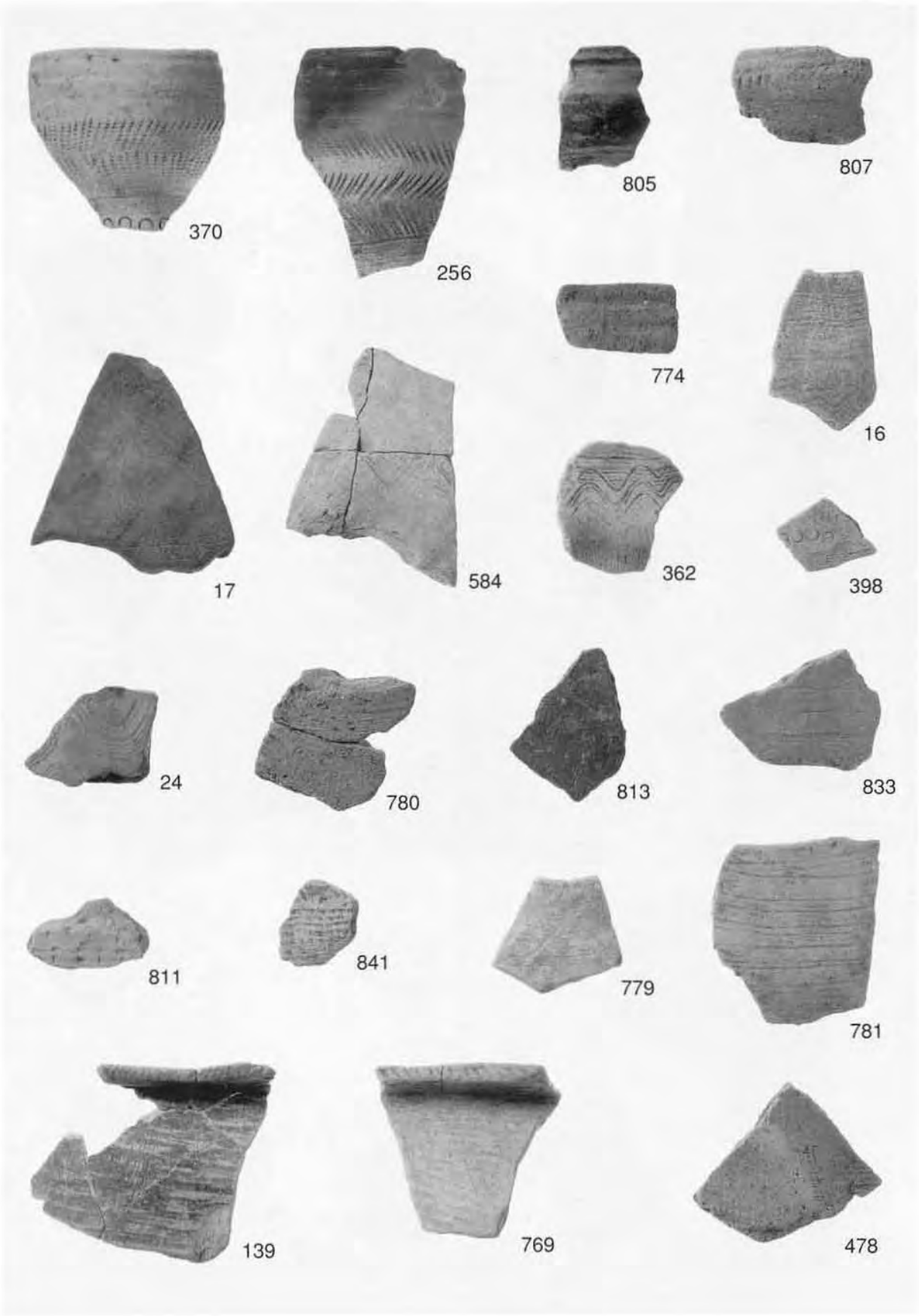
679

677

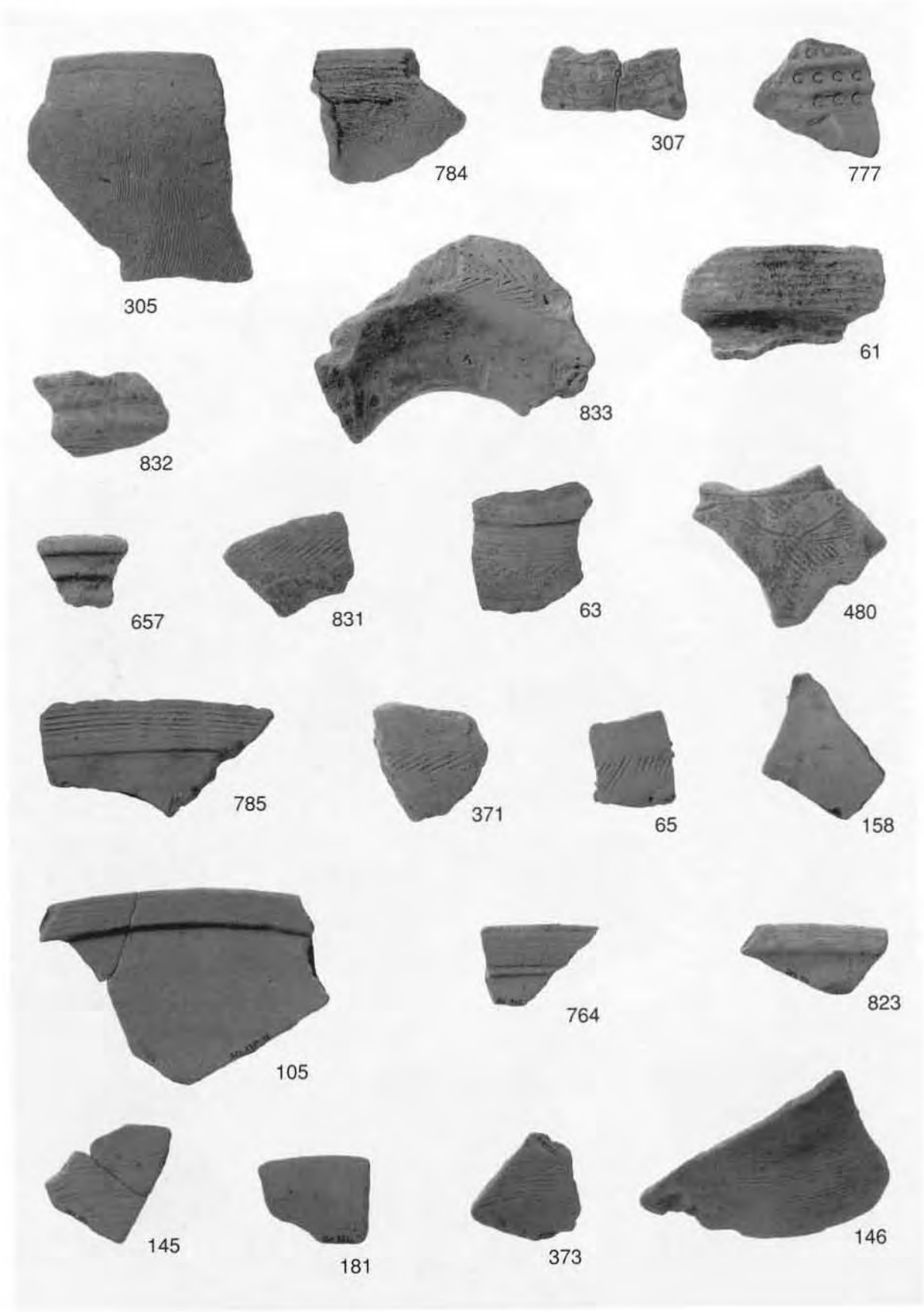
678

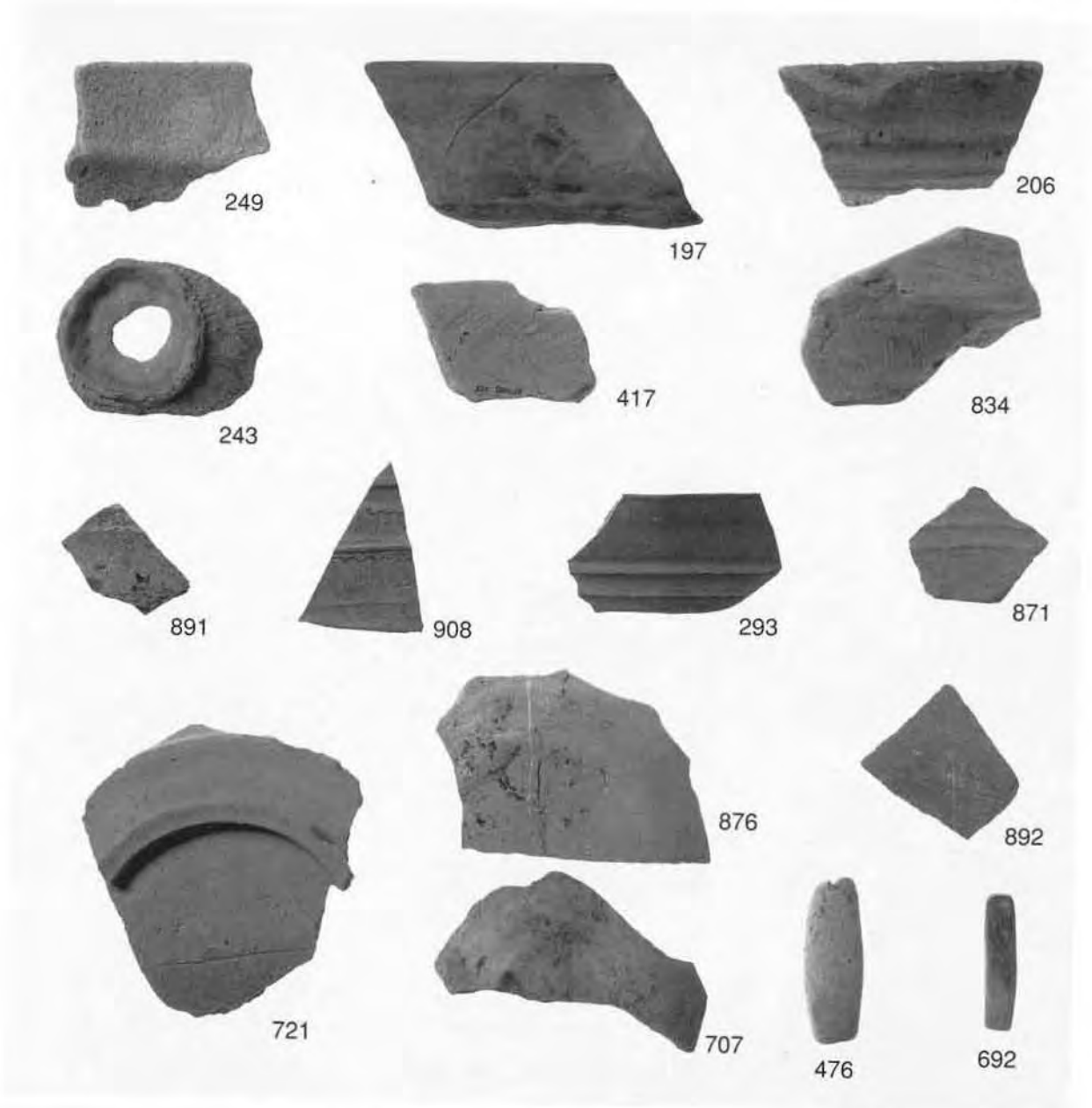
図版30

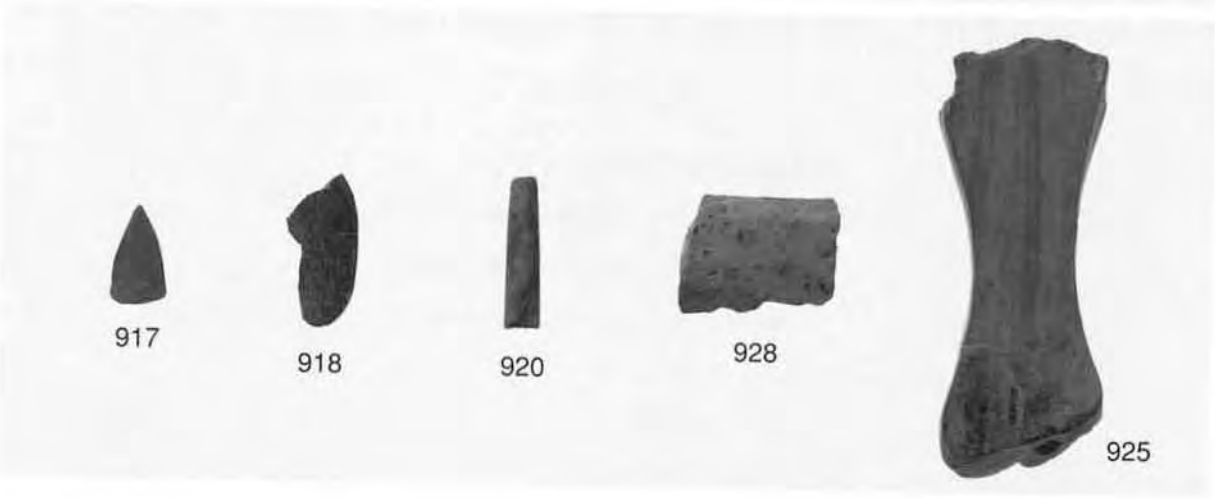

442
343
302
796
21
22
477
20
140
25
77
808
346
815
18
347
78
762
783


370
256
805
807
774
16
17
584
362
398
24
780
813
833
811
841
779
781
139
769
478

図版32


305
784
307
777
833
61
832
657
831
63
480
785
371
65
158
105
764
823
145
181
373
146


249
197
206
243
417
834
891
908
293
871
721
876
892
707
476
692


917
918
920
928
925

下西郷一本松遺跡

－西郷１号線街路事業に伴う緊急発掘調査－

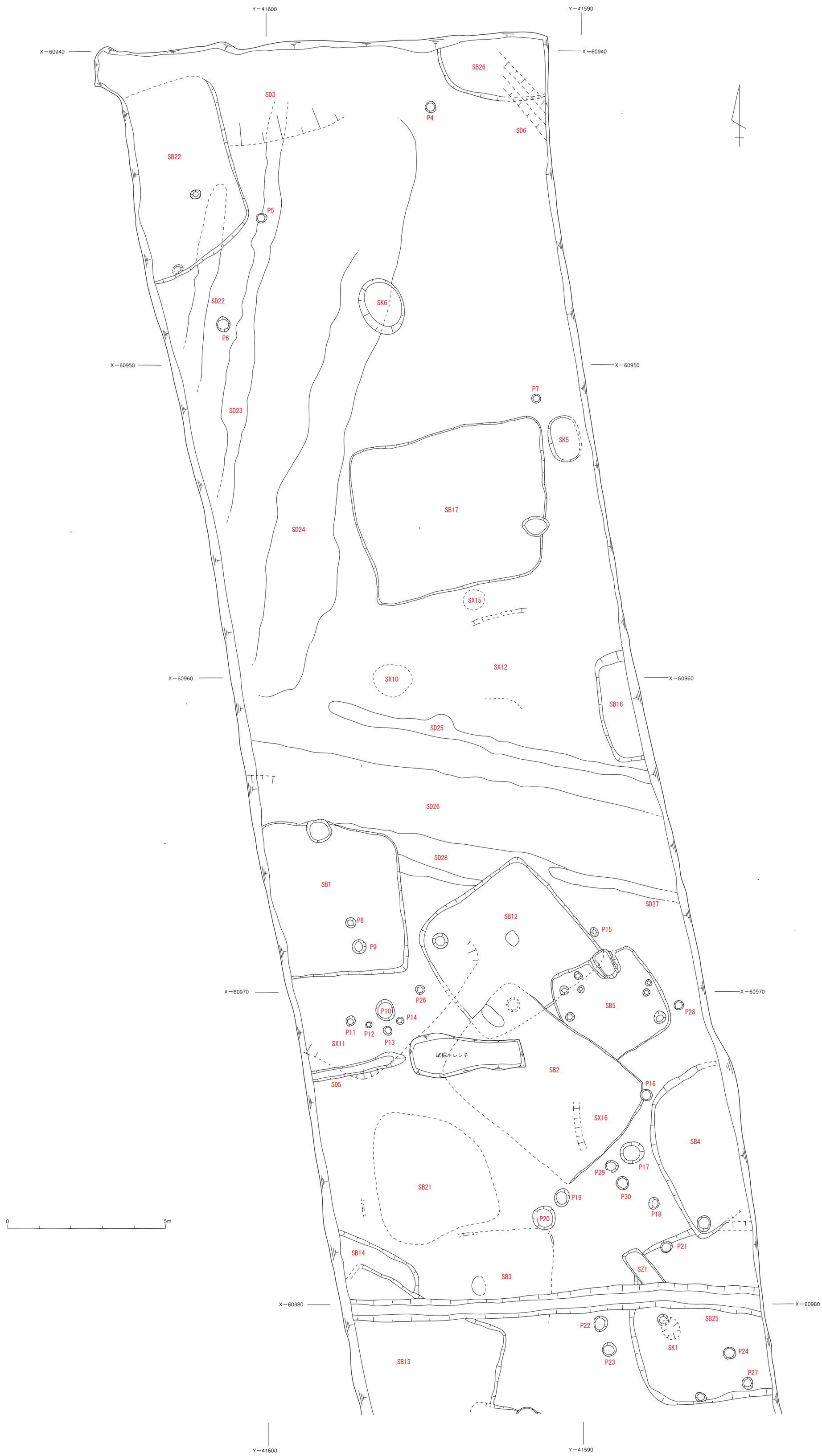
平成12年３月

発行　㈶岐阜市教育文化振興事業団

岐阜市明徳町10番地

印刷　株式会社岐阜文芸社

岐阜市三輪ぷりんとぴあ13番地



別添図１　遺構全体図　（A・B・C区）

別添図２　遺構全体図（C・D・E・F区）

別添図３　遺構全体図（F・G区）